

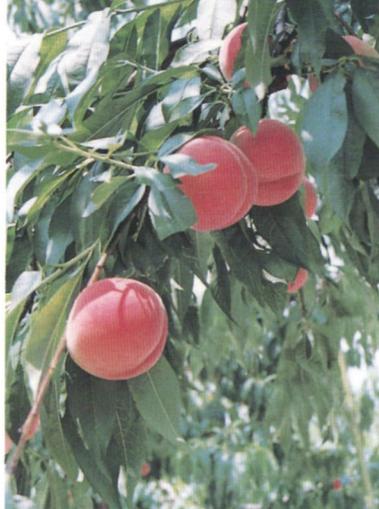
塩川伊一郎評伝

浅間山麓の先覚者



小林
收／編著

龍鳳書房



浅間山麓の先覚者

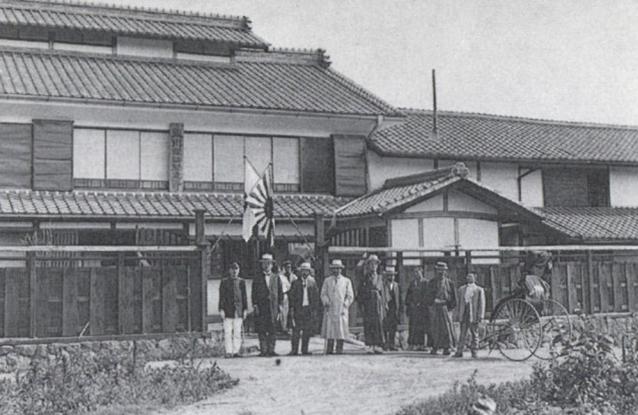
塩川伊一郎評伝

小林

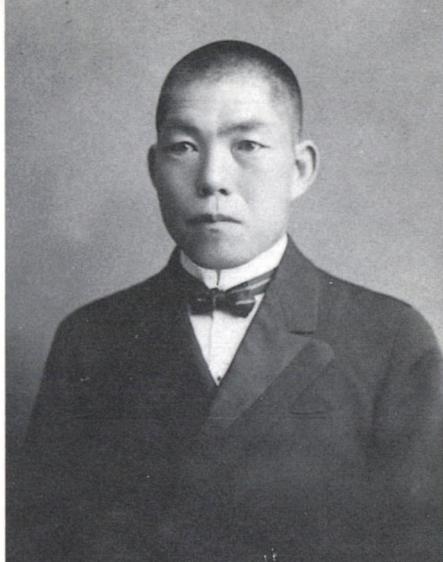
收編著



二代目塩川伊一郎肖像画



塩川家の全景（大正初め頃）



二代目伊一郎



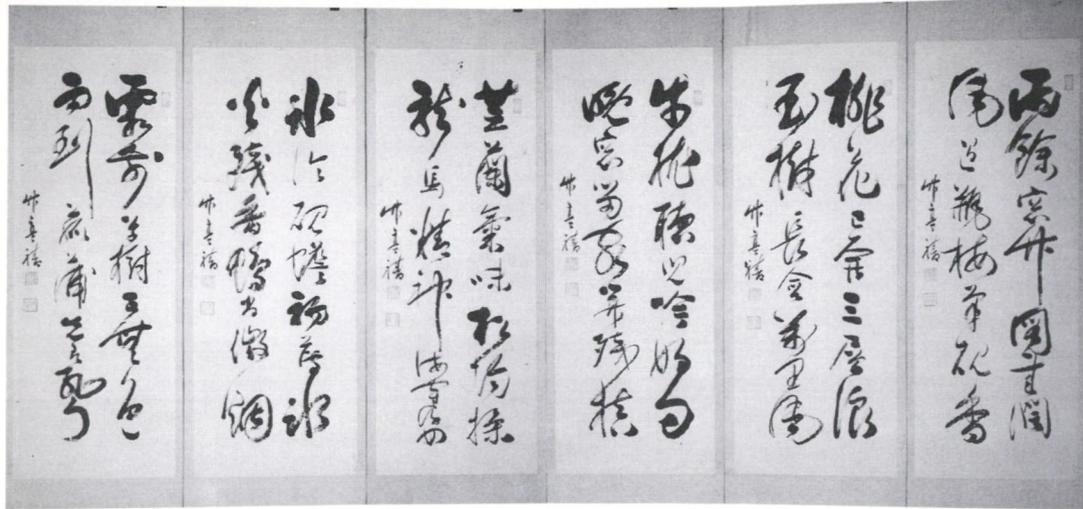
二代目伊一郎の家族一同
（後列中央伊一郎 前列右より4人目妻する）



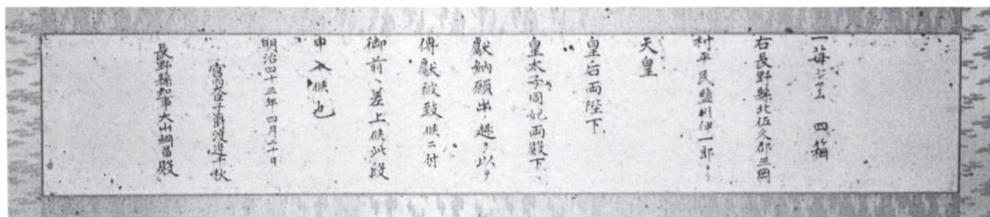
塩川家の紋所が見える鬼瓦（丸に二引）

塩川缶詰合名会社従業員のための
大観桃会の折りに（矢島一郎氏所蔵）





塩川家に残された屏風 有名な陶淵明の漢詞「桃花源の記」を彷彿させる字句や南宋の詩人陸放翁の漢詩の一部もみえる 塩川家の桃園を訪れて筆者がこれら故事を想い書いたものと思われる



伊一郎が天皇家へ苺ジャムを献納したいと申し出、それが認められたことを知らせる渡辺千秋宮内大臣の書（明治43年4月20日）



渡辺千秋宮内大臣が塩川家に贈った書

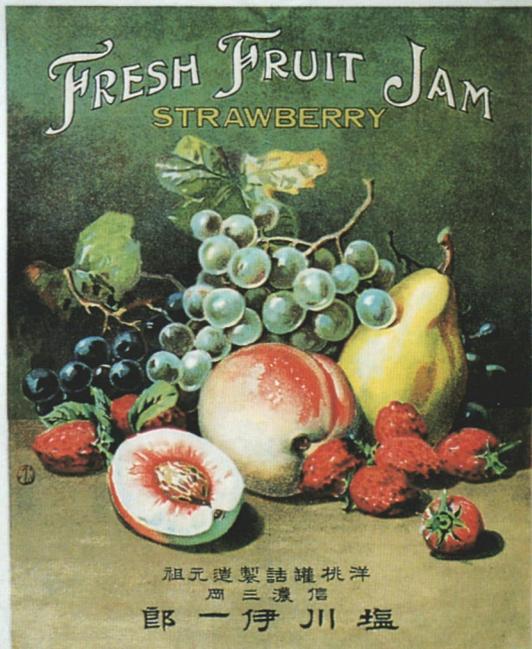


尾崎号堂（行雄）が伊一郎に贈った書

會進共會覽博諸
領受牌賞銀金

納御下陛兩
品用御家宮院兩

特賞三第入形老師野五
記一伊川塩



祖元造製詰罐桃洋
岡三濃信
郎一伊川塩

ES

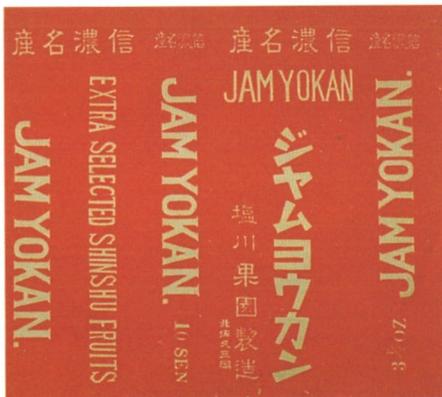
大鐘正八
買三百多
イロ
香
ラシ
洋
各
種
社
會
名
合
詰
罐
川
塩

IS

塩川缶詰合名会社の宣伝チラシ
缶詰はいろいろなのが考案された
塩川缶詰合名会社で使われた缶詰の各種ラベル

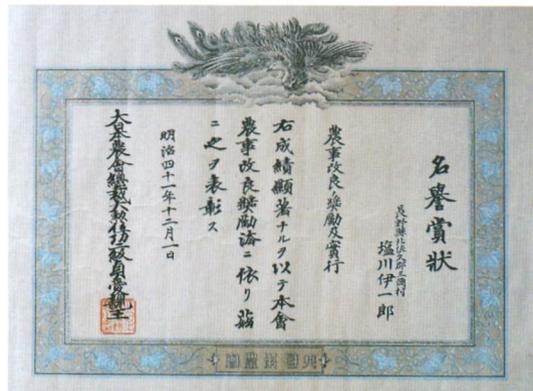
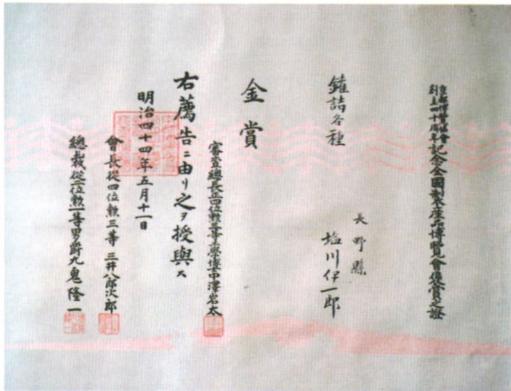


塩川家に残されている琉球塗りの器
二代目伊一郎が琉球を訪れた際に旅費
の足しにするために このような器を
売りながら帰郷した（資料篇七参照
明治32年3月1日 同7日）その時の
記念に1組だけ持ち帰ったもの





塩川缶詰合名会社の製品は、全国の各種品評会や博覧会でいつも優秀な成績を修めた



「信濃佐久新聞」に掲載された塩川缶詰合名会社の広告（昭和5年5月6日付）



伊一郎は村内の子どもたちにも仕事のチャンスを与えた その報酬として与えられた金札（村内の店で通用した）



浅間山麓の畑で苺をつむ工女たち



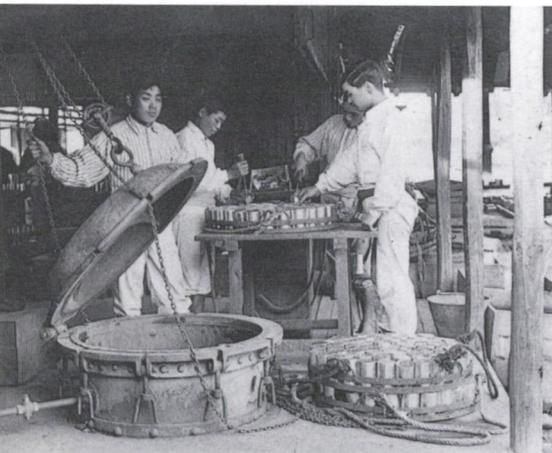
製缶工場の様子



苺のガクをとる作業に
精だすこどもたち
(大正初め頃)



桃の核（種）抜きを行なう工女たち



缶の殺菌を行なっているところ



缶詰工場で桃の皮を剥く工女たち

缶の封缶作業を行なう工女たち



長野縣北佐久郡三岡村
 塩川伊一郎
 明治三十七八年戰役ノ際從
 軍者家族扶助ノ為メ金
 貳圓八拾錢寄附候段寄持
 候事
 明治三十九年六月一日
 長野縣知事從四位勳四等大山綱昌



二代目伊一郎は、社会のためにさまざまな奉仕活動を行なった

我カ親友トシテ最モ愛敬セル
 東洋ノ企業家塩川伊一郎君
 長逝セルル 嗚呼悲シイ哉
 君ノ相知ルハ約四十年前即
 チ明治二十年ノ盛夏 頃ナリシ
 爾來改良農具ノ考案 洋桃
 事業ニ志ヲ注リテ半面ノ於テ
 職卸驛改修工事、岩村日農
 學校、建築工事、長野赤十
 字社附屬病院建築工事、
 平原信邦所新設工事等ヲ始
 メトシテ公私別々ニ克ク資金
 ヲ供給シテ之レヲ援テ續イテ君
 ト共ニ佐久鑛山權利獲得採
 鑛冶金、沿海洲森林採株
 權利獲得、國民生活改善
 簡易食糧品製造、青島

親友小宮山莊助による弔辞の一部
 伊一郎父子の墓（左初代、右二代伊一郎）

浅間山麓一面に広がった桃畑



〃小諸の文明開化〃

木村熊二先生と塩川伊一郎父子の業績をたたえて

小諸市長 塩川忠巳

浅間山麓にひろがる小諸市は、古くから佐久と北信濃を結ぶ交通上・戦略上の要地にあり、城下町・商業の町として発展してきた。しかし一面に被れた火山堆積物と寒冷な気候は、農業生産や日常生活には厳しい環境として人々にたちはだかつてきた。

農業では明治になって江戸時代からの稲や雑穀の生産に加えて養蚕がさかんになり、高橋平四郎による⑦製糸工場の創設を契機として、座繰・器械製糸を中心とする新しい工業が発展した。

明治二十六年、木村熊二先生が耳取町に小諸義塾を開設し、若者たちに英語・漢文・倫理を教授し、島崎藤村・鮫島晋などの有名な先生方によって新しい文学や芸術の世界へと大きく眼を開かせていた。まさに小諸における文明開化がはじまったと言って良いだろう。

そして、ここに忘れることのできない人が森山の塩川伊一郎父子である。初代伊一郎と二代伊一郎（勝太）の果樹栽培に対する情熱と、それを導いた木村熊二先生のアメリカ留学による広い知識が、三岡の桃を生み、缶詰工場の成功となって佐久地方の農業と生活を大きく発展させることになった。もうひ

とつの文明開化であった。

この度、塩川伊一郎家御一族の皆様によって、明治時代の資料が発見され、三岡村の桃栽培から缶詰工場への歴史が明らかになり、元野岸小学校長小林收氏によってまとめられ、『塩川伊一郎評伝』が出版される運びとなったことは、小諸市の近代における発展について正しく理解する上に意義深いことである。この本が小諸の人々ばかりでなく多くの皆様に読まれ、地域発展の一助となることを祈ります。

平成七年九月一日

塩川伊一郎父子の果樹への情熱と

木村熊二先生の卓越した指導のたまもの

編著者 小林 收

「塩川伊一郎についてまとめてほしい」と一族の方から話があった時、私は一瞬ためらった。「木村熊二先生と塩川伊一郎によって三岡の桃栽培がはじめられた」という話は聞いていたが、今までに書かれた本や展示物にはいろいろな話がまことしやかに語られていて、子どもたちにどう教えたらいいのか迷っていたからである。

しばらくして塩川善郎氏が東京女子大学附属比較文化研究所に所蔵されていた、木村熊二先生の書かれた「森山村桃樹栽培の経緯について」を複写して送ってきた。それは毛筆で書かれたむずかしい文章であったが、何回か読んでいくうちに、木村先生と伊一郎との出会いから、桃栽培のはじまりについてくわしく書かれた文章であることがわかった。この文がほんとうに木村先生の自筆であるかどうか、木村先生については小諸で最もくわしい本町の武重夏雄先生に鑑定していただいで確証を得た。そこで、『木村熊二日記Ⅱ』に出てくる伊一郎関係の記述を抜すいしながら調べていくと、記述されていた内容が一致したのである。

平成二年の夏、森山の伊一郎家の座敷二間一面に並べられた伊一郎関係の資料や掛けられている肖像画や書額に接して私の心も決った。その時は小諸の学校に在職中の身であったため、退職後にまとめることにした。

『塩川伊一郎評伝』を編纂するにあたり、私は残されている資料に基くともにも、その背景となつてい

る明治から大正期にかけての世相と佐久の地域性になつて解釈しながらまとめたとい考えた。そのため

に本の構成を三つに分けた。

第一部 伊一郎父子の生いたちからいくつかの失敗を経て、果樹栽培・缶詰製造へと挑戦していく姿

を物語風に

第二部 三岡村桃栽培の起源について、木村先生の文と日記を中心に、立証的な文章で

第三部 『塩川伊一郎評伝』の論拠となつた、木村先生や二代目伊一郎が書いた文章、その他新聞をは

じめ多くの人々が書いた文などの資料をそのままのせた。

それはこの書ができるだけ多くの人々に読んでいただき、火山灰に被れ、寒さのきびしい信州の佐久

地方で、明治のはじめに米と蚕かいこによる農業に果樹栽培と缶詰工業という新しい産業をきり開いた伊一郎

父子の情熱と、それを指導して下さった木村先生の卓見を正しく知ってもらいたためであった。第二

部では今まで伝えられてきたいくつもの桃栽培の起源をはっきりさせることに力をおいた。第三部では

この書をまとめるために使った資料の中から重要なものをのせた。それは今後佐久の果樹発達について

詳しく知ろうとする人のためであり、この書が事実を基に書いた証あかしとしたかからである。

偉人の業績は一族の方々や身近かな人がまとめることが多い中で、全くの他人である私が引き受けたのは、かねてから佐久地方の開発を行ってきた先人の努力を知り、それを地域の発展の礎としたいと考えていたからである。また、「評伝」としたのは、私の解釈を加えさせていただいたからである。

いま私たちは世界でいちばんおいしい果物に恵まれている。その陰に伊一郎父子のようなドラマティックな努力があったことを明治・大正の時代背景を考えながら読みとっていただければ幸いである。おわりに資料を提供して下さった東京女子大学比較文化研究所、武重夏雄先生、龍鳳書房の皆様方に厚く感謝申し上げます。

平成七年九月一日

塩川伊一郎評伝・もくじ

小諸の文明開化

木村熊二先生と塩川伊一郎父子の業績をたたえて

小諸市長 塩川 忠巳・9

塩川伊一郎父子の果樹への情熱と

木村熊二先生の卓越した指導のたまもの

編著者 小林 收・11

第一部 塩川伊一郎評伝

第一章 森山村の桃づくり ————— ・17

一 塩川伊一郎家と勝太の上京・20

二 りんご栽培に着目・23

三 三才山でのりんご園づくり

—若き勝太の挑戦・27

四 木村熊二の門をたたいて・30

五 三岡村、桃栽培のはじまり・34

六 風土に合った浅間水蜜桃づくりに成功・39

七 桃づくりの努力と技法のあみ出し・42

第二章 大島紬に夢を ————— ・47

一 台湾—琉球・奄美大島へ・48

二 歩き続けて故郷へ・52

三 大島紬の失敗に目がさめて・61

第三章 桃づくりから缶詰へ ————— ・65

一 桃は実ったが・66

二	缶詰製造への進展のかけに	・ 69
三	塩川缶詰合名会社の発展	・ 74
四	イチゴジャムの製造	・ 80
五	桃栽培の広がりとの共同の力	・ 86
六	博覧会出品で宣伝、 明治屋との提携で飛躍	・ 92
七	塩川桃園と三岡のにぎわい — 視察あり観桃会あり	・ 99
第四章 夢は果てしなく —————		
一	桃栽培の利益と危険 — 伊一郎の考えと木村熊二への感謝	・ 105
二	小果実の栽培と農閑期の 副業へのアイディア	・ 109
三	缶詰工場の隆盛と社会奉仕	・ 115
四	最後の鳴尾行き	・ 120
五	すみの努力と戦争の中で	・ 129

六	浅間の煙とともに	・ 132
---	----------	-------

第二部 佐久における桃栽培等の起源 —————

一	三岡村の桃栽培をめぐる諸説について	・ 139
二	木村熊二と伊一郎との交流について	・ 141
三	佐久における果樹栽培の記録	・ 145
四	伊一郎とジャム製造について	・ 148

第三部 資料編 —————

第一章 資料解説 —————

一	掲載資料	・ 154
二	未掲載資料	・ 158

第二章 資料 —————

一	森山村桃樹栽培の経緯について	・ 160
二	木村熊二先生の生いたちとアメリカ留学	・ 164
三	木村熊二日記 II	・ 166

- 四 佐久の園芸王・174
- 五 塩川伊一郎氏・191
- 六 浅間山麓の一偉人・202
- 七 台湾・奄美大島紀行・207
- 八 長野県北佐久郡三岡地方洋桃及
苺栽培并缶詰製造業経営書・224
- 九 洋桃の利益及危険に就て・278
- 十 桃養合資會社定款・286
- 十一 果樹害虫驅除豫防組合規約・290
- 十二 佐久特産物の消長・292
- 十三 小果実栽培法・298
- 十四 園芸家 塩川伊一郎君・302
- 十五 弔 辞・308
- 十六 塩川伊一郎の受けた賞状・309
- 十七 塩川伊一郎略年譜・311
- 十八 塩川伊一郎家系図・

主な参考文献及び資料一覧

317

あとがきにかえて

遺族代表 塩川 哲郎・320

明治34年の北佐久郡の古地図（長野県統計書より）



第一部

塩川伊一郎評伝

第一章

森山村の桃づくり



一 塩川伊一郎家と勝太の上京

小海線三岡駅から森山へ向かって南西に約一キロほど進むと、御影用水に沿って大きな二階建て瓦屋根の建物と土蔵が桃畑の中に見えてくる。この家が、佐久に桃樹栽培を導入した塩川伊一郎家である。春のゴールデンウィークのころには、三岡駅から森山・市村・御影新田一帯にかけて、桃の花が咲き誇り、鯉のぼりが風に泳いで佐久地方の最も華やかな季節を迎える。浅間山の頂上には、かすかに白雪が残り、すそを長く引いたなだらかな高原の家々の庭先には、桜やレンギョウの花が咲きみだれる。

小諸には「塩川」姓を名乗る人々が三七〇軒余と多い。彼らは現在も本町をはじめ、御影新田や小原などにいくつかの「まけ」（一族）を持ち、古くから「小山」姓を名乗る人々と共に地域の発展に貢献してきた。

初代塩川伊一郎は、弘化三年（一八四六）北大井村柏木かしわぎの小山儀助ぎすけの次男として生まれ、慶応元年三岡村森山の塩川幸三郎の娘きよと結婚、塩川家へ婿養子に入った。

伊一郎・きよ夫妻は先祖代々からの田畑を耕し、またその頃から盛んになってきた養蚕業にも励んでいた。伊一郎は園芸の趣味が深く、特につき木の技術にすぐれていた。また大工の棟梁とうりょうとしても人々の



往時の面影を残す塩川伊一郎家（平成7年8月撮影）

信頼が厚かった。

二代目伊一郎は、明治二年（一八六九）伊一郎・きよ夫妻の長男として生まれ、幼名を勝太といった。勝太は、小学校を卒業したあと、家業を手伝っていたが、小諸町にあった中山義塾へ入って、漢学の勉強をはじめた。

勝太は小さい時から本を読むことが好きで、新しい世の中の動きに心を動かされていたので、学問で身をたてようと考えていた。二年にわたってむずかしい漢文に立ち向かっていた勝太は、文明開化の進んでいる東京に出て、新しい学問を修めようとした。

父の棟梁の稼ぎと、母の田畑からの農業収入では、生活に多くの余裕があるわけではなかったが、息子の強い意志をみて父は上京を許した。時に勝太十七才の正月であった。

明治十八年一月六日、勝太は、凍りつくような碓氷峠を越えて高崎から汽車に乗り、上京した。早速東京

本郷町にあった「原洋義塾」げんようぎじゆくに入門、数学と英語を学んだ。これからの世の中では、外国の新しい知識や技術を取り入れていかなければならないと考えたからであった。塾の先生や友だちの感化もあって勝太は文明開化の世界へ興味を持ちはじめた。

しかし、残念なことにこの遊学は長くは続かなかつた。家を出る時の「学若無成死不還」がくもしならずんばしじもかえらずとの志に反して、勝太は帰郷せざるを得なくなつた。彼が東京で見たもの知つたものは、日本の文明開化そのものであつた。佐久のきびしい寒さ、肌をさすようなつめたい風は関東にはなく、冬でも緑がいっぱいであつた。汽車が走り、電信がとび、人々が忙しく行きかう様は、勝太が夢に見た西洋の風景そのものであつた。勝太は帰郷に際して『舶来蔬菜果樹栽培便覧』はくらいそさいかじゆさいいびげんらんという本を買つた。果樹やつぎ木の好きな父への土産と自分のこれからの生きる道を胸に秘めた買物といった方が正しいかも知れない。この一冊が伊一郎父子を園芸への道へさそう契機となり、運命をかえることにならうとは、勝太にとって知る由もなかつた。

二 りんご栽培に着目

『舶来蔬菜果樹栽培便覧』を見た父の伊一郎は、興味をもって読んでいたが、「佐久にはりんごがいちばん合っているのではないか」と勝太に語りかけ、りんご栽培が信州には適していることを読みとり、試験的に栽培してみようと意志をかためた。伊一郎は棟梁の仕事のかたわら、春には柿や梅のつぎ木の名人として、三岡村ばかりでなく小諸町の人々にも頼まれるほどの技術を持っていた。また、園芸にはかねてから趣味を持っていたため、りんご栽培に着目したのは自然であった。父子の意見は一致した。

勝太は遊学中に知った東京三田の育種場から数種類のりんご苗を取りよせた（『三岡地方洋桃栽培経営書』—東京女子大学附属比較文化研究所蔵 以下同）。この苗木をつかって、野山にある小さい実をつけるりんごの原種の台木につぎ木していった。つぎ木は伊一郎がはじめは行なったが、数が多くなるにつれて、勝太や家の人々が教えを受けて手伝った。当時の三岡村には松やクヌギの平地林がひろがっており、林の中には村の人々が「コナシ」と呼んでいた小さなりんごと同じ形をした実をつける木が生えていた。はじめのうちはそれらを台木にしていったものと思われる。

この年四〇〇本のりんご苗を育てることに成功した父子は、この苗をもとに広いりんご園をつくり上

けることを考えた。新しいりんご園をつくるには、まず林を開墾することからはじめなければならぬ。勝太は何人かの友人にりんご栽培の有益なことを説いて応援を求めたが、海のものとも山のものともわからないりんご園の造成に賛成する者はなかった。勝太は、新しい国の産業を起し、農村の窮状を救いたいと語りかけたが、村の青年たちは同意するどころか彼をさけるようにもなり、遂には激論となり衝突をしてしまった。

のちの文章に「旧思想を墨守せる青年輩」と書いてあることから、村の青年たちは明治のはじめころの米と雑穀を中心とした農業をかたく守っていかうとする態度がみられ、貧しいけれども金をかけてまで新しい果樹栽培に立ち向かおうとする者はいなかったようである。伊一郎父子のりんごづくりに土地を貸してくれる人もなければ、開墾や畑づくりに手をかしてくれる友もないばかりか、村人たちから相手にもされない状態になってしまった。父伊一郎は自分の信ずる道を成就させること、また若い勝太の希望をかなえさせてやろうと八方手をつくした。まずりんご苗と広い畑がある。そのためにはりんご園をつくり上げるまでの資金が必要である。苗は前の年に植えてのびた枝と野山からの台木をつぎ木して増やしていった。資金は棟梁の仕事の方からつみ立てていった。ところがいちはんだいじな畑を借りることができなかつた。

畑は丸子町鹿教湯かけゆの奥にあたる三才山みさいやまのふもとにみつかった。西内村（現丸子町）の齋藤村長のあつせんによつて一〇町歩ほど借りることができた。今では三才山トンネルができて国道二五四号が開通したのでそんなに遠い土地ではないが、明治二十年代に小諸から鹿教湯へ行くには、北国街道を通つて大

屋から丸子へ出て東内村を西へ進むほかは道がなく、りんご苗や荷物を馬車に積んで行くには一日をついやした。朝早く出発して、夕方でなければ着けない距離であった。そんな遠い所へりんご園をつくろうとしたのは、三岡の附近には貸してくれる人がいなかったのか、三岡ではりんごには寒すぎるので少しあたたかい丸子町を選んだのか、また斎藤村長と伊一郎がどんな関係にあったのか、詳細は不明である。現在は内村ダムができて上流の方は水没しているが、ダムの下のあたりで開墾が行われたものと考えられるが、今となってはそのいきさつはわからない。

明治九年ごろから長野県では、善光寺平でりんごが栽培されはじめていたので、勝太は成功を信じていたのであろう。

三 三才山でのりんご園づくり——若き勝太の挑戦

勝太は明治二十二年（一八八九）、丸子町の鹿教湯温泉の奥の土地に小屋をつくってその中に寝泊りし、近くの青年五人を雇って開墾をはじめた。内村川が上流から長い年月かけて土を運び、谷を埋めてきた平らな土地は雑木林となっていた。小石まじりの土地であったが、三岡のような火山灰の積った軽い土よりは、りんごには適していたと考えたのであろう。

雑木を切り、根を掘り、石を運び出す仕事は勝太と五人の若者たちのおもな仕事となった。彼らはのこぎり、つるはし、唐ぐわ（ちやぐわ）といった道具をつかってりんご園づくりに精出した。

伊一郎は、勝太のためにはじめ千円の資金を用意した。人夫賃や道具代のほか、食料費などに用意した資金は少なくなっていた。伊一郎はその後も資金を勝太のために用意したが、これは決して楽なことではなかった。その上、りんご園に植える苗も増殖しなければならなかった。苗は春から初夏にかけての時期につき木を行なうが、畑の手入れを考えると、朝早くから夜おそくまで仕事が続いたにちがいない。三才山では息子が、三岡では父が、新しいりんご園を夢みて「夙（と）に起き夜中に寝て」という生活の中で努力が続けられていった。

土地を拓いては植え、また土地を拓き、四千本の苗を植えつけていった。りんごの木は、予定通り成長をみせて伊一郎父子を喜ばせた。「一本の木から一円づつ取れても四千円の収入だ」と勝太の夢が現実味をおびてきた。

しかし、白い花はつけたが実がみのらなかつた。りんごの木は植えて数年にして花をつけはじめが、樹が熟成しない時期には実をつけないまま落ちることがよくある。若い勝太にとって、せっかく花が咲いたのに実をつけなかつたことは大きなショックだったにちがいない。交配も不十分だったのであろう。

さらにこわい虫の害が、りんごの成長を弱めた。五年目になって、成長したりんごの木に白いわた毛のような「綿虫」がついてしまった。消毒をする薬についての知識がなく、霧にしてふきつける道具など全くなかつた時代なので、手で取るよりほかに方法はなかつた。しかし、四千本にも広がったりんごの木についた綿虫は、手で取りきれるものではなかつた。ついには枯れたように弱ってしまった木も出はじめた。その上、春先におきた近くの山の野火がりんご園に移って多くの木が焼けてしまった。このたび重なる障害に、勝太の初志はゆらぎはじめた。開墾しただけの畑では肥料分は少なく、りんごの樹勢をつけさせることはできなかつたのである。せっかく結実したりんごが落ちるのを見て、勝太は自らの夢がもろくも崩れ落ちていくのを感じた。

五年間にわたる三才山峠の麓でくりひろげられたりんご園づくりは失敗し、断念せざるを得なくなつた。労働賃約千円、諸経費約千円は、伊一郎が勝太のために用意した大切な金であつたが、その資金を

すべて使い果し、勝太は開墾に使った鍬一挺を持って家に帰らなければならなかった。

果樹の失敗は、りんごばかりではなかった。伊一郎父子は、明治二十二年から、桃の栽培もはじめている。「支那種又ハ在来種ヲ栽培シタルモ皆結果不良ニシテ一モ成績ノ見ルベキモノナクシテ終レリ。是レ其方法宜シキヲ得ザルト種類ノ雜駁ナルニ起因セリ」と後の経営書に書いているように、消毒や肥料についての知識がない上での栽培では成功することは無理であった。

五年間の苦勞と二千円の資金は水の泡のように消え、村人たちからは「それみたことか」と笑われる結果となった。さすがの伊一郎父子は果樹園への夢を失ったばかりでなく、生活や仕事にも困窮をきたすまでになっていった。

伊一郎父子が失意のどん底であえていたその時、一人のキリスト教の伝道師が小諸にやってきた。その人物こそ、のちに伊一郎父子を支援した木村熊二その人であった。

四 木村熊二の門をたたいて

『木村熊二日記Ⅱ』（東京女子大学比較文化研究所刊 以下同）によると、木村熊二が、キリスト教の布教のためにはじめて信州へ入ったのは、明治二十四年（一八九一）十月十日である。横川から馬車で碓氷峠をのぼり、軽井沢から小諸へ入ったことが記されている。しかし、この時の滞在はわずか二週間あまりであった。翌二十五年一月十五日には、再び信州入りし、南佐久郡前山村出身の代議士早川権弥（ごんゑ）の招きによって、岩村田を経て野沢の並木信一郎宅に泊り、佐久各地でキリスト教の伝道をした。

早川権弥は、信州が誇る自由民権運動家。佐久地方のキリスト教布教に多大な功績を残すと共に、自党員として、言論集会の自由や地租軽減などの建白運動に活躍した。また後に衆議院議員、南佐久郡会議員、前山村長などを歴任、木村熊二を助け、佐久キリスト教会初代長老となった。

熊二は小諸へは一月二十五日、岩村田から入って佐野・田沢両氏をたずねている。その後、馬車や人力車で、何回も小諸の街ばかりでなく御影の柏木新三郎や御代田の原田耕三郎などの旧知を訪ねている。

こうした精力的な布教活動の中で、野沢の並木方で親戚に当る小山太郎らの熱心なさそいによって、



小諸義塾を開いた木村熊二

木村熊二の心が小諸へと向いたことは想像に難くない。明治二十六年四月には小諸の耳取町に家を借りることを申し入れており、小諸定住の心が決つたとみられる。熊二は前山から歩いて小諸の小山・佐藤両氏を訪ねていることもあるので、森山附近の村々や農地の様子を観察していたにちがいない。

明治二十六年（一八九三）十一月二十五日、小諸義塾が小諸懐古園かこえん近くの耳取町柳沢呈三の家を使って開校した。

二人の青年たちが、木村熊二の指導のもと自学自習をはじめた。ちょうどこの時が、勝太がりんごづくりに失敗して失意のどん底にいたころであった。アメリカ留学一三年の木村熊二が小諸へ見えたことは、当時としては画期的なニュースであったから、伊一郎父子の耳に入らないはずがなかった。その頃、熊二もりんごづくりには大変な興味をもって試行錯誤を繰り返していたことが日記から伺える。こうしたことから、意気消沈していた伊一郎父子を木村熊二に引き合わせたのが、自由民権家として活躍していた石塚重平の妻シン子であった。シン子はクリスチャンで、熊二の信奉者であった。

石塚重平は、小諸に盤鴻社を結成し、自由民権思想の普及に努めた自由党员であった。明治十八年（一八八五）朝鮮事件に連座、大阪で入獄した。後に衆議院議員として国政で活躍する。石塚は早川権弥と同志であり、木村熊二の信奉者であった。りんご園づくりに失敗した伊一郎は教えを乞うべく、木村熊

二の家を訪ねた。

『木村熊二日記Ⅱ』にはじめて伊一郎の名前が出てくるのは、明治二十八年九月二十日のことである。木村熊二は、その日の大事なことをきちんと書き留めているから、この日より前に伊一郎が訪れたとは考えられない。二十日の日記には「牧野老人塩川栄一郎来訪」と書かれているが、翌二十一日には「朝森山村塩川栄一郎を訪ふ」とあるので、伊一郎のことと推察される。ただ、栄一郎と書かれているのは、佐久地方では「イ」と「エ」の発音が区別つかない人が多く、おそらく熊二は「イ・イ・チロウ」を「エ・エ・チロウ」と聞き間違えたものと思われる。木村の文章である「森山村桃樹栽培の経緯について」(第三部資料篇一参照)によると、「蓬頭乱髪にて髭鬚を剃らず、言笑疎野」と伊一郎の第一印象を書いているところを見ると、伊一郎は頭の毛も口ひげもあごひげも手入れをしないで、しゃべり方も笑い方も、田舎者まる出しの感じを与えたようである。

しかし、伊一郎の話の内容は、佐久地方の農家の暮しの貧しさをなげき、一部の富める地主層とそれに対して塗炭の苦しみにあえぐ多くの小作人層が存在するというその頃の社会の矛盾をなげいている様子がくわしく書かれている。貧富のはげしさ、家柄の差、借金の利息によって苦しんでいる村人たちの生活に憤慨するという社会のあり方に対する伊一郎の認識の鋭さに、木村熊二が心動かされたことは想像に難くない。

伊一郎は、今まで自分が行ってきた果樹の植えつけやりんごの失敗についてくわしく話したとみえる。それを聞いた木村は、翌二十一日の朝、森山の伊一郎宅を訪ね、昼すぎに帰宅している。その時に

どのような話があったのかは、日記には書かれていないが、次の日にわざわざ森山まで出向いたことは、伊一郎の言葉が「疎野」であったにもかかわらず、話した内容が熊二の心をゆり動かしたのである。熊二は伊一郎に会いながら、森山村の土地や生活の様子を見ることがよって、伊一郎の願いに答えられるかを調べたのであろう。森山村は稲が色づきはじめ、秋蚕の繭かきも終わったころで畑の雑穀もみのりの時期であった。

その二週間後、さらに五日おいて伊一郎は熊二宅を訪れている。そして三回目にして、森山村の人々が集った所で話しをしてくれることを熊二に了承させている。伊一郎の熱意が熊二の心を動かしたのである。

五 三岡村、桃栽培のはじまり

木村熊二が森山で演説会を開いたのは、明治二十九年（一八九六）三月三日であつた（『木村熊二日記』）。前年（二十八年）の九月から、伊一郎はたびたび熊二のお宅を訪ね、熊二もまた森山の伊一郎の家をおとずれて果樹栽培についても話していたが、実施するだけの決心も資力も持っていなかつたのであろう。伊一郎は、自分一人だけでなく村人たちにも木村熊二の話聞いてもらい、同志を得ようと木村に森山で演説をしてくれるように依頼した。「森山村桃樹栽培の経緯について」によると、

「かくて余ハ一日森山村に於て演説する事となりぬ 村民の大半ハ同夜集会セリ その土地ハ到處、火山灰の堆積（じ）より成り立たるものにして、果樹にハ適するも 他の農産物にハ許多の肥料を施す（ほじ）にあらされハ多の收穫ハ得難（えがた）かるべしと思へり 余ハ偶然水蜜桃（すいみょうとう）の事を思ひ出し且つ百合栽培ハ適するならんと思ひたれハ 第一に桃樹を植付ケ三年間ハ間作として百合を培養（ばいよう）することを説きたりしに 伊一郎は拍手喝采（かつさい）セリ 一場の演説ハ已（すで）に畢りて聴衆の散して後八人の熱心家は其場所に残りて余と共に桃樹植付の利害得失を談す 半信半疑（はんしんはんぎ）の際伊一郎ハ立ち上りて『桃樹栽培にあらされハ今後の成功ハ期し

ともエモレローが求めたる石塊、市人の捨る野にれと彼に、
 里に貴重なる物にてありき、河村瑞軒が想像せし、江戸市
 街に遺棄したる黄金、八馬の草鞋に遇きよ、所謂勝つ
 人の用ざる所のと、ハ敷る、人の茶にてあり、然れとハ彼
 等ハこれによりて成功し、芳名を千歳に流せしとのハ用意
 周到の結果に遇きよ、信濃守佐久郎、森山村といふハ、
 一、三岡村の一部派なり、村民に鹽川伊二郎といふハ、
 一日我家を訪ふ、蓬頭乱髮、と髯、髪を剃らず、言笑
 疎野すれど、語る亦、田舎者の真面目と、熱心と、顕張
 家生計の日に非なる事と、慨歎あり、元来、亦の也、この時

木村熊二の自筆になる「森山村桃樹栽培の経緯について」原稿

かたし」と一々鋭意に他を奨励せり、ここ
 に八人の者ハ同盟者を得ることとなり、か
 くて屯人ニ付第一の払込を金拾円と為し
 たりしが、夫ハ随分六ヶ敷事の様^いに思ひて
 余ハ『諸君の桃樹栽培の爲め拾円を奮発し
 得る哉』と問いしに、彼等ハどうしても金
 作して差出すといへり。かくて強固なる団
 体は出来たり」

説に賛同したことが明記されている。伊一郎の同志となつたのは、塩川三郎次・小泉多作・大久保茂惣
 吉・森山嘉一・中村廣太郎らの諸氏であつた（『佐久地方桃栽培沿革』）。木村の文中に「同盟者八人ハ直
 ちに着手せん」と書かれているが、もう一人は勝太であつたと思われる。勝太が買ってきた一冊の本に
 よつて父が乗り気になり、仕事のかたわら苗を育て、若き息子が実践者となつて農園づくり^なに挑戦し、
 失敗を重ねてきた苦難の年月も終りをつけることになつた。

さて、木村熊二の演説に賛同した伊一郎ら八人は、桃栽培の意欲は高まつたものの先だつお金があつ



瘠土の浅間山麓を切り開いて桃園がつくられた（大正初め頃）

たわけではなかった。一人一〇円づつ出し合って資金にしようとしたが、家計にそんな余裕があるはずはない。若者たちの当惑した顔色を見てとった木村が、ポケットマネーから一〇円を出そうと話しかけた。この一言によって八人はどんなに勇気づけられたことであろう。当時の一〇円を今の金額に換算することはむずかしいが、木村が小諸の耳取で借りていた家の一か月の家賃が三円（『熊二日記』明治二十六年四月十七日）であったから、およそ三か月分と考えれば桃の苗木を買うお金としては充分であり、彼らの心に火をつけ希望をふくらませていったにちがいない。

そこで若者たちは元氣百倍、稲作りや桑の手入れが始まる前に畑づくりに取りかかる手だてを考えた。

その日の夕方、熊二は伊一郎宅に立ち寄り、そばをごちそうになって小諸へ帰っている。佐久地方では、正月やお祝いごとがあれば、熟練したおばあさんがそばを打って、山鳥か兎の肉で味出しをした汁で、そば

を出すことが最大のもてなしであった。それほどに貧しい農村経済なのであった。「夕帰宅微恙あり」と日記の最後にあるところから、熊二も演説に疲れ、伊一郎たちの興奮に少し熱があったのではないかと推察される。

八人は直ちに桃園づくりにとりかかった。時の村長中村廣太郎の山林約四千坪を借りると、松やクヌギなどの立木を切って、開墾に立ち向かった。勝太ともう一人が熊二から借りたお金を持って、埼玉県安行と東京の育種場へ出張し、水蜜桃の苗木の買入れを行なうことになった。

当時の森山（小海線三岡駅の南部一帯）のまわりには平地林がたくさん残っており、村の人々の建築材や炊事のための薪炭をとる場所となっていた。畑を増やすには木を切り、根を掘り起こす苦しい仕事であったが、同志たちは力を合わせて立ち向かった。

木の根を掘り起こした土地は、表面は木の葉などによる腐食した土であったが、それはうすく、その下には人間の住みつく以前から長い間浅間山が吹き出した火山灰土の層が堆積していた。若者たちは資金不足を、労力をもって補いながら桃栽培に向かってスタートしたのである。

一方、桃苗の買いつけに出発した勝太は、埼玉県北足立郡土塚村の苗木商中田与右衛門方から、「早生半兵衛」、「天津水蜜桃」、「上海水蜜桃」、「日の丸」などの苗木七五〇本を購入して帰った。木村熊二の一〇円を基に七人が少しづつ出し合ったお金を加えて手に入れた、貴重な桃苗であった。

七人は開墾したばかりの畑に桃を植え、あいている所へは、じゃが芋と百合を栽培した。「桃・栗三年、柿八年」と古くからの言い伝えにあるが、桃の実がつくまでの三年は、間作の収入で補おうという熊二

の考えと、作物をつくることによつて地味^{ちみ}を豊かにするとともに、雑草のはびこるのを防ぐねらいもあつた。植えたあとに切り取つた苗の先は、山桃につき木して、苗の増殖をはかつたことは、初代伊一郎の技術と経験からして当然考へられたことである。

「これぞ森山へ桃樹栽培の初期なりき」と熊二が力説しているように、佐久における本格的な桃栽培がここに始まつたのである。

六 風土に合った浅間水蜜桃づくりに成功

りんご園の失敗というにがい経験を持っている伊一郎父子は、桃栽培については慎重に立ち向かった。りんご栽培の失敗は、土や気候などの自然について無知であったのを反省し、果樹の成育について考え続けていたのであった。再び失敗をくりかえさないために、勝太は新しい勉強を続けていた。

土壌については、農商務省地質調査所土性課で調査した「土性説明書」を読んで、三岡附近の火山灰土は予想以上に養分が少ないことを知った。そしてアメリカの果樹地帯では、肥沃の土地にはぶどうや柑橘類かんきつを栽培し、あまり肥沃でない土地に桃を栽培していることを学んだ。

気候については、岩村田にあった北佐久郡役所の調査した温度や降水量によって桃の成長との関係を考えて。勝太は温度表をみて、春の四・五月の開花期から萌芽期に時々おそってくる低温と霜の害を心配していた。しかし、夏は七・八月の平均気温が二三度、二四度の暑さになり、樹の成長や桃果の肥大には充分であろうとみていた。雲の量の少ないことや快晴日数の多いことは良い条件に入り、湿度の低いことは悪い条件になると考えていた。佐久高原に特有の秋冷については、晩熟種の栽培には影響があるのではないだろうかと予測していた。

排水の良い火山灰土と乾燥した気候は、杏すももにつき木した桃苗の成長をおくらせることを知った伊一郎は、欧米の栽培法や川崎地方の栽培方法を参考にしながら、三岡の風土に適した桃づくりにとりかかった。当時の桃といえば「天津水蜜桃てんしんすいみつとう」や「上海水蜜桃しやんはいすいみつとう」など、中国種系が中心であったが、西洋種も東京や埼玉県では販売されはじめていた。伊一郎父子は北足立郡土塚村の苗木商中田与右衛門から買入れた苗で、本格的な桃栽培に取り組むことになった。三岡村の火山灰土や湿度の低い気候に合った種類はどれか、りんごの時にやられてしまった病気や虫の害にはどのように対処したらいいのか、春の寒さや霜の害に強いのはどの種類かなどの研究もおこたらなかつた。

桃苗の成長を観察しているうちに、杏すももの台木につき木した桃は、樹の枝の成長がおそく、枝は上にのびないで横にはっていくことがわかつた。それに早く大きな実をつけるが、樹勢が弱いために数年にして実のつき方が悪くなり、病害や霜にもおかさされやすいという大きな欠点を持つてることがわかつた。それ以後台木には野生桃を使うことよつて、樹勢が旺盛で発育が良く、三岡の風土に適した苗をつくり出すことにつとめた。とは言つても、近くの山野にそんなにたくさん野生桃が生えているわけではない。

そこで伊一郎は台木の育成に取りかかつた。九月に熟した野生桃の実を採集し、肉付きのままあらかじめ深さ一尺(三〇センチ)ぐらゐに掘つた土中に埋め、上から五寸(一五センチ)ほど土を盛りかけてそのままにしておき、十二月頃になつて二〜三回水をかけて冬の寒さにあわせるという方法をとつた。すると果肉の部分がくさつて、核がしぜんにとれていく。四月になつて掘り出してみると半数以上は核がわれている。われていな

いのもつぼで軽く叩くとわけて種子が出てくる。この種子を畑にまくと二週間ぐらいで発芽する。肥料にはうすい下肥しもこえを年に二〜三回やり、雑草をとってやると、秋には太さ五分(一・五センチ)ほどの台木によい野生桃の苗に成長した。それを翌春のつぎ木の時期に掘り取って日かげに仮り植えて発芽しないようにしておいたのである。

このようにして伊一郎が増やしていった種類の中で、アーリーリバー系の「浅間水蜜桃」と名づけられた苗は、はじめての栽培者にもあまり失敗しなかったことが、北佐久地方に洋桃栽培が盛んになった大きな要因となったのである。

七 桃づくりの努力と技法のあみ出し

同志たちは新たに原野や林を切り拓いた畑ばかりでなく、それまで、麦や豆・あわなどをつくっていた畑にも桃を植えていった。植える時期は春と秋の二回あったが、三岡の場合は秋植えの方が成長が早いことがわかった。秋植えの方が翌春の成長が早いために、三年目になるとその春に植えた苗の四年目と同じくらいの成長をみせた。稲の取り入れが終った晩秋になって、ほかの農作業が一段落してから、畑をすきで耕し、雑草や木の根を取りのぞき、縄を張ってうね幅を二間一尺、株間二間の菱四ツ目法によつて、(約一〇〇〇平方メートル)一反歩に七〇本、八〇本植えていった。

苗木は根を傷つけないように掘り起こし、長さ五〜六寸に切り、幹はかりに(四・五センチ)一尺五寸に剪定して植えた。できるだけ浅植えの方が将来の成長を早めるが、秋植えの場合は土を盛りかけて寒さを防ぐようにし、翌春になって発芽するころになって土をかきならすように、細心の注意を払い、苗を保護するなどの工夫を行なった。

火山灰に(おおわ)被れた表土とその下の礫(れき)のまじった排水のはげしい下層土のために、畑はあまり肥(こ)えてはいない土地なので、苗の成長にとって大切なのは肥料であった。明治中頃の農家で畑の野菜の肥料といえ

ば人糞じんげんが使われていた。伊一郎は苗を育てる時に下肥しもじえをうすめて施していたが、それだけでは丈夫な樹を育てるには不足していると考えた。そのころ水田の肥料として使われはじめていた大豆粕かすと化学肥料の硫酸アンモニヤと過燐酸石灰かりんさんせつかいを使う研究をした。それも、チッソ・リンサン・カリの三要素について計算をして、植えた初年度から樹の成長に合わせて量を増やし、四年目から果実がつく頃には、過燐酸石灰を加えるといった近代的な施肥方法を表にして、新しく植える人々に教えた。四年目からは花芽や果実がよくつくように、木炭を加え、樹勢に応じてその割合を考えて施すように、またその年の安い肥料を適宜に使うために、油粕・魚粕・米ぬかなどもあげている。果実が成熟期になって落ちてしまうのは、リンサン肥料が欠乏していることが多いので、木炭を増すか、リンサン・カリを加えるようにと説いている。

せっかく与えた肥料分をすい取ってしまったり、苗の成長に悪いのが雑草の繁殖である。四月下旬から草かきでガリガリと取り除くが、腰がいたくつらい仕事であった。二間けんおきに植えても株間は広くあいている。そこで熊二の教えにしたがって、植えてから二〜三年は間作を行なった。じゃが芋や百合の栽培は除草のためばかりでなく、土を深く耕し、肥料分をのこし、その上に果実をつけるまでの収入となって、現金収入の少なかつた農家の経済を助けることになった。

伊一郎父子が最もおそれていたのはおそ霜と病害虫であった。若い時に三才山のりんご園づくりで全滅に等しい大失敗の原因となった、にがい経験があつたからである。

佐久地方は北に浅間山、南に八ヶ岳と二千五〇〇メートルから三千メートル近い山がそびえ、三岡あ

たりも標高七〇〇メートル以上の高冷地である。日本の中央部にあって冬はたいへん寒い地域である。一月から二月にかけて寒い朝は、零下一二、三度まで下がることしばしばである。その上、冬型の気圧配置になると、かわいた冷たい風によって竹や柏の葉を枯らすほどのきびしさをみせる。土の表面も二〇〜三〇センチも凍ってしまう。秋に植えた苗は根が凍っていたまなないように盛土をして防ぎ、春になってからその土を平らにならして、根もとに太陽のあたたかさがとどくように工夫したことは、前述したとおりである。

四月に入って新芽が出て花をつけようとする頃になっても、冬型の気圧配置になると冷たい強風が吹き、翌日に高気圧が日本の上にくると風は止まり、雲はなく、すみきった星空がキラキラ輝く翌朝はきまって強い霜がおりる。明治のころは今より気温が低かったので、せつかく芽を出した桃の葉は霜にうたれてやけどをしたのと同じようになり、陽が高くなるとおちてしまう。いわゆる凍害である。すると樹の勢いはおとろえてしまう。凍害を受けた時には、いたんだ葉を一枚一枚摘みとることによって被害を少なくするように努めた。幸いにして桃の花は花粉の交接が終ったものは凍傷になることが少なかった。

寒さよりこわいのは病害虫であった。桃の樹には心虫が樹皮の中に入りこみ、ねばねばした樹膠を出すようになる。時には根もとに近い所の樹皮を一まわりするように傷つけて枯らしてしまうことがある。伊一郎父子は、皮を少しはいで穴の中に針金をさしこんで虫を殺すよりほか方法を知らなかった。蛾虫（アブラムシ）が新芽につくと養分をすいとので、枝の先の方の葉が小さくまるまったような

形になって発育を妨げる。ひどい時には枯れてしまうことさえある。伊一郎たちは小諸から石油乳剤を買ってきたり、煙草たばこのエキスを散布して駆除に努めた。

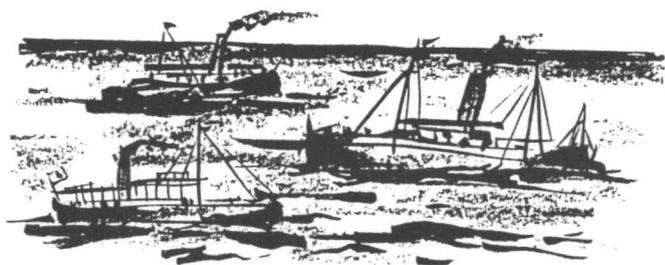
神奈川県では、大発生したエカキ虫によって果実がかたくしぶくなって食べられなくなり、大損害をしたという話が伝わって来た。三岡ではエカキ虫の発生はおそく、果実を取った後であった。これは三岡が寒い土地のため、天の恵みといわなければならなかった。

秋に発生するカビ病には石灰乳や苦汐などをすすめて「ブラシ」につけて、こすり取るようにして絶滅させることができた。このほか象鼻虫なども発生したが被害はあまりなかった。

勝太はりんごでの失敗というにがい経験から、病害虫に対しては細心の注意をはらった。桃の成長を観察し、専門家や本から学びとり、良いと言われていることを試しながら手さぐりで対応していった。

その中で桃づくりについては思わぬ天の賜ともいうべき冬の寒さという味方を得て、桃は思いのほか順調に成長していった。

第二章 大島つむぎ紬に夢を



一 台湾―琉球・奄美大島へ

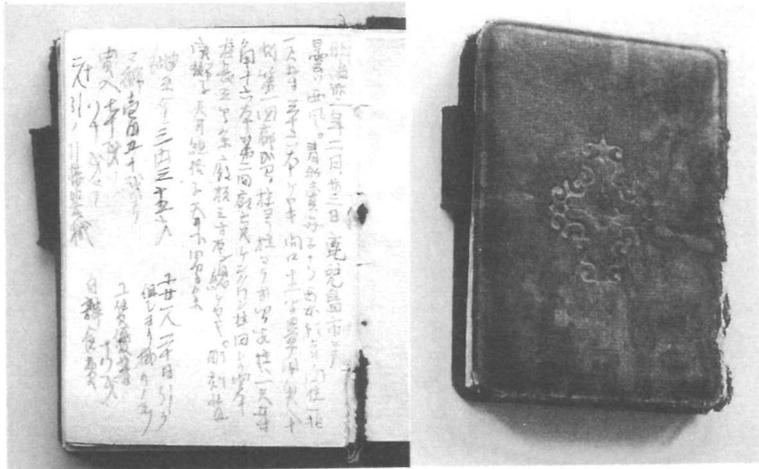
「桃・栗三年、柿八年」ということわざが、古くから言われている。「桃と栗は植えてから三年で実をつけるが、柿は八年たたなければならぬよ」ということで、桃は植えてから早く実をつける樹木の代表であった。

桃の樹は育っているが、三年間は収入にはならない。株間へじゃが芋や百合を植えたがそれはわずかな収入にしかならない。はじめから資金のとほしい中ではじめた事業であり、その上、木村熊二から一〇円を貸りたというものの、それは苗を買うことによつて費し、伊一郎父子をはじめ、同志たちの家計の苦しさは変わることがなかった。

春から夏にかけては桃づくりに没頭しているのでほかのことを考える余裕はなかったものの、秋も深まり冬が近くなると、仕事のあい間に暇が生まれてきた。

折から日清戦争が終つて日本は台湾を領有し、日本の手によつて行なわれる開拓が有望であるという話を耳にした。勝太の夢は広がった。台湾視察を行なつて道を拓こうと考えた。

塩川家に表紙が布製の小さな一冊のノートが残されている。そこには、勝太の台湾旅行と二回にわた



苦難の旅となった台湾・奄美大島行きを記した日記

る奄美大島旅行の記録が、鉛筆の細かい字でびっしりと書き込まれている。

第一回目の旅行は、明治三十一年十一月二十四日から三十二年三月八日にわたる一〇四日間の大旅行であった。地図をみながらまずその経路をたどってみると次のようになる。

十一月二十四日に小諸を出発した勝太は東京で四泊、京都で三泊したあと大阪・神戸を経て船で広島に着いた。広島で二九日と長く滞在した後、再び船に乗って門司から横浜丸で台湾へ着いた。

新しい希望をもってはるばる渡ってきたものの、聞いてきたことと実際に見るのとは大きく異なり、山奥の原住民のいる所は別として、安全に事業を行なえる場所などなかった。せまい土地も開墾され、山の上の方まで茶の木が植えられるおり新しい事業など起こすことなどとうてい考えられなかった。やむなく帰ることにしたが、帰りに琉球・奄美大島、鹿児島に立ちよったことが一つの事業への

夢を勝太に起こさせることになった。

それは大島紬であつた。小さいノートの旅行記には二月二十三日からの分が残されている。原文のまま紹介すると次のようである。

明治卅二年二月廿三日 鹿兒島ニテ

天晴 朝各店ニ至リテ真綿まわたノ相場まわばヲ問フ 最優等百目式(百々二四)円ヨリ下リテ壹(二四)円六十錢マデ。島糸しまいとハアル家殆ほとんトナシ 只一戸アリシノミ 價(價格)四円八十錢ナリ 長町田町冷水入口百六十五番 戸指宿修后氏ノ紬製造ヲ問フ。製造場ハ大ナラズ 場内女工数(二十)式十人ナリ 水車ヲ使用シテ車輪ヲ回轉セシメ 回力ヲ傳つたヘテツムヲ回轉かいてんセシムルナリ ツムハ繰リシ細糸ヲ卷クノ用ヲナス 真綿掛盤まわたかけばんハ竹釘ヲ植ヘ其ノ釘ニ真綿ヲ掛ケ 工女適宜てまぎニ細大ナカラシムル様ニ糸ニ注意スルナリ然しかルトキハ車力ニテ糸ハ引カレテ前頭ノ針金ニ掛リテ二ツノ丸キ棒ノ間ヲ通シテツムニ至ルナリ 棒ノ下ニ水鉢ヲ置キテ棒ニ卷キタル布ハ濡ぬれテ其濕(湿)ヲ細糸ニ傳つたテ濡ぬれサシムルナリ ツム巻カルマデニツムハ非常ノ回轉ヲナシテ総かすリヲ送りテヨリ掛ルナリ ツムヨリツカニ移シテ茲(三)ニカトナルナリ 此ノ製紬ハ百目め三円三十五錢ニテ賣却スト云フ マ綿ハ江州ヨリ仕入ルコトナルガ壹円六十錢ヨリ八十錢マデナリト云フ 此ノ器械ニテハ一人二十目めツ、製スト云フ 優等工賃ハ十八錢自食ナリト云フ。(後略)

このあと城山へ登つて西郷隆盛じじん自刃の地を尋ねた後、船に帰つて泊つてゐる。

大島紬については工場内の製法ばかりでなく、真綿や紬の価格や工賃などについてくわしく聞きとりを行なっており、養蚕王国信州人らしく、安い真綿が高価な大島紬つむぎとなって売れることに着目したようである。この文は鹿児島での一日のことであるが、琉球や奄美大島を通った時に見聞したことがもとなつてゐることは間違いない。勝太の日記は、カタカナまじりのむずかしい文章なので、現代文に直して話を進めてみよう。

二月二十四日、鹿児島を出港、湾内は静かで桜島や開聞岳の美しさにみとれていた勝太は、太平洋に出ると荒波にゆられ嘔吐おうとと苦痛になやまされる。船の中で知り合った大島の青年と親しくなり、その彼に布団の半分を貸してもらい、体の調子もよくなり、安眠できたことからみて、船賃を節約していたことが窺える。

二十六日 天気がよくなつて播磨湾はりまに入ると、甲板かんぱん上に出て四国の島々や白砂青松はくさせいしょうの風景を楽しんでいるが、一ノ谷の合戦における義経の戦略や平家の苦戦を偲び、感慨にふけるなど、歴史について相当勉強していたことがわかる。

神戸港に着いた勝太は、神戸の街を一まわり見学すると、昼食をとつて汽車で大阪に入った。車窓より見える畑には大根が青々と成長し、青菜を採集していることを聞き、梅の花や椿がいたる所に咲いている様子をまのあたりに見て、春のおそい信州と比べて植物の成長が早いことに驚いている。このことが後に勝太がイチゴ栽培をわざわざ兵庫県で行う契機となつたのである。

二 歩き続けて故郷へ

さらに日記をたどってみよう。

大阪へ入った勝太は、ここでも真綿の相場をたずね、絹糸紡績に大きな関心をよせている。にぎやかな道頓堀で飯と魚を食べた。二日も食べていなかったのでおいしかったが、ふところのお金が乏しくなってきた。旅籠へ泊ると二五銭、片旅籠で一五銭を出すことさえ儉約して、夜おそくまで町中を見物して歩いた。夜中の材木のかげは暗くてこわく、公園のベンチは野露にさらされるし、神社は縁日で参詣人が絶えないので、眠るのに良い場所がみつからない。心斎橋を出た所に露店があったので、縁台を引出して風を防ぐようにおおってひざを曲げるようにして横になったが敷物がなくて、眠ることができなかつた。月は皓々と天心にすみわたり、はかまとシャツと羽織のみではとても寒く、特に夜半から明け方にかけては寒さが加わって苦しさにたえきれず、五時に起きて歩き出した。ふところの軽さや空腹にもめげずに活動を開始した。

二十七日も天気が良く、工場の煙突が各地に立って、製造業の盛んなことがわかった。学校・気象

台・商工会・株式会社などの大きな建物が数え切れないほど並んでいた。安治川の橋から見ると汽船が無数に停泊し、居留地、聖アンナ病院が並んでいた。朝早く盛んな魚市場の仲買人の様子はケンカか戦争のように感じた。商工会の建物に入って商品の陳列場を見学した。書籍室に入って本を読んだ。勝太の考えていた事業について、得るところが多かった。日本商品陳列場では、糸類・小間物・陶器・漆器・織物・茶・鉱石の見本・漁業・製油所のひな形など、山国の信州では得られない貴重な知識を得ることができた。

お昼は二銭のさつま芋で腹を満した。しかし勝太の目は大阪の人々の着物に注がれていた。紬の衣類や山糸の布でつくられた着物を着ている人が多かった。大島紬はまだちらほらだったが、将来は流行することもあるだろうと思った。大島紬は柔かくしてシワがよらないで汚れが目につかない。洗っても色が変らないので、ふだん着にはすぐれた衣料と思ったからである。

大阪から汽車に乗って草津に降りたが、着物はよごれ大きな行李こおりを肩にしている風体があやしく見えたのか二軒の宿で宿泊をことわられた。三軒目の宿でやっと三〇銭で泊めてもらった。草津では真綿は作っていなかった。真綿は長浜地方で製造していると聞いて米原に向かった。汽車賃も宿料もなくなったので、羽織を質に置いて八〇銭を得た。この旅行で勝太は大島紬の製造についての構想を立てることばかり考えていた。

米原の東二十町余の村では個々の家で真綿をつくっていたので、勝太は経験と路銀ちぎんの足しにと働きなから教えてもらいたいと頼んだがことわられた。

図2 勝太の台湾・奄美大島行経路



やつと目ざす土地にきたのだから、しばらく滞在しようとしたが思うにまかせず、路頭に迷う身となつてしまった。その上、雨が降り出し雨具もなくびしょぬれになつてしまった。これからは野宿をし、山をこえて一〇〇里の道を歩いて行こうと決心した勝太は、畳たたみ表おもての雨具を買い求め、切れた下駄を捨てて二〇町ほど歩いたが、聞いてみると彦根街道であつた。自分の帰る中山道は反対の方向だという。勝太は進退極まつてしまった。すでに午後五時を過ぎていた。失敗とおそろしさが勝太の心をゆさぶつた。この雨ではどうすることもできない。仕方なく木賃宿きちんじどを見つけてとまることにした。客は一〇人ほどこで、靴の修理人や巡礼などでアラメのような衣服の者ばかりだつた。飯五合を炊いて宿料一一錢五厘であつたが、布団のきたないのには閉口した。

三月一日も雨だつた。あわせの着物とももひき、筒袖つっそでなど四品を一円三十銭で売つた。こんな逆境の中にあつても、真綿の製造所や湖からとれる鮒ふなやどじょうの価格をはじめ、彦根や琵琶湖の風景の美しさや岸辺の様子を観察する努力はおこたらなかつた。

琵琶湖の水位と同じくらしい土地に水田をつくり、水のひかない土地では、半分の土地を畔あぜのようにシヨベルのような道具で土を盛り上げてその上に油菜あぶらなや野菜を作っているのを驚きをもつて見た。

その夜もきたない布団とノミに悩まされてよく眠れなかつた。同宿の者もかゆいので、裸になつて火鉢のまわりでポリポリと音をたててかいている。彼自身も百日も着たままのシャツは、汗のにおいでくさく体もよごれきつていた。まさにおちぶれることその極みに達し、何のために台湾へ行つたのか……。

三月二日 勝太は汽車に乗つて岐阜に向かつた。車窓より見える近くの山々には雪が残り、小川には

水がとうとうと流れている。雪の少ない佐久との風土の大きなちがいに勝太は驚いた。関が原あたりでは寒梅が咲き、天下分け目の戦に東西の大軍が旗をなびかせた壮観さを想像しながら、大垣に着いた。ここも昨日の大雨のために水が出て田畑にあふれていた。しかし土地が平らなためか水の流れは弱く、濁流は山の上から粘土質の土壌を流している。土地を肥やしている原因がこのあたりにあることを勝太は感じとっていた。

岐阜は米原よりとても暖かく、桜の花が咲き、麦も大きく成長していた。新加納をへて山間に入ると、女子は織物をする人が多いと聞いた。鶉沼は一面平坦であったが、地味はあまり良くないように思えた。御料林があつて鹿がたくさんいるとみえて、問屋の前に二〇頭程が売られていた。この辺は小さな山が続き松林が多かつた。

木曾川の激流は満々と流れ、奇岩怪松のながめはすばらしかつた。しかし、出水のために大田の渡しは船が出せないとのことで、止むを得ず兼山を回つた。兼山は豪商が多く風景が良い町であつた。午後八時ころ、御岳おんたけ講の人々が泊る宿に泊つた。

三月四日 夜中は雨があつたが、朝は天気になつた。午前六時三十分宿を出たが外は寒い。昨夜の雨が山の上の方では雪となり、路は雨のあとのぬかるみであつたが、梅が寒さの中でも花をつけていた。馬籠まごめの宿を越え、急な坂の上から下をのぞむと山々が起伏して美しく、登り坂の苦勞を忘れさせてくれた。妻籠つまごを越えると木曾山道である。馬越峠は登り下り二回とも急坂であつた。東の方を望むと御岳山が高くそびえ、雪の白い鎧よろいを着たように見えた。明後日は、はるかに見える御岳の麓を過ぎるのか

と思うと、一步一步の足の運びも積もれば、大きなものだと驚くばかりである。

しかし、足は痛み歩みはだんだんおそくなってくる。木曾川の流勢は急でごうごうと白波をたてながら岩をかんている。石はみがかれたように白く丸く、急な山の斜面にはヒノキが茂っている。けわしい山と深い谷の中ではあるが、新道が開かれて車と馬が通っていた。

須原に着いて宿をとろうとしたが、裸足で行李を肩にかけた勝太の姿をみてあやしんだのか、みなことわられてしまった。この寒い山の中で野宿もできないので、後になってどんなに苦しむとしても、今夜は家の中でねむりたいと意を決していたのに、けがらわしそうに言われてはと勝太も腹を立てたがいかなとも仕方がなかった。半里程行つて、露店らしい家の戸をあけて食事を求めた。昼飯はだんご四くしだけでしのできたので、腹はへり、足は痛い。売りきれたとことわられたが、「飢えているので何でもいから与えよ」と言うとかゆを出してくれた。ふところの金も少ないので多く食べることもできず、かゆ二腕と汁二腕をすった。これより五里もある福島まで行こうとしたが、泊るところもない。苦しさにまけて主人に腰掛で眠ることを乞うと、あわれみからか「然らば眠られよ、布団があれば貸したいが、我々もない、火をたいてやるから炬ばたで眠られよ」と薪をたいてくれた。かますを敷いてふとんもなく、寒夜に土の上に眠ることを許されたが、何と情ないことか、かますの上に横たわったが、なかなか眠ることができなかつた。しばしば目覚め、夜中を過ぎると、寒さが身にしみて、とても眠れるものではなかつた。起きては火をたき、あたたまってはうつらうつらとした。あまりの熱さに目をさますと、羽織は焼け、火は着物に移ろうとしていた。あわてて火を消し、また少し眠る間に夜が明けた。

三月五日 天気 うす暗いうちに起き出した。道路も屋根も霜に凍り、寒気が胃までとおる。焚火を盛んにしてさめきつた体を暖めながら見ると、羽織は下の方が黒く焼けて着ることもできない。昨夜のあまつたかゆと汁をすい、風に身を吹かせながら行路についた。霜柱は、す足にくだかれてサクリサクリと音をたて凍痛がひどい。足袋もなく草履も破れたからである。天に白くそびえる駒ヶ嶽こまがたけは朝日を受けて水晶山のように立ち、麓は暗く、木曾川はとうとうと流れ、景色の美しさは言葉では表せない。(ここから墨の字になる。) 御岳山を拜む。

福島で朝食兼昼食をとった。みそ汁のうまかったこと。木曾川からはなれ、旭将軍(木曾義仲)の城跡を見る。足の痛みは強くなり、道路は雪解けのためにぬかり、草履は切れたが、銭がないので買うこともできない。その上足に豆まめができて痛さは言葉では言えないほどになった。

藪原は櫛くしの産地なので、櫛の店が路のかたわらに多い。声をかけて客を引いている。鳥居峠を越え、新道を回ってけわしい山を越えてようやく頂上に達した。奈良本（原か）に泊った。笠商人と同部屋だった。

三月六日 晴 出雲の少年と同行した。彼はお寺や金持ちの家からお金をもらいながら旅をしているという。道は平坦になり松本を過ぎて保福寺の前村で一泊した。

三月七日 上田で盆(口絵写真参照)をあづけ、金を借りて阿部さんの家に泊った。(ここで日記は終っている。)

日記は鉛筆から墨に変わってから簡単になった。これは途中で鉛筆がなくなったのか、空腹や寒さにな

やまされ、足の痛さにたえられなくなって書けなかったのか。

あるいは、上田の阿部家についてから、墨で書いたものとも考えられる。

上田に着いた時の勝太は、衣類はぼろぼろ、かみの毛やひげはぼうぼうと生え、切れた草履を引きずり、見るもすさまじい姿であったという話が塩川家に伝っている。上田の阿部氏は塩川家とは以前から交際のあった家で、勝太はそのお宅で食事を受け体を休めてもらったのち、衣服をととのえ阿部家の主人につきそわれて三岡へ帰った。察するに、大きな希望を抱き、意気込んで出発したにもかかわらず、あまりにもみすぼらしい結果に終わったために、父に謝るために阿部氏の同行を願ったのであろう。

漢語調で読点がなく、片仮名まじりの文で所々読みとれない文字もあるが、何回も読んでいくうちに若い勝太の人間性と探究心がにじみ出ていて大変面白い旅行記である。

台湾での有利な事業をあきらめた勝太は、帰路に立ち寄った琉球と奄美大島で見た「大島紬つむぎ」の事業化を考えついた。原料である真綿は信州でたくさん生産されている品であったし、製品になると高い値で売れることを見た。その原料は江州産（今の滋賀県）であったことから、米原へ立ち寄って確かめようとしたのである。そのためか旅行記全体に物の値段が細かく書かれている。このことから事業を起こそうとする勝太の意欲的な姿勢をうかがうことができる。ただ船賃がいくらであったかは一度も出てこないことが不思議で、信州の真綿をはるばる大島まで運び、織った紬をまた運んでくる輸送費をどう考えていたのか疑問が残る。

勝太には、船や汽車から見える景色の中で、また大阪市内や歩いている途中で、どんなことにも興味

を示し、新しい知識を身につけようとする旺盛な学習意欲がみられる。腹がへっても足が痛くても、わざわざ出かけて見ようとしている。それに源平の合戦や西南の役などの歴史にくわしいことがわかる。このことは小諸や東京の原洋義塾で漢学や数学を学んだ影響と考えられる。ほろをまともでも美しい風景に感嘆しているが、旅の最後になって金がなくなつて苦労するあたり、旅の日程と財布の中味とのバランスがとれなかったのは、若さのいたりだけだろうか。

(日記の原文を資料編七にのせ、かなをつけて読みやすくしてあるので一読してみていただきたい。少しむずかしいが、とても面白いし筆者の書けなかった部分も感じとってほしい。)

三 大島紬の失敗に目がさめて

有名な「大島紬」は真綿を原料として糸をつむぎ、その糸を染め、機織りして製造する。僅か一〇〇匁もんめ（三七五グラム）か一二〇匁の真綿から最高一〇円の紬ができることを目のあたりにした勝太は、信州にたくさん生産されている真綿を原料として、農家の婦人たちに織らせたら、利益が上るだろうと考えた。その手はじめとして、原料の真綿を売り込みながら、紬の織り方を調査しようとした。

彼は台湾から帰ると、信州の真綿を仕入れ、大島まで持っていくことにした。集めた真綿をきつくしめて荷作りすると、重さの割合には大きな荷物になる。

第二回の大島行きは明治三十二年四月七日に出発、主に海路をとった。それは宿泊料を節約するためである。

4.7 小諸発——東京（二泊）（天津丸（二泊）） 神戸（二泊）（金沢丸（五泊）） 大島（二四泊）

5.11 大島発（萬国丸（五泊）） 大阪（三泊）——京都——古市——無事実家着

大島へ真綿を持ちこんだものの、島の人々ほどの家も貧乏で、現金で真綿を買える人などいなかった。

もともと農家の主婦たちに布を織らせる産地では、問屋が中心になって原料を集め、主婦たちに手間賃を与えて糸につむがせたり、織らせるというのがどこでも行なわれている方式なので、原料を買って自分の力で布を織って売ることとはほとんどなかった。

そこで勝太は、持って行つた真綿を貸して、この次に来る時まで織り上げてもらい、代金を支払う約束をして帰つた。

第三回目の大島行きはその年（明治三十二年）の秋九月六日に出発した。小諸から福島県へ行き、郡山、福島、日光と真綿を買い集め、東京から汽車で米原へ、そして大阪へ出た。大阪から隅田丸で六泊しながら鹿児島へ、再び隅田丸で大島へ着いた。彼のノートには、二十八日上陸、大島三三泊とあり、続いて、

静心全局ニ注意セヨ

品質ノ上下ヲ監別セヨ

価格ノ高低ヲ認メヨ

坪量ノ強弱ヲ熟視セヨ

値切ねぎルコト。量ヲ強クスルコト。良品ヲ撰スルコト

と一ページに書き、自ら新しい事業に対する戒めとした。

ところが、前に真綿を貸しつけた家へ行ってみると、その家はどこへ引越してしまったのか、行方がわからない。あたたかな大島のことなので家は小さく、木と植物の葉でつくられた小舎のような家なので、寒さのきびしい信州とはちがって、簡単に移転することができる。また、ある家では、この前住んでいた人とちがった人になっていて、話がまったく通じないといった状態であった。

貸しつけた真綿の代金を回収するどころか、はるばる遠くまで運んできた二回の真綿は、大島紬にならないばかりか、真綿代まで回収できないという大失敗に終わってしまった。

しかし、大島での三三日間の中で、彼は西郷南洲(隆盛)の夫人（西郷菊次郎の生母）と親しくなり、話を聞く機会に恵まれることになった。夫人は彼が遠隔の地信州から大きな希望をもって渡ってきたことに共感し、紬の織り出しの模様をくわしく教えてくれた。夫人の教えに元気づけられた勝太は、紬の製造を信州で行なう決心をかためて、大島を去った。

帰途に彼は薩摩に立ち寄り、女子授産学校と士族授産学校を訪れ、二人の女教師を雇い入れることを約束し、手合金をおいて鹿児島をはなれた。（信濃毎日新聞記事）

無事故郷に着いた勝太から計画を聞いた父伊一郎は、賛成しなかった。三回にわたる莫大な資金は無駄使いに近く、新しく機器を買ってもむずかしい模様出しをする技術者がすぐ育つとは考えられなかったからである。

勝太は、自ら払った手合金を流し、紬織り出しの計画を思い止まり、りんご園につづいて、またまた失敗に終わった。若い彼の心のうちは「煩悶苦慮」と自ら他の文に書いているごとく、家にいてもどうし

ていいのやらからない状態におかれた。

その時思い出したのが鹿教湯の開墾をしていた当時、石塚シン子より与えられた、

「不毛の地に対して能く一木一草を生ぜしむるものあらば、それは政治家の事業に優ること万々なり」という言葉であった。前述したように、石塚シン子は衆議院議員石塚重平の夫人で、熱心なキリスト教徒であった。

彼が外に出て夢を広げようと旅から旅へとだいたいな金を使っている間にも、黙々と桃栽培に労をおしまない父伊一郎の姿を知った勝太は、再び浅間山麓のやせたこの土地を立派な桃畑にしなければならぬと固く心に誓ったのであった。

第三章 桃づくりから缶詰へ



一 桃は実ったが

「桃は三年で実をつける」とは古くから言われていることであるが、伊一郎たちが丹精こめて栽培した桃の木は美しい実をつけた。この桃をどこで売れば高く売れるだろうか。

「そうだ!! 軽井沢には外国人の別荘があつて、アメリカ人やイギリス人が来ている」

若い勝太は桃が傷つかないようにもみながらを箱につめて軽井沢へ向かった。軽井沢宿の八百屋では良いものは三銭、そのほかは二銭で売れた。走るように帰った息子の手ににぎられた金をみて、伊一郎の顔はほころんだ。長年苦勞して育てた桃が、やっと収入までこぎつけたのであつた。夏の日ざしが強くなると、桃は赤味をましおいしくなつた。しかし、軽井沢へ持つていってもたくさんは売れなかつた。それもそのはず、明治三十三年の別荘数は五一軒、外人用のホテルは万平ホテル一軒だけであつた。その上、避暑客の中には宣教師が多く、経済的にはそんなに裕福とは言えなかつた。

それではどこへ売つたらいいのか、信州で一番大きな町は長野市であつた。県庁や善光寺があつて、にぎやかな町なので買つてもらえるかも知れないと考えた。桃の箱を持つて長野に着いたが、一個二銭、三銭という桃を買つてくれる人はあまりいなかった。それに桃のおいしさを知っている人はなく、八百

屋でも買いしぶった。仕方なく、汽車賃だけでよいと八百屋へ安く売りたいと、ほうほうのていで逃げるように帰ってきた。

八人の同志たちは、せっかくできた桃をどこへどのように売つたらいいのか考えたが、名案はなかなかうかばなかった。

困った時にはいつも木村熊二の意見を聞いてきた伊一郎は、再び小諸義塾の戸をたたいた。

「桃はたくさんなるようになりましたが、さてその売り先として軽井沢のほかなく、多くの生桃をもてあましております」

と訴えると、熊二は、

「東京に出してみてもどうかね」と教えてくれた。

勝太は長野市でうまく売れなかったことから、東京は道のりも遠いので失敗した時に困らないようにと、少しの桃をみかん箱に三箱だけ持って出発した。

上野で汽車を降りたがどこへ売つたらいいのかわからない。ものは試し、当って砕けよとばかり、停車場のそばに青物屋があったのを幸いに飛びこんだ。東京商人との初取引は吉と出るか凶と出るか、かたずをのんでいると、

「こんなおいしい桃ならたくさんほしい」

と思ったより高く売れた。暖かい東京近郊の桃は、完熟時期が終つて品物がきれた時であつたからである。取引成功であつた。

「トウキョウニハモモガナイ、スクオクレ」

心配している熊二と七人のもとへ、うれしい電報がとどいた。東京はもちろん、横浜へも桃はどんどん送られ、一個五銭もの値がついた。前途有望と喜び合いながら生桃を送り出した。

ところが、東京の商人はそんなにあまくはなかった。最初のうちは高値に買い取ったものの、荷の数が多くなるにつれて「くさっているものが多い」と言うようになり、値を下げようとした。熟した桃は傷がつきやすく、傷からくされが広がりやすいのが桃の欠点である。当時の荷物輸送の方法や到着時間からすると、傷ついた桃があつたにちがいない。東京の商人の作戦にかかつてしまったことも事実であろう。後の手紙の中に「姦商かんしょう」という言葉で、この時の悔しさを示している。

「いい桃をつくり出したい」と、木村先生の指導のもと、熱心に研究し努力はしてきたものの、商売のかけひきまでは知恵がまわらなかつたのである。それに桃のくされを防ぐ方法も知らなかつたのである。

二 缶詰製造への進展のかけに

新しい桃づくりに取り組んで五年、苗を育て山野を切りひらき、仲間をさそって植えた桃畑は約二〇町歩にも広がった。桃の樹の成長とともに収穫量は年々増えていった。生食用の販売だけでは売れ残ってしまうことが目に見えてきた。生桃の腐敗を防ぐためには、熊二も同志たちも缶詰にすることが良いという結論に達した。しかし、缶詰の製造が桃の木を育てるように、簡単にいかないことはわかっていった。

この窮状をみた木村熊二は、東京の洋酒缶詰組合長であった豊田吉三郎に桃缶詰製造の助力を依頼してくれた。缶詰会社をつくるに当たっては、何より資本を集めることが必要であった。この呼びかけには森山ばかりでなく、小諸や佐久地方まで広く資本が集められた。

明治三十四年七月二十三日、塩川貞五郎・伊一郎の二人は木村を訪ね、缶詰会社について助言を求めた。木村は、豊田吉三郎を通して、東京小石川指ヶ谷町の豊田缶詰製造主、豊田守五郎を顧問とし、息ら二名を派遣して製造の指導に当たらせることにした。ここに八月十一日、合資組織の日本桃養合資会社が設立され、木村も出席して開業式が行われた。初年度の生産は桃缶詰一万三千本、ジャムおよび

ゼリー三千本余であった。

明治三十五年十二月二十日、桃養合資会社の資本金は三千五〇〇円に増額された。出資者は、塩川貞五郎、大久保茂惣吉が一〇〇円、豊田守五郎、塩川民助（東京）が二〇〇円、中村廣太郎、塩川伊一郎、高山永三郎（小沼）、大塚宗次（小諸）、小山忠左衛門（小諸）が一五〇円のほか、小県や岩村田などから三七名にのぼっている。塩川貞五郎、大久保茂惣吉が無責任社員となって他の三五名は有限責任社員であった。（資料編十 桃養合資会社定款参照）

ここに生果生産過剰の桃を缶詰にして売る方法がみごとに成功した。北佐久の各町村に広がっていった桃栽培は、農家の副業として収入を増し、佐久洋桃の名声は日に日に高まり、順調に発達した。

折しも日本は、ロシアとの関係がけわしくなり、日露戦争に突入していった。国内では諸物資の値が上がり、缶詰の材料が高騰して小さな会社の経営は苦しくなった。そこでさらに資本金を一万円に増額して日本桃養株式会社に変更する議案が出され、明治三十九年八月二十八日に決定された。

これより前の明治三十七年、伊一郎父子をはじめ、直井圓次郎、小山勝治、出澤嘉一、小山三四郎、塩川源助、矢嶋元助、永井與三郎の九人は会社を脱退し、新しく塩川缶詰合名会社を設立することになった。伊一郎と有志達が桃栽培をはじめたそもその動機は、「貧しい農家の生活を少しでも楽にしよ」ということにあった。こうした理念をより実現するために、塩川缶詰合名会社は出発した。いずれにしろ、その後日本桃養株式会社と塩川缶詰合名会社は、ともに北佐久一〇か町村の経済力を高め、長く佐久地方の経済をリードする有力企業として、地域発展に貢献していくことになる。後に昭和初期の

経済恐慌、さらには第二次大戦の影響を受け、火山灰土を豊かな果樹園に変え、さらに果実の加工産業へと発展させたその輝かしい歴史も幕を閉じることになる。

勝太らが新しい缶詰会社を作るといっても、機械や原料をそろえる資本が充分ではなかった。伊一郎一家は一大決心をして先祖伝来の田地三反歩（九〇〇坪＝約三平方メートル）を売却し、五〇〇円程の資本を得て、機械と原料のブリキを買い入れた。いよいよ缶詰の製造にかかろうとした時に、だじいな砂糖を買い入れる金がなくなっていた。

勝太は小諸町の間屋に行き、窮状を打ち明けて砂糖七〇俵（時価七〇円ばかり）の借金を頼んだ。しかし、「缶詰も現金で買い取るから、砂糖も現金でなくては売れない」とことわられてしまった。当然の

母 田中書籍出版部

製造元 **塩川伊一郎**

信州北佐久郡三岡村

發賣元 **小山徳二郎**

信州北佐久郡小諸町

信越 線御代田驛前
内國通運株式会社取引店

新聞に掲載した広告

こととはいいながら、自分の信用のなさに情なくなつて帰ろうとした。しかし、このまま砂糖の工面をつけないまま帰るとは、先祖伝来の土地とようやく整えた設備を無効にすることになってしまう。世の中の無情になげきながら、進退きわまつて小諸の街中をさまよっているうちに、

「鬼の拳こぶしにも当つてみよ」
とのことわざを思いおこし、勝太は勇気を



初代伊一郎の墓
戒名は「創栽桃仙居士」

ふるいおこしてとび込んだのが、小山徳三郎商店であった。事情を話すと、徳三郎は、「それは気の毒だ」

と同情を寄せ、快く引きうけてくれた。

砂糖七俵を借り入れ、缶詰ができたら必ず持つてくることを誓い、ようやく缶詰の製造に着手することができた。砂糖の仕入れで味わった困難は、かえって勝太の心をふるいたたせることになった。それからは今までより一段と事業に熱中し、缶詰を作つては小山商店に送り、かわりに砂糖を借りるという方法で根気よく桃缶とイチゴジャム缶をつくつては小山商店へ運んだ。缶詰は小山商店によつて各地に売り扱められた。製品の評判が高まるにつれ、経営は安定し、伊一郎らは危機を脱することができた。

しかし、いよいよ事業が軌道にのろうとしたその年、初代伊一郎は不幸にして病魔に犯され、遂に帰らぬ人となった。『木村熊二日記』には、伊一郎の死についてくわしく記されている。

明治三十九年三月七日(水) 塩川伊一郎氏之凶計に接す、万感如^{わがごとし}湧

塩川伊一郎君ハ余ト同盟して、森山村ハ桃を栽培せし人なり、今日之盛況を看る^みを得^えたるハ、同君

之畢世ひつせいの力とも言ふべし、今や余ハ君と幽明境ゆうめいを異にす、可歎かたんなり

三月八日（木）朝塩川伊一郎葬式ニ森山村へ至ル 坐上小演説ヲ為ス

熊二日記の中で、一個人についてこんなにくわしく書かれていることは少なく、熊二にとって伊一郎はいかに印象が強かった人物の一人であったかということができよう。

熊二は「余ト同盟して、森山村へ桃を栽培せし人なり、今日之盛況を看るを得たるハ、同君之畢世（一生涯）の力とも言ふべし」と、桃栽培が伊一郎の一生の大業であったと書いている。そして「可歎なり」と心からなげいている。特に「坐上小演説ヲ為ス」とあるのは、葬儀の席か灰寄せの席で、追悼ついでうの話をしたのであろう。木村熊二の伊一郎に対する別れの言葉がのべられたのである。前項「森山村桃栽培の経緯について」の文章に、この時の気持ちがよくあらわれているように思われてならない。

この月の終りには小諸義塾は閉じられ、熊二が長野へ去る直前のことで、いくつもの別れが目の前に迫っていたことを思うと、胸にこみ上げてくるものがあつたにちがいない。

三 塩川缶詰合名会社の発展

父を失った勝太は、二代目伊一郎を襲名しゅうめいした。父とともにりんごや桃の苗づくりから種類えらびといった技術的な研究と工夫を続けながら苦勞を続けてきたが、親子で考えて力を合わせることによりなんとか解決してきた。しかしこれからは一人の力でふりかかると苦難をのり越えていかなければならない。父をみおくれた二代目伊一郎は、自分をいましめながら缶詰製造に力を入れた。明治四十二年に書いた『缶詰製造業経営書』を要約しながらまとめてみると、

桃の処理 缶詰にする桃は、まさに熟さんとする二日前に採った果実を溝にそつて庖丁ほうちょうで二つに切り、皮をむいて核をはなし、それを水に浸して酸化を防ぐ。この原料をふつとうする釜の中で五分程煮るとやわらかくなって浮き上がってくるのですくい上げて冷水に浸す。

糖液の調整 上等の「ザラメ」(約三七キロ)一〇貫匁(約三三リットル)に清水一斗八升の割合に混ぜて煮沸してとかし、これを充分に冷して使う。

肉詰 冷した原料の桃を水きりし、きれいに洗った缶に約百匁(三七グラム)を詰め、冷した糖蜜三五匁を注ぎ、ふ



塩川缶詰工場と従業員たち（大正初め頃）

たをして密封し殺菌蒸箱に入れて二〇分間蒸気上昇の後、殺菌密閉蒸がまより箱を出して小孔をあけて脱気し、ハンダづけして冷い水で冷し、ニスをぬってさびを防ぐ。この缶にラベルをはって四ダースを箱につめて出荷した。桃の缶詰は、空気中の微菌を蒸殺して、再び発生したり侵入することを防ぐとともに、桃の持つ香味をできるだけ変化しないように保存することを大切に考えて作られた。そのために桃の採る時期も熟しすぎず、早すぎず、糖蜜の濃さも、二斗五升式から三斗式まで試作した結果、一斗八升式を採用するなど、細かなところまで心をくばり努力をおしまなかつた。

機械や道具の製造

釜や道具については、小諸の与良町に古くから代々続いていた小宮山莊助（現在の小宮山鉄工所先々社長）の協力によるところが大きかった。伊一郎父子に

とつて、莊助が鉄製機械の製作にあたっては、単なる業者としての関係以上の親しい間柄にあったことは、のちに出てくる莊助の二代目伊一郎に対する弔辞から伺うことができる。明治三十四年と三十五年の木村熊二日記にも莊助の名前がみられることから、缶詰製造のために機械づくりや技術の中心的存在であった伊一郎父子との交際が深かったことがわかる。

桃の缶詰製造の費用の中で大きな位置を占めているのが砂糖の代金であった。支出の内訳をみると最も多いのは缶代であったが、二番目に多いのが砂糖代で、桃の代金よりもはるかに多くなっている。新しく独立した時の砂糖をめぐるエピソードはここから生まれてきたのである。缶詰はのちに材料のブリキを買ってきて、自分の工場で作るようになり、費用の節約をはかったが、外国からの輸入による砂糖の値段は缶詰製造にとつて最後までつきまとうことになる。

道具の発明と能率の向上

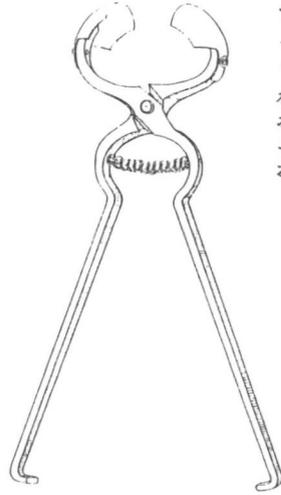
桃の缶詰製造はいくつかの問題点をかかえていた。

その第一は桃の皮をむいたり、核をぬくのには人手がかかり、桃が熟す時期になると近所の婦人たちを頼んでも間に合わないくらい忙しかった。桃を積んだまま日がたつと、腐敗して農家に損害を与えてしまふことになる。たくさんの人を頼むと人件費が多くなつて、経営を圧迫することになった。

伊一郎は工夫に工夫を重ねて金属性の剥皮器と核抜き器を発明し、明治三十八年に専売特許をとつた。それまで庖丁で皮を剥いでいた時は一人一日に六貫目に過ぎなかったものが、この剥皮器を使うと、一

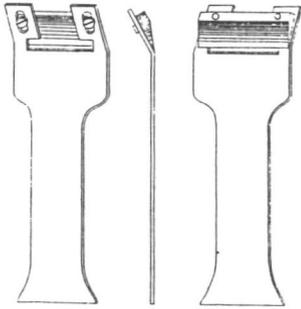
登錄實用新案 第三百五十四號
 塩川式果實核拔取機

長野縣北佐久郡西田村金子敷七百三番地
 新案權者 塩川伊一郎

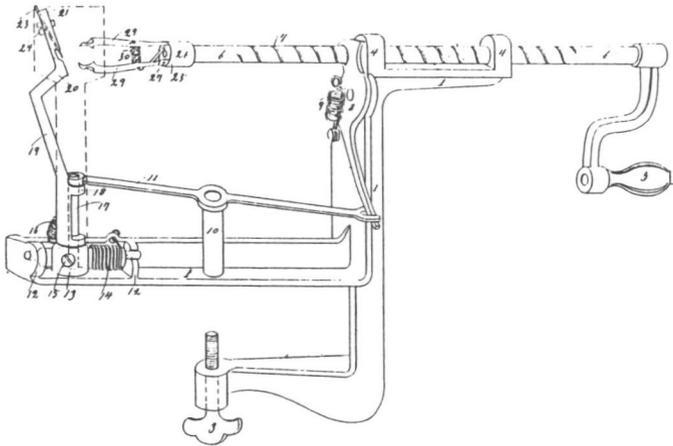


登錄實用新案 第三百五十三號
 塩川式果實皮取取器機

長野縣北佐久郡西田村金子敷七百三番地
 新案權者 塩川伊一郎



第壹圖



日に三〇貫目にもなり、五倍の作業能率を上げることができた。核抜き器の方も同じように能率を上げ、女工一人で一日に一二五本分ぐらいの核を抜きとる能力を持つようになった。

この発明によって桃缶製造の能率は上がり、人件費の節約という大きなメリットを得ることになり、缶詰製造の一大発展をみることになるのである。

明治四十一年の製造高は八千ダースで、一ダース一円二五銭平均で販売できたので、租収入は約一万円となった。原料の洋桃一万六千貫、砂糖一千九二〇貫をはじめ、缶代から金利・償却金など支出の九千一七四円を差引くと、八二六円の利益が上がった。

調理用具と工場規模

調理用器具として、万力(大小) 二台 木製ハンダ流型 など

桃割庖丁 五 核抜き器 六 剥皮器 八〇

ジャム鍋 三 桃煮大釜 一

缶詰用器具

回転封蠟付器 五 殺菌用蒸籠 二組 殺菌用蒸箱 二組

殺菌用蒸缶 二四 ホーメー比重計 一

などが主なもので、費用は九一三円二一銭であった。

当時の工場はそんなに大きなものではなかった。主なものをみると、

原料調理場	二四坪	缶製造場	一八坪（二階建）
缶詰製造所	一六坪	釜場	六坪
貯蔵荷造所	一八坪	事務室	八坪（二階建）
井戸と洗場など			

使っていた機械

ブリキ切断器 二台 チンプレス 二台 底しめロール 二台

蓋切紋形、底切紋形など 七台 胴付器 二台

缶詰製造によって、桃栽培が安定することになった。生産された桃のうち、早く熟した良いものはそのまま販売した。農家にとって米が実る前の夏に現金収入が得られ、収穫が多くなると缶詰工場へ運んで加工したので、安心して桃づくりに精を出すことができたのである。

桃の代金は、栽培農家の人々と相談の上で、安くしなくても十分に利益を上げることが、実証されたのである。

この缶詰工場の独立という一大決心は、二代目伊一郎の考究心と企業感覚が一番発揮された時でもあった。

四 イチゴジャムの製造

桃の缶詰製造は、夏の一時期に集中して短期のうちに終ってしまふ。このことは、多くの資金を使つてつくつた工場の設備を遊ばせ、働いている人を遊ばせなければならなかつた。そこでなるべく製造期間を長くすることによつて、工場の稼働率かどうりつをよくしていかなければならなかつた。このことは桃の缶詰をはじめた時からの問題で桃のほかに、適当な原料をさがしていたが、伊一郎父子はイチゴの栽培とジャムの製造を考えた。ここで伊一郎とイチゴとの關係をみておこう。

ジャム業界の沿革によれば、伊一郎が明治二十年にイチゴジャムを製造したと書かれているが（第二部四参照）、イチゴジャムは早くからその製法が知られていた。イチゴは、土質や天候を選ばない作物といわれていたが、三岡は排水が良く、春先は乾燥する日があるので、最初の二粒はやや大粒でよいが、そのあとにつく実は小粒になることはまぬがれることができなかつた。そのため一反歩に二〇貫匁から多くて三〇貫の収穫で、高い収益が上がる作物といえるものではなかつた。水田を使ったために水は充分に補給できたが、味に酸味が多いという欠点があつた。

イチゴにはたくさんの種類があるが、果粒の大小、色の紅いもの、淡い黄色味のもの、実のしまり、あ

まみと酸味、早生かおくてか、収量の多い少ないなどそれぞれの特性をもっていた。その中から五種ほどを選んで栽培することにした。イチゴの主な種類の特徴は次の通りであった。

① ビルモーラン 果粒中等で鮮紅色、六月上旬に成熟し強健、酸味多く、収穫中位

② ドクトルモレー 大粒で淡紅色、甘味多く生食によい、ジャム用(加工用)によくはない、移植の次年は豊作であるが三年目に収穫が減る。

③ イキゼルシヨール 最も早生で五月下旬に成熟、果粒は中等で深紅色、実の縮りしまよくジャム用(加工用)と生食に適す、繁殖旺盛で豊産な良種(一反歩三〇〇貫あり)

④ ビクトリア 大型で淡紅色であるが中心部は白色、六月中旬に盛熟、豊産で甘味があり生食によいがジャム用に不向き、色澤おちる

⑤ ルザー 大果で豊産、六月下旬に成熟、ジャム用として佳良、密植にすると色澤が良くない。(一反歩五〇〇貫の収穫あり)

伊一郎はイチゴの栽培にあたっては次の点に留意していた。

イチゴは畑一面にはびこらせてしまうと風通しが悪くなつて、果実が成熟する時になつて腐敗したり病害にかかるものが出て収穫が減少する。畦は二尺(約六〇センチ)で苺株を密生させる方がよい。一度結果した旧株は除いて新株を繁殖させることが収量をあげる上に大切であつた。

肥料は一反歩あたり、魚粉七貫五〇〇匁、骨粉一五貫を標準として用い、新しく出回つてきた硫酸アモンニヤや過磷酸石灰を使つてみたが、枝葉を傷つけたり、労賃が増えるなどの問題があるので研究を



莓をつむ娘さんたち 後ろは浅間山（明治末頃）

しながら栽培を続けた。

伊一郎はイチゴの栽培面積を増やすために、農家の人々に栽培をすすめて作ってもらおうという方法をとった。明治の末頃は今ののように肥料もあまりなく、たびたび冷害におそわれたので、米は不足がちであり、田んぼへ稲以外の作物をつくることなど考えられない時代だった。その上、新しい作物で失敗したらいへんだという心配が先にたつて、イチゴをすぐに作ろうとする人はいなかった。

そこで、伊一郎は、作ってくれる田んぼから今まで収穫できた米の量を計算して、その分だけはお金を払う約束をして、苗や肥料まで用意して作ってもらった。耕したり植えるなどの手入れと草とりなどの保護をもらった後、摘みとりの労賃も別に支払った上で、イチゴを納めてもらう方法をとった。

一反歩あたりでは、農家には一三四五〇銭の米代と二年目からは摘み取り代六円が加わるので、一九



村の子どもたちが苺のガクをつんだ（大正初め頃）

四五〇銭となり、農家の人々は稲をつくるよりはるかに多い収入を得ることになった。

伊一郎にとっても、一年目はとれないが、二年目からは一反歩一八〇貫（一貫目三〇銭）として、五四四分のイチゴが収穫されるので、苗代や肥料代それに摘みとり代を支払っても、一か年で七円二五銭の利益となった。このようにして原料のイチゴを確保することができて、缶詰工場では桃缶の製造前にイチゴジャムの製造を行なうことができるようになったのである。

当時のジャムづくりは伊一郎の記録によると次のようである。

ジャムをつくるには、熟したイチゴを採集して工場へ持ちこまれたものを、つるとへタ（ガク）を摘みとるところからはじまる。実はこの作業は案内手間がかかった。そこで人件費節約のために、村の子どもたちを

集めて摘みとってもらった。子どもたちの方が指がほそくてきれいに取れた。工賃は一箱一銭と決められていたが、一日に五箱から八箱の者が多く、報酬は会社で作った一銭・五銭の金札で与えられた。その金札は村中の駄菓子屋などで立派に通用したので、子どもたちはよろこんで集ってきた。写真のように、着物姿で草履をはいた子どもたちが、イチゴの箱を前に働いている姿がみられる。いまのアルバイトのはじまりを思わせる風景である。

ヘタを取ったイチゴはザルに入れて清水に浸し、きれいに洗って水滴を切ると、一貫五〇〇匁を一回分とし、これに同じ量のザラメを混ぜて、深さ七寸、約二センチ直径二尺五寸の鍋に入れて火を加えて煮沸する。この間休むことなく大きな木さじで静かに攪拌かはんして平均に煮沸することが大切である。こげつく前に別の器に上げながら、その間も攪拌しつづける。新しいイチゴと砂糖を入れながら、間髪を入れずに鍋をあかさないうで煮つけるのがむずかしい。このア・ウンの呼吸と水を一滴も使わないことが上等のジャムをつくるコツであった。できあがったジャムは、桃の缶詰の機械を使って桃缶と同じ方法で製品に仕上げていった。

明治四十一年の製造額は四千ダース、四万八千個で、八千八〇〇円の収入を上げ、原料のイチゴ四千八〇〇貫、砂糖のほか缶代、労賃などの支出が七千六八〇円であったから、八七二円の利益を上げている。

イチゴジャムづくりをもっと早くすることができないものか。伊一郎は台湾の帰りに神戸から大阪へ汽車に乗った時、二月下旬だというのに梅の花や椿がいたる所に咲いていたことに驚いたことを思い出

した。大正三年、兵庫県鳴尾村（現西宮市鳴尾―甲子園野球場の近く）の農家に依託してイチゴ栽培を行なった。この地方では明治三十二年頃より海岸の砂畑でイチゴが栽培されており、気候が暖かいので信州よりずっと早く実が赤くなり味も品質も良かった。はじめはイチゴ狩りのあとの残りを使っていたが、それだけでは間に合わなくなり、農家に栽培してもらうようになった。収穫期には、森山の婦人たちがばかりでなく、新潟の娘さんたちもやとつて鳴尾へ向かった。

古結丑之助こけつうしのすけの建物を借りて工場とし、信州から運んでいった道具を使って煮沸した。ボイルは石油缶につめて信州へ送り、森山の工場で小さな缶に詰めて製品にしたのである。六月までは鳴尾のイチゴを使い、七月に入ると森山産のイチゴで、それが終ると桃の缶詰製造へと、工場や職人を有効に使って、経営の合理化に努めていたのである。

石油缶に入れたままハンダづけして信州に送られたボイルは、工場の忙しい時は倉庫に保管しておいて、仕事のなくなった冬に小さい缶につめる仕事へまわされたこともあった。

五 桃栽培の広がりと共に共同の力

桃の缶詰製造が軌道にのり、桃栽培農家の収入が安定しはじめると、それまで様子をみていた農家も桃づくりに意欲を持ちはじめた。

特に「アーリーリバー」系の種類は、樹の勢いが強く、一株で二〇貫匁以上の実をつけた。伊一郎はこれを「浅間水蜜桃」と名づけた。これによって佐久のやせた火山灰の土地でも多くの収量が上がることが認められたので、苗の生産を増やし、その代金は桃の生産によって払うというような方法をとって普及につとめた。組合をつくって助け合うこともすすめた。

この結果、小諸町に信桃社、小沼村に東洋社、南大井の甘桃社・栽桃社、そのほか大里桃園をはじめ岩村田・北大井にも桃園ができた。個人としても桃を栽培しようという人も出てきた。伊一郎自身の桃園も六町歩に広げた。五反田方面は一面の広い桃園に変わった。

明治四十年には南大井村の一八町歩・三岡村一二町歩、小諸町一〇町歩をはじめ、北佐久郡各町村で合計七〇町歩余に達した。

ところが、明治三十六年頃から、桃に縮葉病が発生した。はじめのうちは人の手でその葉を摘みとっていたが、病害はさらにはげしくなった。人手を増やして摘んでも取り切れるものではなかった。三十八年頃からは二斗式ボルドー液を研究し、催芽期から落花期までに三回散布することによってどうやら防除に成功した。

明治四十二年ごろには炭疽病たんそびょうと心喰虫の被害が広がった。防除に手を尽したが効果が少なく、生産量がへってしまった。特に炭疽病は四十四年に激しく発生し、小諸・三岡地区は八割の被害、南大井・岩村田・小沼は七割、御代田で六割、大里でも三割と北佐久郡全体を通じて約七割の大きな被害となり、二万四千四〇〇円にのぼる損害となってしまった。(『信濃毎日新聞』、明治四四・七・一記事)

伊一郎自身も五反田にあった大きな桃畑で、虫のつかない果実は一つもないといった被害を受けた。長野県庁では、この事態を重視し、当時の果樹病害虫防除の権威者であった西ヶ原農事試験場の堀正太郎技師を招いて詳細な調査を行なった。その結果、ボルドー液の調整を誤らないこと、被害果・被害枝の完全処理、樹勢の健全化などについて指導を受けた。特にチツソ肥料の使い過ぎを避け、施肥成分の均衡をはかること、見込みのない枝は伐採して焼きすることなど、具体的な教えを受けた。

こうした努力にもかかわらず、病害の勢いは少しも衰えず、翌四十五年にも多発したため、北佐久郡役所、県農事試験場の協力を得て防除をすすめる一方、炭疽病にかかった枝を西ヶ原農事試験場に送るなどして対策をたてた。しかし官民あげての努力も空しく、品質・生産量とも年々低下し、収益も減少することになった。

病虫害は、一つの桃園で発生すると次々と広がるために、みんなで協力しないと効果が上がらない。そこで「果樹害虫駆除予防組合」をつくって全員で立ち向かうことにした。その前文には「果樹栽培上最も恐ルベキハ害虫ニシテ之ヲ駆除シ撲滅セシムルニハ共同一致シ出ツルノ外ナキヲ確認シ、茲ニ三岡村果樹栽培者一同以下ノ遂条ノ履行ヲ規約ス」とうたっている。その規約を要約すると、

- 一 三岡村栽培者全員と隣村にも加入をすすめる。
- 二 趣旨に反した時は徳義上の制裁を与え説諭をする。
- 三 毎年、春秋に定つた方法で駆除し、必要の時はその間にも行なう。
- 四 組合長兼実査長、副組合長兼実査副長、実査委員一〇名をおく。
- 五 駆除の期日と方法を定め五日以前に通知して行なう。
- 六 委員は果樹園を巡視し、不充分的者には再駆除を通告する。
- 七 通告を受けた者は異議の申し立てをすることができない。
- 八 通告をうけて再駆除しない時は強除し、弁償をさせる。

とかなりきびしいきまりであった。明治末期のボルドー液の散布と焼却ぐらいしか防除の方法がなかった時代だけに、炭疽病の伝播を防ぐために、三岡村を中心に近隣村まで含めた共同防除を行なったことは、佐久の果樹史上特筆すべき活動とみななければならない。

第1表 長野県におけるモモ栽培本数と生産量
(明治41年)

郡市名	栽培本数	生産量	備 考
	本	貫	
南佐久	4,016	5,060	栽培の多くは在来種
北佐久	43,597	102,304	三岡村最も多く洋桃多し
小 県	6,094	11,082	多くは在来種
諏 訪	2,203	7,072	"
上伊那	4,713	7,850	"
下伊那	3,487	2,715	"
西筑摩	2,459	2,788	"
東筑摩	11,752	21,155	芳川村のほかは多く在来種
南安曇	5,685	14,589	多くは在来種
北安曇	5,814	7,717	"
更 級	6,540	10,489	"
埴 科	2,343	3,681	"
上高井	1,689	5,199	川田地方のほかは多く在来種
下高井	4,180	11,103	多くは在来種
上水内	9,525	35,210	若槻・浅川・三輪地方最も多く他は在来種
下水内	1,415	5,693	多くは在来種
長 野	105	425	
松 本	350	15	
計	115,967	254,147	

『信濃産業誌』による

明治四十一年の北佐久郡における桃栽培の広がりを見ると(図3参照)気候の寒い東長倉村・西長倉村(ともに現軽井沢町)のほか、西の芦田村(現立科町)、中央部では中津村(現浅科村)と高瀬村(現佐久市)のほか全町村にわたっている。三岡村とすぐ東隣りの南大井村が特に多いが、これは浅間山から流れ下る小河川が深い田切^{たぎり}地形をつくり、水が谷底を流れ、御影用水が利用できない土地

桃栽培の技術を高め、品質の良い桃を生産するために、各村に組合ができたことは前述の通りであるが、桃の販売についても組合が設立され、小沼・高瀬・瀬戸など一〇組合から四八人の委員が集って「販売組合設立の件」について議決をしている。内容についての記録は見えないが、缶詰工場の安定した原料の確保と農家収入の安定を願うてのことと考えられる。

では、稲がつかれないため、畑地や平地林となっていたところがたくさんあったことによるものと思われる。

同じ年の長野県における桃栽培の本数と生産量をみると（表1参照）、北佐久郡が本数と生産量ともずばぬけて多く、佐久地方と気候や土質が似ている東筑摩郡に多いが、芳川村のほかは在来種が多く、品質の良い洋桃の導入は進んでいないことがわかる。（『信濃産業誌』）

佐久における明治時代の産業の発展をみると、養蚕業と製糸・葉用人参の栽培、馬産の改良などが上げられるが、その中でも製糸業の高橋平四郎、牧場経営神津邦太郎とともに、果樹における塩川伊一郎父子の果たした役割が大きかったことは、これらの数字からもよみとることができる。

六 博覧会出品で宣伝、明治屋との提携で飛躍

桃の缶詰やイチゴジャムは小諸の小山徳二郎商店を通して販売されていった。缶詰工場開業当初にせっぱつまって砂糖の借財分を缶詰で返済したことが、かえって販売の手間をはぶくことができるというよい結果となった。

江戸時代から明治にかけての小諸は、商業の上では大きな位置を占め、大きな問屋があつて、関東地方から、北信や新潟にかけて広い商圏をもつて商売をしていた。小山徳二郎商店もその一つであつたので、缶詰は東京をはじめ、日本各地へと広く販売されていった。

しかし、桃の缶詰やイチゴジャムの製造が増加するにつれて、販売の確実性を増すために、品物の品質の良さを宣伝する必要があつた。いまなら、テレビのコマーシャルや新聞への折りこみをするという方法が考えられるが、明治の世の中では新聞が中心であり、『信濃毎日新聞』（長野市）と『信濃佐久新聞』（岩村田）へたびたび広告を出しては、缶詰を世に出そうとした。

明治三十四年十一月には、はじめての年にできた糖煮^{とうじ}缶詰を閑院^{かんいんのみや}宮殿下に献納し、それから毎年送り続けた。これは当時の最も上流階級であつた皇族に試食してもらい、味についての「おすみつき」をい



塩川缶詰合名会社の製品は数々の賞を獲得した

ただくことが、宣伝上大きな力となると考えたからである。閑院宮は馬の改良や軽井沢への避暑などの関係で皇族の中では佐久へ見えられる機会が多い宮様であった。「閑院宮様御愛用」という文字は宣伝の中でしばしば使われて、人々の目を引いた。

明治三十九年十月、山梨県主催一府九県連合共進会に伊一郎は洋桃糖煮缶詰とイチゴジャムを出品し、共に三等賞銅牌を受けたのをはじめ、四十年四月には、東京府博覧会に洋桃缶詰を出品して一等賞を得た。続いて四十一年四月、長野県主催全国缶詰業者連合大会品評会で一等賞、京都全国製産品博覧会で三等と各地で開かれた、品評会・博覧会に出品し優秀な成績を上げた。森山の伊一郎家には今もたくさん賞状が残されており、当時の活躍のあとが偲ばれる。

これらの品評会や博覧会は、製品の良さをアピールする絶好の機会であり、塩川缶詰の名は全国に知れわたっていった。

明治四十三年の大日本農會品評会に出品した洋桃缶詰の解説書に上げられている販路の項には、特約店として、

兩陛下御嘉納
閑院宮家御用品

舶來品
に優る

洋桃罐詰
苜蓿

諸博覽會共進會
金銀賞牌受領

製 造 元 祖
信州北佐久郡三岡
鹽川伊一郎

宮家御愛用品であることがわかる

長野市酒缶株式会社、東京日本橋区国分勸兵衛、京橋区精養軒、大阪市安土町祭原伊太郎らの名前のほか、東京・横浜・名古屋、京都・大阪・神戸・北海道など全国各地ばかりでなく、台湾・釜山・京城・上海・香港・シンガポール・布哇・サンフランシスコ・ロンドンと世界各地で販売していると書いている。

塩川家の座敷に今も掲げられている額は、明治四十三年四月に明治天皇・皇后と皇太子殿下に、

「イチゴジャム四箱」（口絵参照）

を献上した時のものである。渡辺千秋宮内大臣から、大山綱昌長野県知事あてに、伊一郎よりの献納品が天皇家へ差上げられたという文章である。これは多くの賞状や額の中で一番大切に保存されているものである。今の象徴天皇とちがって、明治末期の天皇は日本の統帥者として大きな権利を一手に持っていた時代であったから、製品の良さを内外に示したことになった。ところで、渡辺千秋宮内大臣は、弟国武と共に、大久保利通に抜てきされた諏訪の高島藩士である。弟は大蔵大臣、千秋は宮内大臣となり、明治政府の中樞を支えた実力者である。渡辺宮内大臣にしても、同郷の信州人からの献上品ということは、いたく誇りであったにちがいない。



伊一郎の半生が「農業世界」に掲載された

な良品を扱って、客に勧めていた店である。

その明治屋が信州名産のイチゴジャムを特約販売することになった。塩川伊一郎の製造場で、明治屋の指定した方法で製造し、MYジャムと名づけて売り出したのである。(『嗜好』明治四四・一〇月号)

その頃、伊一郎の名声は高まり「信州における農会の恩人」と尊敬されるようになり、雑誌『農業世界』において「農界十傑」の一人として功績をたたえられるまでになっていた。(資料編五参照) 『信濃毎日新聞』では、明治四一・一〇・二五日より伊一郎を「佐久の園芸王」として一〇回にわたって連載し、幾多の失敗にもめげずに遂に成功し、浅間山麓の火山灰土を沃野に変えた人物として報じた。(資料

編四参照)

ジャムの販売について特に大きな役割を占めていたのが、東京の明治屋との取り引きである。明治屋は「世界のベスト (BEST) を商ふ」をモットーとした明治以来の食品のしにせであり、当時の西洋人や日本の上流階級に顧客が多く、厚い信用を得ていた。キリンビール、ジョンブラウンのウイスキー、ベンネッシーブランデー、モーチェのブドー酒、クリスタルシャンペン、小岩井のバター、東郷印コンデンスミルクなど多くの世界的

『嗜好』の文から一部を抜すいと、

「我が国にも斯の如き精良なる苺ジャムあり」 MYジャム

浅間山下清鮮の地を劃せし苺園

少女の集むるルビーの如き紅玉

中天高く不断の煙を吐く信州浅間山下、空氣純潔季候清麗の地十数町歩を劃して之に果樹園・苺園を設け、それに缶詰工場をも建築して、専ら果実ジャムの製造をなすものは実に彼の有名なる同地北佐久郡三岡村の塩川氏の事業であります。毎年初夏の候に入ると小諸駅附近の鉄道線路に沿ふて早乙女の田植笠のそののやうに、赤禱の少女の群が嬉々として笑ひ興しながら、青草の褥を分けてルビーの如き紅玉を採取するを見るのは、其の農園に缶詰用の苺を摘みつゝあるの光景であります。而して粒撰のMY苺ジャムは実に其の少女の手に依つて撰出らるゝのであります。

良種の撰択、塩川氏は此の地方に於ける苺園の開祖として数多くの苦い経験と研究とを経て成功した人でありますから、種類の撰択に就ては充分の監識を有して居ります。即ち苺は生食用と製造用で種類が違ひ、粒にも亦白色・黄色・紅色等の差違があつて、夫々用途を異にして居るのでありますが、其の区別を辨へずして是等を混同して製造すると、製品は劣等となつて到底舶来品に拮抗することは出来ないのであります。夫故塩川農園では、仏国と米国とより製造用種を直接に取寄せ、漸次之を繁殖させて十年の年月を経て今の苺園を完成するに至つた次第であります。而して苺の採集に就ても

往々市場に見るが如く未成熟のものを摘み取り、市場へ出る時分に熟させるといふ様な事をする、其の苺の美味は乏しく香氣も亦充分に添ひませんが、塩川氏の農園では充分成熟し香氣の発散も其の度に適した時を以て採取し、其の新鮮のものを直に製造するのでありますから、製品も亦能く其の香味を備ふるのであります。

新鮮が特長 苺は若し古物を以て製すると其のジャムは色澤黒紫色を呈し、風味も亦劣るのみならず、時には腐敗に近いものを混入するおそれがありますが、塩川氏の缶詰は上記の如く今日早朝採取したものを直ぐ工場へ送り、工場では即日清水で洗滌して薈を去りつゝ粒を揀み、上等ザラメ糖を加へて製造しますから、其の製品は恰も新鮮の生苺の如く鮮紅色を呈し、且つ優良の香味を備へて居るのであります。

受賞の逸品 塩川氏の苺ジャムが世に賞讃さるゝ理由は上記の如くでありますから、大日本園芸会品評会、大日本農会品評会、その他各博覧会・品評会に於て、夫々高等の受賞を得、各宮家方、内外貴紳方の御家庭よりも夫々愛用を受けて居る次第でありまして、MY印苺ジャムは実に同工場に於て特殊の注意の下に製造さるゝ逸品である事を御承知になつて戴き度いのであります。

地方遠隔の顧客諸君より明治屋本支店へ御注文被成下候 節は同店にては充分確實の品相揆み及ぶべきだけ 迅速に御送附可申上候

明治屋による製品の販売は、塩川伊一郎の名前とイチゴジャム・桃の缶詰などすべてにわたって名声を全国的に確立することになったのである。これによってジャムの製造は大きな飛躍をみるようになった。

明治四十四年、帝国ホテルでも伊一郎のイチゴジャムを使うことになり直接納品するようになった。

七 塩川桃園と三岡のにぎわい — 視察あり観桃会あり —

各地の博覧会や共進会に出品された洋桃やイチゴの缶詰が賞讃され、賞状がおくられると、塩川伊一郎の名声が高まった。

伊一郎の桃栽培は、明治四十四年、東京帝国大学（今の東大）農学科主任横井時敬の注目するところとなり、四月一日、農学科実科三年生三〇人が職員に引率されて、森山の塩川桃園とイチゴ畑を实地視察に訪れた。当時の日本の桃栽培で、最も進んだ桃とイチゴ栽培について、学習することになったのである。（『信濃佐久新聞』、明治四四・三・二九日号）

伊一郎は二十年余にわたる果樹栽培の失敗をはじめ、研究・工夫によってつくり上げてきた経過を生たちに桃畑の中で熱心に語った。木村熊二の指導のもとに試行錯誤をくりかえしながら、伊一郎はつきあたたった難問を一つひとつのり越えてきたことを話した。それを聞いた学生たちが「東京からはなれた信州の片田舎に、こんなすぐれた研究と実践があったことに驚かされた」と言ったことが、伊一郎家に語り伝えられている。

その年の四月十日、桂太郎総理大臣が特別列車で小諸駅に着いた。伊一郎は大山綱昌長野県知事の紹

を走り、市村・中佐都停留所を過ぎて岩村田へと工事は順調に進んだ

大正四年八月九日、小諸―中込間が開通、蒸気機関車が小さな客車を引いて走り出した。馬車や人力車に比べてずっと早く、乗りごちも良かったことから、運賃は比較的高かったが客は多く、会社は大きな利益を上げた。その勢いをかけて、鉄道は中込から南へのび、羽黒下へ小海へと二期・三期の工事が進められた。

大正五年、東信新報社と信濃佐久新聞社主催による観桃会が開かれた。「信州一の三岡桃林」「好機逸す可からず」との見出しで四月三十日の日曜日に行なわれた。会費は五〇銭であったが、それには汽車賃も弁当代も含まれ、どこの駅からも乗れるということが好評を博し、二十七日には予定の三〇〇人を超過して締め切るほどであった。(『信濃佐久新聞』大正五・四・二八日号)

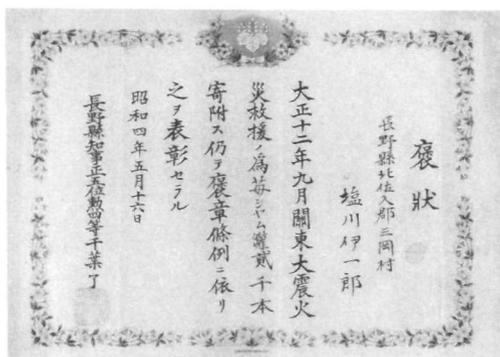
三十日は夜来の雨もあがつて晴れわたった。小諸駅では、鉄道院から借りた客車を増結して六輛編成の列車が、羽黒下駅に向かった。土橋駅(現三岡駅)からは、塩川伊一郎工場から仮装した数人が歓迎のために乗りこんだ。午前十時十四分、羽黒下駅から約一〇〇人を乗せて出発、途中の各駅から会員を集めながら岩村田駅に着いた時には五〇〇人以上にふくれ上がった。満員で乗れないので、有蓋貨車を連結してお客をのせた。「動物の汽車博覧会だ」とぐちを言う人もいたが、お祭気分でにぎやかなうちに土橋駅へ着いた。

駅の南一帯は桃の花が満開となっており、新聞社の旗が風になびく松林では酒やだんごがとぶように売れた。人々は花畑に草原に「今日は命の洗濯日」とばかり手を取り合って花と酒に酔った。(『信濃佐

久新聞』大正五・五・三日号)

塩川缶詰工場でも、一日は全社員家族全員が集って、観桃会を開き、社員の慰労余興を行なうのが例年のならわしとなった。

大正七年には、炭疽病の被害や開花期の冷気が心配された。しかし、弱った樹は植えかえたり、品種の改良を行ない、薬品による消毒の励行によって被害を少なくするようにつとめたため、三年来の大豊作となった。しかし、鉄の値段が急に高くなり、缶詰製造には思わしくない事態となり、生果の販売に



伊一郎の生き方を示す褒状 関東大震災には 2,000個の毎ジャムの缶詰を寄付した

力を入れなければならなかった。翌八年には春の天候不順のため、開花が数日早くなったところへ霜がおり、早生桃はほとんど全滅の状態になってしまった。順調に進んでいるかのように見える桃栽培にも苦勞の種はつきなかった。

大正九年、東京府立第五中学校の生徒が泊りがけて桃園を訪れ、桃畑の草むしり、田の草とり、芋掘りを行なった。伊一郎の友人であった伊藤長七校長が、転地修養隊の活動に農作業を取り入れたのである。伊藤校長は、諏訪郡四賀村出身の進歩的教育者であった。諏訪郡の各小学校の教壇に立ち、小諸小学校で一年間教鞭をとった先生であった。短かい期間であったが、教え子たちから敬慕された。上京して東京高等師範学校に入学、その後、木崎夏期大学や軽井沢夏

期大学の開設に奔走する。大正八年、東京府立第五中学校創設には、校長として一貫した野外活動を重視した教育を行なった。

こうした伊藤校長の教育指導の下、修養隊は、東京を出発して各地に宿泊、登山・水泳・桑つみなどの体験を行ない、それ以後の学習に役立てるといふ試みであった。伊一郎の新しい産業を興そうとする考えと、伊藤校長の将来の国を背負って立てる人間を育てようとする教育思想が一致して、農園が教場となったのであった。この臨地体験学習はその後も続いた。

大正十二年九月、東京や横浜は大きな地震に見まわれた。史上最大の被害を出した関東大震災である。佐久も家はひどくゆれたが倒れるほどではなかったが、夜になると東の空が燃え上がる炎によって赤く見えたといわれている。信越線はかろうじて列車が走っていた。

伊一郎は食料不足に悩む東京の人々に救援品として、イチゴジャム二千本を長野県庁を通じて送った。当時の県知事千葉了はこの功をたたえ、昭和四年に伊一郎に褒状ほうじょうを送っている。

第四章

夢は果てしなく



一 桃栽培の利益と危険

—伊一郎の考えと木村熊二への感謝—

桃は、砂目が荒いやせた土地でも種類によっては育つことがわかった。桃は一反歩あたり約六〇本を植えて肥料を施すことによつて三年目から実をつけた。植えて五、六年目には一本から六、七貫目、七、八年たつと一〇貫目以上の生桃を収穫することもできた。一貫目一六錢（缶詰工場買入れ相場）とすれば一円六〇錢となり諸費用をひいても一株一円の利益となり、一反歩六〇円以上の収益が見込まれた。肥えた田んぼの米の収穫より、やせた畑の方がかえつて収入が多いことが証明されることになったのである。

しかし桃栽培には危険が伴っていた。伊一郎の経営する桃園からは一反歩一千貫以上の収穫が上がつたが、ある農園では病害虫によつて収穫が減り、かたい小さな果実しか採れないということもあつた。多くの資本を投じて数年間努力しても失敗してしまふこともあつた。それは土地に適した種類の選択と、栽培技術のちがひによつて生じてくることは明らかであつた。

伊一郎は洋桃栽培に成功する方法として、

- ① 信州の風土に適した良種
- ② 姦商^{かん}の甘言にのるな
- ③ 果樹栽培の技術を学べ
- ④ 成熟期が短い

で小売だけにたよるな

の四つをあげた。そして解決法として自らの経験に基いて、

一 土質の鑑定を二十余年の実験に基いて責任もって行う。

二 苗は、病害霜害にかかりにくく、農産の良種を接木した精撰種を保証づけて販売する。

三 栽培は、果樹剪定法せんていの原則に則り、それに自家独得発明の新技术を教授する。

四 果実は、特約の便法を設けて、最高価をもって全部を購売する。塩川缶詰は、一日一千貫以上の生果を使用する設備を持ち、機械力を以て工費を削減しており、東京・横浜・大阪など各地の商店と取引しているので、最高価で原料を購入する。

五 私の発明した剥皮器と核拔器の発明は桃缶詰製造の上で一大福音となり、生果の需要を激増させ、販路の拡張となつて、国産の一つとなつた。

六 今後も適当な土地がある限り、桃の栽培につとめ、内には生業の発達をはかり、外に向かつては国産物の輸出に心を注ぎ、もつて日本の富を増す一助となることを期待する。

と農家の人々を励まし、農工一体で安定した桃づくりに向かつて努力することを説いた。

私はもとより浅学無識であつたが、二十余年間の研究によつて、洋桃栽培に成功し、人生を全うしたと信じている。ほかに比べるものない良い種類を選び出し、生果の販路を東京に開き、缶詰所を設立して桃の缶詰をつくり、剥皮器と核拔器の発明によつて仕事の能率を早め、洋桃栽培に一大発展を

与えた。

しかし、私に洋桃栽培を教え、途中での失望をばげまし、どのように進むべきかを教え、缶詰製造所の設立を紹介し、遂に気候は寒く、土地のやせた浅間山の南の佐久の地に、一大果樹産業を起すことが出来るように教えてくれた方は、米国籍学博士木村熊二先生であった。ここにつつしんで先生の高い恩に感謝しながら記述を終ることにする。

と木村熊二の教えが伊一郎父子の成功にとっていかに大きかったか、その大きな恩を忘れることはなかった。

二 小果実の栽培と農閑期の副業へのアイデア

桃とイチゴについてはこと細かに書いてきたが、伊一郎は『信濃毎日新聞』に「趣味と実益に富る小果実栽培法―空地利用の園芸（弊園数年の実地試験）」という文をのせている。（明治四一・一〇・二五日号）（資料編十二参照）それを簡単に紹介すると、

各種の小果実を混植して果樹園とし、家の庭やかきね等のあき地を利用して栽培するとよい。専門的でなく、老人や子どもでも興味をもって楽しみつつ、実益ある仕事になる。生果のままか製品にして市場に売れば百円ぐらい利益はむずかしくない。自家用として朝夕子どもたちの副食物として、食事のあとや来客の接待にも使える。一年に五十円ぐらいの節約になるし、菓子類を食べるより胃腸をいためる心配はなく、栄養上も大きな効力がある。小果実は害虫にかかることも少なく凶作になることもなく毎年一定の収穫がある。私の園で利益があつて栽培の簡単なものは、草イチゴ、木イチゴ、房スグリの三種である。

草イチゴ

初夏のほかの果物が熟さない時に美しい色をつけ、甘く酸味があつて佳い香があつて、生で食べてもジャムにしてもおいしい。近年需要が増し、東京・横浜では一斤二十銭以上なので、一貫目三十五銭以上の値段で買いつついる。草イチゴはいい種類を選んでうまく栽培すれば、一坪で一貫五百匁の実を採ることはむずかしくない。草イチゴの種類はたくさんあつて、私の園でも数十種を実験し、その中からたくさん収穫できる十種ばかりをえらんで栽培している。その中で五種を紹介すると、

- ① ルサー 果実最大で先がとがり、色は紅く甘味と香がよく、優等の種類（二株五銭 百株三円）
② ビルモラン 早生種で果実中等、色はこい赤色で酸味が多い。ジャム用によい。（二銭の半分）（二株五匁 百株二十五銭）

- ③ エキゼルシヨール 果実最大で早生種、五月下旬に熟す。先が円錐状をして紅色で実がしまり輸送にも適す。豊産で虫の害にもかからない。（一株五銭、百株三円）

- ④ ドクトルモーレル 晩生種で果実最大、円形で甘味が多い。生食用として需要が多い。（一株五匁 百株十五銭）

- ⑤ カナデアン・スキート 果実最大 形は卵状で真紅色で佳い香をもち、繁殖力が強い。（一株七銭 百株五円五十銭）

房スグリ

普通に栽培されているスグリはとげがあるが、房スグリはとげがないので手入れや採集にいたみがない。どんな土地にでも育ち、庭やあぜを利用できる。木は強く赤い実がブドウのように下がつてつ



塩川罐詰合名会社では、各種の缶詰や果汁などをつくった そのひとつブドウ液

く。生食にもよいが、ジャムやゼリーを作ったり果実酒にもなる。洋菓子製造用としての需要も多い。

- ① 赤色房スグリ 一株二銭五厘 百株二円
- ② 黒色房スグリ 〃 〃
- ③ 大果房スグリ 一株十二銭 百株十円

木イチゴ

最近の舶来^{はくわい}小果実で樹性は最も強く、土質や気候を問わず好く実をつけ樹勢力が旺盛である。甘ずっぱく風味がよい。ゼリーやジャムをつくと香りがあり、生食すればおいしい上に胃腸病をなおす効用もあるという。美しいお酒にもなる、黒色種はブドウ酒の着色料として需要が多い。

- ① 黒色木イチゴ 繁殖盛んで結実豊か (一株三銭)

百株二円)

- ② 赤色木イチゴ 大粒で熟す期間が長く、結実良く豊産 (一株三銭 百株二円)

- ③ 最優等赤色木イチゴ (ローガンベリー) 実^みは大きく鮮紅色で美しい。特有の香りを持ち、生食用、医薬用として珍重されている。ジャム・ゼリーの原料によい。(一株三十銭 百株二十円)

以上のように伊一郎の関心は多種多様で、当時の果樹のほとんど大部分にわたって試植している。移入してきた苗は自分の家の畑で増殖し、時には新しい種類をつくり出し、佐久の地に適した種類について研究をおこたらなかった。そして良い苗をつくり出しては地域の人々に分けていった。農園経営の収入増よりは、貧しい農家の人々の収入を少しでも多くして、生活を良くするという若いころからの願いを忘れることはなかった。

冬の農閑期の利用については面白い発明をして、みんなにも作ってみるように呼びかけている製品がある。

専売特許第一〇〇六七号 鷹形鳥威し^{おど}

〃 第一一八三七号 〃

実用新案登録第五三三〇号 鳥威し器

の三点である。これはせっかくすばらしい桃がなったのに、カラスやムク鳥などによって食べられてしまったことから、伊一郎が考案した鳥威しであろう。

缶詰を作る時の桃の皮剥器や核拔器の時もそうであったが、仕事をしながら「どうしたら早く簡単にできるのか」と、いつも考え続ける伊一郎は、工夫を重ね、それが一つの製品となって生まれてくる。アイデアを実現させていく創造性豊かな伊一郎の姿がいたる所に出てくる。剥皮器と核拔器の場合は、

小諸の小宮山鉄工所の協力によつたのではないかと思われるが、鳥威しは自分の手で作つた。そして特許権をとつているところが彼らしい。

実物や写真が残っていないのでわからない面もあるが、この発明は、缶詰用のブリキや新聞紙をつかつて大きな鳥の形を造り、ペンキで色づけするという誰にでもできる製品で、翼に風があたりと回転しながら奇妙な音を出すところがみそのようである。作物を鳥の害から守ることは、今も昔も変わりはないが、桃や果物ばかりでなく稲や麦にも使えるので、それを作つて売り出せば大いにもうかるだろうと語っている。製造販売の権利をゆずるので申し出てほしいと書いてあるが、どのくらい作つたのか、もうかつたのかについては記録が残っていない。

もう一つの発明品は実用的である。

専売特許 第一一〇九五号 塩川式完全殺蛾燈

〃 第一一四六四号 花形殺蛾燈

〃 第一二五三一号 第二完全殺蛾燈

これらは、病害虫に苦しんだ伊一郎の怒りが製品となつたものといえる。ガラスとブリキで箱をつくり、具体的には書いてないが、その中に燈あかりを入れて蛾がをおびきよせ、下の葉の中におとして殺すしかけであろう。今なら蛍光管を使って青白い光を出すが、佐久に電気が入ってきたのが大正の初めであるから、畑までは引くことはできなかったと考えると油を使ったのであろうか。

成虫である蛾を退治することによつて葉や樹を食いあらず幼虫の発生を防ごうという、当時としては

進んだ考えであつた。殺蛾燈は苗代、果樹園、野菜畑とどこでも使えるので、この製品には注文があつた。遠くの地からも問い合わせがあつたが、送ることがむずかしいので「返信料をそえて申込みば、くわしく回答する」と返事を書いている。「各地に代理店をおいて製造販売の権利をゆずる」といつているのも伊一郎らしい。ちなみに桃や缶詰販売の特約店が日本各地にたくさんあつたので、伊一郎にとつてはあたりまえの考えで「斯^かる有益の品をひろく配布するのは、亦^{また}吾人国に盡^{つく}す道なるをもつて……」と語っているとところから、害虫駆除に対しては消毒法ばかりでなく、真剣に取り組み、世のため人のためにと日ごろから考えていた伊一郎の生きざまがくみとれる発明である。

三 缶詰工場の隆盛と社会奉仕

伊一郎の研究と努力は大きくみのつて、桃の栽培も缶詰工場も順調な発展をみせた。利益は上がり、農家のふところもうるおった。

鳴尾のイチゴ栽培だけでなく、新潟県にも桃づくりを行なった。善光寺平からアンズを仕入れてジャムづくりをした。しかし、それで満足している伊一郎ではなかった。

伊一郎は缶詰工場の利益をもっとと大きな事業を考えていた。果樹栽培と食品工業で生活の安定を得たが、農村の貧しい生活はまだまだ解消されていなかった。工場の経営を合理化し拡大することや生活を豊かにするためには、安い電気がもっとたくさん使えないかと考えていた。

大正の初めころ、佐久に電気がついた。南佐久の松原湖の東の傾斜を利用して八那池やな発電所がつくられ、町や村に電柱が立って電線が走り、スイッチをひねると電燈がついた。それまでのランプにくらべてずっと明るく、油をついだり、ホヤをみがく仕事もなかった。しかし、一軒で一燈が普通で二燈ついている家は少なかった。それは電気料をはらうお金がもったいなかったからである。

「こんな便利なすばらしい電気をもっと近くで起こせないものか」缶詰工場の利益で大きな資本を持



水力発電所の建設にも伊一郎は積極的であった

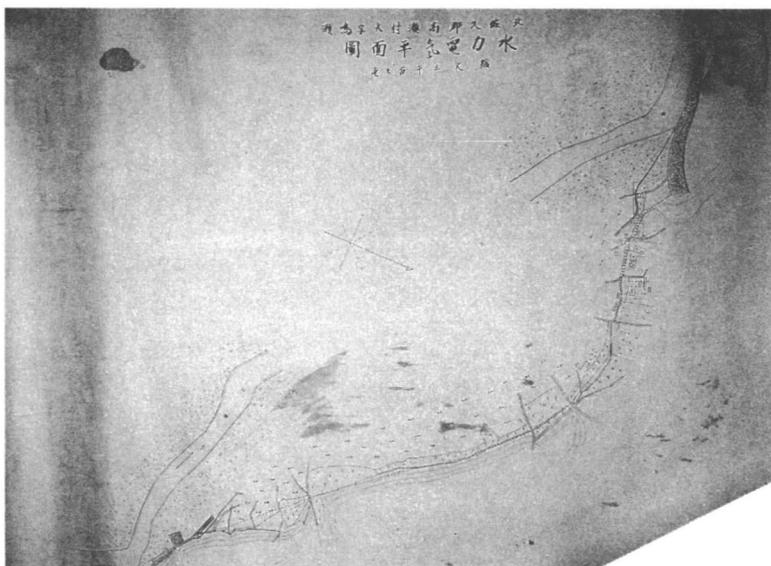
つよようになっていた伊一郎は、発電所の建設を夢みていた。

伊一郎家には今もその時の設計図が残されている。大きな二枚の図は縮尺三千分の一の「水力電気平面図」と「水路豫測図」である。現在にも通用する精巧な図面である。

その図面をみると、高瀬村字羽黒淵（滑津川と千曲川の合流点）に取水口を設け、トンネルで水を北に導いて湯川の谷を渡り、大和田から下塚原へ溝

を掘り、駒形神社の西をさらに北へ進んで、中津村字洞ノ口へ発電所をつくる計画であった。隧道の延長七百八拾間（約千四〇〇メートル）開渠延長千五百九拾間（約三千八〇〇メートル）と排水路八十五間という、水路式発電所であった。

取入口付近にはしっかりと石垣を築き、水路は段丘にそって通さなければならぬため、溝の両面をくずれないように石垣によっておさえる設計であった。それぞれの場所にそった断面図一一九か所が三枚の図面に、トンネル部分から水路に到るレベルを計測した水平図が一枚にまとめられている。



水力電気平面図の一部

この水路図は、後に東信電気が小諸懐古園下に建設した発電所の導水管が今も地下を走っている水路とほぼ一致しており、中込の杉の木には大きな貯水池が作られているが、その場所と取入口が近いことは、単に偶然の一致というだけでなく、企画と測量が発電所建設の実現性を十分に備えていたことを物語っている。

「工場に使ってあまった電気で、村中の家々に夕ダで電気をつけたい」という伊一郎の夢は、水利権の問題や計画中の長野電燈会社との調整がつかなかったことから実現できなかったが、伊一郎の心意気と先見性はくみとることができる。

伊一郎が、桃栽培と缶詰工場の成功によって富を蓄えると、まわりの人々の眼が変わってきた。各種の事業への参加と出資の要請が多くなってきた。伊一郎は、かねがね考えていた「農村社会をもっと良くしよう」という理念にたって、公私の別なく相談に

のつていった。磯部駅改修工事、岩村田農学校の建築工事、平原信号所新設工事などであったが、これらは伊一郎の事業欲を満足させてはくれなかった。

古びた文書箱の中に一冊の『私営鉱業法』という伊一郎が書き写した複写本が残されている。彼が鉱業法則から探鉱の技術・採掘について勉強していたことがわかる。実はこの本のかげには大きな計画がかくされていたのである。

佐久鉄道が小海までまたたく間に建設されたことは前にも述べたが、この一本の鉄道敷設は、人々の眼を南佐久の豊富な材木・石材・鉱物開発へと注がせることになった。今まで荷馬車で、佐久甲州街道を使って運び出していた石材や木材が、鉄道で一氣に運搬できるようになったからである。木材は蒸気機関によって丸のこをまわして製材されたが、鉱物資源については、地元の人々に開発の知識と資本がなかった。伊一郎は鉱物の本を求めて勉強すると、探鉱のため、木の葉が落ちた冬に大日向や相木の山々に入った。しかし、一部に鉄鉱床があるものの、大きな鉱脈を発見することはできなかった。

時あたかも大正三年の第一次世界大戦への参戦によって、日本は大陸へ進出し、大正八年のパリ講和条約によって中国の山東省にあったドイツが持っていた権益を得ることになった。

伊一郎の眼も大きく大陸へ向けられる。若き日の台湾開発への夢に再挑戦することになった。彼はウラジオストックへ渡った。鉱山開発を目的とした旅であった。しかし彼の目の前に広がっていたのは、果てしなく続く広大な森林であった。鉱脈を発見することは無理であったが、太く長く安い材木は無尽蔵にあった。彼は森林伐採の権利を得て、帰ってきた。船の手配や売る相手をさがしていた大正九年三

月、尼港事件が起った。日本人がウラジオストクへ渡ることが危険となつてこの計画を進めることができなくなつてしまつた。

伊一郎の希望は青島^{チンタウ}へ向けられた。中国の青島なら、日本の力が及んでいるから、事業を進めることができるだろうと考えた。塩田を買収し、大量に塩を製して、日本へ送ろうというものであつた。

若いころ、日清戦争のあと台湾へ渡つて開拓しようと思つていつた時以来、いやもつと前に東京の原洋義塾で勉強しようとして上京した時以来、彼の意志は大きく外国へ向かつていたのである。若い時は資金がなくて志を果たせないまま、家へ帰らなければならなかつたが、今回は何万円という当時としては大きな資本を抱いての海外発展計画であつた。

しかし、この計画を進めることができなくなつてしまつた。伊一郎は体調をくずすことが多く、長い海外旅行のような無理をすることができなくなつていた。休むことを知らない頑丈に見えた体も、病魔^マに取りつかれていたのであつた。はちきれんばかりの伊一郎の体が、少しずつやせはじめていたことを家族も気づいていた。

四 最後の鳴尾行き

大正十三年の十二月ころから、伊一郎は胃の調子が悪く、食欲のない日があった。それでも仕事は休むことなく、翌年の桃づくりや缶詰工場の準備は着々と進められていた。冬の間も健康がすぐれない日があった。家族や工場の人たちに「みんなでしっかりやるから休んで下さい」と進言されても休んでいられる性格ではなかった。

十四年五月、イチゴジャム作りのために鳴尾へ行くと言い出した。「戦場へ出陣するつもり」とまで言ってきたかなかった。伊一郎の世話をするために、三女のみさをつきそって出発した。鳴尾へ着いても工場へは出ることができないほど疲れを感じていたようである。体の調子が悪くなり、歩くこともたいていへんなので、人力車をたのんで大阪の病院へ行つて診察してもらったが、病状は悪くなる一方であった。

伊一郎がこんなに無理をしてまで鳴尾に出かけた背景には、むずかしい事情があった。伊一郎が鳴尾でイチゴジャムを製造して以来、小山清兵衛・小出保一郎など長野県の業者が兵庫県に進出し、主としてイチゴボイルを製造していた。その後六・七年はこれら長野県の業者によって占められていたが、大



二代目伊一郎の墓

正八年前、東京の日本ジャムが大坂出張所を開設し、鳴尾でイチゴジャム（丸缶）の製造を開始した。大正十年ころはまだイチゴジャムの生産量は少なく、日本ジャムが小西儀八商店に二〇〇函売ったのが大口契約として業界の話題になったが、その後漸次生産量が増加して、十三年頃には京阪神地区全部で四千函（当時は六ダース入り）以上となった。

大正十三年には伊一郎が、祭原商店から二千函の大量注文を取ったことから、原料イチゴの値が急騰し、業界は大きわぎとなった。これを発端に原料の買いつけ競争は激化の一途をたどり、伊一郎が積極的な現金買いに出たため、他の商店からその対策を要望する声が強くなって、大正十四年に最初の価格協定が行われることになった。この年、鳴尾を中心にイチゴジャム、イチゴボイルの業者、中山兄弟会

社、小出保一郎、熊本商店、塩川合名会社、石橋哲一、鳴尾ジャムの六社でジャム協議会を結成して、一製造期間中に数回にわたって価格協定を行なった。
〔ジャム界今昔物語〕『ジャムのはなし』

こうした経営上のむずかしい状況の中にあつて、伊一郎がいないとみるや、他社がどのような行動に出るか心配で、信州にいることができな胸のうちが伊一郎に無理をさせ、体ばかりでなく神経をすりへらすことになったのであろうか。大正十四年八月

五日、伊一郎は長野日赤病院で五十七年にわたる生涯を閉じたのであった。

二代目伊一郎（勝太）の最後の年と人柄については、今も上田市に健在の、三女のみさをさんに話っていただけことにする。

父が亡くなったのは私が二十才の時でした。その前年の暮からずっと胃が悪く、小諸の医院でみてもらっておりましたが、「お医者さんは神経から来ている」と言うので、具合の悪いのをおして大阪鳴尾へ出発いたしました。

鳴尾ではイチゴジャムを製造しておりましたので、大勢の職人をつれて行きましたが、工場へは殆ど出られないほど体が弱っておりました。私がつきそって世話をしましたが「お前がついてきてくれてよかった」とよろこんでくれました。宿から大阪の病院へ人力車で行って診察してもらいましたが、良くなりませんでした。

父は非常にがまん強い人でした。

「俺が大阪へ行ったのは戦場へ行って死んだも同じだ」

と言っておりました。家でも六月のイチゴジャム製造を控えて心配しておりましたが、いよいよ体の調子が悪くなりましたので家に帰りました。小諸の樋口医院に入院いたしました。博士は首を横にふるばかりでした。

七月下旬、長野の日赤病院へ入院し、手厚い看護をいただきましたが、八月五日に亡くなりました。



晩年の二代目伊一郎

今になって考えると胃がんではなかったかと思えます。痛みがひどかったのではないかと思います。苦しさを顔に出さないと、いつもにこやかさをよそおっておりました。

子どもにはとてもやさしい父でしたが、一面では厳格な人でした。初代はお酒が好きでしたが、父伊一郎はお酒は一滴も飲みませんでした。それで、職人さんや困っている人には非常になさけ深い人で、多くの人から尊敬されていました。なにか村のためにもいつもこれの思い、電話も村一番（塩名田局二番）、役場より先にひいて近くの人々の便宜をはかりました。村中の大勢の子どもから大人まで、なにか収入があるようにと考えていました。

村内に重病人が出た時など、小諸から来る医師は、診療代がもらえるか不安になってよく往診を渋ったものでしたが、そんな時父は、自分の名前を出して、往診を頼んでやっていました。

昔は、桃のお花見に芝居なども呼んできて「観桃会」も催しました。何か事業を起こそうと、いつも考えており、千曲川の水を鉄管でひいて耳取の西に発電所をつくり、村中の電気をタダでつけようとしていました。

東京へ行った時に、大きなカニを買ってきて、それを標本にして学校へ寄附したり、校庭の周囲に



二代目伊一郎の家族（後列左より2人目伊一郎）

ポプラの苗木も植えたそうです。学校の先生方を呼んで、食パンにイチゴジャムをつけて試食していただいたり、いろいろと話をしていたところを見たことがあります。東京の大学の生徒が一泊して桃やイチゴの実習をして帰ったこともあります。が、その中には後になってすばらしく出世した方もあります。

家の前の小川のそばに滝がありました。父は体をきたえるために、寒中でも毎朝その瀧つぼで冷wassakiつをしていました。また、寒中でも足袋は履きませんでした。このことは体をきたえるためばかりでなく、あえて自らに過酷な試練を課すことによって、己の精神をもきたえたのだと思います。

はじめは、ジャムや桃の入れものの缶まで家で作りました。正月三日が過ぎれば、毎日毎日缶作り、それが父が亡くなる少し前から東洋製缶株式

会社で作って送ってくれるようになり、みんなよろこんでいました。

「七転び八起き」とか、広い広い桃畑にたくさんさんの桃はなったが、全部虫になり、一つも虫がつかぬ桃はなかったこともありました。新しいことをするということはほんとうに並大抵のことではないと子ども心にも思ったものでした。

私が長年耳をわずらい、父は「東京の大学病院につれて行く」と言ったのに、行かなかったそうです。今になって後悔しています。

これは姉に聞いた話ですが、商売上、電報・電話はみな小諸迄行かねばなりませんでした。エビス講にはサンマを買ってきてくれたのが一番のたのしみでした。

父は、ふみ姉が女学校のころからなかなかしつかり者で、東京へ行っては目のつけ所がちがうと何やら非常に期待しておりました。やはりお目がねにかない、実践女子大学の教授となり、もう半年で定年というところで、惜しくも他界してしまいました。

鳴尾のジャム製造もはじめは業者が少なかったんですが、だんだん増えて最後の方では一四、五社にもなり、ジャム屋ができて競争になってたいへんのもうでした。

鳴尾村へは私も何回行ったことがあります。はじめのうちはイチゴは森山でつくっておいしかったが、小さいが赤い色がよく、評判は良かったようでした。六月いっぱいイチゴの収穫をしていましたが、もっと早い時期にイチゴがつかれないものかと、父はあちこちの土地で試してみたいようです。そのころ阪神地方でイチゴづくりがさかんになってきたのに注目して鳴尾へ行ったようです。若

後再と機熟スルヤ西比利亞
徴兵ノ悲運と向ヒ、為ノ宝
ノ山ニ入りナカラ寶ヲ得ルニ至ラ
サリシハ今尙心残りナラン
如斯各大事業成ラス半途
ニシテ今夏遂ニ白玉樓中、
人トナラレシハ惜ム可シ
本日茲ニ儀禮ヲ舉ケラル、ニ
當リ、君ヨ靈アラハ余ノ捧
ケマツル一沫ノ香ト共ニ享テ

大正十四年十月十日

小諸町

小宮山莊助

伊一郎を支えた小宮山莊助の弔辞（前半は口絵参照）

いころ、大島からの帰りに知っていたのではないかと思われます。

父と私のほかに職人を一〇人ぐらいいは一緒に行きました。たしか古結丑之助こげつうしのすけさんというお宅の建物をかりて工場にしました。道具はこつちのものを運んでいきました。煮る時のかきまわし方、砂糖の入れ方で味がきまるのでとても慎重でした。でき上がったボイルは、石油缶につめて汽車で三岡へ送り、信州産として売り出していました。本人も苦笑いしていたのを思い出します。大阪や宝塚から甲子園の附近の田んぼにイチゴがいっぱい作られていたので、それを買いとってジャムにしました。それをひまをみては小さい缶につめてラベルをはって明治屋へ出していました。

県知事であつた渡辺千冬さん（一八七六一一九四〇）と父は親交が深く、よく見えられました。そのお父さんの千秋さん（一八四三―一九二一）

は元高島藩士で宮内大臣までなされた方と聞いておりましたが、宮内省や宮様方にジャムをお送りすることになったようです。

父はいつもいそがしい人で、すわってられない性格でした。畑や田んぼへ行く時も、普通にゆつくり歩いたことはなかったように記憶しております。

新しいことを考えつくと、夜おそくまで図を書いたり、コツコツと作ったりこわしたり、あつちへ行って材料を持ってきたりと、一つのことを最後まで真剣に取り組んでいた姿が、今もまなこから消えません。

みさをさんは、父（二代目伊一郎）を思い出しながら語ってくれた。台湾・奄美大島からの帰りに岐阜から信州へ向かって歩いた時の文を読んでもやると、つむった目から涙がにじんでいた。「事実は小説より……」といって目をふせていた姿が印象的であった。

大正十四年十月十日 二代目伊一郎の葬儀が行われた。

四〇年にわたって桃づくりから缶詰工場まで、伊一郎を支えはげましてくれた小諸市与良の小宮山莊助は、弔辞の中で、

「我が親友トシテ最モ愛敬セル東洋ノ企業家塩川伊一郎君長逝セラル 嗚呼悲シイ哉 君ト相知ルハ約四十年前即チ明治二十年ノ盛夏ノ頃ナリシ 爾来改良農具ノ考案・洋桃事業ニ意ヲ注ガレ……」（中

略) 何レモ大事業ヲ企劃シタルガ 就中沿海州ニ関スルモノハ国家的営利ノ事業ニシテ巨万ノ出資ヲ惜シマザリシモ、正ニ成ラントスルニ当リ 不幸君ノ健康勝レズ、其ノ後再ビ機熟スルヤ西比利亜撤兵ノ悲運ニ向ヒ、爲メニ宝ノ山ニ入りナガラ宝ヲ得ルニ至ラサリシハ今尚心残りナラン

如斯 各大事業成ラズ半途ニシテ今夏遂ニ白玉楼中ノ人トナラレシハ惜ム可シ 本日茲ニ儀礼ヲ挙ケラル、ニ当リ、君ヨ靈アラバ余ノ棒ゲマツル一抔ノ香ト共ニ享ケヨ」(全文は資料篇十五を参照)

と悲しみ惜しみながら別れのことばをおくっているが、この弔辞に二代目伊一郎の業績が短い文によく記されている。小宮山莊助もまた、明治初期に小諸の与良町の鍛冶職から身をおこし、新しい技術を取り入れながら機械化を進め、南町に新工場を建設して佐久の農業や工業の発展を支える機械をつくってきた人物である。伊一郎の考案した農具や缶詰製造器具を共に研究製作した人であった。二人は世の中に対する考えもよく似ていたため、伊一郎との親交が深かった。小宮山家の人々は今も小諸市三岡の南部にある和田工業団地で、自動車のエンジン部品など各種工業製品の製造と研究に取り組んでいる。

五 すみの努力と戦争の中で

桃の収穫と缶詰づくりが一段落した十月十日、二代目伊一郎の葬儀がしめやかに取りおこなわれた。長男の栄一は早稲田大学二年の時に亡くなってすでになく、次男の昇は十七才の学生であったが、三代目伊一郎を襲名することになった。桃づくりや缶詰工場の経営は二代目伊一郎の夫人であったすみが支えることになった。

すみは小県郡和の出沢薫則の妹で、明治三十二年四月に勝太のもとへ嫁入りした。勝太が台湾・大島旅行から帰って一か月ほど後のことであった。すみは女性としては大柄でがっちりした体格の人で、夫と共によく働いた。長女ゆきの出産から四男六女を育て、末っ子の歌子がまだ三才の時に夫の死に会うことになってしまった。「桃の核ぬきや皮むきの忙しい時には、職人たちの間に入って包丁を使いながら作業場全体に目をくばりながら指揮に当たっていました。母がいるだけで職場の人々がてきぱきと働いた。桃の数量や缶の入った箱についての計算は暗算でしたが、答を出すのが早くまちがいはありませんでした。手伝いに来てくれた子どもたちが仕事にあきてくると『またきてね』と言いながら、自家製の金札を与え、頭をやさしくなせて帰していました」と歌子さんは母を想い出しながら語っていた。



二代目伊一郎の妻すゐ

夫伊一郎が亡くなってからは「女実業家」らしさを発揮し出した。工場の従業員や出入りの業者ばかりでなく、缶詰同業者もすゐの力量を認めるようになった。

昭和に入ると缶詰とジャム業界は会社が増え、製品の値くずれがはじまっていた。その上に金融恐慌が起きて、不況ムードが高まりつつあった。昭和二年五月の大霜害は佐久の桑や桃に大きな被害を与え、農村の不況が深刻化し、塩川缶詰の経営も苦しくなった。すゐは、夫が築いてきた信用と健全な経営を続け、東洋製缶株式会社の協力を得て苦難を乗り越えていった。

折から世相は日本がロンドン軍縮会議から脱退して無制限軍備拡張時代に入り、ヨーロッパではドイツが再軍備宣言を行うなど、再び戦雲がただよいはじめた。しかし缶詰やジャムは西洋の軍隊の食糧として、重要な位置にあったことから、イギリスの大量買いつけがあつて値段が急騰したので、工場の経営は好転した。

昭和十二年七月 中国の北京郊外蘆溝橋ろこうきょうで日本と中国の軍隊が衝突し、戦火は拡大していった。十三年に入ると国家総動員法が公布され、すべての物資は軍事優先となって統制されることになった。工場

の生産は県単位で統合され、十四年には価格統制令と総動員物資使用令がつぎつぎと公布された。そしてこの年の十二月には工場事業使用収用令によって、工場は自由な経営ができなくなってしまった。輸入にたよっていた砂糖は品不足がはげしく、缶詰やジャムの製造は大きな制限を受けることになった。塩川缶詰合名会社は発足の時に砂糖に苦しめられたが、再び砂糖不足によって缶詰製造ができなくなってしまった。

長野県では、国の方針である経済統制令により、各地の缶詰工場を統合して篠ノ井に長野缶詰会社をつくった。機械を持ちよって缶詰製造を続けることになったのである。塩川缶詰からは、伊一郎の三男、伊三郎が重役の一人として参加することになったが、伊三郎は東京帝国大学在学中であった。第二次世界大戦では、次男の昇（三代目伊一郎）、三男伊三郎、四男勉の三人共出征し、次男昇はフィリッピンで戦死した。

三岡工場は閉鎖され、工場で働いていた人々は食糧増産に従事することになって、桃の樹は切りたおされ、芋や麦がつくられた。桃畑は少なくなかったが、甘い桃の味は砂糖のなくなった戦時中の食糧難の中で、かけがえのない甘味として人々の体と心をうるおし続けた。

六 浅間の煙とともに

第二次世界大戦によって統合された缶詰工場は、戦後になっても復興されなかったが、三岡の桃づくりは復活した。

木村熊二の教えを受けながら、伊一郎父子ら八人の同志たちによってはじめられた三岡の桃づくりは、佐久市の平尾山麓や望月町へとさらに広がった。ゴールデンウィークのころには、三岡ばかりでなく佐久平はブルーの澄みきった空に桃の花と鯉のぼりがひるがえるすばらしい季節を迎える。そして暑い夏になると国道一四一号線の三岡附近には、桃園からもぎとられたばかりのみずみずしい桃が、小さな特設販売店に並べられ、観光客の車を止めている。

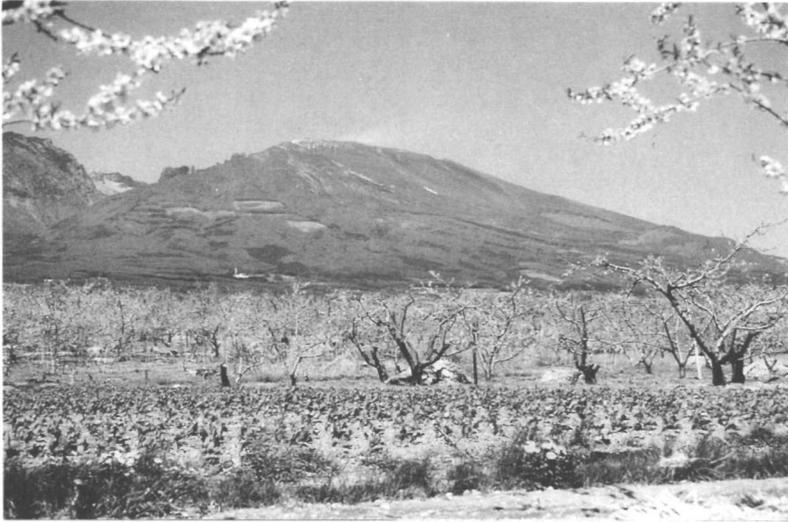
明治以来、浅間山麓は西洋人宣教師によって避暑地となったこともあって、カシグルミ、カンラン、ブルーベリーなど、それまでになかった西洋の果物が持ちこまれ、新しい特産物が生まれた。その中でも木村熊二の指導と伊一郎父子の努力によって成功した三岡の洋桃栽培は、農家の人々の生活を貧しさから救ったばかりでなく、地域の人たちに大きな富を与えることになった。

ここに、伊一郎（二代目）の徳を讃えた論文があるので、抜すいして紹介してみよう。

氏は多年研究の結果会得した方法を広く村内の希望者に伝授して居るので今では佐久地方のみでも三百町歩以上にも増加して居る浅間の降灰で他の耕作物では一町歩百円か百五十円より得られないが、この利益あつて、村民の安樂に暮らされるのも皆塩川氏の恩沢であると喜んで居る、氏は其後苺の栽培を始めたが今ではかなりいい成績が挙がつて来た。失敗又失敗転々又転々斯して氏は遂に最後の勝利を得たのである。

氏は斯くの如くにして今では数万の富をなして居る、が決して物質本位の自己主義ではない、氏の理想とするは細民救済とても云ふた様な考へで、富や権力を以て近郷に名を得よふとはして居らぬ、自己か富を得る為め他の村民が迷惑する様では事業でも何でもないと、此事は常に念頭を離れた事がない、極く近い例が果樹の栽培に適当な土地を手入れるにしても、若しそれが他人の小作中のものであれば話をせず小作人に相当の報償代価を支払って間接に小作人から借りると云た様なやり方で之等はほんの一例にしか過ぎんが万事が下級民本位で経営して居られる、苺ジャムの製造期などでも短期日に何十万と云ふ数を製出するのであるが、氏の徳を慕て居る村人の力により少しの差支もなく製造することを得て居る、兎に角氏は当今には一寸珍らしき人格を備へた人である物質上の成功は第二として事業其物に興味を持ち自分の郷里が富めばそれで満足して居る、富の度から云へば必ずしも大成功とは言へぬ、けれども斯くの如き荒廢に近き土地をして斯くも有利なる事業を創設せしは大なる成功と云はねばならぬ。

〔青年之友〕第十三号 明治四四・一〇・一四所収 資料編六参照)



浅間山麓に豊かな桃園が広がる（平成7年5月撮影）

伊一郎父子が、自己の富や権力を得るために洋桃栽培をしなかったことは、多くのエピソードが物語っている。常に地域の人々のことを考える細民救済とでもいう確固たる信念を持っていたが故に、全ての事業に人々の尊敬を得たのであった。

森山を訪れて付近の様子をみた時、熊二の胸にうかんだ「アメリカ留学時代の桃の木」が、伊一郎と若者たちの努力によって成功し、岳詰へのアイデアが大きな収益となって花ひらいたことは、熊二にとっても忘れることができない思い出となったであろう。

小諸を去って長野へ赴いた熊二は、二代目伊一郎の時代になっても時々森山を訪れている。日記の中には、

大正 五・ 六・ 二 森山村へ美樹恵同行 塩川伊一

郎方訪問 遠山へ立ちよる。

一一・ 八・ 一七 過日塩川伊一郎君より苺ジャム

一ダース贈らる 好意可謝也

一一・七・三一 森山桃実熟季となりたり

八・二五 塩川伊一郎より桃缶到来す、

『木村熊二日記II』には、木村が長野にいても桃の季節になると森山の桃のことを思い出し、伊一郎もまた、缶詰やジャムができ上がると、木村に贈って感謝の気持ちをあらわしていた。

昭和二十八年一月七日の『信濃教育』誌には、

「郷土の偉人伊一郎の名は浅間の煙とともに消えないであろう」

と書かれているが、伊一郎父子にとって木村熊二の指導に対する感謝の念もまた、浅間の煙のように消えなかったことであろう。

第二部

佐久における桃栽培等の起源

一 三岡村の桃栽培をめぐる諸説について

三岡村に桃がどのように導入されたかについては諸説がある。

1 長野県果樹発達史 第三章果樹農業の展開、2 生産の推移には「北佐久郡三岡村地方で、明治二十三年、木村熊二の指導を受け、塩川貞五郎・塩川伊一郎らによって栽培が始められ、初めは軽井沢近郷に販売したが、量の増大に伴い京浜地方に出荷した」

2 三岡農協四十年史には「明治二十七年頃、塩川貞五郎が欧米種及中国種で洋桃・水蜜桃と呼ばれた大果の桃を導入試作した。」

3 北佐久郡志(大正四年刊行)第一篇地理篇第九章の果樹の項 「洋桃は近來栽培の俄に勃興したるものにして、初め木村熊二其適地なることを唱道し、明治二十六年の頃、三岡村に於て塩川伊一郎、塩川貞五郎等栽植を試み、漸次成功の地歩を成し、……」

4 北佐久郡志(昭和三十二年刊行)第二章近代社会と佐久 第二節に「農業三岡村の塩川伊一郎は小諸義塾長木村熊二から得がたい一つの啓示を受け東京三田興農園から上海・天津の両水蜜桃及び洋桃五種を得て、野生砧木に接木して栽培した結果好成绩を収め(明治二十七年)翌二十八年さらに桃園

一町歩をひらき有志にもこれを奨励し、三十年に武州安行地方から良種を求め……」
とあり、そのほか新聞などで報道されている内容は1と2を参考にして書かれており、佐久における洋桃の導入が、いつ誰によってどのように導入されたかについて明らかではなかった。

私は長い教員生活の中で、子どもたちが生まれ育った郷土、佐久の歴史と風土に対する知識を、より確かな資料に基いて正しく認識させようと努力を続けてきた。小諸市では一〇年にわたって勤務し、その間『私たちの小諸市』をはじめ子どもたちの学習資料や地図を市内の先生方と協力して作成し、学習に役立ててきた。小諸市の産業史の中で明治以後の工業部門では製糸業、農業部門では洋桃栽培が重要な位置を占めており、丸万製糸の高橋平四郎の業績については正しく伝えられているが、桃栽培については諸説がバラバラであり、子どもたちにどのように教えたらいいいのか悩んでいた。

平成二年のある日、東京女子大学比較文化研究所蔵の木村熊二による筆書の「森山村桃栽培の経緯について」の文書を見て、読んでいくうちに三岡村での桃栽培の発端となった日の様子が、ありありと書かれているのに驚かされた。早速『木村熊二日記Ⅱ』に記されている塩川伊一郎関係の記録とつき合わせていくうちに、森山における桃樹栽培の発生がはっきりと浮かんできた。と同時に前記した諸説について、疑問を持たざるを得なくなった。

そこで『木村熊二日記Ⅱ』と「森山村桃樹栽培の経緯について」を中心に、明治中期における佐久地方の桃栽培の起源を論証してみたい。

二 木村熊二と伊一郎との交流について

木村熊二と三岡村森山での洋桃栽培のはじまりについては、第一部でくわしく述べてきたが、まず『長野県果樹発達史』に記されている「明治二十三年、木村熊二の指導を受け、塩川貞五郎・塩川伊一郎らによって栽培が始められ」と書かれていることについてである。熊二は明治二十三年にはまだ信州を訪れたことはないし、まして小諸で伊一郎らと会っていない。

ここで『木村熊二日記Ⅱ』によって熊二の佐久での様子と伊一郎との出会いについてくわしく述べてみよう。

木村熊二が布教のため初めて佐久へ入ったのは、明治二十四年（一八九一）十月十日のことである。品川から汽車で横川へ着いた熊二は、碓氷峠を馬車で越えて軽井沢へ入り、その夜は追分の油屋へ宿をとった。小諸へ入ったのは十七日で、角田真平と会った後、荒町の関五太夫方へ滞在し、布教のかたわら布引山などを訪れ、二十三日に汽車で軽井沢へ向かい、佐藤万平方（万平ホテル）へ泊り、その翌日に碓氷峠を越えて横川へ向かっている。この時は伊一郎らに会った記録は見い出せない。

二回目の来信は明治二十五年一月十四日からである。碓氷峠は美しく晴れていたが雪が舞い、信州に

入ると寒い風が吹いていたようである。十六日に人力車で中山道を小田井・岩村田へ向かい、松葉屋に宿をとっている。熊二と親交の深かった早川権弥宅では学校の先生や生徒を集めて演説会を行ない、白田や岩村田の講議所で布教をしている。小諸では佐野嘉ね子の葬会の後、関五太夫を訪れているが、その後御牧が原から印内を経て芦田へ向かっている。

この年の五月にも小諸で佐野・田沢、御影の柏木新三郎などの名前が出てくるが、塩川姓は出てこない。熊二の日記には、だいじな人ばかりでなく、初めて会った人々の名前がこまやかに記されている点が重要であるが、塩川姓はまだ出てこない。

熊二が小諸へ定住を決意し、家を借りるように申し込んだのが、明治二十六年四月十七日のことであり、十一月二十五日には柳沢呈三宅を借りて義塾とし、翌二十七年二月二十四日に小諸講議所の開設式をあげている。

熊二はこの日記の中で果樹関係についても書いている。

二十七年五月六日 朝中込石山織之助氏訪問果樹園之件を相談

二十八年四月八日 | 林檎の種木五百本を御影村柏木新三郎方へ送らんとす。運輸不便所々奔馳せり

五月一日 柏木新三郎留守中に付同人宅より林檎種を送り来る、時期已に過く後園に種付く

五月二日 暁起林檎の種木を後園に種付、稲垣正次氏来助く

とあり、四月十日には万世橋外通りの通運会社から送ったと記されている。ここでは苗木と書かないで種木とあるのは、単なる一本の苗木として使ったのみでなく、長い苗木の上の方はつぎ木のほとして使ったためではないかと考えられる。

塩川伊一郎が木村熊二宅を訪れたのは、明治二十八年（一八九五）九月二十日が最初であったと読み取ることができる。日記には、

九月二十日 塩川栄一郎来訪（伊のまらがい。以下同じ）

〃 二十一日 朝森山村塩川栄一郎を訪ふ 午十二時半帰宅

十月 五日 塩川栄一郎 大谷虞 山田環等来訪

十月 十日 塩川栄一郎来 明日集会之件ヲ告（る）

十月十一日 森山塩川栄一郎方訪問 桃園設置之件を相談す 午後三時帰宅

十月三十日 風雨終日 午後塩川伊一郎来 桃園組織之件を談す（る）

十一月八日 大谷虞来訪 塩川栄一郎出京之件を告ぐ

〃 十六日 塩川伊一郎東京より帰来す

〃 二十日 塩川伊一郎来る 廿三日集会之事申出ず

〃 二十三日 朝森山村に至り桃夭社にて集会す 午後二時帰宅

明治二十九年三月三日 森山村へ出張 演説会を開く 塩川伊一郎方にて蕎麦之饗応あり 夕帰宅微恙あり

ここに出てくる栄一郎とは伊一郎のことで、自分の名前を言った時の「い」がはつきりしていなかったために、熊二には「え」と聞こえて日記には栄一郎と書かれたと考えていいのではないかと思う。この記録からみると、塩川伊一郎が熊二と会ったのは、明治二十八年であり、『長野県果樹発達史』のように「明治二十三年、木村熊二の指導を受け、塩川貞五郎、塩川伊一郎らによって栽培がはじめられ…」ということはなく、明治二十八年九月二十日以後に、伊一郎らが熊二の指導を受けながら二十九年に本格的な洋桃栽培が始まったとみるのが妥当であろう。

明治二十九年三月三日の「森山村へ出張 演説会を聞く」の内容が「森山村桃樹栽培の経緯について」にあることは第一部で原文を引用してくわしく述べたが、この書が木村熊二のものであることは小諸市本町の武重夏雄氏によって筆蹟を確かめていただいた。この中で熊二は「これぞ森山へ桃樹栽培の初期なりき 其の後伊一郎君外七名の有志者は萬難を凌ぎ千苦を嘗めたる結果……終に今日の大成を看るに至りたると信ずるなり……」と書いている。

明治二十九年以前に森山で桃が栽培されていたとするならば、五年もの長い間、果樹に関心の深い熊二の目にとまらないはずはないし、村内の八人の同志者と呼ばれた人々が知らないはずがないと考えるからである。

三 佐久における果樹栽培の記録

明治政府の勸業寮は殖産振興のために桃・りんご・ナシ・ブドウなどの果樹苗を各県に配布した。長野県ではそれらの苗を県庁(現・信大教育学部)の庭に仮植して、各村々の農家に植えるように奨励した。長野の近くにある真島村の人がこの中からリンゴの苗をもらって植えたのが、善光寺りんごのはじまりだと言われている。

佐久市権現堂の小林正一家には、明治九年一月十四日付の県庁から出された文書が残されている。その内容は「リンゴ・ナシ・モモ・ブドウなど十二種、三百四十六本のアメリカ産の苗を管内有志にくれるので、試し植えをする人は勸業職まで申し出るように」との通達である。この通達は、横和村、今井村、下中込村、三河田村、根々井村へ回状としてまわされていたものであるが、果樹苗をもらいに行つて植えたという記録はない。

果樹を植えた確かな記録としては、明治二十二年に志賀村の神津邦太郎が、神津牧場内へりんご・桃・ブドウなどを五本ずつ植えたという報告書を北佐久郡勸業委員池田静作あてに提出している。しかしこれは植えた場所が群馬県下仁田側であつて佐久地域ではない。また成功したという記録もない。

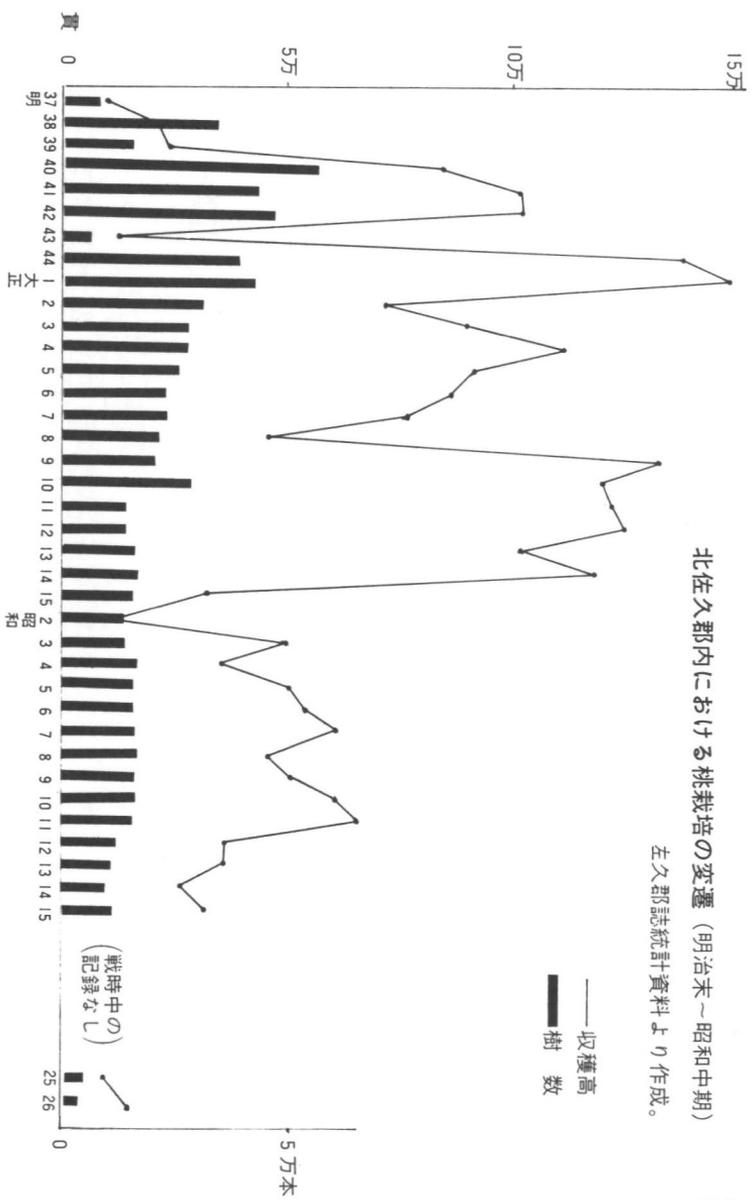


図 4 北佐久郡内における桃栽培の変遷 (明治末～昭和中期) 北佐久郡誌統計集より作成

佐久の野山には自然の桃は生えていたが、果実は小さくおいしいというものではなかった。明治初期には政府によって外国種が輸入されていたので、興味をもって植えた人もあつたろうが、産業として本格的に栽培したという記録はほとんど残っていないのが実情である。

日本の桃産地として有名な岡山県では、明治三十年に金桃・土用水蜜・六六水蜜などの栽培がはじまり、三十二年には離核水蜜桃、三十四年に味の良い白桃などが栽培された。また、神奈川県では明治三十二年から三十八年にかけて、早生水蜜桃・伝十郎などの栽培がはじまっている。

これらの日本の桃産地といわれている地方より早く、三岡村で本格的な洋桃栽培が始まったということは、長野県ばかりでなく日本果樹発達史の上で特筆されるべき事象である。

その後、木村熊二の指導と伊一郎らの努力によって、明治末から大正期にかけて、北佐久郡の桃栽培は最盛期を迎えた。収穫高が急激におちこんでいる年が何回もみられるのは、病虫害や霜害によるものであろう。桃栽培は、第二次世界大戦中の食料不足によって大きく減少するまで、佐久地方の農家経済を支えていた。

四 伊一郎とジャム製造について

全国ジャム工業協同組合連合会から出版された『ジャムのはなし』（昭和三二・一一・一発行）は、日本のジャム産業発展の経過を詳しく解説した本であるが、「第二部 ジャム界今昔物語」の冒頭（三二頁）には、「ジャム事業の草分け塩川」として、次のような記述が見られる。

我が国で一番最初に苺ジャムが製造されたのは明治十四年で、試作したのは長野県北佐久郡三岡村の初代塩川伊一郎であったと伝えられている。当時塩川氏は若冠二十五歳の青年に過ぎなかった。息勝助氏が初代を助けて果実園芸及び苺ジャム、水蜜桃ミヨウガ等の缶詰事業に従事したのは明治二十年であった。

また、『ジャムの知識』（昭和四一・七・三〇 日本ジャム工業組合発行）、『明治屋一〇〇年史』（明治屋発行）にも、これと同様な記述が見られる。さらに『味百年』（昭和四二・九 日本食料新聞社発行）にも、

明治十年になってリンゴの加工を研究、(勸農局)内藤新宿試験所でジャムの試作、一般に売りだした。これが日本におけるジャムの起源といわれている。明治二十年には長野県北佐久郡三岡村の塩川伊一郎、二十四年に長野市の初代雨宮伝吉がアンズジャム、二十八年に大阪でアメリカ帰りの東条豊作がジャムを製造した。

と記されている。

しかし、これら資料は、いずれも二次(間接)資料であり、真偽については直接確認できないが、以下のように推測できる。

前記『ジャムのはなし』、『ジャムの知識』、『明治屋一〇〇年史』の三資料によると、明治二十年にすでに苺ジャムおよび水蜜桃の缶詰事業が行なわれたことになる。しかし、三岡村に桃が導入されたのが明治二十九年であり、また木村熊二から缶詰会社の助言をもらったのが、明治三十四年であることから明らかな矛盾が生じる。また明治十四年には、初代伊一郎は正しくは三十四歳で、年代にかなりの混乱が見られる。したがってこれら三資料は年代に関して十年以上の誤りがあると考えられ、記述の根拠となった資料の出典が明示されていないために、何にもとづいたものなのかハッキリしないのが残念であると言える。

一方、『味百年』には、明治二十年にジャムを製造とはあるが、桃、缶詰の言葉はない。またジャム自体は製造が簡単であり、保存食であるために、当時としては高価な缶詰を必ずしも必要としなかったの

かもしれないと推測される。これらのことを考え併せると先の三資料から、桃、缶詰のことばを除いた内容、すなわち「缶詰でない苺ジャムに関しては、明治十四年に試作が行われ、また明治二十年頃には事業として製造が行なわれた」とするのが正しいのではないかと考えられる。さきの三資料は、明治三十年代の桃、缶詰製造の事実と混同した可能性があると考えられるのである。

なお、『ジャムのはなし』などに、二代目伊一郎の幼名を勝助としているが、これは勝太の明らかな誤りであることも付け加えておきたい。

社会事象について事実とちがった記録が残されている場合がよくある。人の記憶にはちがいがあ
し、誇張して書かれた文には事実とはちがったことが書かれている場合がある。それは新しい資料が発見された時は書きかえられなければならないことは当然である。それ故、この本ではできるだけ多くの資料によって確めながらより正しい認識を得ようとつとめた。第三部には伊一郎関係資料の一部を載せたので読んでいただければ幸いである。

第三部 資料編

第一章 資料解説

一 掲載資料

一 森山村桃樹栽培の経緯について（東京女子大学比較文化研究所所蔵）

この資料は、木村熊二の毛筆による直筆の文章で、森山村にはじめて桃が栽培されるまでの村の様子と伊一郎や若者たちが、桃栽培にいたるまでの姿が語られている。途中文章がとぎれている部分は、つなげてまとめた。『木村熊二日記Ⅱ』と関連させて読むと、三岡村の桃栽培の起源がはっきりするとともに木村熊二の気持ちや伊一郎の様子がよくわかる文である。

二 木村熊二先生の生いたちとアメリカ留学（武重夏雄『木村熊二』より）

武重夏雄氏の父君は、木村熊二の教え子である。木村熊二の生いたちを小諸にくるまでに焦点をあてて、武重氏の著作によりまとめてみた。

三 『木村熊二日記Ⅱ』（東京女子大学比較文化研究所刊）

木村熊二は、毎日よく日記をつけていた。その中から熊二が小諸に来られるまでと塩川伊一郎に関する部分を抜粋した。この日記と資料編一の「森山村桃樹栽培の経緯について」の内容が一致しており、三岡村桃樹栽培の起源がはっきりする。

四 佐久の園芸王（『信濃毎日新聞』明治四一・一〇・二五）

この資料は、『信濃毎日新聞』に一〇日間にわたって連載された記事を、そのままのせたものである。桃栽培が佐久の地でひろく栽培されるようになって、世の中の高い評価を受けるようになったので、記者が取材して記事にしたものと思われる。

五 塩川伊一郎氏（『農界人物』『農業世界』第六卷第一二号 明治四四・九・一 博文館刊）

当時全国的に有名な出版社博文館より発行されていた月刊誌『農業世界』の特別記事として、二代目塩川伊一郎の半生を紹介している。特に伊一郎を立志伝中の人物として描いてはいるが、論調が、単に伊一郎を賞賛するだけでなく、地域の人々の救済のために尽力した姿をとらえている。明治時代特有の筆法ながら、よく伊一郎の人物像を描いている。

六 浅間山麓の一偉人（『青年之友』第一三号 明治四四・一一・一 新公論社刊）

『農業世界』とほとんど同時期に出版された月刊評論誌。日本の未来に若者の奮起を期待するという姿勢の評論が目立つが、二代目伊一郎の半生を簡潔にまとめてある。『農業世界』と同じく、伊一郎の事業姿勢が、細民救済にあったことを強調している。

七 台湾・奄美大島紀行（二代目伊一郎日記より）（塩川家所蔵）

伊一郎が、台湾・奄美大島旅行中に持参の小さなノートに書きつけたメモや日記をまとめたものである。はじめは鉛筆で書いていたが、途中で芯がなくなってしまうのか、終わりの部分はペンで書きつけてある。旅行の様子がありありと目に浮かぶとともに、当時の鹿児島や関西の状況がきわめてよくわ

かり大変興味深い。また、伊一郎の人柄がにじみでている文章である。（読みやすいように、適宜句読点を付した。）

八 長野県北佐久郡三岡地方洋桃及莓栽培并缶詰製造業経営書（二代目伊一郎自著）（東京女子大学比較文化研究所蔵）

明治四十二年に二代目伊一郎が、二〇年間にわたって桃栽培さらには缶詰製造などに精根傾けて研究してきたことを伊一郎自身の手によって書かれた貴重な資料である。その沿革の部分には、明治二十二年から、苗づくりにはじまりその増殖の苦勞など、北佐久地方に桃園がどのように拡大発展していったのが克明に記されている。

九 洋桃の利益及危険に就て（二代目伊一郎自著）（塩川家所蔵）

桃の栽培が利益になることがわかると、近隣の村人たちが桃づくりに取り組むようになった。しかし栽培法や病害虫の防除についての知識がないと失敗することが多かった。この文は栽培を志す人々への奨励と警告を行ったものである。

十 桃養合資会社定款（東京女子大学比較文化研究所蔵）

桃の栽培が成功すると、大量の桃が生産され、生のままでの販売では売り切ることができなくなつた。そこで木村熊二の導きによって、はじめて小諸につくられた缶詰会社の定款である。

十一 果樹害虫駆除予防組合規約（塩川家所蔵）

病害虫の駆除は、一桃園で行なっても、他の農園から広がってくる。そこで同じ桃栽培をしている人

人が、力を合わせて一斉に病害虫駆除に立ち上がりうとして組織的につくられた組合である。

十二 佐久特産物の消長（『信濃佐久新聞』大正八・八・一）

中島禾堂は、佐久の特産物について『信濃佐久新聞』に連載しているが、そのうちの一つに洋桃と苺を取り上げて書いた文章である。

十三 小果実栽培法（塩川家所蔵）

塩川缶詰合名会社は、桃の缶詰を中心にその前後に工場生産の効率を上げるために、多くの種類の缶詰やジャムを生産している。そのために伊一郎は、いろいろな小果実を試験的に栽培、研究をしていた。その良さを人々に紹介した文である。

十四 園芸家 塩川伊一郎君（『佐久名流評林』明治四二・一二・一八 佐久名流評林著作部刊）

本書は、木内政太郎によって書かれ、佐久地方の名望家を取り上げ、その業績を紹介した本である。

二代目伊一郎のことが簡潔にまとめられている。

十五 弔 辞（小宮山莊助氏による）（塩川家所蔵）

小宮山莊助氏は、小諸の小宮山鉄工所の主人で、伊一郎の缶詰工場の機械やその他伊一郎の求めに応じて機械器具をつくってくれた人物である。二代目伊一郎を最も理解し、支援した友人であった。

十六 塩川伊一郎の受けた賞状

十七 塩川伊一郎関係年譜

十八 塩川伊一郎家系図

二 未掲載資料

一 実用新案登録に関する係争資料

桃の核拔器械の実用新案登録について、明治三十九年十月、塩川缶詰合名会社と日本桃養株式会社との間に係争がおきた。伊一郎は、明治三十八年八月に「塩川式果実核拔器械」（実用新案第三五四号）を出願し、桃養社は明治三十九年九月に「缶詰用洋桃核取鉋」（実用新案第三二七三号）を出願していた。伊一郎は、「実用新案登録無効請求」を提出して、後者は前者に類似したものととして、登録の無効を請求した。これに対し、桃養社は同年十二月十日、答弁書を提出、両者は構造、作用において異なるものであり、これら器械類は創業時から指導を受けた豊田吉三郎氏の発明であると反論した。

その後、伊一郎の請求が認められ、両者は和解をするにいたった。

二 「木村熊二と桃」（菊池麟平著）（『佐久新聞』昭和五七・四・一〇から連載）

熊二と伊一郎の関係について詳しく記述されているが、伊一郎の遺族について述べた六回と七回の塩川家の人々には大きな誤りがある。塩川幸太氏、三四郎氏、孝吾氏などは同じ三岡森山の塩川一郎氏の家系の人であり、伊一郎の遺族ではない。

第二章
資
料

一 森山村桃樹栽培の経緯について

(東京女子大学比較文化研究所所蔵)

ミカエルエンジローが求めたる石塊せうかいハ市人の捨る所なれど 彼にハ甚だ貴重なる物にてありき 河村瑞軒が想像せし江戸市街に遺棄したる黄金ハ 人馬の草鞋に過ぎず 所謂勝つ人の用ゐる所のものハ敗るゝ人の碁にてありき 然れども彼等ハこれによりて成功し芳名を千歳に流せしものハ用意周到の結果に過ぎず

信州北佐久郡の森山村といふハ三岡村の一部落なり 村民に塩川伊一郎といふが有る 一日我家を訪ふ蓬頭ほうとうらんぼう乱髪ひげにて髭鬚ひげを剃らす 言笑疎野 然れど語る所ハ田舎者の真面目と熱心あつちを顕し 農家生計の日に非なる事を慨歎セリ 元来この地方の特色ハ貧富の程度の甚しき懸隔を有せざるにより 村民ハ各自門地を以て自ら高慢り居たれど 互に円慢なる交際を為し来りしも 世態人情ハ時と共に推移変化して拜金崇の趣勢ハかゝる僻遠の村落にまで及びて門地何かあらん人物何かあらん 富める者のミ地方の勢力を有する事となりて貧者ハ齒牙の間に置く可きものならずとまで排斥せらるるに至れり これ伊一郎の尤も憤慨に堪ざる所なりき 当時細民ハ富豪者より金円を借り受け 養蚕に従事するも 上簇の上元利を計算して得失相償わさる事数回あり其が為めに失望の結果は飲酒となり博奕ばくちとなりて終極ハ家屋も

土地も蕩^{とう}尽^{じん}し挙て富者の小作人となるに至る 伊一郎も時の風潮に漂されて有形の財産ハ消滅し去りしも無形の財産即チ勇氣ト耐堪ハ未だ全く消除せず彼ハ思へり津田仙君の如き渡瀬寅次郎君の如き果樹栽培によりて成功せし人少からず 自己も苹果^{りんご}を栽培して地方の物産を為ば衆人に益を及す余地なきも一家を支ゆる程の収入を得るハ容易の事ならんと これより苹果栽培の為め百方苦心セリ 第一着手として森山村の地価の尤下直なる場所を借り受けて果樹を植付ケ 又ハ小縣郡内の内にて鹿教湯の邊に数町の地を開拓して新に果樹園と為し 果樹の発生後ハ必ず多量の收穫を得へしと企待せり されど彼ハ土地に適する種類を撰^撰□^取の暇なく 地味の如何を問わず 苹果にてあれハ必ず結実すへしとて全く成算を誤りたり 苹果程害虫の多キモのハ有らず之を防禦^{ぼうぎよ}する方法ハ極て多し 肥料も十分に注意を要するものなるに彼ハ其点^{おこた}に怠^{おこた}りたれハ 数年の後といへとも好成绩^{あだむ}を挙る能す 最後にハ土地の開墾より果樹植付の労働に□^{不明}して 許多^{いくた}の負債を剩して彼ハ愈々窮境に陥らんとするに至れり 失望とか落胆とかいふ言辞ハ彼の手帳にも彼の字引にもあることなし 土地も家屋も金錢も名譽も脱せられて無一物なる境遇に安坐して果樹栽培の夢を結び居たり 一日彼ハ微醉を帯ひて案内もなく紹介もなく我が家に來りて 果樹栽培の地方人民の副業とし益ある事を説き聞かせたり 彼ハ大工となりて失敗し養蚕家となりて失敗し果樹栽培によりて多大の負債を残し 垢面弊衣好んで果樹栽培の益を説くもまた奇ならずや 最後に彼ハ余に問ふ言細民今日の状態より救済する道ハなきやと 余ハ之に答へて酒を禁し業を勉ミ二宮尊徳翁の術を講せハ稍^や挽回^{ばんかい}することを得へしと 君ハ呵々大笑言ふ 前途の迫りたる老翁か少許の金を貯蓄して何をか為ん 其^{それ}ハ子孫の計を為すに

ハ宣しかるへし自ら富豪者とならんに一攫千金の方法にあらずんばある可からすと 余ハ君の説く所の願を遂ひ風を捕る類にして共に談するに足らすと思へり去れとも彼ハ余に森山村に來りて細民救済の演説を為し呉れと依頼せり

かくて余ハ一日森山村に於て演説をする事となりぬ

村民の大半ハ同夜集会セリ その土地ハ到る処火山灰の推積より成り立たるものにして 果樹にハ適するも他の農産物にハ許多の肥料を施すにあらされハ多の收穫ハ得難かるへしと思へり 余ハ偶然水蜜桃の事を思ひ出し且つ百合栽培ハ適するならんと思ひたれハ 第一に桃樹を植付ケ三年間ハ間作として百合を培養することを説きたりしに 伊一郎ハ拍手喝采セリ 一場の演説ハ已に畢りて聴衆の散して後八人の熱心家は其場所に残りて 余と共に桃樹植付の利害得失を談す 半信半疑の際伊一郎ハ立上りて『桃樹栽培にあらされハ今後の成功ハ期しかたし』と一々銳意に他を奨励セリ ここに八人の者ハ同盟者を得ること、なり耆人ニ付第一の払込を金拾円と為したりしか 夫ハ随分六ヶ敷事の様思ひたれば余ハ『諸君の桃樹栽培の爲め拾円を奮発し得る哉』と問ひしに彼等ハどうしても金作して差出すといへり。かくて強固なる団体は出来たり 甚だ熱心になつて善ハ急けと言へハ 彼の同盟者八人ハ直に着手せん 山林の木を伐したる跡を數町歩借受けて開墾し 半ハ百合半ハシヤカイモを培養する事と為したり 同盟ハ伊一郎田作をアンキヨウと東京へ派遣して水蜜桃の苗木買入方を託せり かくて八人は引受け労働費ヲ以テ株金に偏入することせり

これぞ森山へ桃樹栽培の初期なりき 其後伊一郎君外七名の有志者ハ万難を凌ぎ千苦を嘗めたる結果

さらに東京缶詰業の成功者豊田吉参郎君の義侠的精神が一団となりて、終に今日の大成を看るに至りたるを信するなり。故伊一郎君の逸事に至りてハ奇談怪説人口を膾炙するもの者多しといへとも。そは又他日説く所あらん。た、君と七名の有志者か當時あるわ顯したる不撓不屈の精神ハ永久に此団体活動をして枯死せざらん事を望むや切なりき。

二 木村能二先生の生いたちとアメリカ留学

(武重夏雄『木村能二』より)

木村能二先生は弘化二年(一八四五)但馬国出石藩仙石家に儒学で仕えていた。桜井石門の二男として京都で生まれた人である。九才の時に木村琵琶山の養子となり木村能二と改め、養父の死後十九才で幕府の歩兵局に仕え、百俵五人扶持の身分となった。元治元年(一八六四)幕府御家人、田口耕三の長女鑑子と結婚、征長軍に従い京都取締役となり、勝海舟の手付となつて情報収集活動を行つていたが、江戸に戻り下谷に居をかまえた。

幕府が倒れ明治の世になると、静岡の草深町に移住したが命が狙われていた。明治三年十二月、グレート・パブリック号で横浜を出帆、サンフランシスコに着いた。森有礼の一行に密かに紛れこんでの出国であつた。静岡藩からもらった四百ドルを持つて森有礼一行と別れ、蒸気機関車に乗り、広い野原、畑、牧場、砂漠地帯を越えて、十一日間揺られて漸く高層建築の建ち並ぶニューヨークに着いた。

マンハッタン島のセントラルパークのベンチで驚きと疲れで茫然自失の時、ミシガン州ハーランド市ホープ大学長、フィリップ・ヘルプス先生との出会いがあつた。日本から勉強に来たと言う熊二の真挚の情を認めて、下宿をみつけミシガン市の小学校へ入学できるように取り計つてくれた。子供達と一緒に

に英語や地理などを必死で勉強し、日曜には教会へ行って秋風が立つ頃には英会話が身についた。フランスとの恋も芽生えた。日本を離れる時、再び帰るまいと決心して休みなく勉強した。

ヘルプス先生のはからいで、ニューヨーク大学医学部の聴講生になって、解剖学、生理学、病理学を勉強し、ドクター・オブ・デュビュニティ（医学士）を、またニューブリンズウィック神学校からはマスター・オブ・アーツという神学博士をと、二つの称号を得た。

勉強に明け暮れて一三年が経った時、勝海舟から「明治政府になって心配ないから帰るよう」と言ってきた。明治十五年十月五日、三十八才の熊二は、兄と妻の鐙子と十三才の裕吉に迎えられて横浜港に着いた。日本にも蒸気機関車が走り、煉瓦づくりの建物がたくさんできていた。勝海舟先生は年金三万円の身分で豪邸に住んでいた。西洋文明を早く取り入れるために洋行帰りの者には出世栄達の道が待ちかまえていた。明治政府からも、学校からも勧誘があったが、ヘルプス先生やフランスの御恩に報いるためにキリスト教の伝道を行うことにした。

明治十八年、九段の牛込に明治女学校を開校したが、その一年後コレラによって妻の鐙子がこの世を去ってしまった。范然自失となった熊二は校長を厳本善治に譲り、旧約聖書の翻訳と布教につとめ、共立学校で英語を教えた。その生徒に島崎藤村、三宅克己がいる。

軽井沢から小諸にかけて伝道に来た熊二は、先祖の家郷である信州桜井村に思いを馳せた。

三 木村能二日記 II (佐久、小諸関係分のみ抜粋)

(東京女子大学比較文化研究所刊)

木村熊一先生が佐久へ

明二四・一〇・一〇(土) 朝訪アレキス氏八時出宅八時二十分品川を発す中村^{マヤ} 及花等同行午後一時

横川へ着碓氷峠の馬車に乗り羊腸曲折の路を経過し午後四時半軽井沢へ着

馬車会社貴志方へ寄り油屋へ止宿

一〇・一七(土) 二時五分軽井沢を發し小諸へ向ふ 角田真平氏へ面会す三時小諸へ着荒町

関五太夫氏方へ滞在夜岩田政二郎来訪

一〇・一八(日) 快晴十二時半小諸を相發して布引山を訪ふ

一〇・二三(金) 午後二時の汽車にて小諸を發し軽井沢に向ふ 午後三時軽井沢へ着佐藤万

平方へ着す

一〇・二四(土) 午後二時半碓氷嶺を攀て横川へ下る

明二五・一・一四(木) 朝八時品川停車場ヨリ發途(中略)午後五時横川へ着し東京屋へ旅宿

明二五・一・一五(金) 朝訪高須氏乗馬車発程ス時八時此日美晴確嶺微雪あるのミ 信上の界二至り

季候頓ニ変シ寒風斫面訪岸氏一泊 夜信徒六名集会ス

一・一六(土) 朝八時軽井沢ヲ発ス岸氏周旋甚勤む可謝也 小田井へ着し人力車ヲ雇ひ岩

村田へ向フ午前十一時半岩村田へ着ス 松葉屋へ寓ス原沢紀量と相会ス

一・一七(日) 十二時松葉屋を發し野沢へ向ふ二時野沢へ着並木を訪ふ

一・一八(月) 美晴寒威漂烈(中略) 風雪稍霽(中略) 前山村早川権弥氏一泊夜学校之教

員生徒来訪一場之演説を作ス

一・二三(土) 朝野沢へ歸ル寓居を並木信一郎方へ定ム

一・二四(日) 白田講義所へ出席晚餐礼ヲ司ル午後四時白田出發岩村田へ来り松葉屋へ止

宿講義所へ出席

一・二五(月) 朝岩村田相發小諸へ向ふ 十時半同所へ着佐野田沢等を訪ひ午後三時半出

發四時過輕井沢へ来り油屋へ止宿夜通運会社ニ於て説教講義ス

一・二七(水) 並木晋一郎方へ引移荷物運搬ス午後白田へ出發

三・二四(木) 内山村を發し志賀を経て岩村田へ出 講義所を訪ひ直ニ小諸佐野嘉ね子の

葬会ス 関氏を訪ふ 輕井沢へ

五・二三(月) 朝上田出發小諸へ着関氏を訪佐野義質にて昼食 午後輕井沢へ出發

六・八(水) 朝野沢發岩村田小諸之兄弟を見舞佐野氏ニ而昼食関氏田沢を訪午後二時上

田へ向ふ

明二五・ 九・一二(月) 朝菊池之寓を發し御影柏木新三郎方へ到り一泊同氏待遇甚厚

九・一三(火) 朝与柏木氏同行訪小諸之諸子田沢波三郎方へ会集前途を計画ス 訪佐野義

質氏関友三方へ一泊

九・二五(日) 朝小諸へ出發 田沢佐藤を訪ふ大雨 御影柏木新三郎^(前)美代田原田耕三郎を

訪

明二六・ 三・二三(木) 午後十二時過野沢出發岩村田へ立寄 小諸ニ至り佐野関氏を訪ふ鐙子之一

年忌也 佐藤氏へ宿す

四・一七(月) 佐野義質人を遣して小諸家屋之件を談ス月税三円にて借用申入る

五・二三(火) 朝野沢並木直氏方を發し華美ニ鞭ち岩村田へ到り菊池氏を訪 御代田ニ到

り原田耕三郎氏を訪 御代田駐車場まで歩行汽車ニ而小諸を訪 小諸ニ到

り佐野義質氏を訪ひ兼て約束せし家屋之件を議ス 耳取之家屋を訪ひ諸品

を一覽す

六・ 七(水) 朝早川豊鳴佐藤同道一杯水之開墾地を訪淳三虎痴随従 此日水源を探索し

箕輪愛之助氏と会遇ス

六・一九(月) 人力車にて小諸へ向 午後二時小諸へ着 飯田万二郎佐野義質來訪

一・ 七(火) 朝前山村出發小諸へ歩行佐藤小山氏訪問

明二六・一一・二五(土) 此日小諸義塾開業ニ付小山太郎飯田万次両氏非常ニ尽力周旋す 当夜来会

者甚多し 柳沢呈三氏之宅を借り義塾とす 佐藤邸へ一泊

明二七・一・一一(木) 朝前山村を発し小諸へ到る 義塾ニ於て業を始む

二・二四(土) 今夕小諸講義所開設之式を挙ぐ来会者三十一名

三・一一(日) 義塾を大手館へ移す計画あり諸子掃除甚勤む

三・一五(木) 義塾瓦門へ移転す生徒諸子甚勤む 諸子来訪

五・六(日) 朝中込石山織之助氏訪問果樹園之件を相談

明二八・四・八(月) 林檎の種木五百本を御影村柏木新三郎方へ送らんとす 運輸不便所々奔馳

せり

四・一〇(水) 午前四時半床を出万世橋外通運会社へ到る 岡見氏の僕ハ已ニ林檎種木を

与し来ル其劳思へし上野ステーションより上車帰途ニ就く(中略)午後二

時頃小諸町へ着す

五・一(水) 柏木新三郎留守中ニ付同人宅より林檎種を送り来ル時季已ニ過く後園ニ種

付く

五・二(木) 暁起林檎の種木を後園ニ種付稲垣正次氏来助く

伊一郎が木村熊二先生を訪ねてより

明二八・九・二〇（金） 塩川栄一郎来訪^{（伊む）}

二一（土） 朝森山村塩川栄一郎を訪ふ午後十二時半帰宅

一〇・五（土） 塩川栄一郎^{（伊む）} 大谷虞 山田環等来訪

一〇・一〇（木） 塩川栄一郎^{（伊む）}来明日集会之件を告

一〇・一一（金） 森山塩川栄一郎^{（伊む）}方訪問桃夭園設置之件を相談ス午後三時帰宅

一〇・三〇（水） 風雨終日午後塩川伊一郎^{（伊む）}来桃夭園組織之件を談ス

一一・八（木） 朝大谷虞来訪塩川栄一郎^{（伊む）}出京之件を告ぐ

明二八・一一・一六（土） 塩川伊一郎^{（伊む）}東京より归来ス

一二・二〇（水） 塩川伊一郎^{（伊む）}来訪来ル 廿三日集会之事申出ス

一二・二三（月） 朝森山村ニ至り桃夭社ニ而集会ス 午後二時帰宅

明二九・三・三（火） 森山村へ出張演説会を開く塩川伊一郎^{（伊む）}方ニ而蕎麦之饗応あり夕帰宅微恙あり

三・二四（火） 森山塩川伊一郎^{（伊む）}梅樹を送り来ル 懐古園へ植付ヲ命ス

四・二一（火） 森山より桃夭社員三名来りて林檎を移植ス（林檎樹四百五十本）終日奔馳

渡甚し

明二九・ 四・二五(土) 塩川伊一郎来 義塾へ桜樹ヲ植付ル

四・二九(水) 自転車ニ而森山村へ到リ 塩川伊一郎ヲ訪ふ

五・ 六(水) 塩川伊一郎来

五・ 一(月) 訪森山塩川伊一郎巡見桃園 夕帰宅疲甚し

六・ 四(木) 塩川伊一郎来

一〇・一四(水) 塩川伊一郎等来訪同行芦の平へ出張

一〇・一七(土) 飯田きん母子佐野やす塩川伊一並木柏太郎関五太夫来訪 伊一郎へ金貳円

渡ス

一一・ 八(日) 塩川伊一郎送林檎来

明三〇・ 一・ 三(日) 桶田三一郎 塩川伊一郎等来訪

一・一八(月) 桶田三一郎 塩川伊一郎来

(この間中断あり)

明三三・ 五・ 二(水) 塩川伊一郎来リ 森山桃天舎之集会を申来ル

一二・二六(水) 塩川伊一郎来訪歳暮品持参

明三四・ 一・二五(金) 森山村塩川氏訪問

三・ 九(土) 塩川伊一郎来

七・一九(金) 塩川倉庫ニ而罐積^(マ)会社の相談あり

明三四・七・二三(火) 塩川定五郎・伊一郎両氏来訪 罐積会社之件申越す 平瀬(宮白マ)氏小宮山武雄氏

之紹介ヲ以て来訪

七・二六(金) 豊田塩川両氏来訪

八・六(火) 豊田吉太郎等来訪森山邨へ出張を談ス

八・一一(日) 森山邨ニ於て罐積製造所開業式あり 大塚宗二東儀哲同行

一二・二六(木) 塩川伊一郎来訪有志者より桃罐漬を贈らる

明三五・九・一四(日) 森山邨へ至り塩川伊一郎を訪ふ渡辺小山栄両氏同行

明三七・七・一(金) 森山桃洋舎へ訪問関知事来社ニ付一日奔走ス

明三八・四・九(日) 塩川伊一郎より桃樹を送り来ル

六・五(月) 朝森山小原へ行塩川政太郎君祖母物故ス吊之 塩川伊一郎定五郎好次郎兩

氏を訪問

明三九・三・七(水) 塩川伊一郎氏之凶訃に接す万感如湧伊一郎君ハ余と同盟して森山村へ桃を

栽培せし人なり今日之盛況を見るを得たるハ同君之畢世の力とも云ふべし

今や余ハ君と幽明境を異にす可歎なり

三・八(木) 朝塩川伊一郎葬式ニ付森山村へ至ル坐上小演説ヲ為ス

三・三一(土) 午前十時小諸町を出発別を送る者甚多し小山久左衛門氏厚意可謝也十二時

過長野市へ着ス

二代目伊一郎と木村先生との関係

明四二・六・一〇(木) 朝小諸へ出発水明楼訪問三岡村塩川富三郎訪問同家へ一泊塩川伊一郎訪問

伊四郎アルヂエンチンより帰着家に在り旧を話し新を談す

大三・七・二七(月) 塩川伊一郎へ桃罐を託ス

大五・六・二七(火) 森山村へ美樹恵同行塩川伊一郎方訪問遠山へ立寄る

大五・一・二九(水) 塩川伊一郎へ金式円送附郵便局にて

大一一・八・一七(木) 過日塩川伊一郎君より苺ジャム一ダース贈らる好意可謝也

大一二・七・三一(火) 森山桃実熟季となりたり

八・二五(土) 塩川伊一郎より桃罐到来ス

四 佐久の園芸王

立志編中の一人たる可き人

(明治四十一年十月二十五日『信濃毎日新聞』より)

記者が茲(こゝ)に謂(い)ふ佐久の園芸王とは、此頃の一府十縣連合共進会に於て、二等賞銀牌を授与せられたる洋桃罐詰の製造元、北佐久郡三岡村字森山の塩川伊一郎氏のことなり。

氏の父は今より三年前黄泉(こうせん)の客となれり、氏の父及び氏が洋桃の栽培に志し、氏の代に至つて成功し今日の地位を占むるに至れるまでには、幾多の難苦を経たるもの、其の事積歴々称す可く、宛(あたか)も是れ活ける立志談なり。今や縣下の園芸は農会其の他の先進者に依つて頻(しき)りに奨励せられ、農民亦意を園芸に傾くるに至りて、果樹蔬菜の栽培大に行はれんとす。此時に当りて園芸王塩川伊一郎氏を紹介し、且(かつ)其の事業の一斑を語る、蓋(けだしまた)亦園芸を奨励する所以(ゆえん)の道たるべし、乃(すなわ)ち先ず氏が

如何にして園芸に志すに至れる乎

を記さんに、是実に読書の賜(たまもの)にして、其師は『舶来蔬菜果樹栽培便覧』なりき。氏の父は大工なりき。大工といふも、夕、キ大工の類(たぐひ)にはあらずして大工の棟梁即ち受負師(うけおし)なりき。故に小諸町等に出て普請(ふしん)の受負を為すこと少なからず。附近に顔を知られたるものなりしなり。氏の母は農業に従ひ以て生計を

●佐久の園藝王

立志編中の一人たる可き人

氏の父は「舶來統系果樹栽培便覽」を繕くや、忽ちにして面白きものを發見せりとて氏に語るに、林檎栽培の有益なることを以てし、試験的に之を栽培せんと欲する旨を告げたり。氏の父は元來接木の名人にして柿、梅、等の接木には最も妙を得、居村及び小諸町の人々の依頼を受けて柿、梅等の接木を行ひたること多かりき、即ち園藝に於ては兼て多少の趣味を感じ居たりしを以て、同書を讀むや早くも林檎栽培の有益なることを見出したりしかり。氏も父の意見を賛成して、東京三田育種場より苗木を取り寄せ親木となしてはだん／＼に繁殖せしめ五反歩

「信濃毎日新聞」に連載された記事

助けたり。父母の職業斯の如くなりしを以て、普通なれば小学校卒業後の氏は、手斧を携へて父に従ふ平、鋤を擔ふて母に倣ふ乎、二者其の一を選ぶべかりしに、生來讀書好きなる氏は、工ならず又農たらずして、小諸町なる中山義塾に入り、漢籍を修めたり。中山義塾は旧小諸藩士の設立せしもの、資財家の子弟にあらざれば入塾せざる程の慣例なりしを以て、氏は入塾早々「職人の子がアンナ本を讀んで何にする」との冷評を受くるに至れり。然も氏は日夕漢籍を學びて倦まず、學ぶこと二、三年更に志を立てて上京せるは十七才の時にして、翌年一月六日より本郷弓町なる原洋義塾に入り、数学と英語を學べり。時に明治十八年なりき。入学後學術の進歩見るべきものありしと雖も、不幸にして運命の手は、氏を文學界に導かず、氏をして學問を断念せしむるに至れり。他なし。従來家より受けつ、ありし學資仕送りの絶えたればなり。是に於て、先に

「学若無成死不還」と歌ふて郷関を出でたる時の志を屈して、帰郷せざるを得ざるに至れり。然も氏の読書癖は依然として減ぜず、父への土産を兼ね自分が帰郷後の慰みにもと購ひ帰れるものは『舶来蔬菜果樹栽培便覧』なりき。唯是一篇の小冊子のみ、然も氏の父及び氏をして園芸に志すに至らしめたるは、即ち是なりき。

(二)

氏の父は『舶来蔬菜果樹栽培便覧』を繙くや、忽ちにして面白きものを発見せりとて氏に語るに、林檎栽培の有益なることを以てし、試験的に之を栽培せんと欲する旨を告げたり。氏の父は元来接木の名人として、柿・梅等の接木には最も妙を得、居村及び小諸町の人々の依頼を受けて、柿・梅等の接木を行ひたること多かりき。即ち園芸に於ては兼て多少の趣味を感じ居たりしを以て、同書を読むや早くも林檎栽培の有益なることを見出したりしなり。氏も父の意見を賛成して、東京三田育種場より苗木を取寄せ、親木となしてはだん／＼に繁殖せしめ、五反歩許りの土地に四百本程栽培したり。

此間氏をして林檎栽培に付て別方面に向つて、一大飛躍を試むべく決意せしめたり。動機は即ち氏と村内青年との衝突に在りて、旧思想を墨守せる青年輩と新思想を輸入せんとする氏とは、總ての事に於て意見は合はざるものありしなり。而して多勢に無勢、氏は遂に村内の青年輩より絶交を宣告せられたり。されど自ら信ずること深く、自ら恃む所大なる氏は、村内青年輩の爲すがままに任せ甘んじて、此の絶交の宣告を受けたり。

氏の父は氏をして林檎栽培に従事せしむべく、一千餘円の資本を與へて、小県郡鹿教湯の奥即ち三才

嶺の麓に向つて出発せしめたり。明治二十二年、氏は正に二十一才なりき。

三才山の林檎園は如何なりし乎

讀書生より一転して園芸家となりたる氏は、時の西内村長齋藤氏の尽力に依つて事業上の便宜を得、三才山の麓の原野十町歩の開墾を始め、土地を拓くに随つて林檎の木四千本を植附けたり。少壯氣鋭の園芸主人は、雇人五人と共に林檎園の中に小屋を構へ、夙に起き夜中に寝て専心事業に従ひたるが、「二本の木から一円宛取れても四千円の収入だ」とは氏の常に夢みし所なりしと言へり。

然れども木の存分に成長し、花の美事に咲きたるに似ず、結実は至つて不結果にして、四千円の収入は全く長夜の夢に歸し、氏が五年間に投じたる労働賃金約千円と資本金千円とは、只一挺の開墾鋤を記念として遣せるのみにて、跡形もなく消へ失せたり。乃ち氏が丹精を盡して栽培せる四千本の林檎の木は、五年目に至るや綿虫のために害せられて枯れ、其の後野火のため焼盡せられたりしなり。斯くの如くにして始めての事業に失敗せる園芸主人は、記念の鋤一挺を肩にして帰宅したるに、三岡に於ける林檎事業も亦三才山の麓に於けるものと同じの運命に陥り、木に成長し花は開いても、実は思ふやうに結ず、結りても保たずして墜落すると言ふ風にて、全く望みなきこと、決定する時なりき。

林檎にて失敗せる父子の真の後は如何なりよ

園芸を断念せし乎、否。

(三)

林檎に失敗せる氏の父は再び『舶来蔬菜果樹栽培便覧』を讀みて、洋桃栽培に転ぜんとするの意を起

せり。然も先に林檎に於て苦き経験^{にが}を嘗^なめたるより、直ちに転業せず、小諸義塾の木村熊二氏は米国理学博士にして、かつて米国に在りたることあるを思ひ起し、木村氏の意見を聞きてのち決すること、して木村氏に問ふに、洋桃の栽培如何を以てせり、而して木村氏より米国に於ける桃の栽培の実況を聞き、始めて洋桃栽培に転せりと言へり。当時氏は家に在りても面白からざるより、何か一仕事仕出来^しして自己の失敗^だ丈にても取り返さんとし、好き事業もがなと求めつ、ありし處^{ところ}、時恰^{あた}も日清戦争後にあたりて、台湾に於ける開拓事業は最も有望なりと伝へられたるより、新希望をもたらし、台湾視察の途に上りたるは、明治二十九年なりき。されど台湾に到着後遙々^{はるばる}もたらしたる新希望も忽ち^{たち}にして放擲^{ほうてき}せざるを得ざるに至れり。他なし、聞くと見るとは大相違にて生蕃^{せいばん}の居る所はいざ知らず、安全に事業に従ひ得る所は、僅^{わずか}の土地と雖も己に業に開拓せられ、山の頂上にも茶の木を見ると言ふ有様にして、新に開墾の畝を下すべき餘地なきを知れたればなり。是に於て空しく帰国すること、はなりたるが、帰りかけの土産として何物かを心得んとして琉球に立寄り、大島諸島を廻^{めぐ}り薩摩を経たる間に於て一の事業を発見せり。有名なる大島^{おおしま}紬^{つむぎ}は真綿を原料として造らる、もの、僅か百目か百二十目の真綿にて最高十円の紬を得らる、ことを目撃したるもの是なり。真綿は信州の名産、原料として豊富なる点より見て、紬織出しを絶好の副業なりと考へたる氏は、之を県下に於て行はんと欲せるも、先ず第一着手として原料の真綿を売り込み、其の間に於て紬織出し上^{じょう}の調査を遂ぐるごと、して、帰国後信州真綿を大島まで持ち行きたる處、先方鳴人^{しまびと}は何れも貧乏にして現金を支払ひ真綿を買ふこと能はず^{あた}、依つて真綿を貸し置きて紬織り上げの後、代金を受取る約束にて真綿を貸附けたるに、一定の住所も殆どなき程氣楽

なる嶋人は、次に至る頃には何れかにか転居して、其の多くは代だいかわ変わりとなり居れる実況にて、貸附けたる真綿の代金を回収すること能はず、遙々真綿を持ち行きしこと二回なるも、総て失敗に帰したり。されど大島に於て西郷南州の妾しやう即ち西郷菊次郎氏の生母にも親しく面会し談話を交へし由にて、其の間紬織出しの模様は能く調査を遂ぐるを得たるを以て、いよく之を県下に行はんとの意志を堅かため、最後に大島よりの帰途薩摩に立寄りて女子授産学校及び士族授業学校と特約し、二人の女教師を雇ひ入る、こととして手合金を置き帰国したるが、帰国後父の反対を破りたるため、我から手合金を流して紬織出しの計画を思い止まり、是亦失敗に終れり、

嗟失敗に失敗を重ねし氏は如何にして園芸王とはなりし乎

稿を改めて之を記すを待て

(四)

外、雄志を伸ぶるに由なく、内、郷党に容れられず、快々として煩悶苦慮の人となりたる氏が、端なく思ひ起したるは、鹿教湯の開墾に着手当時、石塚シン子より與へられたる訓誨の辞なりき。石塚シン子の與へたる訓誨の辞を意識すれば、「不毛の地に対して能く一木一草を生ぜしむるものあらば、そは政治家の事業に優ること万々なり」と言ふものなりしなり。石塚シン子は、故衆議院議員にして全委員長たりし石塚重平氏の令閨れいけいなり。熱心なる基督教徒にして地方の婦人界に其の名を知られたる女丈夫、当時重平氏は大阪事件に關して入獄中なりしこと、て、氏に與へたる此の訓誨の辞は人生處世の上に付て大に悟る所ありしがためなるやも知れず。閑話休題氏は此辞を思ひ起すと同時に、翻然ほんぜんとして悟る所

あり、飽^あまで園芸家として世に立ち、浅間山麓^{せきど}の瘦土^{せきど}をして立派なる桃畑と化せしめんと決心したり。恰^{あた}も好^かし、父の洋桃栽培事業は次第に発展し来りて、前途益々有望となれる時なりしかば、父を助けて専ら洋桃の栽培に従ひ且盛んに苗木を作りて、無代希望者に貸與し其の植栽を奨励したり。是に於て洋桃の植栽大に行はれ、氏の居村三岡を中心として北大井・南大井等には立派なる桃園を見るに至り、遂に北佐久全部に行はるゝこと、はなれり。乃^{すなわ}ち最近の調査に依るに北佐久全部の桃園二百町歩、内六町歩は氏の所有に係れり。尚一面に於ては明治三十三年頃よりイチゴの栽培を始めたるに、是亦次第に隆盛の域に進みて今日にては其の栽培区域六町歩に上れるが皆是水田を潰してイチゴ畑と為したるものなり。洋桃及びイチゴの栽培に於て成功し、来年の見込み額は生にして売却するものを除き洋桃缶詰二十万本、イチゴ缶詰十万本なりと言へり、されど斯の如くに成功するまでには尚幾多の苦心を費したるものなり、何ぞや

生桃の失敗、缶詰の工夫剥器及び核拔器の發明
是なり。而して此工夫發明の間頗る面白き談^{はなし}あり

(五)

丹精を込めて栽培したる幾多の桃の木は、美事なる実を結ぶに至れり、輕井沢に在る外人を当てにして売り出したる處、一つ二錢乃至三錢となれり。林檎にて金を失^なしたる氏の父及び氏は、桃にて始めて錢の顔を見るに至れるなり。其の喜や知る可し、されど桃の結^なる数の沢山なるに従ふて輕井沢のみにては之を売り盡^つくすこと能はざることとなり、何處に向つて販路を拓めん乎との点に就て苦心せる結果、

先ず長野市を目的とするに決したり、長野市は縣下第一繁栄の土地、官吏始め紳士紳商も比較的に多ければ、定めて買ひ人も多かるべしとの考へなりしなり。然るに、いよ／＼生桃を携へて長野市に來りたる處、当時の長野市は尚未だ一つ二錢乃至三錢と言ふ桃を希望する程の人を沢山に有するに至らず、極言すれば洋桃の美味を知らず、所謂食はず嫌ひの者多かりし也。乃ち目的ガラリと外れて漸くのことに汽車賃丈に売却し、ホウ／＼の体にて帰宅したり。帰宅後販路拡張に就て再び講究せるが、別に名案も浮ばざりしを以て、斯る時には常に其の意見を叩くを例とせる、小諸義塾主木村熊二氏を訪ふて、「桃は沢山に結るやうになりしも儲其の売り先と来ては、輕井沢の外なく多くの生桃を持って餘し居る」旨語りに、木村氏は「東京に出しては如何」と教へたり。是に於て氏の父は、東京に輸出を試むることとなりしが、長野市に於て失敗したる例もあり、長野市よりは道程も遠きを以て失敗の際困却せぬ用意を爲し、先ず少々の生桃を持ち行くこととして、蜜柑箱に詰めたるもの三個丈を携へて出發せり。斯くて上野にて汽車より下りしが、物は試し、當つて見んと、上野停車場の傍に青物屋ありしを幸ひ、生桃を容れたる蜜柑箱を提げて飛び込みたり。東京商人と初取引の結果、吉乎凶乎、木村氏及び父は其の吉凶如何を心配し居りたるに、

「東京には桃がない直ぐ送れ」

と電報來れり。多くを語るに及ばず、是れ丈にて初取引の結果如何なりし乎を推察するに足る。それより東京は勿論横浜にも送り出したるに、一つ五錢位にも売れたるより、前途益々有望なりと喜び勇んで頼りに生桃を送り出したるに、幾許もなくして又々一頓挫を來せり。東京の間屋は最初の中は何れも好

況なりとて高値に買ひ入れたる處、荷数を沢山に送るに及んで、腐敗するもの多しとの苦情の下に代價を踏まんとする傾向となれるもの是なり。及ち、沢山の桃も遺憾なく売り捌かんには、生にてコナス外其の腐敗を防ぐ方法を講ぜらるべからざる場合とはなれり。知らず如何の方法に依つて腐敗を防がんとする乎。

(六)

生桃の腐敗を防がんとするために苦心の結果思ひ附きたるは罐詰なりき。且其の頃はイチゴの栽培亦目的を達して少なからざる収穫を見るに至りしを以て、イチゴも同じく罐詰と為すこととしたり。されど、茲に罐詰実行に際して一つの困難に遭遇せり。是迄の失敗に依りて財産の多くを失ひ果したるを以て、罐詰製造のために要する資金の欠乏を感じたるもの是なり。及ち大奮発を以て祖先伝来の田地三反歩を売却し、約五百円を得て其の資本に充てたる處、諸器機及び原料武力の買入れ等に悉く之を支払ひ盡くして、いよ／＼罐詰の製造と言ふ時に至り、必要なる砂糖を買ひ入ること能はざる悲境に陥りたる。是に於て氏は、小諸町に赴きて大問屋の角権を訪ひ、刻下の窮状を打明けて、砂糖七十俵（時価七十円許り）の借用を請ひし處、同店にては之を承諾せず、製造せられたる罐詰も現金にて買ひ取るべきに付、砂糖も現金ならでは売却せずと答へたり。是れ理の当然なることながら、何となく情なきやうに感じ、角権と言う大問屋に断られる様にては何れの店に至るも其の結果知る可きのみと為し深き思ひに沈みながら同店を立ち去りたり。帰らん乎、砂糖の工面を附けずして帰りては、祖先伝来の田地を売却して漸くのことに整へたる是迄の設備無効に帰するを奈何せん。進まん乎。頼みにしたる大樹の下には己に雨

の漏るを見たり。今將に何處に向つて進むべき、「嗚乎、世の中は実に頼み少なきものなり」と嘆息せしが、行くともなく、帰るともなく、只街中を彷徨居る間、誰とはなしに

「鬼の拳にも當つて見よ」

との諺を知らずやと嘲けるが如く励すが如く呼びかくる者ある乎のやうに感じたり。斯く感ずると同時に「高が知れた砂糖七十俵、僅か七十円許りのもの、借さぬと言ふ店ばかりでもあるまい」と思ひ直して勇氣を鼓し「御免なさい、チトお願ひが」と暖簾を潜つて飛びこみたるは、小山徳三郎氏の店なりき。斯くて事情を話すや、解りの早い小山徳三郎氏は、「それは氣の毒だ」と同情を寄せて直ちに快諾したり。

是に於て砂糖七俵を借り入れて罐詰製造の後持ち来る旨を誓ひ、漸く罐詰の製造に着手するを得たり。砂糖仕入れに付て生じたる此困難は、却つて氏をして激励せしむるものありたるにより、以後一段事業に熱中し、一心に罐詰を製造しては小山氏方に送り、送りては砂糖を借り来り、繰り返し／＼根氣克く行ふ間に沢山の桃罐イチゴ罐を製造するを得、製造したる桃罐・イチゴ罐は小山氏に依つて売り詰められ、頓に好評を博するに至りて事業は次第に有望となれり。然も又、一の困難に陥れり。桃の収穫年に増加し、罐詰製造の盛大に赴くに随ひ、庖丁にて桃の皮を剥き桃の核を取りては間尺に合はざることとなるもの是なり。知らず、如何にして此困難に打ち勝ちしぞ。

(七)

罐詰製造に就て皮剥き、核抜の時間を省略せむがため苦心に苦心を重ね、工夫に工夫を費したる後、

漸くのことに發明したるは、金屬性の皮剥器械及び核拔器械なりき。双方とも明治三十八年に專売特許を得たるもの、其の簡便にして巧妙の器械たるや言ふまでもなし。此器械を發明して以来、著しく桃罐の製造高を増加したり。乃ち庖丁にて皮を剥きたる頃は女工一人一日の皮剥高桃六貫目に過ぎざりし處、器械にて皮を剥くに至れる後は三十貫に上り、核抜きの上に於ても亦之に準じて其の数を増すに至れるより、女工一人にて一日に百二十五本位の桃罐を造るは雑作もなきこと、なれるなり、実地の困難に自家用器械の發明を促されて、遂に大發明を爲したるを紹介せる序、世の爲、人の爲に發明して、專売特許又は実用新案登録を得たるものを紹介せんに、鷹形鳥威し、塩川式完全殺蛾燈あり、

鷹形鳥威し

專売特許を得たもの二つ、実用新案登録を経たるもの一つあり。共に是害鳥駆除器にして、罐詰の廢物薄板、新聞紙の故板屑、ペンキ等を以て製造するもの、材料を得るに極めて易くして何人にも直ちに製造せらる、然も此器は鷹の威容を備へ翼に風を受けて回転すると同時に奇響を發し、又は鷹の鳴くが如くに鳴るを以て、農作物の害鳥を駆逐するに大効あり。此器の製造は獨り冬期農家の最好副業たるのみならず、元と世を利し人を益せんと欲する主意より發明せるものなるを以て、一村一部落に限り製造販売の權利を廉價に譲り渡しつ、ある處、其の希望頗る多しと言ふ。

塩川式殺蛾燈

是にも亦三種あり、一は專売特許塩川式完全殺蛾燈、一は同じく花形殺蛾燈、一は同じく第二完全殺蛾器なりとす。此三つのものは苗代及び果樹園、蔬菜園等の害虫駆除に使用して大効あり。製造原料は

ガラスの切屑、武力の断片等廢物にて足るも、遠隔の地に送るには破壊の恐れあるを以て、一郡一村を限り代理店を置きて、製造販売の權利を讓與しつゝあり。

氏は実に園芸家にして又実に發明家也と謂つ可し

(八)

園芸王の作りつゝある桃はどんな桃乎

桃の種類に四種あり、今実の熟する順序に依つて元を紹介せん

一、日の丸水蜜桃 米国種のレッドクラフォードなりとも言ひ、又アムステンジュン種なりとも言ふ、

果皮の淡紅色を帯ぶるものは早熟種にして濃紅色を呈するものは晩熟種なりとす。果肉軟く甘味淡く水分少し、重量一個二十匁位なり、早熟種の收穫は七月二十日頃なり。

二、青水蜜桃 洋桃アーリクラオードなりとも言ふ。果皮黄青色を帯び、中果にして一果二十五匁乃

至三十匁あり、果肉軟にして淡青色を呈し、成熟すれば甘味強く水分亦多し、收穫は八月五日頃にして、早熟種中の稍晩種とす、結実最も豊産なり

三、上海水蜜桃 水蜜桃中有名の良種にして、果皮は淡紅色を呈す。果肉は軟にして蒼白色を帯び甘味多く水分多し。一果平均三十匁以上あり最も大なるものは五、六十匁に及ぶ、成熟期は八月二十五日より二十八日頃迄にして中熟種に属す。

四、黄肉桃 一名黄金桃おうごんももと言ふ。果は淡紅色にして肉堅く、果汁多からざるも甘酸適良なり、一果平均四十匁、最も大なるものは六十匁あり、各種中果実最も大なり。熟期は九月五日より十月五日頃まで

なり。

是等の洋桃は能く繁茂し能く結実す、園芸王が経験を積みて其の栽培宜しきを得たるがためなりと雖も、然れども亦信州の氣候果樹の栽培に適するに由らずんばならず、詳言すれば氣候寒冷なるを以て害虫を凍死せしめ、果樹をして健全無病ならしむ故に、東京市又は岡山県に於て果樹の害虫を豫防する為め、多大の労力を費すも尚且免るゝこと能ず、袋掛をなし又は薬液を注射して僅かに桃樹を結実を促す如きことなりきものは是なり、碯碯にして農作物の生産し能ざる地と雖も果樹は能く繁茂し、然も甘味ある果実を結び一反歩少くも三・四百貫目、多きは一千貫目内外の收穫あり。更に其の信州に適當なる一の特色を挙げんに、桃の樹の徒長枝を生ぜずして其の作業に頗る好都合なるものあり。

是に就て面白き話しあり、曾て農科大学の研究材料となれり、日本全国に其の名を知らるゝに至りし以来、農科大学生の実地研究として氏の桃園に来れるもの少なしとせず、然るに或る年来れる大学生の帰校後報告せるもの、中には「三岡の桃は、古芽にても結実」とありしより、忽ち大学に於て問題となり、古芽に結実理由なしと言ふ論より氏の許に照会し来れり。是氏の栽培に係る桃の樹は、徒長枝を生ぜずして其の枝極めて短く、新芽と古芽との区別一寸分り難き程なるにも拘はらず、如何に短き新芽にても必ず実を結べるにより、大学生の謬見に出でたるものにして、氏は此の旨を詳細に説明して回答したりと言へり。分りて見れば何んでもなひ話しなれども、大学生をして古芽に結実するものと認めしむるまでに、其の枝振りの他地方と異なるもの、確に桃の樹の栽培に適する一證を見るを得べし。

園芸王の作りつゝあるイチゴはどんなイチゴ乎

氏の手に依つて盛んに作らるゝイチゴは、草イチゴ、木イチゴ、房スグリの三種なりとす、先づ、

草イチゴ

より紹介せんに、草イチゴは初夏百菜の未だ熟せざるに先立ち、早く已に累々として美色を呈し、其の味は甘酸宜しきに適し、加ふるに一種愛す可き佳香を有するを以て、生にても、ジャムにても、頗る美味たり。故に近来其の需用非常に増加し、東京、横浜に出す時は一升二十錢以上となり、三岡地方にて一貫目三十五錢以上となるに至れり。種類はエキゼル、シヨール、ビルモラン、ドクトルモーレル、カナデアンスキート等なるが、此中エキゼルシヨールは温室栽培に適當なりとして、氏の新に発見せる種類に係れりと言ふ。草イチゴは栽培宜しきを得ば、一坪一貫五百目の収穫を見ること難きにあらず、次に

房スグリ

を紹介せんに、赤色房スグリ、黒色房スグリ、大果房スグリの三種あり、普通に栽培せらるゝスグリはトゲありて、果実の採集に困難なれども、房スグリはトゲなきを以て採集は勿論、手入れも亦容易なり。且如何なる土地にても其の栽培に適するより、樹下、庭前、畦畔、廃場等を利用して大利益を収め得、又強健にして結実多く、実は恰も葡萄の如くなるより小葡萄の名あり。生にて食するに適す、実堅くして緊れるを以て遠方にも輸出し得、尤も黒色種は水分少なきを以て、乾果を製造するに適し、ジャム、ゼリーと為して貯蔵するにも妙なり。又美味なる酒を醸造する原料に供し得べく、葡萄酒の着色料

及び西洋菓子製造原料としての需用亦多し、最後には

木イチゴ

を紹介せんに、黒色木イチゴ、赤色木イチゴ、最優等赤色木イチゴ、最優等赤字ローガンベリーの三種あり。最近舶来の小果実にして其の質最も強健、地質、氣候の如何に関せず能く結実し、収穫最も多し、一房十粒以上密着して大房を為す。其の味は甘酸適度にして核に香気あり。果樹園の周囲に植ゆる時は、僅か一年にして堅固なる生籬となり、一挙兩得なり。要するに

イチゴの栽培

は米を作るより其の利益大なるを以て、同地にては水田を潰してイチゴ畑となしたるもの少なからず。氏の如き八十坪の地より収穫するもの六十貫、此の代金十八円に當る。然も糶を造る時は十円に過ぎずと言へり。イチゴ栽培の盛んなるに至れるもの、亦以ありと謂つべし。

(十)

「失敗は成功を生むの母なり」との格言に適中せる、園芸王塩川伊一郎氏は、今や幾多の辛苦を経て事業益々盛大に赴き、獨り自己に於て洋桃イチゴを栽培するのみならず、兩種の園芸をして普及せしめんがため、多くの洋桃苗、多くのイチゴ苗を養成しつつあり。即ち其の栽培方法も亦一般の参考となるもの少なからずと雖も、之を茲に記す時は餘りに長きに失するの嫌ひあるを以て、適當の時期を待つて重ねて紹介すること、なして、本篇は此の一回を以て一ト先ず擱筆せんと欲す。然も終りに臨んで尚一つ紹介せざるべからざるものあり

将来に於ける園芸王の希望

是なり、氏の罐詰は近来東京橋区西店西洋軒を経て、常に宮内省の御用を被るを始め、閑院宮殿下等よりも常に御用を仰せ付けらるるの光榮を有するに至り、一方東京に於ては岡山製と競争して之を凌駕し、新に大阪市東区安土町桑原伊太郎氏と特約を結びて、同氏方に関西代理店を開けり。されば関東代理店東京日本橋区西川岸国分勸兵衛氏及び発売元たる長野市石堂町信濃酒罐株式会社、北佐久郡小諸町小山徳三郎氏の手と新設の関西代理店の手によって、其の販路全国に拡張せり。然も氏は之に満足せず、直輸入商たる東京日本橋区木材木町植田商店佐藤勝治氏の手を経て米國に輸出せり。是氏が果樹の栽培は米國の如き粗大農業に適せず、換言すれば樹枝の剪定、果実の間摘及び採集、施肥、除草等総て機械力に依ること能ずして、何れも人力に待たざるべからざる此の種の園芸に在つては、米國の如く労働者の賃錢高価なる國には適せずとの論断よりして、外國製品を圧倒し、獨り其の輸入を防遏するのみならず、盛んに海外に向つて輸出せんとの大希望より來れるものなり。

されば米國のほかにも、清國上海・香港、浦塩、哈爾濱、大連、新嘉坡、布哇、英國等に向つても輸出しつゝあり、其の販売高未だ多からずと雖も、販売高の少額なるは畢竟罐詰製造高の多額ならざるに原因するを以て、果樹栽培に最も適當なる信州をして、一大果樹國たらしめ、尚近縣新潟其の他に向つて發展し、是非とも生糸に並ぐの一大産物たらしめて、海外に大飛躍を試みんとすの計画中なりと言へり。其の希望や實に大、其の計画や真に壮なりと謂つべし。現に氏は獨り佐久に於て園芸王たるのみならず、信州に於ての園芸王たる位置に進めり。今後果して其の目的を達するを得ば、獨り信州に於て

の園芸王たるのみならず、日本に於ての園芸王たるを得べし。今年の一府十縣聯合共進会にては、農家の副業たる葡萄ぶどうの栽培に於て越後の葡萄園主功労賞を受けたり。是れ園芸奨励の一方法として誠に宜しきを得たるもの、他年若し聯合共進会に於て、此の種の功労賞を受く可きものありとすれば、氏は確かに其の資格を具備せるものなりと謂いつべし。

豊富とよみに立志編中の一人たる可べき人のみならんや (六元)

五 塩川伊一郎氏

(農界十傑投票農産製造家当選)

錦 城 生

(明治四十四年八月二十八日『農業世界』第六卷第十二号)

▲使命は宿れり一冊の書籍

炎帝威を逞うして酷熱金を鑠し、人をして転た炉中に在るの想あらしむるの時、若し夫れ涼を趁ふて山高く水清き信州の地に入り、碓氷の峻嶺を躡えて四顧すれば、或は野に或は畑に、或は農家の庭前屋後に、紅果累々として緑葉の間に点綴し、幽邃の雅趣掬す可きものあるを見ん、借問す、不絶の活火に燃ゆる浅間山麓の曠原、磽确不毛の焼石原を化して斯の如き美なる郷土と成さしめたるは、夫れ果して誰れの力ぞ、是即ち吾人の伝せんとする信州農界の恩人、洋桃栽培家の鼻祖たる塩川伊一郎氏が、刻苦経営、苦心慘澹の餘に成れる賚に非ずや。

王政維れ新にして廟謨既に定まり、黎民咸な我皇の稜威を仰ぐ明治の初年、天瑞祥を信州の地に降して茲に農界の麒麟児塩川氏を生む、家素と富めるに非ず、父は繩墨を以て業と為し、母は農に従ひて以て



「農業世界」の表紙（明治44年9月）

家計を助く、氏生れて穎悟、夙に読書を好み、志を立て、家を起さんと欲し、父に請ふて小諸町なる中山義塾に入る、塾は旧小諸藩士の創設に係り、門生は悉く資産家の子弟に非ざるはなし、茲に於てか氏は常に塾生の冷罵嘲笑を蒙りたりと雖も、能く晏然として此間に処し、漢籍を修すること三星霜、更に笈を負ふて東都に上り、費を本郷壹岐殿坂の原洋義塾に執りて、英語及数学を学ぶ、時に年甫めて十八、爾來螢雪錐股の苦を積んで業大に進みしに、旻天游子に幸せずして学資給せず、氏は素志を擲つて郷間に父母を省するの已むなきに至れり。其帝都を辞するに臨み、『舶来蔬菜果樹栽培便覧』と題する一書を購ひ、以て家君への土産となす、奚ぞ知らん此一小冊子、やがて氏をして今日の大成を齎さしむるの素因たらんとは、噫奇なる哉人の運命!!

▲花徒らに開て実結ばず

由来氏の郷地たる北佐久郡三岡村は、此に接せる三四の村落と共に浅間の南麓に在りて、五穀穰らず蔬菜育せず、所謂不味不毛の焼石原と称せられる、之を拓き之を耕し、以て蚕業国の農家に副業を与へん

平豈に啻ただに一郷一家の幸のみと謂はんや。

氏の先考は元と接木の術に長じ、園芸的趣味を会得する事頗る深かりしかば、愛児の携へ歸れる『果樹栽培便覧』を繙ひもとくや、忽ち案を打つて叫んで曰く、是なる哉是なる哉、萃果りんごの栽培以て我が焼石原を拓くべしと、諄々じゆんぜんとして其見る所を説く、氏大に之を賛し、乃ち東京三田育種場より苗木を購ひ、之が繁殖に思を勞して、漸く五反歩の園圃に約三百本の果樹を栽植し得たり。然るに当時氏は地方青年の積弊を改善せんとして、端なくも彼等と意見の衝突を來し遂に絶交の宣告を与へられぬ。茲に於て嚴父は氏に一千円の資本を与へ、郷を去つて小縣郡三才嶺の麓に至り、林檎栽培の事に従はしむ。

昨は孤燈の下に讀書を親み、今は来らい相しを執つて開墾に努む、氏の新生涯は茲に其幕を開き、明治二十二年、氏は時の西内村長齋藤氏の斡旋に依り、大に事業上の便宜を受けて、三才山麓十町歩の原野を開墾し、果樹を植うることに実に四千本の多きに及ぶ、年少氣銳の園主、五人の雇人と共に園中の茅屋ぼうおくに起臥して、夙夜其業に励み、樹木漸くにして林を成せり然れど年々歳々花徒いなずらに咲きて、実を結ぶもの極めて罕まれに、氏の子想せる利益は全く長夜の夢と化し、加しかのみならず之第七年目に至り、四千本の林檎は害虫の為に枯死し、或は野火の為に焼燼し、数年の勞力と資本とは水の泡と消え、氏は失敗の記念たる一挺の鋤を擔になふて家に帰れば、憐む可し三岡村に於ける栽培事業も亦同様の運命に陥るを見たり、氏が農界に於る第一歩は斯の如くにして蹉す跌し、唯郷党の嘲罵を贏ち得たるに過ぎざりき、知らず彼は如何にして此悲運を挽回せんとはする。

▲紬製織の計量水泡に帰す

浅間の威靈に薰陶されたる信州人士は、堅忍不拔、進取邁往の氣象に富み、一難を経る毎に勇氣百倍す。此時に当り日清の戦雲既に収まりて、台湾は我領土に歸せり、氏惟おのへらく台湾は猶なほ小なる米国のごとし、功名富貴手に唾つばして取るべきなりと、明治廿九年同島に航して視察を遂ぐれば、何ぞ計らん台湾の開墾事業は予想外に發展し、生蕃地を除くの外復た鋤犁を下すべき未開の地あるを見ず、失望落膽、悄然として帰途に上り、琉球諸島を経て薩摩に赴きたるが此間氏は有望なる事業を發見せり、大島紬の製織は即ち是れ。

抑も大島紬は原料を真綿に取り、僅々百匁の真綿は能く十金に値するの製品を出す。而して信州は此原料に富むに於て、農家の副業として絶好のものなりと心竊ひそかに画策する所あり、歸來真綿を買集めて之を大島に送り、傍ら紬製織の調査を遂げて、信州農民の副業を振興せんと欲し、再び彼地に航して真綿を売らんとせしに、資力の薄き島民は現金取引を為すの餘よ贖しなく、製織の終るまで之を貸附るの餘儀なきに至れり。而も其期に及んで島民を訪へば、彼等の樂天的なる、何れにか居を転じて其地に在らず、為に真綿の代金を回収するに由なくして、前後二回の航行、唯冒險的小商売が失敗の話柄を残して止む、然れども紬製織に関する調査を遂ぐるを得て、之を郷地に試みると志し、薩摩に於る女子授産学校及び士族授産学校と特約して、二人の女教師を雇入るべく手金を入れ、胸に前途の光明を懷きて勇躍家

に帰れば、嚴父頑然氏の企図を斥けて諾せず、遂に手金を損して此計画を中止し、氏が失敗の歴史は斯の如くにして其第二頁を閉じぬ。

▲瘠土忽ち化す黄金の野

是より先き、嚴父は林檎栽培事業の蹉跎に屈せず、更に幾多の果樹に付て研究の結果、洋桃栽培の有望なるを認めたり、而も以前の失敗に鑑みて、之を小諸義塾主米國理學博士木村蓮峰氏に謀る、同氏は具さに米國に於る桃果栽培の実況を語り、浅間山下の地味が米國の其れに似たるを教ふ、嚴父意茲に決し孜孜經營の効空しからず、暮年ならざるに拳大の桃果は樹枝に実り、黄金の甘露は昏頭を潤すに至れり。外、雄志を伸ぶるに由なく、内、郷党に容れられず快々として煩悶苦悩の境に在りたる伊一郎氏は、偶偶思ひを三才山麓の開墾時代に駛せ、故石塚重平氏夫人しん子より与へられたる訓誨の辞を想起せり、曰く、不毛の地を耕して能く一木一草を生ぜしむる者あらば、汗は政治家の事業に優ること万々なりと、氏乃ち翻然として大に悟り、将来心を専にして園芸を業とし、此瘠土を化して美なる桃園たらしめんと誓ひ、爾來父を輔けて洋桃栽培に熱中し、研鑽考覈、苦を積み勞を累ねて、数百種の洋桃中信州の風土に好適し、兼ねて収穫の多量なる四種類を選択せり、即ち朝日丸水蜜桃、浅間水蜜桃、上海水蜜桃、黄肉桃是れにして、氏は盛に是等の苗木を繁殖せしめ、希望者に無代配付して、或は培養の法を教へ、或は剪枝の術を説き、或は施肥の可否を述べ、以て其植栽を奨励したり、是に於てか斯業駸々

として進み、今や北佐久地方の農家にして、数株或は十数株を植ゑざる者なく、最近の調査に拠れば、同郡内の桃園は二百町歩の広きに亘り、而して是が種苗は、悉く氏の苗圃より給したるものにして、氏は郷党に唯一無二の副業を与ふると共に、彼の焼石原は黄金の宝野と変じ、我邦園芸王の月桂冠は氏の領する所となれり。

▲声価世に高し洋桃の缶詰

氏の選択に係る四種の洋桃は、顆粒豊大にして香氣馥郁ふくいく、成長迅速にして収量多額、能く礪确不毛の地に稔りて、氏が多年の愁雲漸く霽はれ、赫耀かくようたる光明は彼れの前程を照さんとするの時、氏は更に紅果の販路に付て一の難関に逢着せり、而も之を突破して凱歌を奏し得るに非ずんば、九仞きゅうじんの功を一簣きに欠く是が画策は栽培事業に伴ふ喫緊事たるに於て、氏は幾多の盤根錯節ばんこんさくせつを荏除せんじよし、遂に能く最終の勝利を博し得たり、希くは東信の特産物たる養桃缶詰の歴史に聞け。

氏が洋桃の試作的時代に於る華客は、主として軽井沢に避暑せる外人なりき、然るに年を遂ふて生産益益加はり、限ある外客の需要のみを以てしては、供給の過剰なるを如何せん、去つて付近の町村に販路を求めんか、一顆三四錢に値する桃果は、彼等農民の口にすべく余りに不廉なるを奈何せん、氏は苦めり、氏は憤れり、不撓不屈の精神、企業商略の機智は茲に發揮せられ、明治三十年初めて東京に生果を輸出するに至りたるが、京浜商人の没徳義なる名を果実の腐蝕に藉かりて屢次しばしば彼を苦む、之加、氏が洋桃

栽培に奏功するや、彼に倣ふ者続出し、氏亦大に勸奨したる結果、生産遽に増して需給の均勢を失ひ消費力の大なる京浜地方に於てすら、尚之が中正を得ずして保存期の永からざる桃果は、腐蝕に次ぐに腐蝕を以てし、又如何とするに、由なし、洋桃缶詰の事業是に因て企画せられ、当時東京市洋酒缶詰組合長にして、斯道に造詣深き豊田吉三郎氏を招聘し、洋桃缶詰製造の傍ら技手の養成を委託せり然も数度の失敗に依りて財産を蕩尽したる塩川氏は企業の資金に欠乏を訴へしを以て、東奔西走有志者を説き、資金の醸出を勧めて、缶詰製造会社は茲に創設されぬ然りと雖も桃果の産出歳毎に多きを加へて、到底一製造所の能く之を製了し得べきに非ず桃果腐敗して栽培業者の損害多大なるを見るや、氏は奮然として起ち、独力経営の下に缶詰製造所を設くるに至れり。

洋桃缶詰の一たび世に出づるや忽ち嘖々たる好評を博して需要^{しきり}荐^{いた}に臻り、供給之に伴はざるの盛況を呈す、今や年々十万に垂んとするの缶詰を製出し、全国到る処の店頭、彼れの商標を貼付せる洋桃缶詰を見ざるなし、噫流離困頓、幾度か倒れて而して復た起き、遂に能く其志を大成したる氏が、胸中の感慨果して如何。

▲ジャム製造と名誉表彰

氏が園芸事業の一半は吾人、既に説き去れり、更に進で他の半面の事業たる苺栽培について聊^{いささ}か述ぶる所あらしめよ、明治三十三年の頃、氏は洋桃栽培に全力を傾注するの時に於て、果樹の栽培が頗る有望

にして、且つ樹下庭前屋後畦畔廢墟等、徒に雑草の繁茂に委するの外なき地を利用するに、最も好適のものなるを見、数十種の苺に就て研究したる結果、草莓、木苺、房スグリの三種を選択して之を試作せり元來苺ジャムの製造に於ては、原料たる苺果高価の爲め其利する所極めて尠少なりしに、新に選出されたる草莓は、一反歩に付約五百貫匁の收穫ありて之を在來種に比すれば三倍強の多量を収め、自余の小果実亦一畝歩三四十貫以上を産し得て、而も栽培極めて容易に、老人小兒も娛樂的に之を爲し得べく我邦の如き集約的農業家の副業として、實に好適のものたるを失はず、其房スグりは以て乾果を製すべく、ジャム、ゼリーとして貯ふべく、苺酒の原料となすべく、草莓及木苺の芳味佳香かじょう以て舌を鼓するに足る。

聞説く、三岡村地方の如き瘦土に在つては、苺の栽培が稲作より遙に有利にして、氏の如き一反歩の地面より六十貫の苺果を得、此価十八匁に当り、稲作より収むべき利益に比し殆ど倍額に上るを以て、村民相率ゐて水田を苺畑に変へ、之が栽培年毎に其多きを加ふ、氏が製造に係る苺缶詰及ジャムは、此の如くにして洋桃缶詰と共に世に賞讃せられ、東京勸業博覧会を首めはじとし、諸種の共進会若は品評会は、氏に授くるに最高の賞を以てして、其功績を海内に表彰し、昨年四月宮内省に苺ジャムを献納かしくして畏くも御嘉納の榮を賜はり、閑院宮殿下を首め奉り、各宮殿下の御用命を蒙むるに至る、氏の光榮何物か之に若かんや。

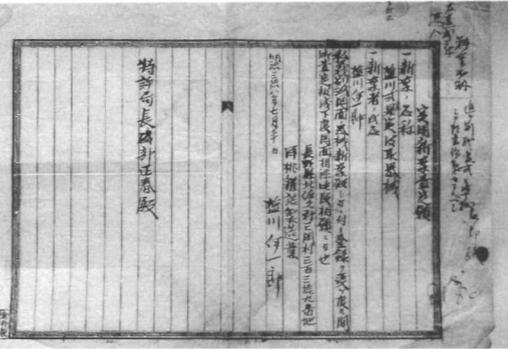
▲ 刮目すべき今後の發展

身は微賤の家に生れて胸に雄志を抱き、時に郷閭に斥けられ、時に窮厄に困められ、失敗に踵ぐに失敗を以てし、而も奮然として猛進邁往、終に其業を大成したる我が園芸王は、常に国家的觀念を以て心と爲し、己を捨て、世を拯ふに汲々たり、其製造に係る洋桃及莓缶詰の声価世に昂まると共に関東関西の代理店に依つて販路を全国に拡張したるに憚らず、更に東京日本橋区本材木町なる直輸出入商植田商店の手を経て米國に輸出するの途を開きたり氏以爲く、果樹の栽培たる、樹枝の剪定、果実の間摘及採集、施肥除草等の作業は、総て機械力に依ること能はずして、何れも人力に待たざる可らざるものたるに於て、此種の園芸は米國の如き大農本位にして且つ勞銀不廉なる國に適せず、須く我邦に於る斯業を奨励發達せしめて外國品を圧倒し、啻に其輸入を防遏するのみならず、盛に海外に向つて輸出すべし、幸にして其計画は能く金的を射、今や米國を始め上海、香港、浦塩、哈爾濱、大連、新嘉坡、布哇及び英國等に向つて輸出するに至れり、其販売額未だ多きに上らずと雖も、是畢竟缶詰製造高の少きに基因し、氏の生産せる洋桃、莓シヤム幾十萬個の缶詰を以てしては、到底内外の需要を充す能はず、即ち原料たる果実の生産不足なるの致す所、茲に於てか氏は果樹栽培に最も適當なる信州をして一大果樹園たらしめ、尚新潟方面にも及ぼして、遂に生糸に重ぐの一大産物を造り、鵬翼を海外に搏たんとする計画中なりと言へり、其希望や遠大にして、其籌策や有偉なりと謂つべく、近き将来に於て其業成るの晝、

信州の園芸王は正に日本に置ける園芸界の王冠を戴かん哉。

▲ 発明技能と国家観念

冀^{ねが}くは塩川氏^をを目^もして、単に園芸に熱中する木強漢^{ぼくきょうかん}となす事勿^なれ、彼れの思想は緻密^{ちみつ}にして、其精神は高潔^{こうけつ}なり、吾人は茲^{こゝ}に氏の発明に係る數種の農具を紹介し、その発明的才能と曾^{かつ}て熄^やまざる公共的行動^{こうこうていどう}を窺^{うかが}はんと欲す。



伊一郎は各種の器械類を考案した提出された実用新案登録願い書

氏の缶詰事業漸く盛大を来すの時に当り、彼を悩ましめたるものは、桃果の皮剥ぎ及び核抜の為に少からざる手数を要すること是なり、氏乃ち焦心苦慮幾度か考案を廻らして、遂に皮剥器械並に核抜器械を發明し、明治卅八年之が専売特許権を得たり、其簡便にして巧妙なる、従前に比して殆ど五倍以上の操業を為すを得工女一人一日の業は、優に數百本の缶詰を作り、工場經濟に莫大の効果を奏せり、信州の果実缶詰が本邦第一の生産額を占むるは、実に該器の發明に其源を發す、氏は更に缶詰の廢物、薄板、新聞紙等を利用して害鳥驅除器を案出し、専売特許権を得たるもの數種あり、此器は隼鷹の威容を備へ、翼に風を受けて廻轉すれば寄響を發し、又は鷹の

鳴くが如くに鳴るを以て、農作物の害鳥及鼯等を駆逐するに大効あり、此器の製造は独り冬期農家の最高副業たるのみならず、元と世を利し人を益せんと欲するの趣旨に則れるを以て、無料にて何人にも製造使用するを許し、教を請ふ者あれば懇篤に之が製法を授けつゝあり、此の他塩川式完全殺蛾燈同花形殺蛾燈、同第二完全殺虫器と称するものあり孰れも専売特許権を有し、之を苗代果樹園又は蔬菜畑の害虫駆除に用ゐて偉大なる効を奏す、尚氏は果実の汁液に炭酸瓦斯を含有せしめ、香味馥郁たる飲料を製出して、生果多大の産額を処理し、毫も斯業發展の結果に累せざらしめんとす、其意を用ふることに常に此の如く、或は一台中三四円を超えざる家庭精米器を造りて、農家の労力を減じ生活費を節せしめ高価なる砂糖に依らずして美味なる菓子の製法を教へ、頃者又各家庭日常の残物を以て、極めて簡易に極めて迅速に味噌醬油を醸造すべく考案を廻らし、殆ど成功に近づきつつありと聞く、此法にして成れるの暁、世を益すること蓋し大なるものあらん。

氏は酒を解せず煙草を喫せず、日々鋤犁を肩にして雇人を率ゐ、果樹の間に耘りて以て自ら楽む、夫人末子（三五）は小県郡和村出澤章則氏の令妹にして、二男三女を挙げ、和氣家庭に靄々たり、氏の次弟波三（三六）氏は家に在りて園芸の事に努め、末弟伊四郎（三〇）氏は外国語学校を出で、明治三十八年実業練習生として亞爾然丁アルゼンチンに派遣せられ、今や伯刺西爾ブラジルに在りて移民監督の職を執る。塩川家の将来は蓋し多望なり矣。

嗚呼信州の地、南に片倉組ありて製糸界の王位を占め、東に塩川氏ありて園芸界の覇権を握る、斯の如くにして我邦の富源が此二三子に依つて涵養せらるる事夫れ幾何ぞや功や録すべく、業や伝ふべし。

六 浅間山麓の一偉人

川上 岳城

(明治四十四年十月十四日『青年之友』第十三号)

浅間山麓の荒廢せる田園に人となつて、幾度か降灰の災厄に苦しめられて居た、数万の農民をして愁眉しゆうびを開かした所の信州北佐久郡塩川伊一郎君の如きは、我が国農界の一大恩人と云つても敢えて過言ではあるまい。

浅間の連山を以て囲まれた、山間の僻地に生れ、朝に夕に崇巖なる峻嶺を仰いで育つた塩川君は小学校を終へると直ぐ父祖伝来の業たる農業に従事して家業の補助をして居たが蛟龍かうりゆう何日いつまで池中のものではない、燃ゆるやうな青春の血は逆ほとぼしつて来て一日も鋤鋤を手にして働のが厭になつて来た、どうしても東京へ出て、勉強して家名を挙げなくてはならないと決心した、まだ浦若い十七の青年は遂に志を抱いて東京遊学の途に就いた、其頃本郷弓町に原要義塾げんようぎじゆと云ふ英漢數専門の私塾が在つた、塩川君は上京後直に此の塾へ入つて専心一意英語と数学とを研究した、然るに在学僅か一年にして郷里の事情は君の遊学を許さなくなつた。君は悲嘆の涙遣る方もなく幾度か故郷の空を眺めて身の不遇を恨んだ、愈々帰国すると云ふ時に君は芝三田の育種場で蔬菜便覽果樹栽培便覽等の書を購入して提ちんへ歸つた。

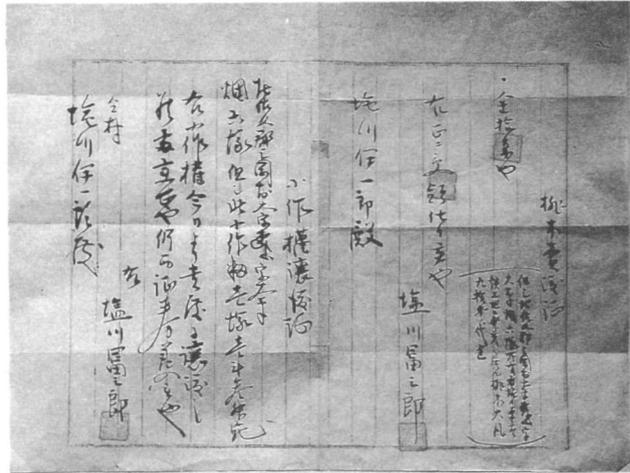


「青年之友」の表紙（明治44年10月）

一日果樹栽培便覧を繙いて居ると、不凶林檎の栽培の事が書いてあつた、予て利益の多いと云ふ事は聞いて居たが、今此書を見て、愈々有望なる事業なる事を確めたので、先づ小県郡の西内村の丁度三沢^{（ママ）}山峠の下の処に十町歩許りの土地を開墾して三千本からの苗木を植付けた、然し不幸此の土地は果樹の栽培には不適當であつた、め折角の苦心は水泡に帰して終つた、けれ共君は少しも失望せず年々歳々苦心に苦心をして栽培法を研究した。花は咲けども実はならず幾度やつても完全の実を得る事が出来ないで斯うして七八年の間一生懸命に研究を重ねた、運命の神は何処まで塩川家に災いするのだから、親子二人で全力を集中して経営して居る此農園は一日野火のため無惨にも悉く焼き尽くされて終つた、僅かの資産は永年の経営に全然り費ひ果して終つて今はもう木から落た猿同様哀れな状態となつた、親子は涙ながらに鋤を担で焼野を後に佐久の古巣へ歸つて来た、是れより先試験的に洋桃を一反歩ばかり栽培して居たが是れとて多少は前途に光明を認める事が出来ても此の場合如何ともする事は出来なかつたが、是が今日信州の名産佐久郡の富源とまでならうとは、神ならぬ身の知るよしもなかつた、事業に失敗して煩悶せる氏は如何かして損失を取り返し再び荒地の開墾をしようと種々苦心した結果台湾の開墾を思ひ立つたので父君に後事を託し、蹶然万里の波濤を越へて異郷へと出立した、豊かならぬ君の懐中には目的通り台湾まで渡る旅費にさへ差

支へて来たので途中琉球に滞在して今後の方針に就てあゝこうと思いを廻らしたが、不幸寒国に生ひ立つ氏の體質は斯る暖国の起業には不適當なる事を感じたので無念とは思ひながら再び故郷に帰ることに決心した、然しこゝ迄漸く渡つて来た位だから、帰国の旅費がない、国へ度々打電してもそう急には金が来ないので、毎日く首を長くして待つて居た。漸く三十圓の金を受取つて帰途に就いたが船が薩摩の大島へ寄港したので茲に三度失敗の種を求めた、此大島は紬の名産地である、その頃一円廿卅錢位の真綿で十円も十五円もする反物が出来るので信州産のものと交換する事の非常に利益あるを思つたから早速実行する事にして帰国を急いだ、江州まで来た時には一円に足らない端金と成つて終つたが前途尚百里の道を歩かねばならないのである、と思つて氏は食ふものも食はずに昼夜兼行、僅か五日にして無事百里の道を踏破した。

帰るや否や直ぐ真綿を買込で大島へと出稼に行つた、島民の氣質や生活状態等を調べずに始めたのは確かに早計であつた、暖国民の不規律な性格は高売上にまで遺憾なく表はれて居て物品の貸借等を何とも思はず自分の家を開放しにして四日も五日も他処へ遊に行く事等もあつて少しも真面目に仕事が出来ないのである、それやこれやで此事業も見事に失敗して終つた、然し氏は此紬製造の利益なることを意識したので如何かして廉^{やす}い原料を使用する道はないかと考えた、丁度薩摩に土族授産館と云ふのがあつた、そこで薩摩緋大島紬等を製作して居るので、から女工を雇つて郷里で製作する事にした、そこで先づ父君に相談をしたが今まで引續いての失敗に懲りた父君は絶対に反対した、ところが試験的に栽培した洋桃が多少成功の緒に就いて居たので父君と共に全力を此の栽培に傾注するように成つた、それが



伊一郎は小作人の立場にたって土地の譲渡を考えた

頗る当つて、今では自園ばかりでも十町歩以上も栽培して居る、創業当時は専ら生果の販売が目的であつたが当時はまだ、洋桃に対する、嗜好甚だ薄く、洋桃と云へば天津水蜜桃が盛に歓迎されて居たので主に天津種を栽培して傍ら他種を試植して次第に「アイスデンジユン」「アーリーリーハー」種を増植し今では天津種を排する様に成つた。

生果販売一途では甚だ危険を感じた氏は缶詰製造を思ひ立つて前二種を主として其他の洋桃を合せて栽培して居るか善良なるものは一樹で二十貫二円四五十銭位になるものもある、此の土地元より交通不便であるから主に軽井沢の外人が第一の華客であるけれ共これとて微々たるものであるが何分短時日に成熟して保存力の甚だ短いものであるから輸送中腐敗の恐がある問屋は完全の物に対しても腐敗を口実に代金を支払はないことは度々である實際に於て長途の輸送は困難であるから今では生果販売を目的とせず缶詰として多く販売して居る年に一万打位は製造して居る、他地方のよりも少し高いが地味が宜いから味は此地の産に及ぶものはない、氏は多年研究の結果会得した方法を広く村内の希望者に伝授して居るので今では佐久地方のみでも三百町歩以上にも増加

して居る浅間の降灰で他の耕作物では一町歩百円か百五十円より得られないのが、こう利益あつて、村民の安楽に暮らされるのも皆塩川氏の恩沢であると喜んで居る、氏は其後苺の栽培を始めたが今ではかなり、成績が挙かつて来た。

失敗又失敗転々又転々斯くして氏は遂に最後の勝利を得たのである。

氏は斯くの如くにして今では数万の富をなして居る、が決して物質本位の自己主義ではない、氏の理想とするは細民救済とでも云ふた様な考へで、富や権力を以て近郷に名を得よふとはして居らぬ、自己が富を得る為め他の村民が迷惑する様では事業でも何んでもないと、此事は常に念頭を離れた事がない、極く近い例が菓樹の栽培に適当な土地を手入れるにしても、若しそれが他人の小作中のものであれば地主に話をせず小作人に相当の報償代価を支払つて間接に小作人から借りると云つた様なやり方で此等はほんの一例にしか過ぎんが万事が下級民本位で経営して居られる、苺ジャムの製造期などでも短期日に何十万と云ふ数を製出するのであるが、氏の徳を慕って居る村人の力により少の差支もなく製造することを得て居る、兎に角氏は当今には一寸珍らしき人格を備へた人である物質上の成功は第二として事業其物に興味を持ち自分の郷里が富めばそれで満足して居る、富の度から云へば必ずしも大成功とは言へぬ、けれども斯くの如き荒廃に近き土地をして斯くも有利なる事業を創設せしは大なる成功と云はねばならぬ。

七 台湾・奄美大島紀行（二代目伊一郎の日記より）

（塩川家所蔵）

明治三十一年十一月より同三十二年十二月迄各地宿泊日数及場所

○第一回台湾・奄美大島旅行

卅一年

十一月二十四日 小諸発 東京麴町四泊

二十八日 新橋発 京都三泊

十二月一日 京都発 大阪一泊

二日 大阪発 神戸二泊

四日 神戸発 錦川丸一泊 廣島廿九泊

卅二年

一月三日 廣島発 吉野川一泊 上陸

四日 門司発 横浜丸三泊

七日 横浜丸上陸 基隆二泊

九日 基隆発 台北五泊

十四日 台北発 基隆八泊
 二十二日 基隆発 高雄丸四泊
 二十六日 高雄丸上陸 琉球二六泊
 二月十七日 琉球発 薩摩二泊
 十九日 大島一泊
 二十日 大島発 薩摩丸一泊
 二十一日 上陸 鹿兒島三泊
 二十四日 鹿兒島発 薩摩丸二泊
 二十六日 上陸 大阪一泊
 二十七日 大阪発草津一泊
 二十八日 草津発 米原三泊
 三月二日 米原発 兼山一泊
 三日 兼山発 みたけ一泊
 三月四日 みたけ発 木曾山中 野泊
 五日 奈良本 一泊
 六日 保福寺 一泊
 七日 上田阿部氏宅一泊

○第二回 大島行

四月七日 小諸発 東京二泊
九日 東京発 天津丸二泊
十一日 上陸 神戸一泊
十二日 夜乗船 金沢丸五泊
十七日 上陸 大島廿四泊
五月十一日 大島発 萬歳丸五泊
五月十六日 上陸 十九日大阪発 大阪三泊 京都一泊
二十日 京都発 古市一泊
二十一日 古市発 汽車一泊 無事 実家着

○第三回 大島行

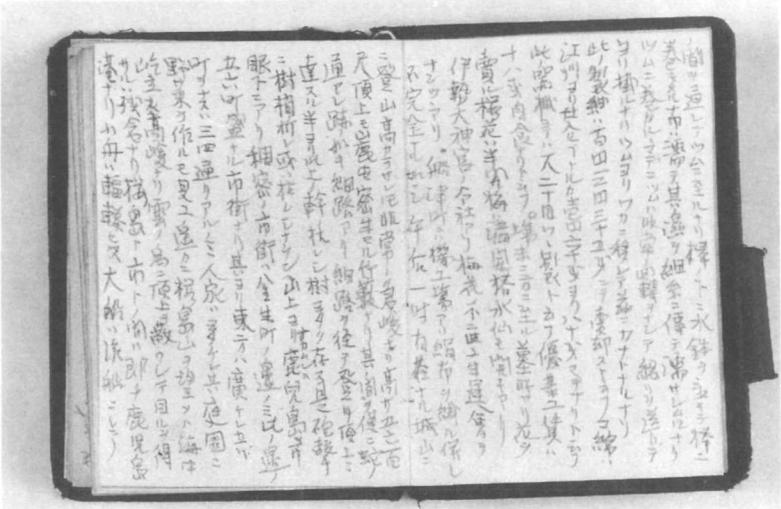
九月六日 小諸発 奥州郡山三泊
九日 郡山発 福島一泊
十日 福島発 日光二泊
十二日 日光発 東京二泊
十四日 東京発 米原二泊

十六日	米原発	大阪三泊
十九日	大阪発	隅田川丸 五、六泊
二十五日	鹿児島上陸	鹿児島二泊
二十七日	鹿児島発	隅田川丸一泊
二十八日	上陸	大島三十三泊
十月三十一日	大島発	サツマ二泊
十一月二日	上陸	鹿児島十一泊
十一月十三日	鹿児島発	富士川二泊
十五日	大阪上陸	大阪三泊
十八日	大阪発	奈良一泊
十九日	奈良発	汽車一泊
廿日	新橋着	東京二泊
廿二日	東京発	足利一泊
廿四日	足利発	高崎一泊
廿五日	故郷到着	

静心全局ニ注意セヨ
 品質ノ上下ヲ監別セヨ
 價格ノ高低ヲ認メヨ
 坪量ノ強弱ヲ熟視セヨ
 價切ルコト。量ヲ強クスル
 コト。良品ヲ撰スルコト。

明治三十二年二月二十三日 鹿兒島ニテ

天晴朗各店ニ至リテ眞綿またノ相場ヲ問フ。最優等百目式円ヨリ下リテ壹円六十錢マデ。島糸ハアル家殆ドナシ、只一戸アリシノミ、價四円八十錢ナリ。長町、田町冷水入口百六十五不明田戸指宿修后氏ノ紬製造ヲ聞ク。製造場ハ大ナラズ、場内女工数二十人ナリ。水車ヲ使用シテ車輪ヲ回轉セシメ、回力ヲ傳ヘテツムヲ回轉セシムナリ、ツムハ練リシ細糸ヲ卷クノ用ヲナス、眞綿掛盤ハ竹釘ヲ植ヘ其ノ釘ニ眞綿ヲ掛ケ工女適宜ニ細大ナカラシムル様ニ糸ニ注意スルナリ。然ルトキハ車力ニテ糸ハ引カレテ前頭ノ針金ニ掛リ、其ヨリ二ツノ丸キ棒ノ間ヲ通シテツムニ至ルナリ。棒ノ下ニ水鉢ヲ置キテ棒ニ卷キタル布ハ濡テ其ノ濕ヲ細糸ニ傳テ濡サシムルナリ。ツムニ卷カルルマデニツムハ非常ノ回轉ヲナシテ縊リヲ送りテヨリ掛ルナリ。ツムヨリツカニ移シテ茲ニ力トナルナリ。此ノ製紬ハ百目三円三十五錢ニテ賣却スト言フ。マ綿ハ江州ヨリ仕入ルコトナルガ、壹円六十錢ヨリ八十錢マデナリト言フ。此ノ器械ニテハ一人二十目ヅ、製ト言フ。優業工賃ハ十八錢自食ナリト言フ。場末ニ方ニ至ル、墓所アリ、花ヲ賣ル桜花ハ半開、梅ハ満開、椿水仙モ開キアリ。伊勢大神宮ノ分社アリ、梅花ノ下ニ學生運會ヲナシツツアリ。船津町ニハ機工場アリ、絹布ヲ織ル併ノ不完全ナル如シ、午后一時有益ナル城山ニ登ル、山高カラザレトモ非常ノ急峻ナリ、高サ五、六百尺、頂上モ山麓モ密生セル竹藪ナリ。其ノ間ヲ僅ニ蛇ノ通セシ跡ノ如キ細路アリ、細路ヲ徑テ登リ頂上ニ達スル、半ヨリ以上ノ幹枯レシ樹多ク存ス、是レ砲撃ニ樹梢折レ或ハ枯レシナラン、山上ヨリナガムレバ鹿兒島市眼下ニアリ、稠密ノ市街ハ金生町ノ辺ノミ、此ノ辺五、六町盛ナル市街ナリ、其ヨリ東方ハ廣ケレ共町ヲナスハ三、四通リアルノミ、人家ハ多ケレ共庭園ニ野菜



台湾・奄美大島行きを記した日記

を作ルモ見ユ。遙カニ桜島山ヲ望メバ、海中屹立ス高
 峻ナリ、雲ノ為ニ頂上ヲ蔽ワレテ見ルヲ得ザルハ残念
 ナリ、桜島ト市トノ間ハ即チ鹿兒島港ナリ、小舟ハ輻
 輳セス、大船ハ汽船ニシテ、十艘余モ碇泊セリ、密生
 セル竹藪ヲ分ケテ行ケバ、山上少シク凹キ處ニシテ平
 ナル處アリ、是レ城ト言フ、此處ヨリ少シク北ニ下レ
 バ又廣ク長キ平地アリ、楠ノ五抱六抱ノモノアリ、
 楠島砦ト言フ、西方ニ下レバ急ニシテ底ニ家アリ、
 児玉ト言フ土族ノ居ト言フ、庭ニ種々ナル樹木ヲ植エ
 甚タ清閑ナリ、之ヲ南方ニ登レバ高クシテ遙ニ熊本ノ
 方ニ通ズル道路ヲ見ル、横田村アリ、宏大ナル建築ハ
 鎮台ナリ、峰巒重疊ノ間ヲ縫フテ熊本ノ方ヘ通ズルナ
 リ、猶ツケノ馬場ニ登レバ、其ノ下ハ深谷ニシテ篠竹
 密生シ其ノ昔杉楠樹高ク蔽フ、此ノ辺ニ洞穴アランカ
 ト下レバ、晝モ暗タトシテ微カニ日光ヲ見ルノミ、篠
 竹密生シテ歩スベカラス、分ケツツ漸ク暗路ヲ踏ミ此
 ノ深谷ヲ行ク、處々ニ土ヲ穿テテルヲ見ル、是レ山ノ諸

ヲ掘リシナリト言フ、余ハ誤想シテ骨ヲ搜リシニ非ズヤ、凄慘ノ思ニ堪ザリキ、併シ此ノ辺ニ壯士ノ籠
リテ官軍ノ砲丸ニ倒レシ處ナリト言フ、只樵夫ノ枯枝ヲ拾フ為ニ通セサ、ヤカノ暗キ路アルノミ、余ハ
斯ル深山ノ市ニ接シテアラントハ思サリシ、樵夫アルヲ認メテ西郷氏ノ自刃ノ處ヲ問ハント近ヨリシ
ニ、彼ハ山林官ト余誤視シテ逃ゲ去リ、問フ得サリシ恐ロシキ深山ヲ篠ヲ分ケツツ漸ク士族家敷ニ出ル
ヲ得タリ、切石ヲ積タル上ニ水田アリ麦畑アリ、人家ハ八、九アルノミ、是ノ地ハ城山ノ峻シク聳シ兩
開ノ谷ノ平地ナリ、城山ハ切立テタル如ク峻シク聳ルナリ、人ニ問フテ漸ク西郷氏自刃ノ處ヲ知ルヲ得
タリ、石策ヲ建ツ形バカリノ洞穴アリ、茲ニ自殺セリト言フ、洞穴ノ前ニ大家アリシガ、築地ノ官軍籠
讓艦ヨリ大砲ヲ拳ケシ切りニ砲撃セシカハ彈丸ヲ避ルガ為ニ茲ニ籠リシナリト言フ。此ノ辺ニ岩二十数
ケノ小穴アリ桐野□□^(不明)ノ如キ大將分ノ人ノミ籠リシト言フ、城山ヲ南ニ上リテ下ル處ニ大巖アリ杉樹密
生シテ暗キ處アリ、茲ニモ居リシガ丸達シテ避クヘカラズ、又茲ニ歸りて自刃セリト言フ、是ヨリ西郷
氏ノ墓所ニ至ル、城山ノ西方ノ小丘上ニアリ、丘ハ處々ニアリ

鹿兒島ハ不思議ナル處ナリ、市ノ前ハ恐ロシキ深山ナリ、戰爭時多禿山トナレリト言ヘトモ其ヨリ生ゼ
シ樹ニテ又深山トナレリ、小丘山ニ西郷氏ノ墓處アリ、近日木像建築落成セリト、參詣人多シ、木像ハ
能ク画ニ見ル如キ所ニシテ、犬ヲ引キ筒袖腕ニ至リ、衣裾脰ニ至リ蒿草履ヲ穿ケ、小刀ヲ攫ミ五州ヲ睥
睨スルノ概ヲ以テ活眼ヲ瞠リシ様ノ像ナリ、高サ三、四間モアランカ、像ノ側方ハ墓處ナリ、西郷翁ノ
石碑中央ニアリ、左右ニ村田桐野大村益田ノ諸人ノ碑並列セリ、其ノ数何百ヲ以テ数フ可シ、香花ヲ備
ヘ灑掃至レリ、上段ヨリ三尺程前ノ低キ處ニハ大山綱吉ノ碑高ク建テラレタリ、碑銘モアリタレトモ読

ムノ閑ヲ得ズ、此處ヨリ湾ヲ望メバ景色殊ニヨシ、下リテ各處ヲ散歩シテ船ニ一宿センガ為、通船ニ乗ジテ薩摩丸ニ投乗ス波ナク風ナク甚静カナリ。

二月二十四日 天氣好シ 午前八時鹿兒島港ヲ発ス、本日出帆ノ船多シ、隅田川丸、信濃川丸、肥川丸併セテ四艘発ス、湾内波ナク風無ク桜島山拭フガ如ク美シク晴タリ、屹然湾内ノ晴波ニ浮クノ景色言語ニ盡サレズ、麓ニハ桜島大根ノ畑晴々タリ、西方ニ遠ク鹿兒島湾ヲ隔テ、霧島山ヲ烟霞ノ間ニ望ム可シ、白帆様々トシテ風ニ揺ク、鹿兒島湾ヲ出ズレバ市街モ城山モ烟ニ没セリ、湾ノ兩岸ハ山岳屹立シテ平地少シ。鹿兒島市ヨリ肥州熊本マデハ險阻ナル山嶺アリ、道路行步難シト、鹿兒島市ハ湾内ヨリ入ルノ外殆ド道ナキ如シト。鹿兒島県ハ山岳多クシテ平地少シ、湾ヲ出ズレバ嘉右エ門カエモンガ岳タケ富士ノ如ク屹然トシテ湾頭ニタツ。是ヨリ肥州灘ナリ、今日ノ如キ平穩ナル日ナレ共、有名ノ灘ヘトテ今迄ノ漣波ニ引換ヘテ大波船腹ヲ撃ツ、午後二時ナリ、午后四時ヨリ浪次第二荒クナリ動揺甚シ、今日ハ朝食、晝食二度セシコトトテ苦痛甚シ、午後六時ヨリ嘔吐スルコト三回。旅中種々ノ困難ヲ重ネシガ、夏ノ蚊ニ刺撃セラレタルハ随分困難ナリシガ、船中敷物無クシテ船板ゴザノ上ニ轉々スルコト程困難ナルコトナシ、一、二時間位ナラバ宜ケレ共、一晝夜二晝夜ハ実ニ堪ラレヌナリ、異ニ動ク時ニ苦シカ為ニ苦シケレバ、一方ニノミ固定スルガ故ニ骨モ碎ケントスルナリ、斯ク苦痛ヲ重ネテ一夜ヲ明シ明日午前十時頃漸ク肥州灘ヲ出デタリ

二月二十五日 好天氣 内海ニ入ルヨリ波次第ニ收リテ静穩ニ歸ス、昨日鹿兒島湾ニテ、フカ數百尾船ヲ追來リ、前后ニ群集ス、美觀筆スベカラズ、船長銃ヲ以テ狙撃ス、中あたラザリキ。今日ハ甚ダ安ラカ

ニシテ何處ノ国ニ至ルモ人ノ情ハ同シキモノナリ。二十三日ノ夜船ニ乗リシトキヨリ大島ノ一青年アリ、大阪ニ行く者ト談ズ、彼親切ニ余ニ布団ノ半ヲ與フ、是ガ為ニ大ニ先患ヲ減ズルヲ得タリ。兩岸ノ山々画クガ如シ、夜安眠ス。

二月二十六日 天氣晴朗午前七時頃播磨灣ニ入、甲板上ニ出テ望メバ四国ノ島青螺ノ如シ、一方ハ播磨ノ浦々名工ノ畫ノ如シ。青松白砂ノ間樓閣隱見ス、高砂須磨明石舞子ノ名所ヲ船上ヨリ眺メタリ。一ノ谷ハ高峻ナル山岳ヲ後ニ負ヒ前ニ深キ海水ヲ扣ユ、是鉄拐山ト播磨灘ナリ。義経ノ戰略平氏ノ苦戦ノ古昔ヲ忍ブレバ轉タ感慨ニ堪ザリキ。今日文明ノ汽船ノ便ヲ借ルスラ船中ノ苦悶甚ダシキニ、小舟ニ乗ジテ軟弱ナル婦女子マテ海波ニタマヨウテ四国、九州ノ果マテ至リシカヲ追思スレバ、如何ニ苦シカリケント思イテソゾロ憐ニ堪サリシ、況ンヤ陸ヨリ海ヨリ敵ニ追撃セラレ、今日モ昨日モ親キ友ヤ思愛ノ父母可憐ノ配偶ヲ失フ悲ミ、明日モ知ラレス露ノ命ヲ□トスルニ止ムル歎ハ如何ナラント思ヒ来レバ、悲嘆ニ堪ザリキ。兵庫浦ノ海中ニ燈台アリ、是外船ノ沈没セル處ニ記念ノ為ニ立シナリト。明石ノ対岸ニ当リテ一島アリ、有名ノ淡路島山ナリ。山上樹多シ、松樹ナル如シ。淡路島ト明石ト突出スル處喉ノ如シ。茲ニ役場アリ、信号旗ヲ上下ス、外国船ナルカ日本船ナルカヲ問フナリ。兵庫ニ近接スレバ一官船アリ、信号シテ停止セヨト命ズ、即チ停止スレバ大声ヲ発シテ船名ヲ問フ、答フルニ薩摩丸ナルヲ以テスレバ、何處ヨリ来リシヲ問フ、鹿児島ト答フ、進ミテ神戸港ニ入ル。帆船汽船其ノ數ヲ知ラズ、大阪着船ハ午後五時頃ナラント言フヲ以テ、茲ヨリ上陸ス、荷物ト共十五錢ナリ。神戸市ヲ一週シテ晝飯ヲ食ス、梅花咲ク暖甚シ。花見遊山ノ人多シ、汽車ニ投ジテ大阪ニ入ル、各市ヲ回リテ眞綿ノ相場ヲ問

フ、上等弔円、中等弔円七十錢、下等弔円五十錢ナリ。絹糸紡績ナル者アリ、紵糸ノ染タルモノ是ナリ、十匁七十五錢、六十五錢ナリ。島^{不明}□糸ヲ問ヘトモナシ、絹糸紡績ハ総合セタル如ク思ル、手紬ノ如キモノハ見当ラス、大阪ニハ絹糸紡績所アリ、岡村尤モ盛ナリト。大阪、神戸ノ間車窓ヨリ望メバ畑ニハ大根植ル多シ、菜種ヲ採集スルナリト言フ、今植ル者モアリ、蒔物ナシツ、アル處多シ。梅花椿到ル處ニ咲ケリ、咲キ方ハ三分ノ一程ナラン。處々ヲ馳回り終リニ道頓堀ニ到ル、賑シコト甚シ肩摩穀撃トハ此ノコトナラン。観物、芝居其ノ數ヲ知ラズ、茲ニ旅籠二十五錢、片旅籠十五錢ト記シアリ。飯ヲ食シ魚類ヲ食ス、二日余モ食セザルコトナレバ美味忘ル可カラズ、囊^{のうちゅう}中空シキコトヲ忘レテ、十錢余ヲ食シ後悔セン、今日ハ神戸ノ晝飯ト共ニ三十錢モ費セシ故ニ宿泊スル能^{アタハ}ザル様ニナレリ、故ニ今夜ハ野ト決セリ、夜中處々ヲ遍歴ス、婚姻アリ簞笥^{さお}三棹^{さお}長持^{さお}二棹^{さお}是袋ヲ懸ケ、長持一棹ニハ白桐ノマ、續キテ台ニツリヲ並ヘテ擔^{かち}キ行ケリ。供モ仲人モ行ヌ、只此ノ荷物ノミナリ、家ハ直チニ戸ヲ閉セリ、何ナル風ナルヤ知ルヲ得ズ、只頗ル大家ナルヲ知ルノミ、步行モ頗ル悩メトモ何ニ宿ス可キヤヲ知ラズ、ウカ^くト歩シテ材木積シ處ニ到ル、此處ニ宿センカト思シガサスガニ恐レテ宿セズ、野露ニ曝^{さら}サル、モ公園ノ寝台上ニ宿センカト思シガ忘レタルヲ如何セン、又歩シテ行ケバ何神社ナルヤ縁日ナリ、人群集スルコト甚シ、社殿ニ詣シテ回視スレバ好地アリ、然共^{シカレドモ}何時詣人ノ絶スルヤ知ラス、去テ心齋橋ニ出テ見レバ一野店アリ、是屈竟ト縁台ヲ引テ風ト月光ヲ覆ヘ、茲ニツグミシ膝ヲ屈スルノミ坐スルコトナラズ、敷物無レバナリ、斯克シテ夜半ニ到、夢驚キ一時モ寝リ難シ、前ニ石碑アリ、木村長門ノ守重成ノ誠忠ヲ表スト大ニ石ニ記セリ、明月ハ天心ニスミ渡リ晝ノ如シ、而シテ我ハ流離シテ宿スルノ資無ク

軒下ニ踞シテ偉人ノ碑ニ対ス、感如何ナラン、今夜ニ限りテハ二月ノ寒天袷トシャツ羽織ノミ、寒サ甚シ、殊ニ夜半後ハ寒加リテ苦シサニ堪ズ、五時ニ起出テ歩行ス

二月二十七日 天氣好シ 製造處各地ニ烟突突出ス、以テ製造業ノ盛ナルヲ知ル。学校・氣象台・商工会・株式会社ノ宏大ノ建築物数知ラズ、安治川橋ニ到レバ汽船ノ碇泊スル者無数ナリ、居留地ヲ見ル、聖アンナ病院アリ、思ラクハ慈善的病院ナランカ。魚市場ヲ見ル、盛ノ物ナリ、生魚生貝ヲ商フ、商人群集シテノ喧争ハ戦争ノ如シ。商工会ノ商品陳列場ニ入りテ一覽ス、一館西洋ノモノナリ、書籍室アリ、此ノ書籍ニヨリテ大ニ余方目的ノ商業ニ利益ヲ與ヘタリ、日本商品陳列場ハ一二三四館アリ、糸類・小間物・陶器・漆器・織物・茶・鉱石見本、漁業、製油場ノ雛形等ナリ、晝食、二錢甘藷ナリトハ憐ナラズヤ、市中ノ行人ヲ觀察スルニ、衣類ハ黒七緋ノ羽織紬縞ノ衣類山糸織多キガ如シ、大島紬ヲ着タルモノ散見ス、将来ニ至ラバ此ノ紬流行スル時アランカ、大島紬ノ効用ハ柔カクシテ皺ノ寄ラザルト汚レノ付カザルト、雨ニ若クハ洗フモ変色セザルトニアリ、故ニ不雜ノ者ノ好衣服ナリト言フ、停車場ニ至レバ混雜スルコト甚シ、梅田ステーションハ東西ヨリ同時ニ発スルガ故ニ、此處ニ降上ノ客ハ一千以上ヨリ少カラザル可シ、而シテ汽車ハ一時間毎ニ発着スル者ナレバ、其ノ数莫大ナラズヤ、午后三時ノ汽車ニ搭シテ草津ニ着ス、余ノ風体ノ奇シキヲ以テ二家ヨリ断ル、即チ大行李ヲ肩ニシテ宿泊ヲ求メテ漸ク宿スルヲ得タリ、三十錢ノ宿料ニシテ平皿ト茶ヲ付ケタリ。此ノ地ニテハ眞綿ハ製セスト

二月二十八日 曇リ 午后二時ヨリ雨降ル 眞綿ハ長浜地方製造盛ナルト聞キ、即チ米原ニ着ス、汽車賃・宿料ナキヲ以テ羽織ヲ置キ八十錢ヲ借り費トシテ米原ニ着ス。眞綿ハ此地ヨリ東方二十町余ニシ

テ三、四ヶ村アリ、此ノ地ニテハ戸毎ニ眞綿ヲ製スアリ、雇レンカヲ求ムレトモ断ル、下宿ヨリ通フ故ニ教授セラレンコトヲ求ムレ共、本年ハ原料乏シケレバ業モ近日ニ切上ル故ニ教授ナリ難シト。江州マ綿ノ原料ハ重ニ九州ヨリ来ルト、長野県モノハ来ラスト言フ。眞綿ハ十メ目百七十円ヨリ八十円マデ上等、同ジク百四十円ヨリ五十円マデ中等ナリ、中等ハ九州辺ノ上等ナランカ。信州スカラハ絹糸紡績ニハ不向ナリト言フ、信ズベカラズ、上等ハ重ニ絹糸紡績ニ使用スルヲ以テ格外ニ高シト言フ、マ綿ハ色澤白シ、上等ハ断力アリ、中々ナメラカナリ。菓^{不明}□ハ一人マ綿百目位ナリト言フ。余ガ目的ハ此ノ地ニアリテ、暫ク滞在スルニアリシガ、意ノ如クナラザルヲ以テ忽チ路頭ニ迷フ身トナリタリ。雨ハ肅々トシテ降来リシヲ以テ蓋ナク雨衣ナキ身ハシボ濡トナリシ。是ヨリハ野ニ伏シ山ニ伏し行歩、百里道ヲ行カント大決心ヲナシ蓋及ヒ着畳表ヲ買求メ下駄モ切レタレバ、跣足トナリ停車場ノ構内ニ入ル悲シカナ、悪シキ時ニハ此處通セズ、戻リテ道ヲ求メテ出入歩スルコト二十町聞ケバ彦根街道ニシテ中仙道ハ反対ノ方向ナリト言フ、初メヨリ野伏シ山ニ伏サント決心セル余モ、茲ニ至リテハ進退極リシ、時ニ午後五時ナリ、ア、失敗、ア、恐シカラズヤ、一厘ノ貯ナケレバ如何トモシカタシ、左レ共雨ニ如何トモシガタケレバ木賃宿ヲ求メテ宿ス、宿人十人アリ、靴修理様者、巡礼アラメノ如キ衣ヲ着セル同宿人ナリ、飯五合ヲ炊キテ貰フ、蔬ハ泥鰯及ビ宿料金十一錢五厘ナリ。零落シタルモ布団ノ汚キニハ閉口セリ、天気ナラバ野ノ新鮮ナル空氣ヲ呼吸スルノ快ナルモ如何セン 雨天ナルヲ

三月一日 大雨連日 袷単衣服引、筒袖四品一円三十錢テ売却ス雜諸六錢ニ拂フ、水^{不明}□ハ米原産物ナリト。眞綿ハ彦根井口上川等ニ製造處多シト、但シ機械掛ニ非ス。名ニ負フ江州ノコトトテ人情輕薄ナ

り、女子ハ美ナリ、裾太ク裏ハ紅ナリ。語調早く軽ク了解ニ苦シムコト多シ。語音ハ京都ニ類セリ。鮎ハ漁獲多シ、泥鰌四百目十二錢。米価下等九錢。旅宿料下等二十三錢、中三十錢、(不明)一錢五厘。湖畔ノ岳雪白皚々。鉄道ハ当今複線工事中。氣候ハ京都ヨリ寒シ。湖畔ハ平地廣漠ナリ、周圍困ラスニ山岳ヲ以テス、山岳甚高カラズ樹多シ。近江ノ国ハ一面平担ナリ。湖中ニ突出セル彦根市、石徹上ノ彦根城ノ風景絶美、雨ナルヲ以テ遊覽スル能サルハ遺憾ナリシ。湖畔ニ葦多シ。水田ハ湖水ノ水ト水平ヲナス位ナリ、サゴ泥鰌多ク二、三時間一、二升ヲ捕フト言フ、油菜ヲ作ルニ水ニ浸ルヲ以テ畦ヲ高クスルニ、シヨベルノ如キ器ニテ足ニテ踏込ミ之ヲ起シテ高ク積ムコトナルガ、石垣ヲ壘シタ如ク美シク積上ルナリ。今夜モ汚サ穢キ處ニ夜ヲ明セシカ、何事モ堪ルトスルモ蒲団ノ穢キバカリハ實ニ心地悪シハナシ、次ハギノ洗晒シテ白ケテ縞ノアリシヤ色ノ紺ナリシヤヲモ辨ジ兼ル布團纏フ氣ノ悪ルサヨ、尚モ乞食(不明)□□□土方巡禮等ノ臥タルモノナルヤ、現在モ尚臥シツツアルニ於テヲヤ是思ヘバ眠ラレヌ様ナリ、最暗里ノ記者モ閉口セシ如ク、彼宿泊人ハ虱多ク軒頭ニ出テ犢鼻褌ヲ長ク引クアリ、下衣ヲ脱シテ裸体ニテ(不明)□□シアリ、火鉢ヲ回リテ坐シテボリ〜音ヲ立テ、搔クモアリ、汗臭キ鼻ヲ蔽おほフバカリ、猥談雑談 目ヲ蔽ハカリナリ、左レ共独リ彼等ノミヲ咎メテ身ノ臭ヲ知ラザル余モ又彼等ト余リ見違スルナラン、百日間モ着セシシャツニハ汗ヲ嗅フ蚤ノ搔ケシハナリ、衣モ破レ体汚シモ湯アミスル資ナケレバナリ、嗚呼零落其ノ極ニ達セリ、我ハ安宿ニ宿スル彼等ト均シキ界級ニ随落セリ。人モ又吾ヲ見テ同一般ノ者ト見下シ、盆ヲ賣リツ、歸ラセルナラン、或ハ軍夫トナリテ台湾ニ行シヤ、何處ニ働キシヤト問フナリ

三月二日 汽車ニ乗シテ岐阜ニ向フ。車窓ヨリ望メバ岩脇村ノ近辺ノ小山ハ雨ニテ雪解ケ、細流滝ヲナセリ。是ノ雪ニヨリテ氣候ヲ考フルニ、江州ハ甚ダ寒キ如ク思ル 小山ノ頂キニ雪ノアル如キハ (不明) 過セル国々ニテハ見タルコトナケレバナリ、

寒梅開ク。関ヶ原ハ伊吹ヶ岳高ク聳へ山脈他ノ小山ニ連ル、小山ハ原ノ西北辺ニ群起ス、山麓ハ遠ク大垣岐阜ニ連リ、目ノ達ス所一面平地ナリ、斯ル平野ヲ望ミテハ大洋ノ広漠ニ目ノ慣レシ余モ驚ヲ喫セリ、昔関ヶ原ノ大戦ハ胆吹ノ須走トカ称スルノ地ニテ戦ハレシト言フ、東西ノ軍旌旗ヲ翻シ平野ニ百萬ノ軍ヲ交ヘシハ如何ニ壯觀ナリケン、大垣ハ昨日ノ大雨ノ為ニ出水シテ田野道路モ水ニ没セリ、然レ共深カラズ麦・油菜ノ僅ニ没セシノミ、大垣辺ノ田野ハ低ク平ラニシテ河流ハ田野ヨリ高シ、一日二夜ノ位ノ雨サヘカ、レバ連日ノ大雨ニ遇ハバ如何ン、堤防破壊セバ如何。岐阜県ノ大洪水ヲ屢々耳ニセシカ、今實驗シテ其ノ然ルヲ知りシ。家屋敷マデ田野ヨリ二尺程モ高キニ過ズ。河流ハ濁流滔々トシテ流レタリ、然レ共水勢弱シ。濁流ハ粘土ノ山上ヨリ流下セルモノナレバ、此地肥沃ナル湧因ナリ。岐阜ハ縣聽ノ處在地ナレバ、頻ル大市ナリ。岐阜ハ氣候米原ヨリ大ニ暖シ、桜ノ花咲キ麦モ大ニ生成長セリ。新加納ヲヘテ漸ク山間ニ入ル。女子織物ヲナスモノ多シ。鶺鴒沼ニ八九原アリ、一面平坦ニシテ、大凡百町歩程モアランカ。地味宣シカラズ。御料官林アリ。酒倉山林ヲ過グ、鹿多シト見へ、問屋前ニ二十頭程アリタリ、此ノ辺ハ小山群起シテ松林ナリ。木曾川ノ激流ハ滔々トシテ流ル、河岸ノ風景大ニヨシ、奇巖怪松趣ヲナス。出水ノ為ニ大田ノ渡シ渡船絶ユ、止ムヲ得ズ兼山ヲ回ル、二里余ノ徒勞ナリ。兼山ハ山ニシテハ良キ町ナリ、良キ商家アリ。木曾川ニ架セル兼山橋アリ、水面ヨリ甚高シ巖ヨリ巖ニ架

セルナリ。キソ川の水勢激スル中央ニ奇巖高ク立ル頂ニ杜祠アル。風景甚好シ、午后八時頃御岳宿ニ泊ス、此ノ宿ハ少シ善キ方ナリ、

三月四日 夜中雨、朝天気 午前六時三十分宿ヲ発ス 寒サ甚シ 見レバ夜前ノ雨山上ハ雪トナリテ白シ 路泥濘。梅白ク寒梅ナラン小学ノ児童ハ口々吾人ノ勇武ヲ談シツツ学校ニ通フハ愛ラシ。馬籠ノ駅ヲ超ユ 峻坂ナリ、坂上ヨリ山下ヲ望メハ小山波ノ如ク起伏シ登坂ノ苦ヲ忘ル、馬籠宿駅ニ郵便局アリ、妻籠ヲ超ヘ所謂木曾山道ナリ 馬籠峠ハ登リ又下ルコト二回 甚ダ峻坂ナリ。下リ下テ美濃ノ長嶋大井町ニ出ス、中津ニ下ラントスル處 富岳群山ヲ圧シテ白扇倒影天辺ニ懸ル。東方ヲ望メバ御岳天際ニ聳ヘテ白皚々タリ 明後日ハ斯クモ遙ニ見ル御岳ノ山麓ヲ過クルカト思ヘバ足歩ノ一步一步ヲ運ブモ積レハ大ナルモノナリト感嘆セリ、

足痛甚シク歩行甚ダ難ム 汽車上ニアリテ古人ノ旅行ノ苦ヲ語ルヲ笑ンカ 今ニシテ眞ナルヲ知ル。是ヨリ木曾川沿岸ヲ上リ行クナリ、木曾川ノ流勢急ニシテドウク、白玉ヲ飛シ石ヲ嚙ム 石磨セラレテ白ク円ナリ 檜林ハ峻山ニ茂生セリ 行ク處トシテ險山ナラサルハナク過ル處深谷ナラザルハナシ。古イ路峻ナリシガ 今ハ新道開キ馬車通行セリ。須原ニ至リ宿セント欲シ宿ヲ求ムレトモアラス、我ガ風体怪シケレバナリ 木曾山中ノ□中ヲ裸足ニテ行李ヲ肩ケ行ク様吾ヨリ見ルモ怪シケレバ人ハサゾカシ怪シク思ヒケン、皆宿ヲ断ル、木賃ヲ求メテ在ラザル故、二日ノ宿料ヲ一日ニ費スモ斯ル寒山ニ露宿モナリガタケレバ後ニハ如何ニ苦シムモ屋中ニ臥サント決心シテノ上ナリ、然レ共余ヲ宿セシメザレバ止ムヲ得ズ忽チニ至ル、又同ジ或ル家ノ如キ断テシマキサモ穢ラハシサウニ言声ヲ強クシテ言ヘルニハサス

ガ我モ大ニ立腹セルガ如何トモ致シカタナシ、去リテ半里余ヲ行キ或ル露店メキタル處ノ戸ヲ引テ食ヲ求メタリ、今日ハ晝飯ハ飯団子四串ニテ凌ギシコトトテ腹飢ヘ足痛シ、歩シカタケレバ此ノ露店ヲ問シガ出張ノコトトテ ウリキレタトテ断ル、余ハ何ナリトモ飢タレバ與ヘヨト言ヘケレバ粥ヲ與ヘタリ、然レ共懷中勘定モアレバ多ク食スルコトモ得ズ、僅ニ二椀ヲ喫シ汁ニワン吸ヒタリ、ヨリテ考フルニ是ヨリ五里モアル福島ニ行ントテ宿セシムル處アルニモ非ズ、悲シサ言ハン方ナカリシ、苦シサニ主人ニ腰掛ニ眠ルコトヲ許サレンコトヲ乞フ、主人憐ミテ然ラハ眠ラレヨ、布団アラバ借スベケレ共我々トテモナシ、火ヲ焚キヤルベケレバ 炉バタニテ眠ラレヨト 薪ヲ焚キ與ヘタリ吠ヲ敷物ニ借シタリ 吠ヲ敷キ布トシナク寒夜ニ土上ニ眠ルコトヲ許サレシガ情ナリトハ何ト情ナキコトナラズヤ、教ノママニ吠ノ上ニ眠リシガ眠リナリガタク夢シバノ覚ム、夜半過ヨリ寒威處々ニ透リテ眠ラレヌ、起テ火ヲ焚キテ眠ル、甚ダ暖キニ驚キサメテ見レバ羽織ハ半焼キ衣ニ移ラントス、アワテ、消シ又少シク眠ル間ニ夜ハ明タリ。

三月三日 三日ト四日ノ順序前後ス、天氣 此ノ辺ハ山ナリ 何ノ奇モナク何ノ景モナシ、石ヲ水車デ撞ク處アリ、瀬戸焼ノ材料ナリト言フ、午後四時頃御岳ト富士ヲ望ミシ好日ナリ 晚中津ニ宿ス

三月五日 天氣

薄暗キニ起出ツレバ道路モ屋上モ嚴霜ニ凍リ、寒氣膚ニ透ル 焚火ヲ盛ニシ冷果テシ身ヲ暖メツ、見レバ、羽織ハ下方黒ク焼ケ再ビ着ルベカラズ。昨夜ノ餘ノ粥及ビ汁ヲ喫シ朝寒風ニ身ヲ吹カセツツ行路ニ就ク。霜柱ハ跣足ニ碎カレテ、サクリノト音ヲナシ凍痛甚シ、蓋シ足袋モ穿カズ草鞋モ破レタレバナ

り。千古ノ白雪ヲ載キ天表ニ巍然トシテ屹立スル駒ヶ岳、朝日ヲ受ケテ水晶山ノ如ク、山麓ハ暗ク木曾川堂々ト流レ景色言表レス、御岳山ヲ拜ス、峻山屹立霜鋒ヲ巒スルガ如シ、福島ニテ朝食兼晝食ス 粕汁ハ美味 言フベカラズ、木曾川ノ沿岸ヲ漸ク離ル旭將軍ノ城址ヲ見ル、巴鎧掛ともえよろいかけノ松アリ、駒岳ヲ一週シテ後南ニ出ス、足痛甚シ、道路ハ雪解ケ泥濘ニシテ草鞋ゾウリハ切レルトモ錢無ケレバ買コトヲ得ズ、加フルニ足豆出来タレバ痛言フヘカラズ、藪原ハ櫛ノ産地ナリ、櫛店路傍ニ多シ、呼テ客ヲ引ク、鳥井トウヅヲ超エ新道ヲ回リテ悪道ヲ過ル苦シサニ險シキ山ヲ超テ漸ク頂上ニ達ス、奈良本ニ宿ス 竿商ト同宿ス 三月六日 晴

出雲ノ少年ト同行ス、彼ハ錢ヲ僧家豪家ニ乞フテ生活スト言フ、是ヨリハ路平坦ナリ、松本ヲ過ギ保福寺ノ前村ニテ一泊ス

三月七日 上田ニテ盆ヲ預ケ金ヲ借りテ下宅 阿部氏ノ家ニ宿ス

典膳町 上田

碓田周蔵

八 長野県北佐久郡三岡地方洋桃及苺栽培并缶詰製造業経営書

長野県北佐久郡三岡村

塩川 伊一郎 出品

(東京女子大学比較文化研究所所蔵)

緒言

余ガ家世々工匠タリシガ父伊一郎。

明治聖政ノ 皇恩ニ浴スルノ榮ヲ負フヤ、徒ラニ父祖ノ余澤ニ沐スルヲ以テ足レリトセズ、果樹栽培ノ有益ナルヲ信ジ自ラ余ヲ伴ヒテ斯業界ニ投ズ。

然レトモ元ヨリ一ノ經驗ナキ無学ノ徒、加フルニ乏シキ資力ヲ以テス。其行程如何ハ平々坦々タルヲ期セン。即チ忽チニシテ家産ヲ蕩尽シ、或ハ斯業中道ニシテ挫敗シ、計画ノ変更ヲ余儀ナクスルコト再三ニ止ラズ。唯夫レ粉骨碎身百折不撓ノ精神ヲ以テ之レニ堪へ、今ヤ漸ク其ノ曙光ヲ看ルノ機会ニ達セリ。不幸ニシテ父伊一郎去ル三十九年六十一才ヲ以テ逝去シ、今日ノ盛況ヲ閱ルニ至ラザリシハ甚タ遺憾トスル処ナリト雖モ、此皆父伊一郎ノ創見卓識ノ余恵ニ依ルモノ、而シテ父伊一郎ノ素志ヤ実ニ郷閭万衆ト共ニ手ヲ携へ以テ富強ニ進マントスルニアリキ。而シテ郷閭ノ素志ヤ今ヤ一段落ヲ告ゲ、時恰モ創業

長野縣北佐久郡三岡地方洋桃及莓栽培并鐘詰製造業經營書

長野縣北佐久郡三岡村

鹽川伊一郎 出品

緒言

余方家世々工匠タリシガ父伊一郎。

明治聖政ノ 皇恩ニ浴スルノ榮ヲ負フヤ、徒ラニ父祖ノ餘澤ニ沐スルヲ以テ足レリトセズ、果樹栽培ノ有益ナルヲ信ジ自ラ余ヲ伴ヒテ斯業界ニ投ズ。

然レトモ元ヨリ一ノ經驗ナキ無學ノ徒、加フルニモシキ資力ヲ以テス。其行程如何ハ平々坦々タルヲ期セン。即チ忽チニシテ家産ヲ蕩盡シ、或ハ斯業中道ニシテ挫敗シ、計劃ノ變改ヲ余義ナクスルコト再三ニ止ラズ。唯夫レ骨粉細身百折不撓ノ精神ヲ以テ之レニ堪ヘ、今ヤ漸ク其曙光ヲ看ルノ機會ニ達セリ。

不幸ニシテ父伊一郎去ル三十九年六十一才ヲ以テ逝去シ、今日ノ盛況ヲ閱ルニ至ラザリシハ甚々遺憾トスル處ナリト雖モ、此皆父伊一郎ノ創見卓識ノ餘惠ニ依ルモノ、而シテ父伊一郎ノ素志ヲ實ニ郷閭萬衆

農業經營

二代目伊一郎の著作

以来滿二十年ニ相当スルヲ以テ、聊カ父カ素志ヲ發展シテ広く国益ヲ計リ、以テ父ノ冥福ヲ祈ランコトヲ期セシニ、此時ニ當ツテ栃木県農會又斯業奨励ノ計画アリト聞ク。依テ不学不文ノ一農漢、執筆意ノ如クナラズ、殊ニ匆々ノ際其真相ヲ穿ツ能ハズト雖モ、聊カ研鑽スル一端ヲ記シテ、以テ同會ニ贈リ参

考ニ供ス。若シ夫レ斯業界ノ為メニ寸毫裨益スル所アルヲ得バ此レ父子ノ本懐ナリ。
冀こいねがわクハ大方ノ諸賢父子多年ノ素志ヲ諒トシ、指導是正ニやぶさか吝ナラザランコトヲ、蕪辭ヲ卷頭ニ掲ゲテ
緒言トナス。

明治四十二年二月

塩川 伊一郎

第一編 沿革

噴火山浅間山麓ノ地味甚クこつぐ礮确ニシテ、一反歩ノ收穫僅拾円内外ニ過ギズ。農民貧困ニ苦ム。如何ニセ
バ此瘠地ニ多額ノ産出ヲナサシメ、以テ農民ノ貧困ヲ救済スベキカトハ日常苦慮焦心スル所ナリ。有利
ノ事業トシテ第一ニ注意ヲ引起サシメタルモノハ苹果ノ栽培ナリ。

明治十八年東京芝区三田育種場ヨリ數種ノ苹果苗ヲ取り寄せ、之ヲ繁殖シ果樹園ヲ仕立テ当郡三岡村ニ
五反歩ヲ栽培セリ。次ニ小泉郡西内村ニ拾町歩ノ原野ヲ開墾シテ之ニ苹果苗ヲ栽培シテ心血ヲ注ギ栽培
シタルモ、資質氣候ノ宜シキヲ得ザルガ爲メ遂ニ失敗ニ歸シ明治二十六年全部ノ苹果園ヲ廃スルニ至レ
リ明年二十二年ヨリ支那種又ハ在來種ノ各桃樹ヲ栽培シタルモ皆結果不良ニシテ一モ成績ノ見ルベキモ
ノナクシテ終レリ。是レ其方法宜シキヲ得ザルト種類ノ雜駁ナルニ起因セリ。

偶モ當時小諸義塾ヲ開キテ幾多ノ人才ヲ養成セラレシ木村米國理學博士ノ久シク米國ニアリテ同國果樹

栽培ノ実況ニ明カナルヲ知り、同氏ニ就キテ我ガ風土ニ適スル果樹ノ指導ヲ乞ヒシニ、親シク風土ヲ調査シ米國種桃樹ノ有利ナル可キヲ指示セラレタルヲ以テ、直ニ東京赤坂興農園ヨリ數十種ノ洋桃種苗ヲ取り寄セ桃園ヲ開キ各種ヲ試験セリ。或ルモノハ良好ノ結実ヲ爲シタルモ、尚ホ樹勢萎縮シ其外ノモノハ皆数年ナラスシテ枯死シ、或ハ害虫ノ蝕害する処トナレリ。其原因ハ李砧^{ナシロカ}苗木ノ高燥ナル我風土ニ適セザルニ因レリ。

是レヨリ野性桃砧^{（日本か）}木ヲ選ミ前ニ選出シタル良種ヲ接木シ益々増殖ヲ謀レリ。選出種中「アーリーリバー」系ノ一種ノ如キハ樹勢強健ニシテ一株ニシテ二十貫以上ノ結実ヲナセリ。現今淺間水蜜桃ト称スルモノ之ナリ。是ヲ以テ洋桃栽培ハ此地方瘠地ニ適シテ多大ノ産額アルモノナルコトヲ認め、此ノ良種ヲ繁殖シテ自己ノ桃園ヲ設立シ、又同志ヲ勧誘シテ大ニ栽培普及を謀レリ。

洋桃栽培普及ノ方法トシテ、桃樹ノ結実後收利ノ曉ニ種苗代金ヲ支弁スル約束ニテ苗木ヲ売却シ、或ハ自ラ発起者トナリテ組合組織ノ桃園ヲ仕立テ、或ハ苗木ヲ寄贈スル等大ニ尽力シタルノ結果、小諸町信桃社、小沼村ノ東洋社、南大井村ノ甘桃社、栽培社、大里村ノ大里桃園其他岩村田町北大井村等ニ各組合ノ桃園設立セラルルニ至レリ。各個人モ亦桃園ヲ仕立ツルモノ続出シ、將ニ二百有余町歩ノ桃園ヲ見ルニ至レリ。而シテ其内自己ノ所有桃園ハ五町歩組合ニ加入シタル自己ノ所有部分六町歩ヲ積算スルニ至レリ。

創業当初ハ其目的専ラ生果販売ニアリシモ、長野県下ノ都会等ニテハ未ダ洋桃風味ノ嗜好ヲ知ラズ、到底其買客ニアラザリシヲ以テ輕井沢ノ外客ヲ以テ唯一ノ買客トセシモ亦外客ノ需用ニ限りアリ。依テ明

治三十三年東京横浜ニ販路ヲ開ケリ。初メハ姦商等ニ欺カレ腐敗ノ口実ノ下ニ多大ノ損失ヲ被ラサレタルモ、奮勵事ニ当リタルヲ以テ遂ニ信州洋桃ノ名声ヲ得ルニ至レリ。

然レドモ生果ノ生産額遽カニ激増シ、加フルニ洋桃ハ生果トシテ其保存力甚タ短キヲ以テ腐敗ニ腐敗ヲ重ネ大ニ損失ヲ被レリ。茲ニ於テ生果利用ノ方法トシテ洋桃缶詰ノ製造ヲ企テ同志ト謀リ明治三十四年洋桃合資会社ヲ設立スルニ至レリ。

三十四年十一月以來毎年糖煮缶詰ヲ閑院宮殿下ニ獻納ス。

明治三十五年西洋苺ノ栽培ヲ初メ洋桃缶詰製造ノ余暇ヲ利用センコトヲ企テ、各種ノ種類良否及ビ製造ノ適否試験ヲ行ヒ、漸次増殖シテ現今ハ四町五反歩ノ苺園ヲ有スルニ至レリ。畑ハ浅間山下一般ノ圃地ハ余リニ瘠薄ニシテ不適當ナルヲ以テ苺園ハ水田ヲ使用セリ然レ共一時ニ多数ノ田地ヲ借入スルハ小作人ヲ困却セシムルモノナルヲ以テ、水田收穫ノ全部ヲ彼等ニ支払ヒ苺園ノ手入ヲナサシメ肥料ト採集ノ手間ヲ苺園主之ヲ支弁スル約束ニテ前記ノ苺園ヲ設立セリ。

明治三十七年会社ヨリ分離シテ独立洋桃缶詰、苺ジャム製造所ヲ設立セリ。

明治三十八年塩川式剥皮器及塩川式核拔器ヲ發明セリ。剥皮器ハ人工ノ四倍ニシテ桃果三十貫以上ヲ剥皮シ、核拔器ハ人工ノ十倍ノ速力ヲ有シ二百貫内外ヲ核拔ス。而シテ剥皮面ハ美麗ニシテ離核面ハ美觀ナリ本器發明以前ニアリテハ工女一人ニテ平均一切仕上ケ迄二十五個ノ缶詰ヲ製造スルニ止リシガ本器ノ發明アリテヨリ一人ニテ一百個ノ缶詰ヲ製造シ得ルニ至レリ。故ヲ以テ工費ヲ節約スルコト多大ナリ。従テ製品ハ多大ニ産出セラレ廉価ニ販売シ得ルニ至リタルヲ以テ他産ト競争スル余力ヲ生ジ大ニ販

路ヲ拡張スルニ至レリ。

桃果ノ如キ一時ニ成熟スルモノハ勞力ノ足ラザルタメ腐敗ノ困難アリタルモ本器ノ發明ニ依リ斯ル困難ヲ救済スルニ至レルハ洋桃栽培及缶詰製造上貢獻少ナカラスト信ズ。

明治三十九年塩川式殺蟻燈ヲ發明特許ヲ得タリ。本器ハ害虫ヲ誘殺スルニ至大ノ効アリ。

今三十九年十月山梨県主催一府九県連合共進会ニ於テ洋桃糖煮缶詰及苺ジャムヲ出品シ何レモ三等賞銅牌ヲ受領ス。

明治四十年四月東京府博覧会ニ洋桃糖缶詰ヲ出品シ一等賞ヲ受領ス。

明治四十年塩川式第二剝皮器ヲ發明シ發明特許ヲ得タリ。本器ハ工女一人ニテ一百貫以上ノ剝皮ヲナシ得ベシ。

明治四十一年四月長野県主催全国缶詰業者連合大会品評会ニ洋桃糖煮缶詰ヲ出品シ一等賞ヲ受領ス。

今年京都主催全国生産品博覧会ニ洋桃糖煮缶詰及苺ジャムヲ出品シ三等賞銅牌ヲ受領ス。

同年九月長野県主催一府十県連合共進会ニ洋桃糖煮缶詰ヲ出品シ二等賞銀牌、苺ジャム三等賞銅牌ヲ受領ス。

今ヤ種々研究ヲ重ヌルニ随ヒ倍々難問題ニ遭遇シ、洋桃ノ乾燥ニ就テ斬新ナル製造法ヲ工夫シツツアリ近キ將來ニ其製造ニ着手セント欲ス。又同果実ヲ菓子ニ応用シ果実汁液ヲ搾取シ酒類ヲ醸造シ、又ハ果液ニ炭酸瓦斯ヲ含有セシメ香味アル飲料ヲ製造セントス。洋桃多大ノ産額ヲ生果販売、又ハ各種製造ニ使用シ以テ斯業ノ發展上、聊カ遺憾ナカラシメ、浅間山下礪礪地ノ生産力ヲ増進シ、以テ自ラ利スルニ

止マラズ広く民生ノ福利ヲ増進センコトヲ期スルハ我等父子ノ懇望ナリ。
終リニ去ル四十年末ニ於ケル本郡該事業ノ統計ヲ付シテ参考ニ資ス。

町村名	栽培別			計	産 數量	額 價格
	三年以上	四年以上	反別			
平根村	一反三〇〇	三反五〇〇		四反八〇〇	七〇〇貫	一〇五円
三井村	二六、四〇〇	一一、〇〇〇		三八、〇〇〇	五五〇	九七
志賀村	一、〇〇〇	二、〇〇〇		三、〇〇〇	二二〇	五五
岩村田村	一、〇〇〇	三七、〇〇〇		三八、〇〇〇	七、四五〇	一、四三八
高瀬村	二〇〇			二〇〇		
中佐都村		二、〇〇〇		二、〇〇〇	四〇〇	八〇
中津村	三、〇〇〇	四、〇〇〇		七、〇〇〇	四四〇	一一〇
三岡村	二〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇		一二〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	七、五〇〇
南大井村	八九、〇〇〇	九、一〇〇		一八〇、〇〇〇	二四、八〇〇	三、六八四
御代田村	二一、〇〇〇	二、〇〇〇		二三、〇〇〇	二二〇	五五
小沼村	一一、四〇〇	三九、〇〇〇		五〇、四〇〇	九、二四四	一、〇九九
北大井村	二五、〇〇〇	一八、〇〇〇		四三、〇〇〇	五、〇〇〇	七五〇
小諸町	三五、〇〇〇	六七、〇〇〇		一〇二、〇〇〇	一〇、二〇〇	一、二七〇
大里村	五、〇〇〇	一〇、〇〇〇		一五、〇〇〇	五、〇〇〇	七五〇

洋桃並苺罐詰製造高調

製造者姓名	洋桃		苺	
	数量	価格	数量	価格
南大井村	一、〇〇〇	五〇〇	七五	一五
春日村	一、〇〇〇	一、〇〇〇	—	—
脇和村	六、六〇〇	一、三〇〇	八八〇	九五〇
本牧村	五、三〇〇	八〇〇	一二〇	二四
北御牧村	—	二、〇〇〇	六〇〇	九〇〇
計	三二二、六〇〇	三九二、〇〇〇	二一五、八九九	一八、九八二
日本桃養株式会社	一五五、〇〇〇斤	一八、六〇〇円	一五、〇〇〇斤	三、一五〇円
塩川 伊一郎	一一二、六四〇	一一、三九〇	六八、二〇〇	一一、六七七
小山 清兵衛	三〇、〇〇〇	三、七〇〇	二〇、〇〇〇	五、〇〇〇
甘利 慶助	三〇、五〇〇	三、五三八	五、〇〇〇	三、〇〇〇
伊藤 義吉	一五、〇〇〇	一、八〇〇	二〇、〇〇〇	三、六〇〇
計	三四三、一四〇	四〇、〇二八	一二八、二〇〇	二七、四二七

第二編 洋桃園ノ經營

第一章 風 土

洋桃栽培ノ元祖タル三岡村ハ淺間山麓信越線小諸駅ヲ去ル東南方一里余ノ地ニアリ。今ヤ四隣各村ニ多
少ノ栽培ヲ見ザルナク、北佐久郡町村十九町村ニ及ビ尚ホ小県郡ノ一部ヲ侵蝕スルニ至レリ。然レ共其
最モ盛ナルハ三岡村南北大井小沼小諸等ニシテ、何レモ火山岩質壤砂土或ハ礫質壤土ナリトス。今農
商務省地質調査所土性課調査土性説明書ニ依リ、其理化学的分析表ヲ掲グルニ左ノ如シ。

地名	洗滌分析		科学分析	
	御代田	沓掛	沓掛	壤土
項目 土性	壤質砂土	礫質砂土	礫質	
一〇、ミリメートル以上	〇、一五	五、五四	水分	一八、八六
一〇、一八ミリメートル	〇、三一	三、三四	燃烧ノ際消失	一七、五一
九、一六、同	〇、五七	四、八四	炭素(腐植質)	一一、一八
六、四、同	一、九二	六、一〇	不溶解残物	五七、三七

石礫計	二、九六	一九、八一	酸塩ニ溶解セシ硅酸	〇、九二
原土中細土百分率	九七、〇四	八〇、一九	炭酸曹達ニ溶解セシ硅酸	一〇、五七
四、三、ミリメートル	〇、六八	三、四〇	硅酸合計	一〇、八六
三、一、二、同	二、四一	七、五〇	礬土	七、八四
二、一、一、同	四、七二	七、六二	一半酸化鉄	一、四〇
一〇、一〇、五同	一〇、四〇	一〇、八四	一酸化鉄	二、〇七
〇、五一〇、二五同	一一、四四	一〇、七八	石炭	一、〇九
〇、二五一〇、一同	二一、八六	二〇、七四	苦土	〇、一三
〇、一一〇、〇五同	一四、三六	一九、六二	加里	〇、〇三九
〇、〇五一〇、〇一同	二三、二四	一一、二二	曹達	〇、一四八
〇、〇一以下	七、六二	四、九二	磷酸	〇、〇七四
微細	〇、五一〇、二五	一四、五七	硫酸	〇、七九〇
土	〇、二五一〇、一	二七、八四	硫酸ニ溶解セシ礬土及酸化鉄計	一、二四〇
百分	〇、一一〇、〇五	一九、九五	同上硅酸	〇、七九〇
中	〇、〇五一〇、〇一	二九、五九	硫酸及收係数	二〇九、四八
組成	〇、〇一以下	九、六八	窒素吸收係数	五一、五八
分				
原土中細微土百分率	七六、二〇	五三、九五		
細土中細微土百分率	七八、五二	六七、二八		

主成分吸	加里	〇、〇六七
収量ヲ細	磷酸	〇、〇五〇
微土百分	加里吸收係数	一四〇、九四
中ニ改算	磷酸吸收係数	三四、七〇
ス		

同上原土	加里	〇、〇五四
百分中改	磷酸	〇、〇四〇
算	加里吸收係数	一一三、〇一
	磷酸吸收係数	二七、八三

右ノ如ク本土壤ノ養分ニ乏シキヲ以テ其礫礫ナルヲ知ル可シ。

聞ク世界ノ果樹園ヲ以テ著名ナル北亞米利加中其首脳タルハ「フレズノ」ナリト。而シテ同地ニ於テハ先ツ土地肥沃ナルトキハ葡萄、柑橘類ヲ栽植シ而シテ終リニ桃樹ヲ栽植スト云フ。故ニ専ラ瘠薄ナル地ヲ以テ此レニ充ツルモノノ如シ。我地方ノ土質亦此レニ似タルモノアルカ如シ。岡山県ニ於テモ亦平地ノ沃地ニハ苹果、柑橘等ヲ栽植シ、瘠薄ナル傾斜地ニ桃園ヲ開クト云フ。川崎地方ハ此等ニ比スレバ土質甚タ肥沃ニシテ殊ニ排水充分ナラサルガ如ク、從テ砧木ノ選定ニ或ハ植替ヲ頻繁ニ或ハ剪定整枝法ヲ極メテ短矮極度ニ行フ等繁雜ナル手数ヲ要スト云フ。氣候ハ此レヲ岩村田村郡役所ノ調査ニ徴スルニ左

ノ如シ。

	温度	湿度	降水日数	快晴日数	降水量	雲量
一月 (-)	〇、三	七六	四日二	一二日八	二九、五	三、三
二月 (-)	〇、八	六八	四、〇	八、四	四六、九	三、六
三月	三、七	六七	六、二	九、四	四七、〇	三、九
四月	一〇、九	七一	七、八	九、四	七二、三	四、〇
五月	一五、七	七一	八、五	七、二	九八、〇	五、二
六月	一九、七	六九	一二、八	八、二	一一五、八	五、八
七月	二三、六	六六	一二、三	七、六	一四一、八	六、一
八月	二四、七	七八	七、三	一〇、〇	九六、〇	五、四
九月	二〇、二	八一	一、二	九、八	一二九、二	五、九
十月	一三、三	八二	七、七	一二、二	一一一、四	五、三
十一月	六、八	七七	四、三	一五、六	四一、〇	三、八
十二月	一、九	八〇	三、七	一五、〇	二七、二	五、二

右ノ如ク冬期ハ極メテ寒サ酷烈ナリト雖モ敢テ樹勢ヲ損スルコトナク、唯春暖ニ至リ漸ク開花シ萌芽セ
 ントスルニ当リ往々突然トシテ襲来スル過度ノ低温ノ爲メニ花芽及葉芽ノ凍害ヲ受クルアルノミ。然レ
 トモ其被害ハ敢テ恐ル可キニアラザルコト後段ニ述ブル處ノ如シ、而シテ夏季ハ冬季ノ寒冷ニ比シテ頗

ル温暖トナリ、岡山地方ニ比スベクモアラザレ共、横浜地方ト大差ナキヲ見ル、加フルニ湿氣雨量ニ於テハ岡山県ニ比シ遙カニ少ナク、且其雲量モ常ニ少ナク日光ノ直射多キハ其湿度不足ノ悪結果ヲ幾分交互補供スルコトヲ得ベキガ如シ。只同地方ニ及バサルハ春暖ノ来ル稍々遅キト、殊ニ秋冷ノ来ルコト甚早キカ爲メニ、晩熟種ノ栽培利益アラザルニアリ。然レモ之ヲ関東地方供給地タル川崎地方ニ比スレバ土質ニ於テ氣候ニ於テ甚タ適切ナルヲ見ル。此故ニ砧木ノ選定ト剪定整枝法等ニ種々ノ差異ヲ来スヲ見ル其最モ著シキ類例ヲ舉クレハ、

砧木 当地方創業當時ニ於テハ、斯業ノ經驗乏シキ結果其苗木ヲ求ルヤ、単ニ種苗商ニ任シテ顧ミザリキ。然ルニ當時川崎地方ニ於テハ到底実生砧洋桃ノ徒ラニ繁茂成長シテ結果容易ナラス。即チ欧米ノ学説実験ニ基キ此ノ如キ肥沃多湿ノ土壤ニハ李砧ノ選ム可キヲ知り、桃苗ト云ハバ川崎向ナリシ際ナリシ爲メニヤ、本園購入ノモノ又多ク李砧ナリキ。然ルニ当地方ノ土質ハ前述ノ如ク砂壤土ニシテ下層ハ礫質ニシテ其層頗ル深ク排水甚タ可良ナリシカバ、李砧ノ桃苗ハ成長極メテ遅緩ニシテ、且ツ病虫害多ク当初数年良果ヲ結ビタルノミニシテ。他ノ実生砧ノ成長ニ比ス可クモアラズ。

剪定整枝ハ甚タ簡單ニシテ多ク盃状ノ短幹仕立ナリト雖モ、敢テ短矮ナル障壁誘引ノ如キモノニアラズ。即チ其高キハ六尺乃至八尺ニ及ブモ可成摘果ニ便ナルヲ度トスルノミ。而シテ剪定ノ如キモ他地方ノ如ク甚シク短縮スルトキハ翌年ハ全く開花ヲ見ザルノ悲境ニ陥リ。創業當時ニ於テハ専ラ欧米ノ著書或ハ川崎地方ニ習テナスノミナリシガ、多年ノ經驗ハ自ラ其適度ヲ発見シ得ルニ至レリ此レ土地乾燥ニシテ氣候モ亦乾燥ナルニ、快晴日数多ク雲量少ナク日光ノ直射多ク、従テ樹勢ノ成長ハ常ニ適

度ニ抑止セラレテ花芽ヲ多数附スルヲ以テナラン。

施肥法 桃園ニ於テハ樹根ノ成長繁茂充分ナル爲メニヤ、敢テ其施肥法他ト異ナル所ナキモ果樹ノ窒素多量ハ種々失敗ヲ見ルモ、本地ハ其土地甚タ瘠薄ナルカ爲メ比較的多量ヲ要ス。

母栽培ニ於テハ窒素肥料ハ必ず茎株上ヨリ直接施サザレバ其肥効甚ダ乏シ。此レ土性ノ窒素吸収量ノ甚タ乏シキニ依ルナランカ。此亦風土ノ教フル處タリ。

病虫害ノ防除氣候乾燥ナルト冬氣寒威凜烈ナルカ爲メ発生甚ダ少ナク爲メニ防除ニ手数費用ヲ要スルコト從ツテ少ナシ。

第二章 種 類

創業當時ニ於テハ専ラ生果販売ノ目的ナリシ爲メ當時世人ノ此等ニ對スル嗜好ハ甚タ進歩セズ。洋桃ト云ヘバ天津水蜜桃ノ歡迎セラルル狀況ナリシ故天津種ヲ主トシ併セテ上海種ヲ栽植シ傍ラ各種ヲ栽植シテ其適否ヲ比較研究シ、次第二「アムステンジユレ」「アーリーリバー」種ヲ増殖セシニ、時勢ノ変遷ハ次第二天津種ヲ排スルニ至リタルト、生果販売ノ一途ニ出ツルノ危険ナルヤ、罐詰製造ヲ始ムルニ至ツテハ天津種ハ殆ント取ルニ足ラサルヲ以テ漸次改植シ、現今ハ「アムステンジユレ」「アーリーリバー」ノ兩種ヲ主トシ、其他ノ洋桃種ヲ合セテ約七分、支那種水蜜桃三分ノ割合ナリ。今主ナル種類ニ就テ其特性ヲ摘記スレバ左ノ如シ。

一 「アムステンジュレ」中三種アリ。早種粘核種ニシテ其外皮鮮紅色果形中大ニシテ圓形全果稍々同一ニシテ大小不同ナク七月中旬ニ熟ス。樹ハ強健ニシテ害虫ニ罹ルコトナシ。

中熟種ハ外皮曇紅色、或ルモノハ大果、或ルモノハ小果ナリ。樹勢中等、七月下旬ニ熟ス。

晩種ハ中熟種ト樹勢果形殆ント同一ナレモ、果ハ大小不同ニシテ結実ハ前種ヨリ少ク、八月下旬ニ熟ス。「アムステンジュレ」種ハ概して盛季一株十貫匁以下ナリ。市鬻^いニ適シ又罐詰ニ適ス。

二 「アーリーリバー」系種浅間水蜜桃本種ハ先代ノ発見スル所ノモノニシテ、当郡ニ洋桃栽培事業ノ勃興セルハ本種ノ発見ニ依ル。桃園ヲ設立スルニ本種ノ移植割合ノ多少ニヨリテ桃園ノ収支ニ影響シ本種ノ移植ナキ桃園ハ損害失敗ノ悲境ニ陥レル实例ニ乏シカラス。

浅間水蜜桃ハ粘核種ニシテ果形正圓ニ近く、外皮日光ニ面スル部分淡紅色ニシテ、其他ハ青白色果肉白色、甘味多ク漿液ニ富ム。樹勢強健、最モ土質ニ適シ、害虫ト霜害トニ罹ルコトナシ。盛季ハ一株二十貫以上ノ結実ヲナシ市鬻及ビ罐詰トナスニ適スル最良種ナリ。八月上旬ヨリ成熟ス。

三 天津水蜜桃ハ大果ニシテ内質硬ク外皮及果肉カ赤色ナリ。味^いヒ宜シカラズ。然レドモ輸送ニ適シ又他果ニ比シテ保存力久シキヲ以テ市鬻ノ目的ニテ栽培ス。

罐詰トナストキハ鉄氣ノ爲メニ罐詰ノ「シラップ」ヲ変色シ黒色トナス外觀悪キヲ以テ罐詰ニ使用セズ。樹勢中等害虫ノ患ナシ八月中旬ニ熟ス。

四 「ダブルモウンテン」ハ離核種ニシテ浅間水蜜桃ニ酷似スルモ形小ナリ。樹勢強健ナルモ結実少ナシ。八月中旬ニ熟ス。

五 上海水蜜桃ハ粘核種ニシテ果形大圓、桃肉白色外皮鮮紅色ヲ帯ビ頗ル美大ニシテ樹勢中等ナリ。虫害及霜害ニ罹リ易シ。果ハ袋掛ヲ要ス。輸送ニ堪ヘ保存力強ク市鬻ニ宜シ。又罐詰トスルニ適ス。本種ハ六七年ヨリ良ク結実スルモ、若齡ニテハ結実悪ク栽培ニ多ク熟練ヲ要ス。九月上旬ニ熟ス。

六 「クロホードアリー」ハ離核種ニシテ大果圓形外皮向陽ノ部分ハ紅曇ヲ被リ其他ハ黄色香佳快最モ良種ナリ。樹勢強健ニ過ギ發育ヲ抑制スルニアラザレバ結果シ難シ。害虫ノ被害ヲ受クルコトナキモ霜害ニ罹リ易シ。袋掛ヲナス可シ。輸送及保存ニ堪ヘ当ニ市場ニ最大高価ヲ占ム。又罐詰トナスモ頗ル美觀ナリ。栽培に熟練ヲ要ス。九月下旬ニ熟ス。

七 「クラホードレート」ハ前種ト殆ド同シ九月下旬ニ熟ス栽培困難ナリ。

八 「オレンジクーング」ハ大顆皮肌黄色淡黄色ニ暗紅色ヲ被リ甘味多量黄肉種洋桃中ノ逸品ナリ。市場高価ヲ占ムルヲ以テ罐詰トナシ難シ。樹勢及栽培ノ難易等ハ「クロホードアリー」種ト同ジ。九月中旬ニ熟ス。

其他数十種ノ洋桃種アリ。今尚ホ試験継続中ニ付追テ其結果ヲ報道スルノ機会アル可シ。

第三章 苗木ノ育成

明治二十二年創業当時苹果苗木共二三田育種場ヨリ二十数種ヲ輸入シ、後明治二十四年東京興農園ヨリ十数種ヲ輸入ス。其後更ニ埼玉県安行地方ヨリ数種ヲ輸入試植シ以テ其後類ノ適否ヲ調査スルト共ニ其

苗木養成法ノ相違ガ我風土ニ如何ナル關係アルヤヲ注意ラザリキ。即チ栽培ノ難易、地質ノ適否、病虫害霜害寒害ノ罹否、結実ノ多少、樹勢ノ強弱、及品質ニ及ボス影響等ヲ調査セルニ、前述セル如ク李砧ノ苗木ハ同ク失敗ニ歸セリ。尤モ該種ハ世説ノ如ク樹枝ノ成長遲緩ニシテ能ク枝幹擴張シテ直立スルコトナク從テ結果早く、又初年ニ於テハ美質豊大ナル良果ヲ結ブコト事實ナレドモ、其生長余リニ遲緩ニシテ樹勢徒ラニ虚弱ニ陥リ易ク、為メニ数年ニシテ結果不良トナリ、病害ニ罹リ易ク、又霜害ニ冒サレ易ク、樹齡甚タ短カシ。普通五六年ニシテ全盛期ヲ終リ到底収支相償ハス。

右ノ如クニシテ注意調査セル結果ハ野生桃砧木ニ接種増殖スルノ最モ優良ナルヲ確ムルニ至レリ。即チ此養生苗木ハ樹勢旺盛ニシテ發育良好ナリト雖モ、風土ハ常ニ之ヲ適度ニ抑止シテ、無用ノ成長ヲ防止シ剪定整枝ノ勞ヲ除キ、而カモ病虫害ヲ受クルコト少ナク、又霜害ニ堪フル力甚ダ強ク為メニ年々多数ノ結果枝ヲ生ジテ常ニ豊産ナルヲ以テ、此方法ニ基キ自園ノ増殖ヲ図ルト共ニ、同志者ニ分配譲与シタルニ世運漸ク熟シテ洋桃栽培ノ声漸ク大トナリ、年々二万本以上ノ希望者ヲ見ルニ至レリ。左レバ到底自園ノ微力此レガ需用ヲ充スベクモアラス、左リトテ此好機ヲ逸セバ又新進氣鋭ノ銳鋒ニ徒ラニ挫折セシメ、再ビ好機ノ熟成ヲ待ツコト至難ナルヲ以テ、埼玉県安行地方ノ同志者ト相詢リテ接穂ヲ輸送シ指導ノ許ニ此レヲ養成セシメ以テ其需用者ヲ満足セシムルヲ得、今日ノ隆盛ヲ見ルニ至レリ。

爾來毎年此繁殖法ヲ繼續シ、毎年当地方ヨリ接穂ヲ同地ニ輸送スルモノ石油管入、多キハ五六十少ナキモ二十個ニ及ブ。

接木養成法專ラ切接法ニ依ルモノニシテ、予メ野生養生実生砧木ノ直径五分、若クハ一寸以下ノモノヲ

発芽セントスルノ候、即チ四月上旬（是ヨリ以前ニ採取スレバ尚宜シ）ニ砧木ヲ採取シテ土ニ埋レシ部分ヨリ一寸五分位ノ処ニテ裁断シ、二三芽ヲ存セル接穂ヲ上皮ヨリ少シク木質ヲ削リ砧木ノ平滑ノ部分ヲ選ミ、一寸位浅ク削キ下シ是レニ接穂ヲ挿入シ、打藁ニテ縛シ畦ニ植テ接芽ノ上五分程マテ土ヲ蔽ヒ、接着スルヲ待チ土ヲ除キ施肥シテ苗木ヲ仕立ツルナリ。

桃ハ活着困難ナルモノニシテ最初ハ活着三分位ニ止マリシガ、接穂ヲ準備スルノ方法ヲ取りシ以来現今ハ六分以上活着ヲ見ルニ至レリ。

接穂ヲ準備スルハ春季未夕樹液ノ循環ヲ始メザル前ニ適當ナルモノヲ切断シ、日陰地ノ土中ニ埋藏シテ生藁わら又ハ筵むしろニテ周圍ヲ蔽ヒ、接穂ノ乾燥セサル様注意シ、接木ノ期節ニ之ヲ使用スルナリ。接木期節ニ採取シタル接穂ハ活着歩合少ナキモノナリ。

野生砧木ノ養成ニハ九月登熟セル野生桃実ヲ採果シ肉付キノママ予メ深サ一尺計リニ掘レル土窟中ニ埋藏シ上方五寸許リ幾分土ヲ盛り掛ケ放任シ、十二月頃二三回灌水シテ冬季ノ嚴冬ニ遭遇セシムルトキハ内部腐敗シ核自ラ分割シテ春四月掘出セバ已ニ半数以上ハ分割セリ、分割セザルモ輕キ（不明）ヲ以テ叩ケバ直ニ分割シテ種子出ツ。依テ之ヲ準備セル圃場ニ畦巾一尺五寸ニ（不明）筋ヲ切り三寸距テ下（不明）シ土ヲ蓋フニ週間位ニシテ發生スルヲ待ツテ下肥ノ希薄ナルモノヲ肥取（不明）荷ヲ凡ソ二三畝ニ分植ス。其後発育ノ狀況ニ依リ施肥スルコト二三回ニ及ブコトアリ。何レモ除草ニ注意スベシ而シテ秋季ニ至レバ已ニ直径五寸ニ達スルヲ以テ、砧木ニ適ス畢竟施肥ハ年内ニ砧木タルノ成長ヲナサシムルヲ以テ適度トス。翌春接木ノ時季ニ先立チ掘取り、日陰地ニ寄植シテ発芽ヲ防止す。

第四章 栽植法

新タニ原野ヲ開墾スルモノアレ共、多クハ已ニ開墾ヲ終リ嘗テ穀菽類ヲ栽培セル圃場ナリト雖モ、土地瘠薄ニシテ比較的土壌広潤ナル故ニ寧ロ多大ノ勞費ヲ投シテ新圃ヲ開墾スルニ優レリトス。

栽培期ハ春秋二季アレ共、通常秋植ヲ以テ可トス。秋植ハ翌春生長早く為メに其三年目ハ春植ノ四年目ト相当スルニ至ルモノナリ。即チ晩秋の候農閑ヲ俟ツテ圃地ヲ鋤耕シ雜草、木根、草ヲ除キ繩張ヲナシテ二間一尺に二間乃至二間二尺ニ二間、約七八十本菱四ツ目植法ニ依リ、交叉点ニ木杭ヲ立テテ目標ヲ定メ移植ニ適ス可ク、植穴ヲ掘リ起シ苗木ハ根ヲ五六寸ニ切斷シ、且ツ傷根等ハ必ズ之ヲ除却シ、主幹ハ仮リニ一尺五六寸ニ剪定シ之ヲ栽植ス。栽植ニハ可及的淺植ヲ可トス。然レトモ根際ノ土中ニ埋没セラル部分ヲ顯ハスハ宜シカラズ、植付終ラハ根際ニ高ク土ヲ盛り掛ケ、以テ寒サヲ防ギ翌春發芽ノ候ニ至リテ搔キ均ラス可シ。(但シ春植ノモノハ盛土ヲ要セス)

第五章 剪定整枝

初テ春盛土ヲ搔キ均ラスト同時ニ地上約八寸ニ剪定シ三芽ヲ残シ他ノ發芽ハ悉ク之ヲ摘斷ス。二年目ニハ各主枝ヲ八寸乃至一尺ニ剪定シ、盛夏綠芽ヲ摘斷シ予メ盃狀形整姿ノ準備ヲナス可ク、又各主枝二三

芽ノ發育ヲ助ケ三年目ニハ直立シタル徒長枝ヲ剪除シ密生シタル枝梢ヲ截除シ、其他ノ枝梢ハ長梢ハ梢々強ク短梢ハ僅カニ其梢頭ヲ剪採シ、以テ結果枝ヲ養成スルト同時ニ可成内方ヲ疎除シ外方ニ拡張セシム可ク、二三ノ主枝ヲ養成ス。此クシテ四年後殆ント同様ノ方式ニ依ルモ専ラ冬期剪定ノ一回ニシテ夏季緑枝剪定ヲ行フコトナキモ敢テ徒長ニ過クルコトナク、能ク花芽ヲ結ブ。己ニシテ十一二年ニ至レバ主枝ノ高サ六尺以上トナリテ樹勢自ラ衰弱シ、下方ニ結果枝ヲ生スルコト少ナク從テ剪定ニ摘果ニ或ハ收穫ニ病虫害妨除等ノ保護手入ニ不便不尠ニ付、適宜主枝ヲ伐採シテ新梢ヲ發セシメ旧幹ト更新ス。十年前ト雖モ樹勢衰弱ノ程度如何ニ依リ其衰弱セル枝ハ短ク剪定シテ勢力ヲ回復シ、或ハ適宜主枝ノ各部ヲ伐採シテ新梢ヲ發生セシメ、以テ旧枝ニ更新ス。往々此際樹種ヲ改良スル爲メ二三ノ強壯ナル接穂ヲ切接法ニ依リテ行フコトアリ。此法ヲ行フトキハ能ク接着スルモノナリ。

第六章 耕耘肥培

除草ハ春開花前即チ四月下旬、五月下旬、六月下旬、七月中旬、八月中旬、九月中旬ノ六回ナレドモ栽植當時二三年間ハ大抵間作ヲナスガ故ニ特ニ行フモノナリ。其後ハ必ズ之ヲ行フ。器具ハ幅一尺二寸ノ大除草器（万能^{まんのう}）ヲ使用スルガ故ニ一反歩凡ソ二人ノ行程ナリ。元來果樹園ニ於ケル雜草ノ繁茂ハ土中水分ノ蒸發ヲ促シ、且ツ地温ヲ低下シ果樹園ノ乾燥ヲ來シテ、果樹ノ結果品質ヲ劣悪ナラシムルモノナレバ勉メテ行フヲ可トス。又間^{不明}□ニ依リテ間作ヲ永續スルモ共ニ不利ナリ。

中耕ハ殆ンド行フモノ少ナク、只除草ノ際除草器ニ依リテ浅ク表土ヲ多少攪拌スルニ過ギズ。己ニ栽植後十年ノ久シキ未ダ嘗テ行ヒシコトナキ果樹園アレドモ収量品質ニ敢テ影響ヲ見ザルモノアリ。是当地方ノ表土輕^{不明}ナルト下層ハ疎道ナル礫質地ニシテ排水能ク樹根ノ繁茂蔓延自在ナルトニ因ルナル可シ。肥培ハ専ラ開花前ニ一同ニ行フ者ニシテ、其一株ニ対スル標準ハ凡ソ左ノ如シ。

年次	大豆粕		石灰	合計價格	含有三成分		
	硫	酸			窒素	磷酸	加里
初年	五匁	四〇匁	一匁	四〇五〇	二一匁一四	一匁八〇	四匁一四
二年	五	四〇	一	〇五〇	二一、一四	一、八〇	四、一四
三年	七	五〇	一	〇七五	二八、四〇	二、五一	五、八〇
四年	一〇	五〇	一〇〇	一〇五	三九、四八	一八、六〇	九、二八
五年	一二	六〇	一二〇	一二五	四二、五四	二二、三二	九、九四
六年	一五	六〇	一五〇	一四五	五一、六三	二七、九〇	一二、四二
			外木炭三〇〇				

七年目ヨリハ結果如何ニ依リ一株ニ付十五錢乃至二十錢以内、即チ反当金十円乃至十五円ヲ施スモノトス。又收益金ノ一割ヲ準備金トシテ適宜三成分ノ調合ヲナシ施ス可シ。肥料ノ種類ハ適宜廉価ノモノヲ用フ。即チ油粕、魚粕、米糠等ヲ使用ス。

施肥ハ開花前一回ニ施スヲ可トスレドモ、果実成熟ニ近キ往々落下スルコトアリ。多クハ燐酸肥料ノ欠乏ニ因ルカ如ク、此ノ如キ場合ニハ速ニ硫酸「アンモニヤ」及過燐酸石灰ヲ混合施用ス可シ。又七八年目後ヨリハ木灰五百匁乃至一貫匁ヲ増施シ、或ハ硫酸加里ヲ加用スルモ結果ヲ奏スルモノナリ。

第七章 患害ノ種類及防除法

当地方ハ冬季寒酷烈ニシテ年間乾燥シ排水極メテ佳良ニシテ、果樹ニ對シテハ絶好ノ天恵ニ浴スルヲ以テ諸種ノ害虫ハ其發生發育ヲ妨害セラレ微菌類モ亦夕從テ少ナク、被害ノ程度自ラ他ニ比シテ輕微ナリ。然レ共栽培面積ノ擴張ト共ニ嘗テ甚シカラザリシ病虫害モ次第ニ好境遇ヲ与ヘラルルノ機會ヲ生ジ氣候變化ノ過々誘フコトモアランカ猛然トシテ其虚ヲ突カントスルノ場合ナシトセズ。又新病虫害ノ輸入ノ如キ又常ニ注意怠ル可カラザルモノナレバ、徒ラ天恵ニ甘ンジテ人爲ヲ尽サザルガ如キハ決シテ策ノ得タルモノニアラズ。依テ現今知ラルル所ノ一班ヲ左ニ掲ゲン。

一凍傷初春樹液ノ循環旺盛トナリ、發芽開花ヲ催サントスル頃、俄然トシテ温度低下シ結霜下雪トナルコト少ナカラズ。此際葉ハ萎縮病トナリ、又ハ膨張シテ恰モ人ノ火傷ト同一徵候ヲ呈ス。而シテ温暖ノ候ニ至リテ脱落ス。病葉自然ニ脱落スルニ委スルトキハ樹勢衰へ結実ハ落下スベシ。之ヲ予防スルニハ開葉後猶予ナク、其病葉ヲ摘除ス可シ然ルトキハ被害ヲ免ル可シ。

花モ亦凍傷ヲ被リ花梗白變シテ脱落ス。然レドモ花ハ一芽ニ一花若クハ二花ヲ存スレバ、結実ニ差支

ナキヲ以テ、結局間接ノ手数ヲ省略スルヲ得ルニ止ル。又桃花ハ梢頭ヨリ次第ニ下方ニ開花スルモノニシテ、其間一週間以上ノ日子ヲ要スルヲ以テ、早キハ梢頭ノミニ止リ、其後ニ開花スルモノハ結実ス可シ。蓋シ桃花ハ花粉ノ交接終リタルモノハ凍傷セラルルコトナシ。

一心虫樹皮中ニ蝕入シ樹膠ヲ生ス。又ハ樹根ヲ一周蝕シテ枯死セシムルコトアリ。皮ヲ剥キ針金ニテ刺殺ス可シ。

一象鼻虫緑芽及果梗ヲ刺採シテ落下セシム被害ハ至ツテ少ナシ。

一蛾虫ハ緑芽ニ附着シテ養分ヲ吸収ス被害ノ激甚ナルモノハ樹ノ發育ヲ妨ゲ甚シキハ枯死セシム。石油乳劑又ハ煙草イキスヲ注射シテ驅除スベシ。

一ユカキ虫ハ肉眼ニテハ殆ント認識シ難キ一小虫ニシテ、緑葉ノ中心ニ□ノ如ク又ハ□ノ如ク蝕入シテ穴ヲ穿ツ。而シテ其發生スルヤ全樹全園ニ及ビ、其葉ハ雨ノ如ク落下ス。而シテ其被害果実ノ生熟期又ハ果実ノ發育期ニ發生スルトキハ、樹ノ發育ヲ停止シ果実ハ生熟スルコト能ハズ。果実硬化シテ澁酸激烈到底口ニスルコト能ハズ。昨年神奈川県川崎地方ニテハ全桃園皆該虫ニ被害セラレ果実販売ニ供スルコト能ハズ。タメニ園主ノ損害非常ナルコトアリキ。実ニ戦慄ス可キ害虫ナリ。当地ハ寒地ノタメニ予防セラレ被害少ナキハ実ニ天賜トシテ感謝セザル可カラザルナリ。縦令該虫ノ發生スルコトアルモ其發生期ハ川崎地方ノ如ク果実ノ成熟以前ニアラズシテ果実採集ヲ終リタル以後ナルヲ以テ、其被害ハ僅少ナリ未ダ完全ナル驅除ヲ防ナシ。

一カビ病秋季ニ發生ス。樹勢衰弱ス。之ヲ予防スルニハ石灰乳又ハ苦汐等ノ稀溶液ヲ「ブラシ」ニ浸シ

テ刷除シ直ニ絶滅ス可シ。

一其他害虫アリト雖モ被害甚シカラズ。

第八章 摘果及袋掛

摘果法桃樹ハ全枝ニ開花スルモノニシテ其假放任スルトキハ、全枝ノ花皆結実シテ果ハ甚タ少トナリ味悪ク市場ノ販売品トナスコト能ハズ。而シテ樹ハ年成リト称シテ次年ハ結実休止ス。斯ノ如クナルトキハ損害少カラズ此虫害ヲ免ルルタメニ摘果法ヲ施行ス。

摘果ヲ行フニハ花収リテ果実ノ小豆大トナリタルトキ、一枝ニ三四個ヲ残シテ其他ヲ摘去ス。残ス一芽中ニハ可成中央ヲ残ス可ク、又一枝ニツキテモ枝ノ元ノ部ハ樹液ノ凝集過激ニシテ落下スルコトアリ。仮令結果スルモ小ナルヲ免レズ。余リ前段ハ樹液ノ凝集少クシテ小ナルヲ免レズ。又先頭ノ心芽葉芽ノ勢力旺盛ナルニ制セラレテ落下ス可シ。此等ノ害ヲ免ルルニハ必ず中心ヲ残サザル可カラズ。第二回ニハ大豆大トナリタルトキニ、太ク長キ枝ハ三個トナシ弱ク小ナル枝ハ二個トシ虫蝕又ハ發育不良ナルモノハ悉ク摘去ス可シ。第三回目ニハ太キ枝又頂上ノ枝ニ二個ヲ存シ細ク小ナル枝ハ一個トス可シ。尚ホ衰弱セル枝又ハ密生シタル枝ノ果実ハ摘去シテ翌年ニ於ケル樹勢ノ平均ヲ保チ將來ノ結果ニ予め注意セザル可カラズ。

袋掛ハ小指頭大トナレル頃上海種其他二三種ノモノニ行フ。收穫二三日前摘去シテ日光ニ浴セシメ色澤

ヲ附ス。然レドモ当地方ハ必ラズシモ袋掛ヲ要スルモノニアラズ。

第九章 収 穫

外面紅ヲ潮シ香氣ヲ発スルニ至レバ枝幹ヲ損セザル様、又一株毎ニ多大ノ注意ヲ払イテ熟シタルモノヲ見落サザル様摘採ス可シ。若シ残ストキハ忽チニシテ腐爛シテ市場ニ鬻クベカラズ。又果実ノ熟スルハ一種ノ醗酵作用ニ依ルモノナルヲ以テ、熟シタルモノヲ存スルトキハ其酵母忽チ他果ニ伝染シ未ダ熟期ニ至ラズ即チ充分肥満セズシテ熟スベシ。或ルモノハ小部分ノミ熟シテ他ノ部分ハ硬澁ナルコトアリ。或ハ果小ニシテ全樹早熟スルノ恐レアリ。故ニ熟期ヲ長カラシメ完然豊肥ナル熟果ヲ収ムルニハ毎日檢視シテ熟果ヲ摘採ス。此レ全熟果収穫上最モ注意スベキ要点ナリ。

然レドモ収穫ノ適期ハ用途ニ依リテ多少ノ差異アリ。即チ罐詰製造用果ハ手ニテ握リ弾力アルヲ宜トシ遠距離ノ市場ニ輸送スルニハ果形完備スルモ未ダ柔軟ナラザルモノヲ可トシ、近キ市町村ニ販売スルモノハ全熟シタルモノヲ宜トス。

第十章 利 用 法

生果販売トナスノ外、冷蔵庫中ニ貯蔵シテ不時ニ販売ス可シ。其他種々ノ用途アリテ数フ可ラスト雖モ、

其主ナルモノヲ挙ゲンニ之ヲ製造セバ洋桃糖煮罐詰、同「ジャム」、「ヒーチ」、「ブランデー」、乾果砂糖煮、「シロップ」、「桃ゼリー」、桃羊羹、炭酸瓦斬含有飲料、桃酒等アレドモ、現今当地方ノ主要ナル用途ハ過半ハ生果ニテ販売セラレ其半数ハ糖煮罐詰ノ原料トナリ加熱シテ運搬ニ堪ヘザルハ「ジャム」ノ原料トナリ、製造ノ外皮ハ桃酒ノ原料ニ供セラル。

第十一章 販路及価格ノ変種

東方面ハ東京、横浜、高崎、前橋、桐生、足利、松枝地方及西方面ハ上田、長野、諏訪、松本、高田、直江津等ナリ。販路ハ前記ノ如ク広大ナリト雖モ、値段ニ高下アリ。時ニ腐敗ノ惨害ヲ被ルコト少カラズ。桃ハ果肉柔軟ニシテ損傷シ易ク、殊ニ盛夏ノ候ナレバ幾日モ貯蔵スルコト能ハズ生果販売トシテハ甚ダ不安定ナルヲ免レズ。然レドモ当業者販売組合ヲ組織シテ個々ノ競争ヲ避ケ冷蔵倉庫貯蔵ノ方法ヲ利用シ、一時ニ累積スル多量ノ出荷ヲ制限シ、暫次冷蔵貨車ニ依リテ輸送シ蒸熱ノタメ敗肉スルヲ避ケ、以テ細心留意、熟練者ヲシテ販売セシメ大利ヲ博スルニ至ル可シ。

価格ハ明治二十八年ハ百貫匁金四拾圓、同卅年ハ三十圓、三十二年ハ二十五圓、三十四年ハ二十圓、三十六年ハ拾八圓、卅八年ハ十六圓、四十年ハ十二圓、四十一年ハ十五圓ナリトス。

第十二章 経 済

多年栽培ノ結果ニ基キ調査セル拾ケ年収支計算表ハ左ノ如シ。

年次	支		出		計		収		益	
	地代	肥料代	人員	金額	雑費	計	果実収益	金額	計	益
一年	五,000	五,000	七人	二,000	苗木 四,000 間作費 七,000	二,000	—	—	五,000	損 一三,000
二年	五,000	三,000	三	一,000	苗木 五,000 間作費 一,000	一,500	—	—	六,500	損 七,500
三年	五,000	五,000	三	一八,000	間作費 三,000 雑費 一,000	一五,000	—	—	九,000	全 六,000
四年	五,000	五,000	一七	三,000	雑費 一,000	一八,000	一四,000	一七,000	一六,000	全 一四,000
五年	五,000	八,000	三五	七,000	一,000	二二,000	二八,000	三六,000	三六,000	益 一四,000
六年	五,000	一,000	七	八,000	一,000	二四,000	四九,000	三八,000	三八,000	全 一四,000
七年	五,000	一,000	四六	三,000	一,000	二五,000	七,000	八四,000	八四,000	全 五,000
八年	五,000	一,000	四六	一三,000	一,000	二五,000	七,000	八四,000	八四,000	全 五,000
九年	五,000	一,000	四六	一三,000	一,000	二五,000	七,000	八四,000	八四,000	全 五,000
十年	五,000	一,000	四六	一三,000	一,000	二五,000	七,000	八四,000	八四,000	全 五,000
計	五,000	七,000	二二六	六四,000	二九,000	二,三九,000	三七,四五〇	四,九五,〇〇〇	四,七六,〇〇〇	差引総利益 二八,六〇〇

今右調査ノ上最モ必要ナル勞力調査ヲ示スコト左ノ如シ。

項目	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年
整地	三〇人						
栽植	三〇						
施肥	一〇	二〇	二五	二五	二五	二五	二五
除草第一回				一〇	一〇	一〇	一〇
第二回				一〇	一〇	一〇	一〇
第三回				二〇	二〇	二〇	二〇
第四回				二〇	二〇	二〇	二〇
第五回				二〇	二〇	二〇	二〇
第六回				一五	一五	一五	一五
計				九五	九五	九五	九五
剪定		一〇	二〇	二五	二五	二五	二五
摘果			五	一五	四九	六〇	一六
袋掛	(袋張古新聞代一圓四貫目八百 枚二千二百袋一袋約三毛ツツ 二人二千袋掛ヲ標準トス)						
但シ特別ノ種類				七〇	一〇〇	一四〇	一四〇
患害防除		五	五	一〇	一〇	一〇	一〇

以下同シ

収穫	—	—	七 <small>一人六十二</small>	四六	八〇	一〇〇
計	七〇	三五	六二	一七〇	二二五	二七〇
						三四六

今当地方ノ普通農作物ノ經濟ト对照センガタメ、左ニ最モ普通ナル桑園ト多小夏作大豆ノ圃場二町歩ノ収支計算ヲ掲ゲン。

支出 麦 作(冬)

大豆(夏)

小作料

一反歩四塚一塚粃一斗五榊 五〇、〇〇〇円
 四十塚大石粃六斗五円換

麦ノ跡作ニ付小作料不要

種子

一塚一榊一町歩四十塚四斗 四、〇〇〇
 一石拾円換

一塚五合一町歩計 一円八〇〇

整地

一人四塚計十人 三、〇〇〇
 一人三十錢

施肥及下種

一人四塚計十人一人三十錢 三、〇〇〇
 厩肥八百貫勿約二十駄六円

一人四塚計拾人 三、〇〇〇
 粃傭ノ焼肥ニ下肥灰ヲ混ス

肥料

過磷酸石灰四十貫六円 一八、六〇〇
 下肥二十荷六円六十錢

下肥反二荷計二十荷六円六十錢 一〇、六〇〇
 木灰反十貫計二百貫四円

中耕	二回一人四塚計二十人	六、〇〇〇	四塚一人一回十人二十人	六、〇〇〇
麦踏	一反歩一人計十人	三、〇〇〇	—	—
收穫運搬	四塚二人計二十人	六、〇〇〇	二十人	六、〇〇〇
調整	一人麦扱十二束計廿七人	一〇、八〇〇	一塚六束計二百四十束	九、〇〇〇
荷造費	仕上五人十俵計九人(十六俵)	一、一二〇	一塚二斗升計八石八升十七俵	一、二〇〇
小計	依一個五錢繩二錢計十六錢	一〇五、五二〇		三七、六〇〇
支出累計金百四拾參円拾貳錢				
収入	小 麦		大 豆	
穀実	八石(石拾円換)	八〇、〇〇〇	八石八斗(石九円換)	七九、二〇〇
稿稈	十三駄	四、二三〇	十三駄(□二四駄)	三、二五〇
小計		八四、二三〇		八二、四五〇
収入累計	金百六十六円六十八錢			
差引利益金貳拾參円五拾六錢				
一万年 平均	金二円三十五錢六厘			
桑園一町歩収支計算 (植付后借入ル場合トス)				
一 小作料(一塚四百株計一万六千本)				一五〇、〇〇〇

〔反三円七十五銭〕

一 肥料 春秋二回一回下肥一塚四荷計四十貫 一〇六、六〇〇

五十三円三十銭二荷一駄一円の割

一 施肥 二回一人四塚一回拾人計式拾人 六、〇〇〇

一 中耕 四回一人四塚一回拾人計四拾人 一一、〇〇〇

一 株直 一人二塚計二十人 八、〇〇〇

小計 一八八、六〇〇

一 收穫 十六株一束計十束一塚八円四十塚計 三二〇、〇〇〇

差引利益金參拾壹円四拾銭（並の大きさ）

一カ年 平均金三円拾四銭

以上二例ト比較スルニ其利益実ニ古諺ニ所謂宵懐いむゆるノ差トハ此レ之ヲ云ウナル可キカ。サレバ近ク僅カニ
数年ニシテ数十倍ニ拡張シ桃樹ヲ栽培セザルハ農家ニアラザルガ如ク、今ヤ近郷數方里ノ間春暖ノ候信
越線ノ鐵路ニ跨リテ、南方蓼村八ヶ岳ノ峻嶺ヲ望ム其ノ間、北方浅間山ノ雄烟ヲ仰カントスル其瞬間、
必ズ紅々薄朱満朶ノ桃花或ハ霧ノ如ク或ハ蝶ノ舞フガ如ク醉客瓢ヲ叩イテ歌ヒ狂スルヲ見ル所以ナシト
センヤ。以上己ニ述ブル如ク当地方浅間山麓拾數方里ニ渉ル土壤ハ同火山ノ噴火ニヨリテ成レルモノナ
レバ、殆ド其構造同様ニシテ礫ノ含有ニ多少アルカ或ハ砂質ノ強弱アル壤土地ニシテ下層ノ構造ニ至ツ
テハ殆ド同一ナリ。即チ火山ハ屢々噴出セル溶融岩漿其都度次第ニ放冷凝塊シテ磐屑ヲナシ累積シ、次
第二風化作用ヲ受ケテ甚ダ脆弱トナレル礫質岩ナリトス。故ニ其ノ凹キハ忽チ流水ノタメニ欠潰シ流去

セラレ幾千百带状ノ露谷トナリ、高キハ數丈ニ達スル斷崖ヲナシテ明ラカニ其地質ノ成因ヲ示スコト当
 地方ノ如ク明了ナルモノ亦少ナカル可シ。此故ニ地質土性ニ於テ已ニ桃樹ニ適スルコト此ノ如ク加フル
 ニ氣候ノ天恵之ヲ以テス唯夫レ人口ノ不足ハ未ダ遼カニ全国悉ク化シテ桃園タラシムルコト未ダ甚ダ難
 シ今ヤ生果販売ノ到底該園經濟維持唯一ノ策ニアラズ。即チ嘗テ今將サニ因弊ニ陥リ再ビ立ツベカラザ
 ルノ難境ニ沈淪セントセシガ、缶詰製造ノ福音ノ為メニ再ビ余喘テ恢復スルノミカ更ラニ利益ノ極メテ
 確實安全ナル事業トナリ、其著シキ増殖ト擴張トヲ見タル所以ナレドモ現今ノ勞力供給ハ未ダ以テ無限
 ノ擴張ヲ許サズ。今ヤ増殖擴張ノ一段落ヲ告ゲタリト云ウ可キカ。爾後ハ更ラニ交通運輸ノ進歩世人一
 般嗜好ノ増進、栽培製造等ノ改良發達ニ待ツニアラザレバ、著シキ増加ハ容易ニ見ル難キモノナル可シ。
 要スルニ製造業創始セラレテ、該業ノ基礎ハ安全トナリ、立脚地ハ鞏固トナリ、此業ノ勃興ヲ見ルニ
 到レルハ照々呼トシテ明ラカナル所。此ヨリ篇ヲ改メテ製造業ノ一般ヲ述ベントス。

尚ホ此篇ヲ終ルニ当テ我家栽培反別累年調査ヲ左ニ掲グ。尤モ三十年以前ハ殆ンド試験時代トモ云ウ
 ベキニ付キ之ヲ省略スルコトヲナセリ。

年次	反別	樹數	備考
明治三十年	二〇反九	一、四五〇本	当地方ノミ耕作ハ豊凶殆ト差ナク時ニ約一割前後ノ減収アルコト アリト雖モ甚ダ稀ナリ
明治三十一年	二〇、九	一、四五〇本	
明治三十二年	二〇、九	一、四五〇本	

明治三十三年	二〇、九	一、四五〇本
明治三十四年	二〇、九	一、四五〇本
明治三十五年	二〇、九	一、四五〇本
明治三十六年	二八、七	二、〇五〇本
明治三十七年	四五、〇	三、一五〇本
明治三十八年	四五、〇	三、一五〇本
明治三十九年	四五、〇	三、一五〇本
明治四十年	四五、〇	三、一五〇本
明治四十一年	四五、〇	三、一五〇本

普通作物一般ニ凶作連続セシモ桃作ハ大差ナシ但シ雨量稍多カリ
シ為メ
酸味多ク品質稍不良

豊作ニ割増成熟期ニ敵当ノ雨量アリタルニヨル元来当地方ハ寧ロ
成熟期ニ多少ノ降雨アル時豊作ナリ
七月下旬ヨリ八月下旬高温ニ過ギ且乾燥セルタメ急ニ成熟シテ完
熟セズ 形小ニシテ品質不良ナリ

外二三十五年以來組合ニ加入シ自己配当分六町歩アリ

第三編 洋桃缶詰製造業一斑

第一章 洋桃糖煮缶詰製造法

一 原理 凡ソ物ノ腐敗スルハ微菌ノ發生ニ因ルモノニシテ、微菌ハ何レノ處ニモ存在シテ發生ノ機會ニ接スルトキハ猛然蕃殖シテ腐敗作用ヲ呈スルモノナリ。缶詰トハ鉄葉板缶中ニ肉類及ビ果実ヲ詰メ密封シテ空氣ヲ遮斷シ、品物及ビ空氣中ニ存在スル微菌ヲ蒸殺シ以テ再ビ發生或ハ侵入ノ機會ナカラシメタルモノナレバ、或ル一定ノ期間内ニ於テハ決シテ腐敗セザルノミカ、更ニ香味等ニ變化ヲ及ボスコトナク安全ニ保存セラル。故ニ果実ノ如キモ亦盛ニ缶詰法ニヨリテ保存セラルルニ至レリ殊ニ桃果ノ如ク短時日ニ成熟シ生果トシテ其保存力其ダ短キモノハ缶詰法ニヨリテ保存スルニ若クハナシ。

二 原料ノ処理 桃ハ過熟ノモノハ缶詰トシテ果肉爛漬らんかいシ糖液混濁シテ宜シカラズ。未熟ノモノハ有機酸弱クシテ酸味多ク肉硬クシテ缶詰トナス可カラズ。將ニ熟セントスル三日前ニ採集シタル果実最モ適當ナリ。果ノ溝ニ沿フテ包丁ニテ打ツトキハ容易ニ縱斷セラル可シ。縱斷シタル果実ノ半片ヲ塩川式剝皮器ニテ剝皮スベシ。剝皮終了スルトキハ塩川式核拔器ニテ刃ヲ果核ノ兩端ニ當テ柄ヲ握リ縮メルトキハ核ハ分離セラル可シ。コレヲ水中ニ浸シテ酸化ヲ防止ス。若シ酸化スルトキハ赤鍋色トナリ外觀甚ダ

醜シ。以上ノ工程ヲ施シタル原料ヲ釜中ノ沸騰水ニ投入シテ放置スルコト五分間、手指ニテ圧シ試ミ柔ラカニ感ズルヲ程度トシ、次第ニ水上ニ浮遊スルモノヨリ掬ヒ上ゲテ冷水ニ浸漬シ、以テ放冷ス。此ノ如ク作業ハ最モ迅速ト熟練トヲ要ス。蓋シ缶詰ノ硬柔良否ハ一ニ煮沸ノ程度ニアレバナリ。

三 糖液ノ調製 砂糖ハ上等「ザラメ」糖ヲ拾貫匁ニ対シテ清水一斗八舛ノ割合ニ混ジ、煮沸溶解セシム砂糖ト清水ノ混合量ハ各工場ニ於テ一定セズ。或ルモノハ二斗五舛式ヲ採用シ、或ルモノハ三斗式ヲ採用ス。然レドモ実験ニ徴スルニ良ク斯ク稀薄ノ「シラツプ」ハ果實ノ香氣ト美味ヲ失ハシメ食スルニ堪ヘズ。故ニ当工場ニテハ一斗八舛式ヲ採用ス。糖蜜ヲ調整スルニモ煮沸ノ程度ニ注意セザル可カラズ若シ煮沸ノ程度充分ナラザルトキハ、原料ト糖蜜トハ吸入親和不良ナリ。マタ糖蜜ノ混濁スルコトアリ。故ニ糖蜜ハ可及的煮沸スルヲ要ス。然ルトキハ糖蜜ハ良ク香氣アル原料ニ吸収セラルガ故ニ原料ハ収縮シテ潰爛かいらんスル加キコトナシ。之ヲ充分放冷シ後使用ス。

四 肉詰 放冷セラレタル原料ノ水切りヲナシ、空缶ヲ清水ニテ洗淨シ、之ニ原料百匁ヲ詰メ放冷シタル糖蜜三十五匁宛ヲ注加シ。之ニ小蓋ヲ敵ヒ密封シテ殺菌蒸箱ニ入レテ蒸氣上昇ヨリ二十分間ヲ経テ、殺菌密封蒸竈ヨリ右ノ殺菌蒸箱ヲ出シテ、直ニ小孔ヲ穿テ缶内ノ空氣膨張セルモノヲ脱氣シ、直ニ蠟ヲ以テ密封シ、冷水ニ投シテ放冷シ、防繡ぼうしゅう劑タル「ニス」ヲ引キ四打箱ニ詰メ以テ販売ニ供ス。

第二章 経 済

我四十一年度製造高八千打、即チ九万六千斤ニ封スル収支計算ヲ示スニ左ノ如シ。

一 支出の部

一 原料	洋桃一万六千貫	一、九二〇円〇〇〇
一 砂糖	一千九百二十貫	二、三〇四、〇〇〇
一 空缶	八千打 (自己製造ニヨリ改算)	二、八八〇、〇〇〇
一 レッテル	拾万枚	四〇〇、〇〇〇
一 ニス	金光色三打	一八、〇〇〇
一 箱	二千個	四〇〇、〇〇〇
一 荷造費		四、〇〇〇
一 薪炭費 (四拾駄)		一四四、〇〇〇
一 原料処理労賃		七二〇、〇〇〇
一 職工賃 (六人廿四日)		一〇四、〇〇〇
一 金利 (流通資本参千円日歩一步六カ月分)		一八〇、〇〇〇
一 償却金 (器具、機械、建物平均二十か年保存仮定修繕費共)		二〇〇、〇〇〇

計

一 収入の部

九、一七四、〇〇〇
一〇、〇〇〇、〇〇〇

八千打（売却代一打壱円廿五銭）

差引利益金八百二十六円也

第三章 製造所の設備

第一 建物

建物ノ種類坪敷建築価格左ノ如シ。

一 空缶製造場二階建	一八坪	四五〇円〇〇〇
一 原料理調場	二四坪	二四〇、〇〇〇
一 缶詰製造所	一六坪	二五〇、〇〇〇
一 釜場	六坪	六〇、〇〇〇
一 貯蔵荷造所	一八坪	一〇〇、〇〇〇
一 事務室二階建	八坪	一八〇、〇〇〇
一 井戸付属器一式		四〇、〇〇〇
一 敷地	六〇〇坪	三〇〇、〇〇〇

計金 一千六百二十円

第二 器具機械種別員数価格

本場経営ニ要スル器具機械類左ノ如シ

甲 空缶製造用器具

一	金八拾円	切断器	二台
一	金百円	チンプレス	二台
一	金拾八円	三本ロール	一台
一	金参拾九円	底メロール	二台
一	金八円	一ポント胴付器	一台
一	金拾円	二ポント胴付器	一台
一	金四拾五円	一ポント蓋切紋形 (大小敲目)	三台
一	金参拾円	一ポント底切紋形	二台
一	金式拾円	ニポント蓋切紋形 (大小敲目)	一台
一	金式拾円	同 底切紋形	一台
一	金八円	縁折器	一台
一	金壹円七拾銭	スパナ	一個

一	金三十錢	打出金槌	二個
一	金五十錢	尺金	一個
一	金壹円五拾錢	鉄葉板鋏	二個
一	金七十五錢	同上曲鋏	一個
一	金拾四円	万力大小	二個
一	金四円	フイゴ	一台
一	金拾五円	金敷	一台
一	金壹円	鍛冶槌	一台
一	金貳円	木製ハンダ流型	二個
一	金七拾錢	ハンダ鍋	二個
一	金參拾五錢	ハンダ杓子	一個
一	金四拾錢	垂鉛水入	拾個
一	金壹円五拾錢	<small>(不明)</small> 焼コンロ	六個
一	金四拾円	<small>(不明)</small> □(二百匁付)	四個
一	金拾六円	胴付□ <small>(不明)</small>	拾六個
一	金八円五十錢	平鑪(十二吋)	拾個
一	金壹円五十錢	三角鑪	二個

合計 金四百八拾七円五拾銭

乙 原料調理用器具

一	金壹円貳拾五銭	桃割包丁	五丁
一	金七円貳拾銭	核拔器	六丁
一	金貳拾四円	剥皮器	八拾丁
一	金貳円	バケツ	五個
一	金貳拾六銭	有孔金杓子	二丁
一	金八拾銭	ジャム用杓子	二丁
一	金貳拾壹円五拾銭	腰掛	八十六個
一	金六十銭	スイノー(大)	四個
一	金貳拾銭	同(小)	四個
一	金壹円	火箸	二個
一	金六拾六円	ジャム鍋	三個
一	金貳拾貳円	桃煮大釜	一個
一	金五円	桃煮大竈	一個
一	金拾円	シャム竈	二個
合計	金百五拾六円壹銭		

丙 缶詰用器具

一	金貳拾円	ポンド秤 (三十五貫)	一個
一	金八円五十銭	小台秤	一個
一	金八拾銭	枺 (一枺一合、五勺)	三個
一	金五円	砂糖貯藏用四斗樽	拾個
一	金貳拾円	糖蜜貯藏用四斗樽	貳拾個
一	金六拾銭	三徳金槌	二個
一	金壹円	大小玄能	二個
一	金四拾銭	漏斗	二個
一	金貳拾銭	木槌	五個
一	金七円五拾銭	回轉封蝻蠟付器	五個
一	金貳拾円	殺菌用蒸竈	二組
一	金拾六円	放冷箱	四個
一	金八拾円	殺菌用蒸箱	二組
一	金拾參円貳拾銭	井楼 (殺菌用蒸竈)	廿四個
一	金四円	肉詰台	二個
一	金拾貳円	殺菌竈大煙突	一組

一	金參円	同上小煙突	一組
一	金壹円	ホームー比重計	一個
一	金五十五錢	大小柄杓	六個
一	金壹円拾五錢	寒暖計	一個
一	金壹円	瓦斯抜用台	一個
一	金壹円五拾錢	腰掛	六脚
合計 金貳百拾七円四拾錢			
丁 雑用具類			
一	金八円五拾錢	時計	一個
一	金參円	時計	一個
一	金壹円五拾錢	磁石	三個
一	金六円四拾錢	桃入竹籠	八十個
一	金貳円四拾錢	ランプ	六個
一	金六円	白布	拾反
一	金貳円	ニス用木綿	二貫匁
一	金拾五円	水揚用ポンプ	一組
一	金七円五拾錢	同(小)	一組

合計 金五拾貳円參拾錢
總計 金九百拾參円二十一錢

第四編 苺ノ栽培及「ヂヤム」ノ製造

第一章 起 原

夫レ洋桃缶詰製造ハ純粹ノ製造工業ナリ。工業ハ年間不斷一定ノ勞力及建物器具機械ヲ運轉スルニアラザレバ、到定有利ナル経営ヲミル能ハザルヤ定則ノアルアリ、變動ス可カラズ。然ルニ農家栽培ノ傍ラ之ヲ行フ。殊ニ僅々二三カ月ノ製造期ナル洋桃ノミヲ目的トシテ行ハントスル、是交通販路上ノ關係余義ナキ變通ノ法ナリト雖モ、多額ノ資本ヲ投ゼル建物器具ヲシテ徒ニ遊々放浪ニ任ジテ錆ノ蔓延腐蝕ニ委スルガ如キハ不經濟ノ極ニシテ、勞力ハ勿論流通資本ノ如キモ亦安価ニ利用シ得ザル等ノ不利實ニ莫大ナリト云ハザル可ラズ。故ニ可及的其製造期ノ延長ヲ図リ、之ニ由リ此等ノ損失ヲ減少シ、以テ洋桃缶詰ノ負担スル無用ノ入費ヲ除キテ廉価ニ製造シ、外界ノ競争ニ堪フルノ余力ヲ準備スルコトハ唯ニ自家經營ノ為メニアラズ、實ニ当郡洋桃業一般商略上必要ナル手段ナリトス。依テ適當ナル製造原料ヲ

得ントセシモ未ダ我智識經驗ノ不足ナルノミナラズ。元來瘠薄ノ地方トテ在来ノ物質ニ求ム可キモノナク、又新タニ輸入シテ有利ナル可シト信ズルモノ殆ド之レ無シ、茲ニ於テカ百方研究ノ結果得タルハ唯夫レ苺ノ栽培「チャム」ノ製造ナリトス。此レ即本業誕生ノ起原ニシテ、其栽培ヲ創メタルハ實ニ三十五年ニアリ、此レニヨリテ洋桃製造期前約一カ月延長セシムルコトヲ得、製造業ノ利益ヲ拡張シタルコト少ナカラズ。加フルニ其栽培ノ有利ナルヤ水稻麦作ノ比ニアラザルハ勿論、現今ニ於テハ洋桃ヲモ圧セントスルノ勢力アリテ著シキ拡張ヲ見タリ。今統計ノ徴スベキモノナキハ遺憾ナレドモ余ノ概算ニ依レバ約拾五町歩ナル可シ。

第二章 苺ノ栽培

- 一 風土 苺ハ土質天候ヲ選バズト雖モ、強粘土又ハ輕鬆土けいしょうどニハ收穫上ニ影響スルコト少ナカラズ。当地ノ如キハ排水過度ニシテ乾燥ニ失スルヲ以テ桃ノ如キハ美味ナルモ苺ハ最初ノ二粒ハ稍大粒ニシテ其他ハ小粒ナルヲ免カレズ。故ニ一反歩僅カニ二十貫乃至三十貫ノ收穫ニシテ到底収支相償ハズ。依テ水田ヲ苺園トシテ使用セリ。水田ハ水分ノ補給充分ナリト雖モ、往々果実ハ酸味ヲ含有スルコト多キ欠点アリ。
- 二 種類 己ニ從來試作セルモノ數十種ノ多キニ達スルモ、其煩ヲ去リ就中重要ナル數種ニ就テ説明ス可シ。

一「ビルモローシ」果粒中等鮮紅色六月上旬成熟シ強健ナル種類ナリ。製造用トシテ好適ナルモ酸味多シ收穫ハ中等ナリ。

一「ドクトルモレー」大粒淡赤色甘味多ク生食ニ可ナルモ、製造用トシテ好適ナラズ。本種移植ノ次年ハ非常ノ豊産ナルモ其次年ヨリハ変種シテ收穫大ニ減ズ。

一「イキゼルシヨール」最早生ニシテ五月下旬成熟ス。深紅色果粒中等宵ノ締リ良ク製造及生食ニ適ス。繁殖旺盛ニシテ豊産ナル良種ナリ。

一「ビクトリヤ」大形淡紅色ニシテ中心白色ナリ。六月中旬成熟ス。頗ル豊産ニシテ甘味アリ。生食用トシテハ良好ナルモ製造用トシテハ可ナラズ。製造品ノ色澤不良ナリ。

一「ルザー」大果、豊産、六月下旬成熟ス。製造用トシテハ佳良ナリ。密植ニ過グルトキハ色澤不良ナリ。

三 栽植 苺園ハ一面ニ彌蔓^{びまん}セシムルトキハ通風悪ク果実成熟ノ時ニ及ビテ腐敗シ、又密植ニ過ギテ開花スルモノ少ナク、或ハ病害ニ罹ルモノ続生シ、收穫大ニ減少ス。現今ハ畦ニ尺ニシテ苺株ヲ畦間ニ密生セシメ、新株ハ旧株ノ交替ヲナサシム。(結果セル旧株ヲ除キ新株ヲ繁殖セシムル法)

四 手入 除草ハ春四月初旬、五月上旬及下旬、七月初旬、八月初旬ノ五回ニシテ一回五人手間ヲ要シ肥料ハ四月第一回、除草後、従来血粉七貫五百匁骨粉十五貫金額七円五十錢ヲ標準トシテ之ヲ用ヒシモ、近来該肥料甚ダ騰貴シタルヲ以テ近来ハ硫酸「アンモニヤ」及過燐酸石灰ヲ施用セント欲スルモ苺ハ株ノ枝葉上ヨリ直接撒布セサレバ甚ダ有効ナラズ。然ルニ此等肥料ハ往々枝葉ヲ傷害スルハ甚ダ遺憾トス

ル處ニシテ、稀薄ノ液肥トシテ施スハ可ナレドモ勞賃ノ甚ダ累ムアリテ未ダ良法ナク今ヤ研究中ニアリ。病虫害トシテ未ダ著シキモノアラズ。

四 經濟 余ハ特別ノ小作法ヲ取レリ。即チ、自作者又ハ小作者ノ水田ヲ其當業者ヨリ借入レ、從來ノ平均収量ヲ計量シテ全部自ラ之ヲ支給シ以テ小作料ニ換ヘ、更ラニ苺苗ヲ支給して耕耘栽植セシメ、更ラニ又与フルニ肥料ヲ以テシ、唯耕耘除草ノ手入保護ヲナサシメ收穫ニ當ツテ摘採ノ勞賃ヲ支拂ヒ、以テ收穫物ヲ納ムルノ法トス。今一般栽培ノ収支一反歩計算ヲ示サン。

項目	一年	二年	三年	四年	計
小作料	一三、五〇〇 円	一三、五〇〇 円	一三、五〇〇 円	一三、五〇〇 円	五四、〇〇〇 円
苗 一坪三十株 九千本代	九、〇〇〇	—	—	—	九、〇〇〇
肥料	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	三六、〇〇〇
摘賃一人四十 錢十貫匁	—	六、〇〇〇	六、〇〇〇	六、〇〇〇	一八、〇〇〇
支出合計	三一、五〇〇	二八、五〇〇	二八、五〇〇	二八、五〇〇	二七、〇〇〇
苺 一貫匁 三十錢	—	—	—	—	—
籾 四年目苺收穫後 拔取水田トス	—	一八〇貫 五四、〇〇〇	一八〇貫 五四、〇〇〇	一五〇貫 四五、〇〇〇	一五三、〇〇〇
収入合計	—	五四、〇〇〇	五四、〇〇〇	七二、〇〇〇	一八〇、〇〇〇

差引入利益金六拾九円

一カ年平均 金拾七円貳拾五銭

第三章 「ジャム」ノ製造

一 製造法 先ツ熟果ヲ採集シ来リタルモノハ子女等ノ手ニヨリテ萼即チ蔓片ヲ摘ミ去リ、之ヲ適宜ノ箆ニ投シ清水ニ浸シテ汚物ヲ洗滌シ水滴ヲ去リ、一、五、百、匁ノ果実ヲ一回分トシテ之ニ同量ノ「ザラメ」糖ヲ混シ、深サ七寸経二尺五寸ノ鍋ニ投シ、火力ヲ加ヘテ煮沸ス。此間絶ヘズ大ナル木篭ヲ以テ静カニ攪拌シ以テ其焼付クヲ防止シ且ツ煮沸ヲ均一ナラシム。其間泡ノ立ツコト夥シキヲ以テ時々木篭ヲ以テ別器ニ掬ヒ去リ、泡ノ殆ド消エ失セ煮沸スルコト約二十五分間ニ達スレバ、之ヲ別器ニ移シ、更ニ缶詰場ニ送ル。其方法敢テ洋桃ト異ナルコトナシ。

二 経済 我四十一年度製造類四千打、即チ四万八千個ニ封スル収支ヲ示スコト左ノ如シ。

支出ノ部

- | | |
|----------------|-----------|
| 一 原料 苺四千八百貫購入費 | 一、四四〇円〇〇〇 |
| 一 砂糖 三千八百四十貫 | 四、六〇八、〇〇〇 |
| 一 空缶 四千打 | 一、〇〇〇、〇〇〇 |
| 一 レッテル及ビ荷造費 | 三三六、〇〇〇 |

一 薪炭及ビ其他

一四四、〇〇〇

一 労賃

二四〇、〇〇〇

一 金利（四千円日歩一分四カ月分）

一六〇、〇〇〇

一 償却金（洋桃部ニ計上省略）

計 金七千九百貳拾八円也

収入ノ部

一 四千打売却賃

八、八〇〇、〇〇〇

差引利益金 八百七拾貳円

第五篇 本業ニ対スル官ノ思想及本業ト地方トノ関係

本業開始ノ当時ニ於ケル一般官民ノ思想ハ甚ダ冷淡ニシテ、或者ハ桃業者ヲ嘲笑シ甚ダシキハ狂人シ、或者ハ土地ノ貸与ヲ拒止スルモノアリ。或ハ桃園ノ借地ニハ法外ノ借地料ヲ徴セントスルカ如キ狀況ナリシガ、果樹園ノ有利ナル事業タルノ曙光ヲ見ルニ至ツテハ、世人ノ思想全ク一転シテ前篇屢々陳述スルノ趨勢トナリ、官署モ亦進ンデ或ハ奨励シ或ハ誘掖シ以テ斯業ノタメニ多大ノ尽力ヲ与フルニ至レルハ真ニ慶賀ノ至リニシテ、本業将来ノ發展上利スル所少ナカラズトス。此今ヤ個人ノ利害問題ニアラズシテ小ハ北佐久間郡ノ経済ニシテ実ニ長野県下ノ財源タリ又大ニシテハ国家ノ財源ヲ豊富ナラシムル所

以ナレバナリ。

更ニ步ヲ転ジテ本業ガ地方ヲ幸スルノ事實ハ已ニ其駸々しんしん呼トシテ栽培ノ拡張スルニ依テ以テ其詳説スルノ要ナキヲ知ルト雖モ、此レガ為メニ礎礫不毛ノ地ハ開發セラレ、又此レガ為ニ多大ノ勞力ハ利用セラレ、殊ニ其事業ノ複雑ナルヤ、老若男女其強壯ナルト虛弱ナルトヲ論ゼズ、各々適当ノ勞力ニ服スルヲ得テ、土地ニ遊民ナカラシメ以テ勤儉ノ美風ヲ養成シタルガ如キ、暗々裡（それとなく）ノ内ニ其ノ利益ノ埋藏セラレテ探ル可キモノ少ナカラズト信ズ。

第六篇 結 論

本業ノ将来及砂糖トノ關係

佐久ノ天地ガ其風土ニ於テ果樹栽培上幾多ノ天恵ニ浴スルヤ、已ニ縷々陳述セル處ナリト雖モ、信州ノ天地又諸般ノ果樹栽培ニ好適スルヤ、已ニ定論アリ。豈独リ信州ノミナラズ我国ノ全土亦果樹ニ適セザルノ地アラザルナシト、夫レ然ラズンバ余輩ノ経営ガ内地ノ蝸牛角上ニ競争セントスルガ如キハ其ダ愚昧ノ至リニシテ、更ニ大局ニ注目スルノ要ヲ認ム。斯クシテ其限界ヲ宇内ノ大勢ニ進メンカ、我国ノ位置タルヤ四面環海ニシテ地勢南北ニ狭長海岸線長大ニシテ富有ナル良灣良港ニ通ズル頗ル便ナルモノアリ。即チ本邦海陸ノ航海運輸ノ發達ト共ニ東洋諸國ノ開發ヲ見ルニ至ランカ、實ニ世界市場ノ中心地ヲ

以テ任ゼラレント欲スルモ免カル可ラズ。此ノ如キ幾多天恵ノ果樹園ニ座シ、而シテ如何ゾ世界ノ斯業界ト競争シ得ザルノ理アラシヤ。今ヤ世界ノ果樹園タル米國ノ地タル、風土ノ天恵我レニ優ル更ラニ幾倍ナリト雖モ、斯業上最必要ナル勞力ハ甚ダ不廉ニシテ我レニ十数倍スト開ク。此ノ如キノ生産ト競争シ得ザルノ理夫レ何ニカアル。然ルニ現今ノ狀況ハ果実缶詰ノ業タル微々トシテ振ハズ。洋桃ノ如キ海外ニ輸出スルモノハ未ダ寂々数フルニ足ラズ。然レドモ己ニ述ブルノ好境遇ニアリ。益々奮勵努力以テ斯業ニ貢獻センニハ、彼岸ニ達スル亦近キ將來ニアル可シト信ズ。唯終リニ、一言スベキハ本業経営上至難ナル一大問題アリ。何ゾヤ本業中主要ナル原料、即チ砂糖價格ノ甚ダ不廉ナル此ナリ。今本郡ニ於ケル洋桃及苺製造全産額、約七万円ニ要スル砂糖ノ原料ヲ計算スルニ其購入價格實に二万二千円余リニ昇リ、約其ノ三〇「プロセント」ハ此ガ為ニ除却セラル。反之シテ米國ノ如キハ甚ダ廉ナリト言フ。未ダ海外品ト競争スルノ位置ニアラザルガ故ニ敢テ至大ノ困難ヲ感ズルノ域ニ達セザルモ、將來海外品ト競争スルノ暁ニ至ツテハ大ニ注意ス可キ事項ナル可シト信ズ。附記シテ大方諸賢ノ教ヲ乞ハント欲ス。

解 説 書

(明治四十三年か)

長野県北佐久郡三岡村七〇三番地

出品人 塩川伊一郎

一、製造法

桃の将ニ熟セントスル一日前に採集シ、塩川式剥皮器ヲ以テ剥皮シ縦断シテ塩川式核拔器ヲ以テ離核シ之ヲ清水中ニ投シテ酸化ヲ防止シ、釜中ニ投ジテ煮沸スルコト三分間、手指ニテ圧シ試ミ柔カニ感スルヲ程度トシテ掬上ゲ、清水ニテ放冷ス。糖液ハ精製ザラメ十貫目ニ対シ、清水一斗八升ヲ注加シ煮沸溶解セシメ放冷シ、原料ヲ□^(不明)中ニ詰メ糖液ヲ注入シテ密封シ、輕便蒸氣釜ニテ八ポンドノ氣圧ニテ五分鐘殺菌シ、克排氣放冷シテ製造ス

二、職工徒弟数

職工七人 徒弟四人 工男六人 工女二十人

三、學術應用発見功勞

明治三十二年ヨリ洋桃栽培ヲ開始シ、幾多ノ失敗ヲ重子、本邦ノ如キ高燥酷寒ノ瘠地ニ適スル良種四種ヲ発見シ、種苗ヲ繁殖シ種苗ノ費代配布ヲナシ又ハ収利ノ曉ニ代金支拂ノ約束ニテ貸興スル等百方勧誘ノ結果、本郡ニ二百町歩ノ桃園・並ニ莓園二十五町歩ヲ開設スルニ至レリ
明治三十年、東京ニ生果ノ販路ヲ開キ、多大ノ生果ヲ輸送シ、信州洋桃ノ名声ヲ擧ゲタリ。

明治三十四年、西洋イチゴ栽培シ、幾多ノ失敗ノ後、最優良種三種ヲ発見セリ、「イキセルシヨール」ハ一反歩三百貫ノ收穫アリ、「カナデアンスキート」ハ一反歩四百貫、「ルザー」ハ一反歩五百貫ノ收穫アリ、イチゴジャムの産額三十万個以上ニ及ヘルハ、出品人新種ヲ発見シ、ジャム製造ヲ指導シタルニ由レリ。

明治三十四年、桃養合資会社ヲ組織シ、洋桃缶詰ヲナセリ

明治三十七年、桃缶詰及イチゴジャムの製造所ヲ設立シ、大ニ製品ノ販路ヲ開拓セリ。

明治三十八年、塩川式剥皮器同核拔器ヲ發明シ、新安特許ヲ受ケタリ、剥皮器ハ人工ノ四倍、核拔器ハ十倍ノ働キヲナシ、剥皮ニ於テ三十貫、核拔ニ施テ二百貫ノ原料ヲ処理ス

明治四十年、第二塩川式剥皮器ヲ發明シ、發明特許ヲ受ケタリ、本器ハ女工一人ニシテ二百貫ノ原料ヲ剥皮ス、如上ノ如ク剥皮器及核拔器ノ發明ニヨリテ、洋桃缶詰業ノ盛大ヲ来シ、現今ニ至リテハ、製造所ハ北佐久郡ノミニテモ五ヶ所ニ及、製品ハ四十万ヲ算スルニ至レリ。

四、製造高及價格 洋桃缶詰 塩川伊一郎製造高

明治三十八年 五四二四〇斤 五九六六四円

三十九年 八六四〇〇斤 九五〇〇〇円

四十年 一一二六四〇斤 一二三九〇〇円

四十一年 九六〇〇〇斤 九六〇〇〇円

四十二年 一〇〇八〇〇斤 一〇〇八〇〇円

五、販路

特約店ハ長野市酒缶株式会社、東京日本橋区国分勸兵衛、同京橋区精養軒、大阪市安土町祭原作太郎等ニテ、東京市・横浜市・名古屋市・京都市・大阪市・神戸市其の他全国樞要ノ地北海道・台湾・釜山・京城・上海・香港・シンガポール・布哇・サンフランシスコ・ロンドン等なり。

六、褒償

明治三十九年十月 山梨県主催一府十縣連合共進会 三等賞

〃 四十四年四月 東京府勸業博覧会ニ於テ 一等賞

〃 四十一年四月 長野県主催一府十縣共進会ニ於テ 二等賞銀牌

〃 四十一年十二月 大日本農会農事改良奨励会法ニヨリ伏見宮殿下ヨリ 名誉賞状

〃 四十三年一月 第三十七回大日本農会品評会 上海桃二等賞

茜肉桃三等賞

七、審査上必要ト認ムル事項

(一)原料ノ潰爛シ糖液ノ混濁セサル為メニ将ニ究熟セントスル二日前ニ採取セリ。

(二)塩川式剥皮器ニヨリ剥皮シタルヲ以テ剥皮薄クシテ果肉ヲ損セス剥皮面美シキ点

- (三) 塩川式核拔器ニヨリテ核拔シ果肉ヲ損セス離核面ヲ美觀ナラシメタル点
- (四) 本邦人ノ嗜好ニ適セシムル爲較外国製品ヨリ硬度ニ製造セル点
- (五) 天然ノ香味ヲ存セシムル爲精製ザラメ糖十貫目ニ付、清水一斗七升ヲ注加シテ溶解セシメタル糖液ヲ使用シ、甘味ノ程度ヲ適良ナラシメタル点
- (六) 糖液ノ浸透親和ヲ良好ナラシムル爲、糖液ノ煮沸ヲ良好ニセシ点

九 洋桃の利益及危険に就て

経験者 塩川 伊一郎

(塩川家所蔵)

日本中央山脈・富士山脈の衝点たる信州佐久の地、新企業・新事業として勃興するもの多しと雖も、忽ち興り忽ち倒れ、永續する者少なし。蓋し浅間山南麓の土地礫确、氣候寒冷、各種の工業殖産に適せざるに因る。故に国産物として輸出する者、僅かに生糸の一種に過ぎず、更に余の遺憾とする処なり。余茲に鑑みて国産物を興し、海外輸出を謀らんとする事年あり。其の第一着手として今を去る二十有余年前、果樹栽培に志し、熱心事に従ひ、遂に今日国産物の一として認められ、盛に栽培せらるるに至りたる洋桃の起源を爲せり。

蓋し新事業として洋桃栽培の如く、急激の発達をなせる者尠。去。以て如何に其の利益の多大なるか、如何に其の氣候風土に適せるかを見る可志。然れ共人は皆盾の両面を見ざる可からず。多大の利益は無限の危険を伴ふものなることを知るを要す、其の利益のみを見て危険を知らざるものは失敗す。洋桃の栽培益々盛ならんとして危険を冒すもの愈々多からんとす。或は恐る漸次発達の氣運に向へる事業を蹉跌せしめんことを、余果樹栽培業に従事すること二十有余年、殊に洋桃栽培には十有五年間、実験研究

者たる歴史を有す。若し余が之等の欠応にして洋桃栽培業者の眞利益を勧め、其の危険を誠志め、進んで斯業發展の一助となるあらば幸なり。

抑も果実は、人麁の栄養上一日も欠く可からざるものにして、又衛生上至大の効力を有す。血液を清浄ならしめ、胃腸の停滞を療し、日用ゆれば心神を爽快ならしめ、食後に喫すれば食物の消化を速かならしむ。されば西洋諸国にては果実を以て食卓上欠く可からざる必需品となすと、然れ共本邦果実は其の種類多しと雖も衛生上の價値に至りては疑なき能はず。或は胃腸を害するあり、或は諸病の因をなすあり。遂に国産物として輸出に適する者を認むる能はず。之に反して苹果桃の如きは生果にて販売し、乾菓・缶詰とするに適し、其の需用甚だ多志、茲に於てか余は明治十七年、苹果栽培に従事し、数千の種苗を移植し、数千の資本を投したるも、風土に適せざりしか栽培其の宜敷に適せざりしか、十有余年間の苦心経営一敗地に泥るゝに至れり。是が爲めに資産を蕩盡し人の嘲笑を招けり。当時の失望落胆今日追思するも猶且つ慄然たる者あり。

之より先き、明治二十四年の頃、米國理學博士木村熊二先生の教を受け、洋桃苗を移植したるも、台木違にして枯槁するもの、生育の遅々たるもの、虫害を被れるもの、霜害を受けるものの続出し、憂愁の極、此の事業をも放擲せんとする事幾度、然かも木村先生の激励により、栽培を継続し、苦心に苦心を重ね、慘擔を加へ、遂に漸く一條の光明を認むるに至れり。光明とは何ぞや、即ち数十種の洋桃中より三種の良種を撰出したる事是なり。該種は成長迅速、收穫多量にして、果粒美麗豊大・香氣馥郁たり。多年の愁眉初めて開く、当時の歎び知るべきのみ。

然れ共、販路は一の問題を来せり。軽井沢避暑外人のみを估客として、無限の生果を売盡す可からず。之を地方に販売せんか、生活の程度低き田舎に於て西洋新果の需要多かるべき筈なし、況んや熟期の長からざるものたるに於てをや、一難排し去られて一難又来る。或る年の如きは空しく地上に落下せしむるの災を蒙り志こともありき。茲に於て明治二十九年の夏、洋桃の密柑箱入数個を携へ、販路拡張の爲め上京し、上野にて一箱一円五十錢にて販売し得たるを以て歡喜措く能はず、木村翁に發電したるは今猶話柄とする処なり、是より後、京濱問屋に輸送するに及びたるも、問屋商の狡猾なる、常に腐敗の口実の下に多大の損害を蒙らしめり。かくの如くして継続数年、漸く一個の国産物として誠実の取引を見るに至れり。之れ実に洋桃界の一大發展なり。余之に力を得て、外へ東奔西走洋桃の栽培を勧誘し、内に良種の繁殖に務めしが、氣運転じて余が説を容るもの次第に続出し、小諸には信桃社・酢屋桃園、小沼の桃洋社南大井の甘桃社、岩村田には長土呂区の桃園、大里村の有実社、御代田桃園等を見るに至れり。其の他、個人に至りても大は数千本、少なるも猶二・三百本を移植するに至れり。其の發達の迅速驚くべきに非ずや。而して苗木は弊園撰出の良種を移植し、余の管督の下に皆良成績を収むるに至れり。斯くの如く其の栽培の盛となれるに伴ひ、生果の供給無限、殊に収穫期に限りあるものなるを以て、大輸出も腐敗に次ぐに腐敗を以てし、其の処分に窮するの有様を呈しぬ。余や元果実栽培を以て国産を興し、猶進んでは海外輸出をも図らんとする者、坐して斯る窮状を見るに忍びん。

木村先生の紹介状により、明治三十三年、豊田氏を東京に訪問する事三回、有志と共に募財に従事志、遂に桃養社を興し、共に製造に従ふ事三年なり。然れ共会社は当時遠大の抱負無く、徒らに原料の價格

を低廉にし、將に發達せんとする新事業を躓か^{つまず}しめたり。嗚呼余は苹果の失敗に家資を失ひ、洋桃の種類研究に幾多の歲月を費やし、販路の拡張に焦慮多費を以て洋桃利益の過半を失ふ。而かも漸く盛ならんとして又この事なり。誰か洋桃業を以て容易なりとなすものぞ、是れ余が歴史を知らざるものなり。

総て事業に資本を要するは言ふ迄^{まで}も無きことなるも、冲天の意気存するならば、資本無くも又成功せざることなるらん。「精神一到何事か成らざらん」とは、古人の金言なり。

明治三十七年一大決心を以て家財を売却志、空拳を揮^{ふる}うて缶詰製造処を設立せり。此の時に当り一人余を助くる者無きのみならず多数の反対妨害に逢ひ、其の困厄明状すべからず、四面皆敵、加ふるに内糧食の欠乏を告ぐ、進退全く谷^{きま}まれりと言ふべし。斯く千難に衝^{あた}り、万苦を嘗^なむるも、富者の助力を仰がず、貧者猶爲^{なほ}するあるの感慨を示し、勇往邁進^{まいしん}、益々製品の精撰に勉め、致々として勉励怠らざる結果、内外の信用次第に重く、小諸には⑤商店率先して余が製品発売の任に当り、今や京濱は勿論、各地に取引の大商店を有し猶進^{なほ}んでは海外に販路を拡張するの策を立つるに至れり。

以上余が洋桃栽培に従事して以来十有余年間の歴史概略なり。尚進んで余の斯業に就き研究し、自得したる結果の大略を述^べふ可し。

洋桃は地質の輕^{けい}鬆^{しょう}なると砂礫^{さだ}の瘠地^{せつち}たるを問はず、能く適當す。種類を精撰し、一反歩六十本を移植し、三円より六・七円の肥料を施せば、移植後三年目より結実し、初め五・六年目には六・七百貫匁、七・八年目には一千貫匁以上の生果を收穫すべし。故に現今價格（小売相場に非ず製造処にて買入の相

場)一貫金十六錢とすれば、実に一百六十円也。假りに今後は斯る收穫、斯る價格は期すべからざるとするも、尚一株金一円づつ即ち六十円以上の収益は確實なり。而して毎年風雨寒暑の別なく、此の收穫を均保し得るとせば、其の利益の大なる驚くべきものに非ずや。肥田一反歩の收穫より、瘠地畑の收穫反て優れるが如きに至りては、普通農家の信ずる能はざる処なり。然かも實際の事實は、之を証明しつゝ、あるを奈何せん。一得一失は数の免がれざる処、洋桃を以て多額の利益として危険の伴ふこと無しと輕信するは誤れり。弊園は桃樹の増殖又増殖に依りて獨立經營、及会社の加入持合を加算する時は、自己所有の桃樹実に四千本以上に達せるに係はらず、或者は桃樹を伐採して桑園となせり。弊園にては一反歩一千貫以上の收穫あるに反して、或る者は全然無收穫なるあり。弊園にては美麗の大果を産出するに係はらず、或者は粗悪の小果を産せり。弊園の桃樹は強健繁茂せるに、或者は萎縮枯死するあり。多大の資本を投じて数年間經營せる事業、一朝にして大敗に歸す。豈寒心の至りならずや、斯く弊園は成功し、他者の失敗に終れるは何故なるや。他無し、土質種類の撰擇、其の宜敷を得ず、栽培の技術適せざる故なるなからんや。

洋桃栽培の失敗する原因四あり。弊園に於て普通「日の丸水蜜桃」と稱する処の者と、他に於ける在來種の小果、若くは「天津桃」「上海桃」等の支那種とは全く異種なるに係はらず、之を以て弊園の撰出したる信州の風土に適する良種なりと誤信し、殊に種苗の安價に迷ひ、所謂「安者買の元失ひ」に終る。是れ其の一なり。姦商の甘言に欺かれ、價格の低廉なるに迷ひ、台木違ひの種類を購入し、数年を出でざるに枯死するに至る。是れ其の二なり。養蚕に養蚕術あり、造家に建築術あり、果樹栽培のみ豈其の

術法なからんや。然るに其技術を習はず、其の栽培法をも知らずして、盲目的培養を爲すが故に、截断すべき枝葉は截断せず、截断す可からざる枝葉を截断し、間摘すべき果実を存して、間摘すべからざる果実を截摘し、樹を害し果を失ふに至る。是れ其の三なり。成熟期節に限りある桃果の大栽培に従事する者は、小売のみを以て販売し盡すこと容易に非ず、若雨三日の雨天に逢はば、忽ち販路に窮し、従しく地上に落下せしむるの損害を蒙ることなしといふ可からず。専門の商家猶販路の難きを唱ふ。況んや多事なる農家に於てをや。是れ其の四なり。斯く数い来れば洋桃栽培の危険失敗亦恐る可きものに非ずや。

洋桃栽培の危険多きは、前述の如しと雖も、又非常に利益ある事業なることは、一般の確認する処なり。然らば如何にして其の危険を避けて利益のみを収め得可きか。是の問題に明確なる解答を與ふる者は即ち弊園なり。

一、土質の鑑定は、二十有余年間の実験に基き、鑑察の明確なる殆ど人力以上により。之の鑑察力に加ふるに、無限の責任を以て依頼者の需めに応じ、土質の適不適を鑑定す可し。

二、洋桃の種苗は、洋種数十種中より撰出したる良種にして、八年間病害虫霜害等に罹る事無く、豊産なる結実を継続し、樹勢益々強健、一反歩一千貫以上の收穫ある良種を自ら接木したるものなり。斯くの如き精撰権保証を付して、以て販売す可し。

三、栽培法は、果樹剪截法の原則に則り、洗截法、樹頭剪截法、繁枝法、主枝^{不明}□截法、整枝法、誘曲法、果実減除法、果実増大法等の各法を習得して大に得る処あり、加ふるに自家独得発明の断技術を教授

す可し。

四、果実は、特約の便法を設け、最高價を以て全部を購売すべし、弊場の缶詰は、東京・横浜・大阪其他大市場の商店に取引を有し、今や進んで海外に販路を拡張しつゝあり。製造は機械力を用ひ、一日一千貫以上の生果を使用するの設備あり。故に他社の如く推積して腐敗せしめ、荷主の損害を招かしむるが如き憂なし、殊に機械力を以て工費を削減し得るを以て、最高價に原料を購入す可し。

五、余が剥皮器の發明は、缶詰製造界の大發展にして又洋桃栽培上の一大福音たりしなり。若し旧來の手剥法に依るとせば、工女一日一人にて、漸く五・六貫匁を剥皮するに止る、故に一日一万个の缶詰を製造するとせば、少くとも工女五百人を使用せざる可からず、即ち製造期間を二十五日としても、二十五万个の製造をなすに過ぎず、而かも五百人の工女を短期間に雇使せんとする、豈に容易の事ならんや。如ふるに使用原料、僅かに五万貫に過ぎず斯くの如くにして如何で益々桃園を増殖し、無限に缶詰の製造を繁営せしむるを得可き、洋桃栽培者の頭上に迫れる危険の趨勢は、すうせい(なりゆき)有識の士の愁眉を開らく能はざる処たりしなり。然るに余が發明はこの危険を除きたるものなり。余が新發明の機械に依る時は、工女一人一日間に三十貫より四十貫を剥皮し、核拔器は二百貫以上を核拔す。故に一日一万个を製造するには、一日百人の工女を使用するに過ぎず。若し五百人を雇用する時は、五万个を製造し、二十五日間には一日二十五万个を製すべく、之を原料に改算する時は、生果二十五万貫の多量を使用し得可し。斯くして新機械の發明に伴ふ缶詰界の大發展は、生果の需要を激増せしめ、販路を拡張し、併せて国産の一たらしむを得たり。

今後益々適當なる土地の有らん限り、桃樹の栽培に勉め、内生業の發達を図り、外国産の大輸出に心を注ぎ、以て国富の一助たら志めん事を期す。

余元より浅学無識なるも、二十有余年間の研究は、洋桃栽培に成功し、能く其の終始を全ふしたることを信ず。即ち比類無き良種苗を撰出し生果の販路を東京に開き、缶詰処を設立して生果を製造し、迅速無比の剥皮器・核拔器を發明し、洋桃栽培に一大發展を與へたり。而して余に洋桃栽培を教へ、中途の失望を勵まし、前途を指導し、缶詰製造処の設立を紹介し、遂に氣候寒烈、土地礮礮なる浅南の地に、一大國産を起すに至らしめたる者、實に米國理學博士木村熊二先生其人なり。茲に余が□^(不明) 応を記述するに当り、謹^{つしん}而^{そと}其の高思を感謝すること斯の如し。

十 桃養合資會社定款

(東京女子大学比較文化研究所所蔵)

明治参拾五年拾貳月貳拾日桃養合資會社定款左ノ通り變更ス

定款 第一章 総則

第一條 當社ハ缶詰製造ノ事業ヲ經營スルヲ以テ目的トス

二 當社ハ桃養合資會社ト称ス

三 當社ハ營業所ヲ長野県北佐久郡三岡村大字森山九百六拾番地ニ設置ス

四 當社ハ資本ノ総額ヲ金參千五百円ト定メ社員氏名及其出資額左ノ如シ 但シ小山五左衛門小宮山権兵衛小山忠五郎吉沢芳次郎市川亀吉ハ新ニ出資シテ入社シ小山久左衛門中山信太郎ハ豊田守五郎ノ持分ノ一部ヲ小山五郎ハ塩川賢三ノ持分ノ一部ヲ森山忠太郎ハ塩川源助ノ持分ヲ柳田森四郎ハ小山三四郎ノ持分ヲ譲受ケ入社ス

長野県北佐久郡三岡村参百拾八番地

一金壹百円

塩川 貞五郎

同県同郡同村

参百六拾番地

一金壹百円

大久保 茂 惣吉

一金貳百圓	東京都小石川区指ヶ谷町八番地	豊田守五郎
一金貳百圓	長野県北佐久郡三岡村参百拾八番地	塩川民助
一金壹百五拾圓	同県同郡同村五九番地	中村廣太郎
一金壹百五拾圓	同県同郡同村三三九番地	塩川伊一郎
一金壹百五拾圓	同県同郡同村三二五番地	塩川幸太
一金壹百五拾圓	同県同郡小沼村三五五番地	高山永三郎
一金壹百五拾圓	同県同郡小諸町六四八番地	大塚宗次
一金壹百五拾圓	同県同郡小諸町五二番地	小山忠左衛門

(以下略して記述する)



日本桃養合資会社定款

	一金壹百円	遠山 市助	三岡村三八五番地
”	”	高山 和一	小沼村三六三
”	”	塩川 一郎	三岡村三二一
”	”	直井園次郎	小諸町八六三
”	一金五拾円	塩川 賢三	小諸町四二三
”	一金壹百円	小山 勝治	北大井村二九〇
”	”	出澤 嘉一	小県郡和村三二三
”	一金五拾円	森山 嘉市	三岡村三〇八
”	”	塩川三郎治	三岡村二九一
”	”	小泉 多作	三岡村三〇三
”	”	中村道之助	三岡村六八
”	”	安川濱之助	小諸町五八六
”	”	矢嶋 市助	北大井村一四六
”	”	矢嶋 元助	” 四九
”	”	小山 立三	三〇六一
”	”	小山徳三郎	小諸町三六九
”	”	塩川松太郎	上田町五〇一

- 一金壹百円 小山久左衛門 小諸町四三三
 - 一金五拾円 中山信太郎 小沼村二七九
 - 〃 小山 五郎 小諸町甲二九〇四
 - 〃 森山忠太郎 三岡村三五三
 - 〃 柳田森四郎 小諸町三六五
 - 一金壹百円 小山五左衛門 〃 二六六
 - 〃 小宮山権兵衛 小諸町六七六
 - 〃 小山忠五郎 小諸町四四八
 - 〃 吉沢芳次郎 〃 三〇五
 - 〃 市川 亀吉 岩村田町四〇六一
- 第五條 塩川貞五郎大久保茂惣吉ハ無限責任社員ニシテ他ノ參拾五名ハ有限責任社員トス
- 六 當社存立期限ハ明治參拾四年十月一日ヨリ全五拾四年九月參拾日迄式拾ケ年トス
- 七 當社ノ使用スル印章ハ左ノ如シ

桃養合
資会社
之章印

桃養合資
会社之印

(第八條以下は略)

十一 果樹害虫驅除豫防組合規約

(塩川家所蔵)

果樹栽培上最モ恐ベキハ害虫ニシテ之ヲ驅除シ撲滅セシ□□□□^(不明)ハ必シモ共同一致シ出ツルノ外策ナキヲ確認シ 茲ニ三岡村果樹栽培者一同以下ノ遂条ノ履行ヲ規約ス

第一條 本規約ハ三岡村果樹栽培者全般ニ涉リ成立ヲ期スル者トス 但隣村ニ栽培者アルトキハ必要ニヨリ強テ加入ヲ勸ムルモノトス

第二條 區域外従来ノ栽培者及ビ新タニ栽培セントスル者、若シ前條ノ趣旨ニ反スルトキハ他ノ同業者一同ヨリ徳義上ノ制裁ヲ與ヘ又ハ行政廳ノ説諭ヲ受ケシムルモノトス

第三條 同業者ハ毎年春秋定ムル期間定ムル方法ニ因リ必ズ驅除ヲ励行スルコト 春秋ノ間ト雖モ^{イモト}必要ト認ムル場合ニ於テ驅除ノ励行ヲナスコトアルベシ

第四條 本條ノ實績ヲ行ハンガ爲メ左ノ役員ヲ置ク

一 組合長兼審査長 壹名

二 副組合長兼審査副長 壹名

三 審査委員 拾名

四 會計

- 第五條 組合長ハ村農會長トシ 副組合長及審査委員ハ同業者中ヨリ之ヲ撰出ス
- 第六條 役員ノ任期ハ各二ヶ年トス
- 第七條 審査長ハ駆除ノ期日方法ヲ定メ五日以前ニ之ヲ同業者ニ通知スルモノトス 但病害ノ發生猛烈ヲ極メ駆除火急ヲ要スル場合ハ此ノ限りニアラズ
- 第八條 審査委員ハ毎駆除勵行後ニ於テ各同業者ノ果樹園ヲ巡視シ公平無私ナル審査ヲ遂ゲ其ノ不充分ナル者ハ更ニ期日ヲ定メ駆除再行ヲ通告スルモノトス
- 第九條 前條ノ通告ヲ受ケタル同業者ハ異議ノ申立ヲナスコトヲ得ズ
- 第十條 第八條ノ通告ヲ受ケタル同業者若シ其ノ期間内ニ於テ再行駆除ヲナサザル件ハ人夫ヲ使用シ其ノ強除ニ当ラシメ實質ノ弁償ヲナサシムル者トス
- 第十一條 本組合ハ毎年一月總會ヲ開キ經費ノ予算決算并ニ事業施行ノ順序方法ヲ議決ス
- 第十二條 本組合ニ加入若シクハ脱退セント欲スル者ハ組合長ニ届出總會ノ議決ニ依ル
- 第十三條 本組合ハ組合員三分ノ二以上ノ同意アルニアラザレバ改正スル事ヲ得ズ
- 第十四條 本組合ニ加盟ヲ証スル為メ左記ニ記名捺印ス

十二 佐久特産物の消長

〔信濃佐久新聞〕大正八年八月一日より

北佐久の洋桃と苺

中 島 禾 堂

北佐久郡に於ける洋桃と苺は、我長野県下は勿論本邦各府県を通じて有名なる特産物なるは、世人の^{ひと}齊しく認めらるゝ處にして、我等が茲^{こゝ}に事新しく記述するの要なきも、之等^{これら}事業の創設者は、如何にして斯業^しの今日あるを致したる功勞の一斑を公にして併せて事業の發展せる徑路を紹介せんとするにあり。今その起源の概況を報道すれば同郡三岡村及附近の各村は、地味慨して瘠薄にして普通農業の収益の如き反当り僅々拾余円に過ぎざる耕地多きは往時に於ける通例なりとす。

然るに明治初年来の世運の進展は、農業組織の改善を促して尚進まず租税公課は無遠慮に向上する等農家經濟の不況思はざるの甚しきものあるに至り、如何にせば此の瘠地を利用し多額の産出を收さしめ農民の困難を救済すべきやは当時官民共に日常苦慮焦心したる時代なりき。而して当時比較的有利ならんとして第一に注意を惹起^{じやくき}せしめたるは園芸事業にして普通農業の集約的耕種法に依るよりも薄地に適當の作物を撰^{えら}みて栽培し而も收穫物は他地方に売却し利益を自村に持歸る等の事業は不知不識の間に農村の經濟を潤沢ならしむる唯一の方策なればなり。

斯かくの如き時勢の生みたる事業家は即ち三岡村森山の先代塩川伊一郎氏なりとす。氏は明治十八年中率先して数多の苹果苗を購入して之を繁殖し、居村に五反歩、小県郡地籍に十町歩の果樹園を設置し専ら経営に苦心の結果、一時有望の時代なりしも、斯業の将来は自己の経験上、地味適當せざる傾きあるを認むるに至れるも、尚数年継続し到底見込なきに依り、後年遂に廃止するを得ざるの悲況となれり。是より先、明治二十九年三月現村長中村廣太郎氏所有せる山林約四千坪の立木を伐採したる事ありき。

当時其跡地は苹果りんごの栽培が適當ならんと言ふものあり、同氏外六名の共同経営を以て果樹園を仕立つるの議まとまり愈々いよいよ着手せんとするに当り、兎に角斯業しよの率先者塩川伊一郎氏に協議し、更に米國理學士木村熊二氏当時小諸義塾の経営者なりしが、氏は多年米國にありて同時果樹栽培の実況に明かなるを知り、同氏に付き同村の風土に適する果樹の指導を乞ふに至り、その結果米國桃樹の有利なるべきを揭示せられ、直に数十種の洋桃種苗の購入を為し、試植を為したるを以て其の起りと為す。

(二)

斯かくの如き径路を以て創業せる洋桃事業は、数十種の試作に依り或る物は良好の結果を収むるに反し或るものは枯死し或は害虫の蝕害する處となりしも現今栽培しつゝ、ある水蜜桃外二三種が同地に通ずるところを認むるを得たり。依て更に同志に勧誘したるに斯業の當時有利なるを世人の知る處となり、数年を出ずして附近各村に分布し得るに至れり。其間三岡村塩川伊一郎塩川貞五郎等の諸氏は、勧誘するの一方便として桃樹の結実後収益を見たる曉に於て、種苗代を支弁せしむる約束にて売却し、或は自ら發起となり組合組織の桃園を仕立て、不明しく希望者に苗木を寄贈する等大いに盡力したる結果創業早々にし

て小諸町の信桃社、小沼村東洋社、南大井村甘桃社及栽桃社、大里村に於ける大里桃園、其の他岩村田、北大井等に各組合の設立を見、且つ個人仕立の桃園続出するに至りたり。

而して、創業当初は其目的専ら生果の販売にありし県下市街地に供給して末だ洋桃本来なる風味の嗜好を知るもの少なく、軽井沢の外客をして唯一の顧客とせしも、之又需用に限りありて到底地方に於て處分し能はざるに至りたれば、進んで京濱地方に販路を開きたるも多くは姦商等に斯かれ、多大の損失を蒙りたるが如き状況にして殊に一面に於ては生果の産額にはかに激増し、いわゆる生産過剰となり、益々販路に窮するに至りたるを以て、先輩同志相謀る處あり、生果利用の方法として、缶詰の製造を企画せるは、明治三十四年中の事に属し、同年十月十日塩川貞五郎、遠藤市助、豊田吉三郎、大久保茂惣吉、塩川伊一郎、小原多作、森山嘉市、塩川三郎等の諸氏の發起に依りて、当時小規模ながら、合資組織の日本桃養会社を創設したり。

読者諸君、我が三岡村に洋桃の試植を為せしは、前回に述べたる如く明治二十九年にして、此の間即ち僅か満五年しかもかくの如き発展を來したるは何故ぞ、こは申す迄もなく先輩者は農家副業の爲め、自己の利害を顧みるの暇なく奨励の結果、異状の発達を來したるにあり、今其の壮挙に加わり直接間接斯業に功勞ありし社員を挙げれば附近数か町村に亘り左の如し

中村廣太郎、塩川民助、塩川幸太、高山永三郎、大塚宗次、小山忠右衛門、高山和一郎、塩川一郎、直井圓次郎、塩川賢三、小山勝治、出沢嘉一、中村道之助、小山三四郎、塩川源助、安川濱之助、矢嶋市助、小山立三、矢嶋元助、永井興三郎、塩川松太郎、豊田守五郎

(三)

読者諸君、何事に依らず創始の事業をして、或る程度迄發達せしめんとする起業者の苦心は容易のものにあらず。終始一貫その任に当り百折不屈千挫不撓、即ち献身的至誠の行動を以て難事と戦ひ、熱血をそそぎ堅実忍耐を以て四圍に蝟集するの凡百の害敵を駆逐するの覚悟なかるべからず、これに加えこれ等の事業は起業者が如何に高尚純潔の精神と不拔不磨の氣力とを以て事を處し、或は自己の利益を犠牲に供すると雖も、小数の当業者が燃ゆるが如き理想の憧憬を以てしても、到底所期の目的を貫徹するや極めて難き場合稀なりとせず。故に事業の種類を問はず多数の同志が一團となりて十有余年の昔、三岡村を中心としての有力者が、其挙に賛同せられたるが如きは洵に斯業の一大思人にして、北佐久の洋桃及苺の今日あるは決して故なきにあらず。「衆髮克く象を繫ぐ」と言ふにありしなるべし。

さて、三岡村森山に合資会社の組織となり缶詰業を開始するに方りては、木村氏が盡力するは勿論なるも、氏としても其製造の實地に通ぜるにあらず、其の他の諸氏も勿論なれば、木村氏の知人なる当時東京市小石川区指ヶ谷町に斯業を営み、而も其道に造詣深き豊田守五郎氏を招聘し實地の指導を受くるに至り、茲に於て始めて其の目的を達し得るに至れり。即ち我が佐久の地に缶詰製造を開始せられたるは、之を以て嚆矢にして缶詰業の起源として、大方読者の永く記憶に存し置かれ度事實なりとす。斯の如く生果生産過剩の利用策は美事に成功し、会社直営の栽培地は勿論各地事業家若しくは實際農家の副業として植栽せられたる数本の洋樹にても生果處分に全きを得ざる向に對しては、相当値段を以て買上の上製造し、一面販路の拡張に努め其一方法としては各地の共進會博覽會、若しくは品評會には、開

催地の遠近と経費の多少とを問わず出品し、極力發展策を講じ、裁製共に奨励普及に余念なかりし結果と共に好況となり、佐久洋桃の声價は日に月に旺盛となり、順境の發達を遂ぐるに至れるも、一面に於ては世運の難展も又著しく、従つて諸物資の騰貴に伴ひ製造に要する諸材料の昂騰と其他の生産費の膨脹とは、到底小規模なる団体の力を以て能く経営し能はざるは自然の趨勢なるに至り、更に資本の増額を爲すに方り壹万円の株式会社と組織を変更するの議起りしは、明治二十九年中の事なり。而して愈々株式組織に変更したるは同年八月二十八日なるが、其際故ありて同時に脱退したるは

塩川伊一郎、直井圓次郎、小山勝治、出澤嘉一、小山三四郎、塩川源助、矢嶋元助、永井舉三郎の諸氏なるが、塩川伊一郎氏は別に個人として缶詰工場を創設し、会社と同等の勢力を以て栽培に製造に益々斯業の隆盛を企図したる事、其當時有名なるものなりし

(四)

斯の如くして株式組織に変更した日本桃養会社は、塩川貞五郎氏主腦者となり、極力社業の發展策に腐心し、一方塩川伊一郎氏は製造工場を会社と異にせるも、斯業の奨励普及は旧に倍し、村の爲め郡の爲め將又國家の爲め努力したり。然るに何ぞ此好個の事業家をして不幸病魔の犯する處となり、明治三十九年遂に黄泉の客となり去る。

当時、斯業に及ぼしたる影響甚だ大なりしなり。然れとも襲名したる嗣子伊一郎氏又却々の事業家に於て、今や斯業に關しては拡く全國の事業として知らるるに至れり。又塩川貞五郎氏は老後尚晩近迄社業に尽くしたるも是又今や其の温容に接する不能、されど嗣子民助氏は非常の熱心家にして會て本県農

事試験場に於て洋桃の病害其他の栽培地を設置したるに選ばれて、担任者となり熱誠を以て管理の任にありし。当時余も又郡の勸業の一部に携はり居りて實地に其を視察したる事ありき、而して今回余が此頃を記するに当り頃日寸暇を以て三岡村森山を訪ひ土橋停留場よりの道順として塩川伊一郎氏を第一に訪問し、現天下の特産物をして我等が拙なる筆を以て紹介するの要なきも去りとて特産物中の特産物として除外するは如何のものにや。兎に角起業以来今日までの経過並に其間に於ける事業の起伏の主要を聴し世に発表し後進者の参考にもがなと、種々なる想像を持して訪れたるに、塩川氏数日前上京との事にて不在、空しく辞して会社に立寄りたるも是又農繁時の事とて留守居役の人々すら居らず塩川民助氏を問はんとせるも、斯の如き運悪しき日は一先つ中止するの得策ならんと思ひ止まり三岡村役場に至れば、当日は日曜との事にて当直の人迄も他出是又何等得る処なくして帰路に向ふ、我等は常に繁劇の身天下の日曜を忘却し居りしは帝国の臣民として洵に突止千万なるも此日位余の為に都合あしき日は會てあらざりし様愚考したりき、従て本項記事の材料は余が會て斯業奨励に關せし当時の記憶に任せて述ぶる次第なれば、實際其事業に携はりつつありし熱心家功労家の諸君より見れば事実相違の点多く反物足らざる感あるべきは勿論あるも一般後進者の参考と師範ともなるべき事實は更に回を重ねて連載したき考へなれば先輩者に対しては予め茲にお断り致し置く次第なり。

十三 趣味と実
益に宿る

小果実栽培法 空地利用の園芸（弊園数年の実地試験）

（塩川家所蔵）

小果実の栽培は、最も趣味と実益を兼ねたる事業にして、各種の小果実を混植して果樹園となし、或は庭前屋後檣垣樹間等の廢地を利用して栽培地となすを得可く、殊に専門的技術を要せず、何人にも容易に栽培することを得て、老人小兒と雖も尚ほ能く栽培上の與深き趣味を楽しみつつ、実益ある作業に従事し得る□々あり。（不明）されば多大の注意を以て、庭前屋後樹陰檣垣又は田畑の畦畔廢墟等を利用して、此等の小果実を栽培し、生果或は製品として以て市場に販売せば、優に壹百円内外の利益を得ること難しに非ず。若し之を自家に使用するとせば、朝夕兒女等の副食物として、或は食膳に供し、又は來客の接待に用ゐて決して不足を感じざるべし。此等によりて一ケ年優に五十円内外の冗費を節減するを得べく、而して菓子類を常用する如く胃腸を害する患なく、衛生上実に至大の効力あり、而して此等の小果実有害虫に罹ることなく、又年々凶作あることなく毎年一定の收穫を収め得べし。其小果実中弊場に於て最も利益あり且つ栽培極めて容易なりと認めたるものは、草イチゴ・木イチゴ、房スグリの三種なりとなす。因て茲に其の三種に就き簡単に説明すべし。

草イチゴ

草イチゴは、初夏百果の末だ熟せざるに先だち、已に累々として美色を呈し、味は甘酸宜しきに適し、一種愛好すべき佳香を有し、生食し或はジャムとして頗る美味なるを以て、近來其の需用非常に激増し來り、東京、横浜の如きは一斤二十錢以上の價を保ち、我が地方に於てもイチゴジャム製造盛大となりたる結果、一貫目金三十五錢以上の時價を保つも、尚各製造家争ふて購買するに至れり。草イチゴは種類を撰定し栽培宜しきを得ば、一坪一貫五百目の結実をなさしむるは敢て難きに非るなり。仮令其大栽培をなすも尚一反歩三百貫の收穫を得べきなり、草イチゴの種類は数百種ありて、弊場に於ても数十種を一々実験し、其最豊産なる種類十有余種を撰出せり、今更に其五種を紹介す可し。

一、ルサー 一株金五錢 百株金三円

果実最大、先端尖り色は紅色にして種子少く甘味にして香氣高し、一粒四五匁ありて優等種なり。

二、ビルモラン 一株金五厘 百株二十五錢

早生種にして果実中等なり、色は濃赤色、酸味多し 製造用に適す。

三、エキゼルショール 一株金五錢 百株金三円

果実最大早生種なり、弊園にては五月下旬に成熟す。温室栽培に適し、秋季より開花す。先端円錐状をなし、紅色にして実緊りよし。輸送販売に適す、豊産にして強健虫害に罹ることなし。

四、ドクトルモーレル 一株金五厘 百株十五錢

晩生種にして、果実最大円形をなし、甘味多し、生食用として需要多し。

五、カナデアン・スキート 一株金七錢 百株五円五十錢

果実最大、卵円形状をなし、品質佳良、眞紅色を呈し、豊艶雄麗佳香を有し、繁植映盛なり。熟すれば満地錦を布くが如し。

其の他新種十有余種あり。

房スグリ

普通に栽培せらるゝスグリは、とげありて果実の採収に困難なれども、房スグリは、とげなきを以て、手入れ採集甚だ容易なり。而して如何なる土地にも適し、尚樹下庭前・畦畔・廢墟等を利用して得て、大いに利益を収む可し。樹性強健にして結実多し。果実は恰も葡萄の如く、果粒密着し累々として下垂す。故に小葡萄の名あり、生食に宜しく、実堅く緊れるを以て、遠地に輸送して生果販売に適す。黒色種は水分少なきを以て乾果を製造するに適し、ジャム・ゼリーとなして貯蔵し、又は販売し殊に美味なる良酒を醸造するを得べく、又葡萄酒の着色料とし、或は西洋菓子製造用として需用多し。

一、赤色房スグリ 一株二錢五厘 百株金二円

二、黒色房スグリ 一株二錢五厘 百株金二円

三、大果房スグリ 一株十二錢 百株金十円

木イチゴ

木イチゴは、最近の舶来小果実にして、樹性最も強健、地質・氣候の如何に關せず好く結実し、勢力旺盛なり。果実は一房十粒以上密着して大房をなし、味甘酸適度にして風味佳良、販売するには枝のま
ま剪切して市場に搬出す可し、収益甚だ大なり。果園の周圍に植ゆるときは、僅かに一年にして堅固な
る籬となり、強頑なる盜賊も潜入すること能す、故に比種を果園の籬となせば一挙兩得なり、ゼリー
ジャムに製造するときは、美味にして核に香氣あり、生食すれば爽快なる佳香あり、胃腸病を治するに
大効ありと言ふ、又能く美酒を醸造することを得可し、黒色種は葡萄酒の着色料として色澤を良好なら
しむるが爲に使用せらるゝを以て、需要頗る盛なり。

一、黒色木イチゴ 一株金三錢 百株金二円

繁殖盛んにして結実豊産なり、製造用とし釀酒用として需用多し

二、赤色木イチゴ 一株金三錢 百株金二円

果大熟期極めて長く結実堅良豊産にして市場に販売するに宜し

三、最優等赤色木イチゴ

一株金三十錢 百株二十円

ローガンベリー

本種の実は最大にして鮮紅色を呈し極めて艶美なり、一種特有の芳香を有し甘味多し、生食用・医薬
用として珍重せらるゝのみならず、豊産なるを以てジャムゼリーの製造原料として佳良なり。

此の種はとげを有せず六尺以上に繁茂するを以て、收穫過大なる最優等種なり。

其の他に最新輸入の珍種數種あり。

十四 園芸家 塩川伊一郎君

〔佐久名流評林〕より〕

君は北佐久郡三岡村字森山の人、明治二年某月に生る。父某氏性警敏器用常に規矩準繩の事に従ひ最も良匠の譽ありき。而して又接木の法に熟し事業の傍々々人の委嘱を受け、諸種の樹木を接し人某の多能を称しき。君亦其の性を承け幼にして器識あり。而も自ら其の箕裘を襲くを欲せず、文学を以て身を立てんと欲し、居村の小学校卒業の後、小諸町なる中山義塾に遊び、専ら漢籍を修めたり。居ること二年、遂に意を決して東上し、原洋義塾に入学し、数学と英語とを研究せり。実に明治十八年一月六日なりとす。既にして家事の君をして研学を遂げしめざるに会し、恨を吞みて帰郷するや、閭巷の年少相語って日く、彼れ多少の文字あるを以て、傲岸自ら處る豊悪むべきにあらずや。請ふ今より彼と交を絶たんと、議一決、之を君に通ずるや、君平然自若、毫も之を意に介せず、却つて青年の無謀を愍みたりき。而も是れ君をして後年奮起の基因たらしめしと言ふ。

会々父某氏、舶来蔬菜果樹栽培便覧を読み、曉る所あり。語るに林檎栽培の利を以てし、日く、請ふ試みに之を栽えんとす。君亦大に某の擧を賛し、即ち苗木を東京三田育種場に求め、漸次之を繁殖せしめて遂に数百株の栽培を爲したり。此の時に当り、君別に見る所あり、父の同意を得金一千円を投じ地を小県郡三才山麓に卜し、一林檎園を設くるに決意せり。

を知る得るや再び園芸に向つて自ら其の運命を開拓するに決意し、即ち復苗木を東京に取り、地を選びて之を試植せり。

時恰も明治二十七・八年の戦役、始めて其の局を結び、彼の台湾島の我が版図に入り、而して其の開拓事業の頗る有望なりと聞くや、君の壮心又働き、轉た鵬翼凶南の感に堪へず。明治二十九^{三十一}年某月、絶大の新希望を齎して、同島視察の長途に上れり。而も之れ亦失敗の悲運に畢れり。他なし見る所は聞く所と異り、安全に事に従ふべき熟蕃の地は、開拓既に普くして、復新に鋤犁の入るべき寸地をも見る能はざりしを以てなり。即ち琉球諸島を視察して、將に帰国せんとするに当り、端なくも又一新事業を発見するを得たり。何ぞや大島々民の紬製造に従事するを目撃して、思へらく、我が信州は由来真綿の産出に富む、故に我が信州にて之を織り出さんには、益する所尠からざるべしとの事はれなり。而もこは最後の目的として、先ず之が原料たる真綿を彼等島民に売捌し、而して徐に其の製造の調査を遂げんと、前後二回、親ら真綿を齎して同島に赴きしも、収支相償はず、これ亦絶望の己むなきに終れり。

時に往年試植の洋桃、生育極めて善美にして、結実亦聯珠の如し。試みに其の數顆を取りて之を喫するに、甘漿美味、殆と言ふべからず。此に於て、父子始めて愁眉を解き相約して益々培植を盛にせんことを盟へり。爾來君父を助けて鋤犁を執り、且つ栽え、且つ培ひ、且つ盛に苗木を作り、無代を以て希望者に頒ち、其の植栽を奨励せしを以て、今日君の居村三岡を中心として、南北大井村等にも、美しき桃園を見るに至り、遂に北佐久全部に行はるゝに至れり。乃ち最近の調査に依るに、北佐久全部の桃園は、二百町歩以上に上り、而して君の所有は、實に六町歩以上に居ると言う。亦盛なりと謂ふべし。一

面洋桃事業の成効斯くの如くなるに、他面に於ては、明治三十三年の比より栽植せし苺の生育も、亦隆々たる運命を招き、其の栽培地亦六町歩以上に上れりと言ふ。此に於て文学界に失望せし君は、園芸界に大得意の境遇を開き、遂に佐久の園芸王を以て目せらるゝに至れり。嗚呼、亦偉なる哉。

特に君の事蹟中、茲に大筆すべきは、金屬製皮剥器械と核拔器械との発明に継ぎて、鷹形鳥威、塩川式殺蛾燈の発明新案是れなり。是れより先き、君收獲の洋桃を箱詰として盛に之を各地に販売せしが、動もすれば腐敗の虞なきにあらず。此に於て百方苦心の後、之を缶詰と爲さんと欲し、更に幾多の資本を投じて、之が實行に着手せしに、之が皮剥き、核抜き等に許多の人力を費し、尠からぬ費用を要せしを以て、工夫慘憺遂に皮剥器械とを發明して、明治三十八年某月之が専売特許を得たり。更に又君をして新案工夫を要せしめ一事あり、害鳥と害虫と是れなり。此に於て、沈吟苦思幾多の實驗を積み、遂に鷹形鳥威、塩川式殺蛾燈の二器を發明し、これ亦専売特許乃至實用新案登録を得たり。此等二器の如きは、単に園芸上に効力あるのみならず、一般農芸上にも大効あるを以て、名声噴々、需用日を追ひて盛なりと言ふ。固より此等の発明の如きは、事業上實際の困難若しくば障碍の爲めに促されたる結果なるべしと雖も、而も君の卓絶なる識見と優秀なる忍耐力とに待つにあらざれば得て此に至るべからざるなり。

今や其の事業益々盛に、販路亦愈々擴まり、現に缶詰のみにても、洋桃二十万餘個、苺十餘万個の多額に上ると言ふ。殊に宮内省の恩命を辱うするのみならず、閑院宮殿下の珍膳にも上る光榮を有するに至りては、園芸家の面目何物か之に尚へん。宜なる哉、明治四十一年九月、我が長野県主催の一府十縣

連合共進会に於て、二等賞銀牌を授與せられて、錦上更に花を添ふるの榮譽を擔ひしや。嗚呼君が園芸の奨励及び改良上の功績、洵に此の如し。故を以て明治四十二年四月、大日本農會總裁伏見宮殿下より、名譽賞狀を下賜せられたり。亦幸榮の極なり。

聞く君の缶詰は、現今到る處顧客の稱贊を博し、啻に内國製を凌駕するのみならず、外國製をも圧倒せんとする勢なりと。而も君尚ほ之に満足せず、將來益々該事業を拡張し最も果樹に適する我が信州をして、一大果樹國たらしめ、更に越後其の他の近縣に向つて發展を試み、以て盛に諸外國に輸出し、一方には外國製の輸入を防遏し、他方には生糸に垂くべき一大産物たらしめ、以て國富を啓発するの希望なりと言ふ。其の志望の大にして其の等盡の壯なる實に斯の如し。人の稱して園芸王と曰ふ、溢言にあらざるなり。

陶堂子曰く、予、君の園林を想ふ毎に、未だ嘗て武陵桃源を連想せずんばあらず。而も彼等は奏の乱を避けて此の境を開き、以て桃花園を作りしに過ぎず。豈毫も國家の消長に關係あらんや。今君の營む所は其の意全く此に異なり。聖世の思風に浴して、茲に一大園林を開き以て其の裏に起臥し而して其の果實を天下に頒ち、人をして普く其の甘味に舌を鼓せしむるのみならず、依りて以て地方の富源を開き、一國の財源を作らんとするにありき。豈武陵桃源の毫も家国民人に要なきもの、比ならんや、而も其の花時に際して、万朶齊しく春風に笑ひ、芳華鮮艷落英繽紛、蝶蜂相逐ひ、雞犬相聞ゆ。而して父子婢僕、此の境に處し怡然として相樂む所は、又雅より武陵桃源なり、而して一たび結實の期至り、團々たる万顆が悉く其の酡顏醉臉を呈するに當りては、眞に黄金郷を現出す、是れ豈腰纏十萬鶴に乗して楊州に遊

ぶが如きものにあらずや、是に於てか予は、益々君の卓見と、膽識とを嘆称せざるを得ざるなり。

明治四十二年十二月十五日印刷 著作 白田町一五八

” 十八日発行 発行 木内政太郎

十五 弔 辞

(塩川家所蔵)

我が親友トシテ最モ愛敬セル東洋ノ企業家、塩川伊一郎君長逝セラル、嗚呼悲シイ哉 君ト相知ルハ約四十年前以前、即チ明治二十年ノ盛夏ノ頃ナリシ、爾来改良農具ノ考案、洋桃事業ニ意ヲ注カレ、半面ニ於テハ磯部驛改修工事、岩村田農学校の建築工事、長野赤十字社附属病院建築工事、平原信号所新設工事等ヲ始メトシテ、公私ノ別ナリ克ク資金ヲ供給シテ之ヲ援ケ、続いて君ト共ニ佐久鉱山權利獲得採鉱冶金、沿海洲森林伐採權利獲得、国民生活改善簡易食糧品ノ製造、青島塩田買収等何レモ大企業ヲ企画スルモノハ、国家的營利ノ事業ニシテ、巨万ノ出資ヲ惜シマサリシモ、正ニ成ラントスルニ当リ不幸君ノ健康勝して、其ノ後再ヒ機熟スルヤ、西比利亞徹兵ノ非運ニ向ヒ、爲メニ宝ノ山ニ入りナガラ宝ヲ得ルニ至ラサリシハ、今尚心残りナラン

如斯 各大事業成ラス半途ニシテ 今夏遂ニ白玉樓中ノ人トナラレシハ惜ム可シ

本日茲ニ儀礼ヲ挙ケラルルニ当リ、君ノ靈アラハ余ノ捧ケマツル一沫ノ香ト共ニ享ケヨ

大正十四年十月十日

小諸町 小宮山莊助

十六 塩川伊一郎の受けた賞状（残されていたもの）

明治四一	大日本農会総裁貞愛親王	農事改良ノ奨励及実行	名誉賞状
〃	第五回全国製産品博覧会	イチゴジャム	褒状
〃	〃	洋桃缶詰	銅賞
〃	一府十県連合共進会	缶詰洋桃	二等賞銀牌
四三	一府十四県連合共進会（群馬県）	苺ジャム	三等賞銅牌
〃	〃	洋桃イチゴ栽培并缶詰製造経営法	三等賞銅牌
〃	第一回園芸品評会	苺ジャム	一等賞
〃	第七回全国製産品博覧会	ジャム	銀賞
〃	〃	水蜜桃	銅賞
四四	全国製産品博覧会（京都）	水蜜桃缶詰	銅賞
〃	第二回園芸品評会	苺ジャム	優等賞
〃	〃	洋桃缶詰	一等賞
四四	第六回缶詰業連合大会品評会	洋桃糖煮	二等賞
〃	全国製産品博覧会	缶詰各種	金賞

大二 第三回園芸品評会

桃砂糖煮

一等賞

〃 第八回全国特産品博覧会

感謝状

三 東京大博覧会

洋桃缶詰

銅牌

〃 〃

杏ジャム缶詰

銅牌

五 全国飯食品
理想的品評会

杏ジャム

金牌状

〃 〃

苺ジャム

金牌状

十五 国産発展博覧会

苺ジャム

褒状

昭三 国産振興東京博覧会

苺ジャム缶詰

優良国産賞碑

十八 塩川伊一郎関係年譜

年 西 曆

事

柄

弘化3 (一八四六)

初代伊一郎、北佐久郡北大井村柏木に生まれる。

慶応元 (一八六五)

初代伊一郎、北佐久郡三岡村森山の塩川幸三郎の娘きよと結婚、塩川家に婿養子にはいる。

明治2 (一八六九)

11月3日、勝太(二代目伊一郎)生まれる。

14 (一八八一)

勝太、小諸の中山義塾に入門。漢籍を修める。

18 (一八八五)

1月6日、勝太、東京の原洋義塾に入門のため上京。

22 (一八八九)

伊一郎父子丸子町の三才山峠の麓でりんご栽培を始める。

24 (一八九二)

10月10日、木村熊二、初めて信州入りする。

25 (一八九二)

1月15日、木村熊二、再度信州入りする。

26 (一八九三)

11月25日、小諸義塾開校する。

27 (一八九四)

三才山峠の麓でのりんご栽培、失敗する。

28 (一八九五)

9月20日、伊一郎、木村熊二宅を訪ねる。

29 (一八九六)

3月3日、熊二、森山村で演説会を開き、桃樹栽培を奨励する。

明治29 (二八九六)

伊一郎ら同志8人、桃園づくりにとりかかる。

31 (二八九八)

明治31年11月24日、同32年3月8日まで、勝太、台湾・奄美大島旅行を行なう。

32 (二八九九)

4月、勝太、小県郡和の出沢薫則の妹すると結婚する。

4月7日、勝太、奄美大島に真綿の売り込みに出発する(5月11日帰郷)。

9月6日、勝太、第三回目の奄美大島行きを行なう(11月20日帰郷)

33 (一九〇〇)

イチゴ栽培を始める。

34 (一九〇一)

8月11日、日本桃養合資会社が設立される。

11月、イチゴジャムの缶詰を閑院宮殿下に献納する。以後毎年献納する。

35 (一九〇二)

12月20日、日本桃養合資会社の資本金三千五〇〇円に増資される。

37 (一九〇四)
伊一郎父子ら九人、日本桃養合資会社を脱退、新たに塩川缶詰合名会社を設立する。

日露戦争起こる。

38 (一九〇五)

塩川式果実皮取器械と同核抜器械を発明、専売特許を取る。

39 (一九〇六)

3月7日、初代伊一郎亡くなる。

3月末、小諸義塾閉塾。

8月28日、日本桃養合資会社、資本金を一万円に増額して株式会社となる。

10月、山梨県主催一府九県連合共進会に洋梨糖煮缶詰とイチゴジャムを出品、共

に三等賞銅牌を受賞。

明治40（二九〇七）

4月、東京府博覧会に洋桃缶詰を出品、一等賞を受賞。

41（二九〇八）

昇、生まれる（三代目伊一郎）。

4月、長野県主催全国缶詰業者連合大会品評会で一等賞、京都全国製品博覧会で三等を受賞。以後毎年、各種品評会、博覧会などで塩川缶詰合名会社の製品は、優秀な成績を修める。

42（二九〇九）

二代目伊一郎『缶詰製造業経営書』を書き上げる。

43（二九一〇）

4月、明治天皇、皇后両陛下ならびに皇太子殿下にイチゴジャム四箱を献納する。

44（二九一一）

桃の炭疽病の被害広がる。

三岡村に果樹害虫駆除予防組合設立。

東京帝国ホテルで塩川缶詰合名会社のイチゴジャムを使うことになる。

東京帝国大学農学科主任横井時敬により、農学科実科生三〇人の現地視察が行なわれる。

4月10日、小諸駅で、桂太郎総理大臣に洋桃缶詰とイチゴジャムを贈る。

大正3（二九一四）

兵庫県鳴尾村の農家に委託してイチゴ栽培を行なう。

9（二九二〇）

東京府立第五中学校の生徒の転地修養隊による農作業実習が伊一郎の農園で行な

われ、以後毎年続いた。

大正12（一九二三） 関東大震災の救援のため、被災地にイチゴジャム二千本贈る。

14（一九二五） 5月、伊一郎、兵庫県鳴尾に赴く。

7月下旬、伊一郎、長野日赤病院に入院。

8月5日、伊一郎、長野日赤病院にて逝去。享年五十七歳。

10月10日、二代目伊一郎の葬儀が行われる。

昭和2（一九二七） 5月、佐久平一帯の果樹や桑に大霜害広がる。

12（一九三七） 7月、日中戦争始まる。

国家総動員法公布される。

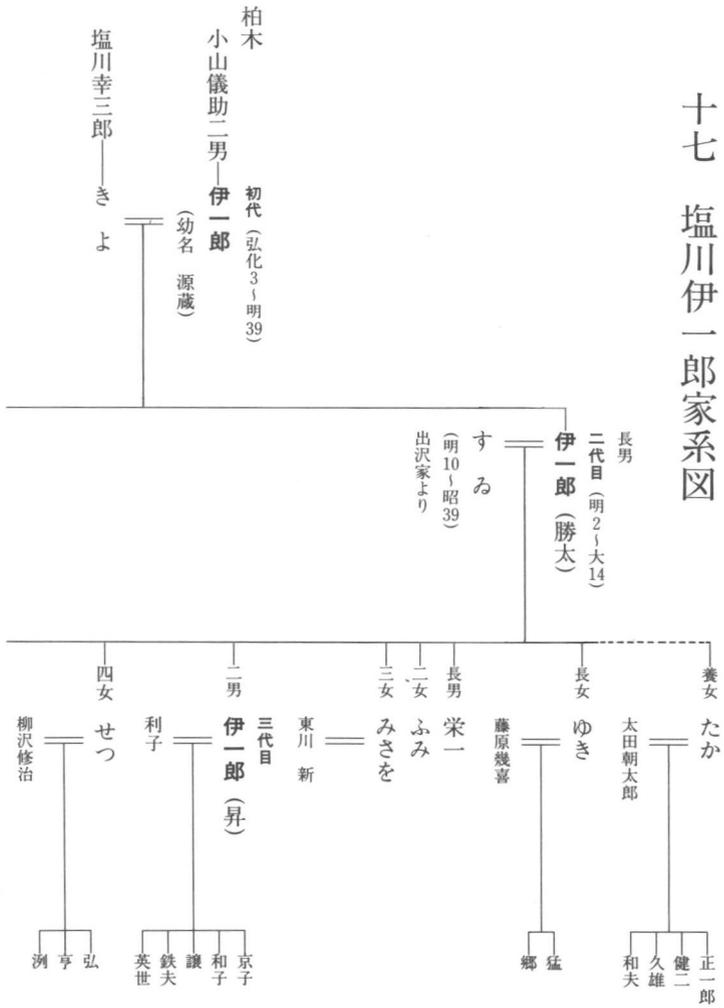
13（一九三八） 価格統制令、総動員物資使用令公布される。

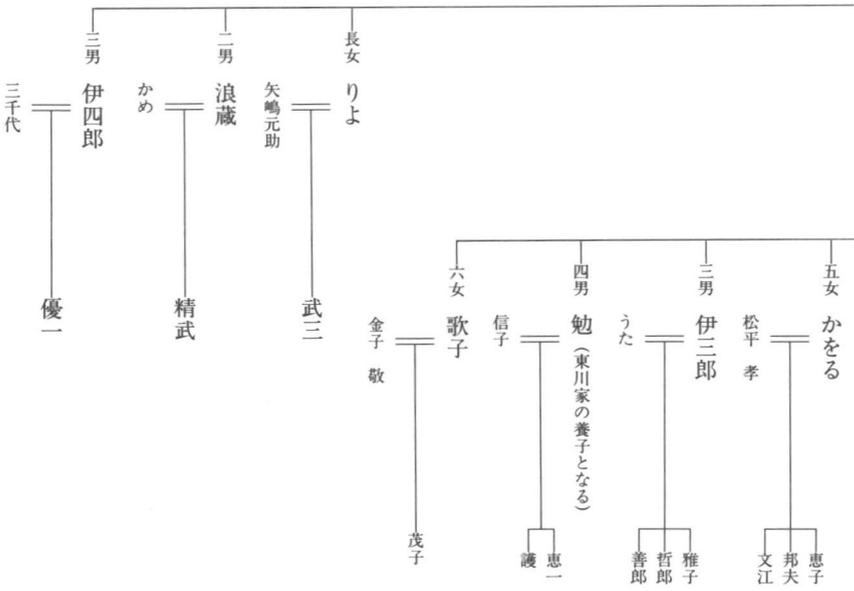
県下の缶詰会社が統合され、篠ノ井に長野缶詰会社がつくられる。

塩川缶詰合名会社の工場も閉鎖される。

16（一九四一） 太平洋戦争始まる。

十七 塩川伊一郎家系図





主な参考文献及び資料一覧

- 「塩川伊一郎氏」 錦城生『農業世界』第六卷一二号 明治四四年九月一日 博文館
- 「浅間山麓の一偉人」 川上岳城『青年之友』第一三号 明治四四年一月一日 新公論社
- 「佐久の園芸王」 『信濃毎日新聞』明治四一年一月六日、信濃毎日新聞社
- 「園芸家塩川伊一郎君」 木内政太郎『佐久名流評林』明治四二年一月一八日 佐久名流評林著作部
- 「木村熊二と桃」 菊池麟平『信濃佐久新聞』昭和五七年四月一〇日、
- 「桃源郷」の作者」 太田愛人『三つの森の物語』 筑摩書房
- 「イチゴジャム」 井出孫六『信濃毎日新聞』昭和六三年九月一日
- 『長野県果樹発達史』 昭和五四年三月 長野県経済事業農業協同組合連合会
- 『信州くだものニュース』 昭和四一年六月二五日
- 「モモ、いち早く産地化」 『信州の人と産業』昭和四五年 信濃毎日新聞社
- 「佐久特産物の消長」 中島禾堂『信濃佐久新聞』大正八年一日 信濃佐久新聞社
- 「嗜好」 明治四四年一〇月 明治屋
- 「嗜好」 明治四五年八月 明治屋

『嗜好別冊ジャムブック』 明治四八年六月 明治屋

『明治屋七三年史』 明治屋

『明治屋一〇〇年史』 明治屋

『顕彰状』 『ジャム工業会報』 昭和三二年一二月 全国ジャム工業協同組合連合会

『業界功労者の横顔』 『ジャムのはなし』 昭和三二年一月 全国ジャム工業協同組合連合会

『ジャム界今昔物語』

『ジャムの知識』 昭和四一年七月三〇日 日本ジャム工業組合

『缶詰・水産加工』 『味百年』 昭和四二年九月 日本食料新聞社

『業界功労者を顕彰』 『日本食料新聞』 昭和三二年一月七月 日本食料新聞社

『ジャム』 『大事典desk』 七六八P 昭和五八年五月 講談社

『塩川氏の苺ジャム製造談』 『農業利用缶詰罐詰加工法』 昭和四年六月

『塩川伊一郎』 『信濃郷土史』 第二卷 歴史図書社

『奮闘成功録』 岩崎錦城 大正四年 広文堂

『北佐久郡志』 大正四年一二月 長野県北佐久郡役所

『地方発達史と其の人物』 鈴木善作 昭和一六年 郷土研究社

『長野県歴史大年表』 昭和六二年七月 郷土出版社

『長野県歴史人物大事典』 平成元年七月 郷土出版社

- 「森山村桃樹栽培の経緯」 木村熊二 明治三八年 東京女子大学比較文化研究所蔵
- 『木村熊二日記』 昭和五六年三月 東京女子大学比較文化研究所
- 『木村熊二日記II』 昭和五四年一月 東京女子大学比較文化研究所
- 『三岡村塩川伊一郎果樹栽培関係書類』 東京女子大学比較文化研究所蔵
- (この中に『長野県北佐久郡三岡地方洋桃及母栽培并缶詰製造業経営書』明治四二年 と『桃養合資会社定款』明治四三年 が含まれる)

あとがきにかえて

塩川伊一郎の妻するの三十三回忌、次女ふみの二十三回忌、三男伊三郎の七回忌の法要の行なわれる日に、『塩川伊一郎評伝』を発刊することができ、誠に喜びに耐えません。ふみ、伊三郎は生前、本の発刊を強く望んでおりましたが、果たせぬまま亡くなりました。この本の発刊は三人への何よりの供養になることと思います。

伊一郎のことを広く、また後世に伝えることは私たち遺族の大きな責務と感じておりました。伊一郎は、他者への思いやりの「心」とそのために事業を興す「才」を持ち合わせた人でありました。そこで伊一郎の本は、その「人柄」についてはエピソードなども交え多くの人に共感していただけるように、しかしその「業績」については客観的に記し、史料としても耐え得るようなものでなければならぬと考えておりました。

この難しい注文に小林先生は見事に答えてくださいました。先生は、平成四年小諸市立野岸小学校長をご引退後も佐久地方の地誌についてご研究を続けられており、現在市町村誌のご執筆もされております。伊一郎についても多くの史料を綿密に調査し、分かりやすくかつ正確に執筆してくださいました。その熱意と忍耐に敬服するとともに、大いなる感謝の念を禁じ得ません。

小諸市長にはありがたい序文をいただき、遺族一同大変光栄に感じております。

この本のできるまでには多くの人のお世話になりました。全体の方向づけに助言をいただいた森嶋稔先生と小林收先生を紹介していただいた太田和夫さん、費用面での取りまとめをいただいた塩川歌子さん、伊一郎のエピソードを聞かせていただいた東川みさをさんに感謝します。また、母うたには情報整理・原稿の確認を、弟善郎には資料収集や全体の連絡・調整をしてもらいました。

発刊の費用は、この本の発案者である塩川ふみの遺産からあてることになりましたが、ふみの相続人すべての方々のご協力で深く感謝致します。

最後に、本書の編集から発刊までの万般に亘って責任をもってご努力いただいた龍鳳書房の酒井春人社長に感謝いたします。

平成七年九月十日

遺族代表

塩川哲郎

著者紹介

小林 收 (こばやし・おさむ)

佐久市岩村田3200出身

信州大学教育学部卒業／元長野県地理学会理事／元長野県望月少年自然の家所
長／元小諸市立野岸小学校長

現在 佐久市志編纂委員／佐久市文化財保護委員

著書 『軽井沢開発ものがたり』／『小海線を行く』／『軽井沢町誌』(観光篇)

塩川家遺族連絡先

塩川哲郎 〒659 兵庫県芦屋市潮見町6-4-4 TEL0797-23-3676

塩川善郎 〒192 東京都八王子市久保山町2-46-32 TEL0426-91-1413

塩川伊一郎評伝

発行 平成八年三月二十八日

定価 二、五〇〇円(本体二、四二七円)

著者 小林 收

発行者 酒井 春人

発行所 有限会社龍鳳書房

〒三八〇長野市若里一八〇五―二四

☎・FAX〇二六(二八)一一〇五

郵便振替 長野〇〇五六〇―四―一九二三

印刷字 三和印刷株式会社

製本 関製本株式会社

©1996 O・K 乱丁落丁はお取り替えます。
ISBN4-947697-01-6 C0023-P2500E

定価2,500円(本体2,427円・税73円)

ISBN4-947697-01-6 C0023-P2500E

